富士吉田市史資料叢書８

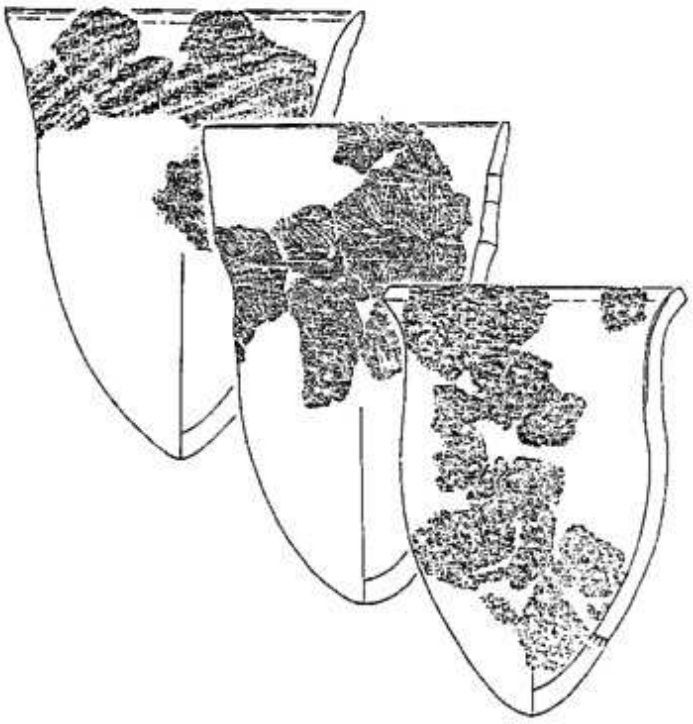
# 古屋敷遺跡発掘調査報告書

1990.3

富士吉田市史編さん室
古屋敷遺跡調査団

# 古屋敷遺跡発掘調査報告書

—富士山北東麓における縄文時代早期後半文化の研究—



1990.3

富士吉田市史編さん室　発行
古屋敷遺跡調査団　編集

**巻頭図版1**　古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器

古屋敷遺跡のⅢb層と呼称した文化層とこの層から掘り込まれた住居址より主体的に出土した土器群。各地点において野島式土器（早期第Ⅲ群土器）が共伴している。

左・中は第Ⅳ群1類としたもので胴部上半に段帯部をもち、擬似羽状縄文が施文される。以下の胴部は条が縦位の縄文が観られ、異なる縄文の施文法が特徴的である。また口唇部にも施文されるものがある。これらと同類で段帯部に沈線文を描くもの（第Ⅳ群2類）も共伴している。右は無文の深鉢で第Ⅳ群3類としたもの。口唇部が肥厚して外側状を呈する特徴がある。
左：器高37.4cm。中：器高37.0cm。右：器高30.7cm。

**巻頭図版2**　古屋敷遺跡早期第Ⅴ群土器

古屋敷遺跡のⅢa層と呼称した文化層から掘り込まれた第5号住居址より一括で出土した。これらは早期終末の神之木台式に比定される。左は波状の口縁部に隆帯が巡らされる深鉢で胴上半には貝殻条痕が観られる。右は貝殻条痕のみの深鉢。
左側：器高41.8cm。右側：器高24.0cm。

# 発刊にあたって

このたび，富士吉田市史編さん事業の一環としまして「古屋敷遺跡発掘調査報告書」が刊行の運びとなりました。

当市史編さん室では，昭和54年に「行政編」上下2巻を刊行致しましたが，『史料編』『通史編』の刊行をめざし，「資料所在目録」「民俗調査報告書」「市史研究」等を刊行しております。

古屋敷遺跡は，昭和55年に行われました遺跡分布調査の結果，所在が明らかにされた遺跡の一つであり，市内では，池之元遺跡と並び歴史的に価値ある内容を持つ遺跡であることが予測されました。この遺跡の実態を把握し，また現在編さん事業が進んでいる富士吉田市史『自然・原始・古代・中世』の史料編の基礎資料とするため，昭和63年に発掘調査を実施し，その詳細をここに報告することができました。

本調査の団長をお願いした明治大学教授戸沢充則氏をはじめ，明治大学の学生諸兄には献身的なご努力をいただき，また，土地所有者等のご協力により十分な成果を上げることができましたことを，衷心より感謝申し上げます。

本書が，市民の皆様・関係者に広く活用されることを願っております。今後とも，市史編さん事業につきましてはご支援ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成2年3月

富士吉田市長　渡　辺　皓　彦

# 発刊のことば

富士吉田市史編さん事業は，市民の皆様をはじめ，多くの方々のご協力によりその調査も進展してきました。

このたび，「古屋敷遺跡発掘調査報告書」が関係各位のご尽力により発刊されることになりました。

本書が，市史研究調査の上で更に大きく役立つことを期待し，また，市民の皆様に広く活用され，当時の歴史をしのぶ資料としてご高覧いただければ幸いに思います。

最後に，発刊にあたり，発掘調査にご協力頂いた皆様及び編集執筆に携わった関係者の方々に心から感謝申し上げ，ごあいさつといたします。

平成２年３月

富士吉田市史編さん委員会

委員長　志　村　国　彦

# 例　言

1. 本書は，山梨県富士吉田市大明見地区字古屋敷に所在する古屋敷（ふるやしき）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は富士吉田市史編さん室の市史編さん事業の一環として古屋敷遺跡調査団が実施した。
3. 本書の編集は阿部芳郎がおこない，全体として戸沢充則が監修した。
4. 本書の執筆は調査団の討議のもとに分担をおこない，執筆分担は第Ⅰ～Ⅲ章は文末にⅣ章は文頭に記した。また資料の整理から分析にいたるまでの作業は発掘調査員および整理調査員がおこなった。
5. 本文中の遺物図版は，土器拓影を1/2，個体実測図を1/4，石器は2/3を基本とし，それ以外については，図中に記入した。
6. 本報告書の作成に関しては下記の諸氏，諸機関より多くの御助言や御指導を賜った。記して感謝の意を表するものである。（敬省略）

   会田　進，磯田　進，上杉　陽，大竹憲昭，小杉　康，小林康男，瀬川裕一郎，関野哲夫，佐藤祐仁，奈良泰史，西沢寿晃，古谷健一郎，宮坂光昭，宮下健司，岡谷市美術考古館，信州大学第二解剖学教室，裾野市教育委員会，諏訪市史編纂室，沼津市埋蔵文化財センター，平出考古館，明治大学考古学博物館，山梨文化財研究所，山梨県埋蔵文化財センター
7. 古屋敷遺跡の調査団の組織および参加者は以下の通りである。

## 調査団組織

| | |
|---|---|
| 調査団長 | 戸沢充則（明治大学教授，富士吉田市史編さん専門委員） |
| 調査担当者 | 末木　健（山梨県文化財センター，富士吉田市史編さん専門委員） |
| | 堀内　真（富士吉田市教育委員会） |
| 調査主任 | 阿部芳郎（明治大学大学院） |
| | 恩田　勇（明治大学大学院） |
| 調査員 | 蛭間真一（大東文化大学第一高等学校教諭），渡辺厳訓（下吉田第一小学校教諭），大久保忠保，久保田直子，田中　総，田中貴美子，田嶋慎治，横田和美（以上明治大学考古学専攻生），宇野祐子（奈良大学学生） |
| 調査補助員 | 柏木謹之助，権藤　聖，柳瀬健太郎，黒田光一，奥脇　剛，堀内栄次，水越久雄，宮下太志，宮野和人 |
| 調査員（整理） | 黒沢　浩（明治大学考古学博物館），小林　努，白石真理，鶴田典昭，中村哲也，西沢　明（以上明治大学大学院），小口達志，荻沢太郎，加藤祐治，小坂健一郎，須賀博子，中村幸太郎，布施光敏，馬場信子，前川容子，毎沢信博，米　賢一（以上明治大学考古学専攻生） |

# 古屋敷遺跡調査報告書　目次

発刊にあたって
発刊のことば
例　言

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境
第１節　富士吉田市内における遺跡の分布と性格…… 1
第２節　古屋敷遺跡周辺の環境…… 4

第Ⅱ章　調査の経過と概要
第１節　発掘調査の経過と概要…… 6
第２節　調査と出土遺物の概要…… 8
(1)　遺跡の形成と性格…… 8
a.立地とひろがり　b.文化層の形成と土層の堆積　c.遺構の性格と分布
(2)　出土遺物の概要と分類…… 15
a.縄文土器の分類概要　b.石器群の概要と分類

第Ⅲ章　調査の記録
第１節　第一段丘面における調査…… 20
(1)　Ⅰ区１トレンチの調査…… 20
a.土層の堆積と遺物の出土状態　b.出土した遺物
(2)　Ⅰ区２トレンチの調査…… 21
a.土層の堆積と遺物の出土状態　b.出土した遺物
(3)　Ⅱ区１トレンチの調査…… 23
a.土層の堆積と遺物の出土状態　b.検出された遺構と遺物／近世の土坑墓　c.土坑墓出土の遺物　d.遺構外出土の遺物
第２節　第二段丘面における調査…… 27
(1)　Ⅲ区１トレンチの調査…… 27
a.土層の堆積と遺物の出土状態　b.検出された遺構と遺物／早期の遺構と遺物／前期の遺構と遺物／第Ⅲ層（早期文化層）出土の遺物
(2)　Ⅳ区１トレンチの調査…… 38

a．土層の堆積と遺物の出土状態　b．検出された遺構と遺物／早期の遺構と遺物／前期の遺構と遺物／第Ⅲ層（早期文化層）出土の遺物／第Ⅱ層（前期文化層）出土の遺物

(3)　Ⅳ区２トレンチの調査…… 63

a．土層の堆積と遺物の出土状態　b．検出された遺構と遺物／早期の遺構／前期の遺構と遺物／近世の配石遺構／第Ⅲ層（早期文化層）出土の遺物／第Ⅱ層（前期文化層）出土の遺物

(4)　Ⅳ区３トレンチの調査…… 75

a．土層の堆積と遺物の出土状態　b．検出された遺構と遺物／早期の遺構と遺物　c．出土した遺物／近世の溝状遺構

第Ⅳ章　研　究　編

第１節　古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の型式学的検討…… 81

1，早期第Ⅳ群土器の構成／2，早期第Ⅳ群土器の型式学的位相と編年的位置／3，まとめ／あとがき

第２節　古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の胎土・製作技法の特徴…… 98

1，早期第Ⅲ・Ⅳ群土器胎土の肉眼による観察・分類と型式学的分類との対応／2，早期第Ⅲ・Ⅳ群土器胎土の岩石学的分析／3，早期第Ⅲ・Ⅳ群土器の製作技法／4，胎土・製作技法からみた早期第Ⅳ群土器の特徴と周辺遺跡出土土器との関係

第３節　古屋敷遺跡早期第Ⅴ群土器の型式学的検討…… 125

1，早期第Ⅴ群土器の型式学的特徴／2，神之木台式土器の成立／3，神之木台式土器の変遷／4，早期第Ⅴ群土器の編年的位置／5，まとめ

第４節　古屋敷遺跡前期第Ⅲ群１類土器の型式学的検討…… 136

1，前期第Ⅲ群１類土器の型式学的特徴／2，前期第Ⅲ群１類土器の編年的位置／3，甲信地方の諸磯ａ式土器成立時における文様帯区画文の形成／4，まとめ

第５節　早期土器片中にみられる動植物体圧痕について…… 144

1，土器片にみられる堅果種子圧痕の同定／2，堅果種子圧痕土器の観察／3，貝殻片圧痕土器の観察／4，動植物体圧痕土器の類例と分類／5，まとめ

第６節　古屋敷遺跡における花粉分析ならびにプラント・オパール分析…… 149

1，遺跡の立地と地層の特徴／2，分析の方法／3，結果／4，考察／

おわりに
第７節　古屋敷遺跡およびその周辺採集の弥生式土器 …… 162
１，資料紹介／２，若干の考察
第８節　弥生末—古墳時代前期の土器群について …… 167
１，採集資料の紹介／２，採集資料の位置づけ／３，駿河・甲府における該当期の様相／４，まとめ

総　　括 …… 178

# 挿 図 目 次


第1図　富士吉田市内地形図……3
第2図　古屋敷遺跡周辺の遺跡と地形……5
第3図　遺跡の立地とひろがり……9
第4図　第二段丘面における土層の堆積層準……10
第5図　古屋敷遺跡における遺構群のひろがり……13
第6図　古屋敷遺跡出土の縄文土器の分類と序列……17
第7図　古屋敷遺跡出土の石器群の分類……19
第8図　Ⅰ区1トレンチの土層堆積図……21
第9図　Ⅰ区2トレンチの土層状況と出土遺物……22
第10図　Ⅱ区1トレンチの土層堆積と遺構配置……24
第11図　近世土坑墓実測図……25
第12図　近世土坑墓出土遺物……26
第13図　Ⅱ区1トレンチ遺構外出土遺物……26
第14図　Ⅲ区1トレンチの土層堆積と遺構配置……28
第15図　集石土坑と出土遺物……29
第16図　第Ⅱ層下面に検出された焼土址と遺物……31
第17図　第Ⅲ層出土遺物（土器1）……33
第18図　第Ⅲ層出土遺物（土器2）……34
第19図　第Ⅲ層出土遺物（土器3）……35
第20図　Ⅲ区1トレンチ第Ⅱ層およびⅢ層出土遺物（石器1）……37
第21図　Ⅳ区1トレンチの土層堆積と遺構配置……39
第22図　Ⅳ区1トレンチにおける早期の遺物出土現況……42
第23図　1号住居址出土遺物（土器）……43
第24図　2号住居址出土遺物（土器）……45
第25図　3，4，6号住居址出土遺物（土器）……46
第26図　5号住居址出土遺物（土器）……48
第27図　1～5号住居址出土遺物（石器1）……50
第28図　1～5号住居址出土遺物（石器2）……51
第29図　第Ⅱ層下面の集石と出土遺物……52
第30図　第Ⅲ層出土遺物（土器1）……54
第31図　第Ⅲ層出土遺物（土器2）……56
第32図　第Ⅲ層出土遺物（土器3）……57
第33図　第Ⅲ層出土遺物（石器1）……59
第34図　第Ⅲ層出土遺物（石器2）……60
第35図　第Ⅱ層出土遺物（土器4）……62
第36図　Ⅳ区2トレンチの土層堆積と遺構配置……64
第37図　第Ⅱ層下面の集石実測図……65
第38図　第Ⅲ層出土遺物（土器1）……67
第39図　第Ⅲ層出土遺物（土器2）……69
第40図　第Ⅲ層出土遺物（土器3）……70
第41図　第Ⅱ，Ⅲ層出土遺物（石器1）……72
第42図　第Ⅱ，Ⅲ層出土遺物（石器2）……73
第43図　第Ⅱ層出土遺物（土器4）……74
第44図　Ⅳ区3トレンチの土層堆積……76
第45図　Ⅳ区3トレンチ18層上面における炉址状遺構……77
第46図　炉址状遺構および周辺出土遺物（土器）……79
第47図　Ⅳ区3トレンチ出土遺物（石器）……80
第48図　近世の溝状遺構……80
第49図　文化層の堆積状況……82
第50図　遺構別土器組成……83
第51図　早期第Ⅳ群土器の構成……84
第52図　早期Ⅳ群Ⅲ類土器の口唇部形態……84
第53図　子母口式土器の生成と絡条体圧痕文の系譜……86
第54図　野島式期における絡条体圧痕文土器の地域性……88
第55図　野島式土器の文様帯と早期第Ⅳ群1，2類の文様帯系統……90
第56図　早期第Ⅳ群土器の分布……91
第57図　早期第Ⅳ群土器の類例(1)……96
第58図　早期第Ⅳ群土器の類例(2)……97
第59図　肉眼観察による胎土分類と型式学的分類との対応関係……99
第60図　周辺地質と遺跡の位置……100
第61図　岩石学的分析試料……103
第62図　古屋敷遺跡出土土器の岩石鉱物組成……106
第63図　土器の岩石鉱物組成……107
第64図　岩石組成折れ線グラフ(1)……108
第65図　岩石組成折れ線グラフ(2)……109
第66図　富士山北東麓河川砂の岩石鉱物組成……110

第67図　富士山北東麓河川砂の岩石組成…… 111
第68図　クラスター分析におけるデンドログラム…… 113
第69図　第Ⅳ群土器の成形・整形…… 118
第70図　第Ⅳ群1・2類土器の段部の成形・整形…… 119
第71図　第Ⅳ群3類土器の口唇部成形・整形…… 120
第72図　古屋敷遺跡早期第Ⅴ群土器の構成…… 126
第73図　隆帯の生成過程…… 128
第74図　隆帯生成に伴う文様帯構成の変化…… 129
第75図　打越式から神之木台への文様帯構成の変化…… 130
第76図　神之木台式の変遷…… 132
第77図　古屋敷遺跡前期第Ⅲ群1類土器…… 136
第78図　口唇部に隆帯を有する類似土器…… 138
第79図　節を有する平行沈線が施文された類似土器…… 139
第80図　口唇部に隆帯を有する土器の型式学的位置…… 141
第81図　口唇部形成過程…… 141
第82図　古屋敷遺跡の動植物圧痕土器と類例…… 145
第83図　プラント・オパール分析結果…… 151
第84図　山ノ神戸遺跡採集土器…… 162
第85図　古屋敷遺跡出土土器…… 163
第86図　古屋敷遺跡弥生末～古墳時代前期の採集資料…… 169
第87図　山梨県における弥生時代～古墳時代前期の遺跡分布図…… 175

# 表 目 次


第1表　古屋敷遺跡出土縄文土器分類概要……16
第2表　III区1トレンチ出土土器組成……36
第3表　IV区1トレンチ出土土器組成……47
第4表　IV区2，3トレンチ出土土器組成……73
第5表　岩石学的胎土分析試料……102
第6表　土器および河川砂試料の岩石鉱物……105
第7表　クラスター分析による分類……114


# 写真図版目次

## 本文中写真図版


写真1　富士吉田市遠景……1
写真2　古屋敷遺跡遠景……4
写真3　IV区1トレンチ調査状況……7
写真4　古屋敷遺跡の周辺地形……11
写真5　第二段丘面の土層堆積（IV区2トレンチ）……12
写真6　重複する早期後半の住居址群……14
写真7　IV区1トレンチ完掘状況……41
写真8　1号住居址における遺物出土状態……43
写真9　2号住居址床面付近における遺物出土状況……46
写真10　IV区2トレンチにおける縄文時代前期文化層の調査状況……51
写真11　IV区2トレンチにおける近世の配石遺構……65
写真12　IV区3トレンチ調査状況……75
写真13　IV区3トレンチにおける土層堆積状況……76
写真14　早期第IV群土器をともなう炉址状遺構……78
写真15　第IV群土器の成形・整形……119
写真16　第III群土器の成形・整形……121
写真17　カヤの実（現生）……144
写真18　古屋敷遺跡出土の植物圧痕土器(1)……145
写真19　古屋敷遺跡出土の植物圧痕土器(2)……145
写真20　花粉化石，プラント・オパール……161
写真21　古屋敷遺跡出土の弥生式土器……166


## 巻末写真図版


図版1　第I群1，2類土器，第III群3類土器
図版2　早期第III群4類土器
図版3　早期第III群土器2，3類土器
図版4　早期第III群1類土器
図版5　早期第III群3類，第IV群2類土器
図版6　早期第IV群1類土器
図版7　早期第IV群2類土器
図版8　早期第IV群3類土器
図版9　早期第V群1，2類土器
図版10　第III群6類，第V群3類土器
図版11　前期第I，II，III群土器
図版12　前期第III，IV群土器

# 第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

## 第１節　富士吉田市内における遺跡の分布と性格

中部山岳地帯の東南部に位置する山梨県は甲府盆地を中心として，南に富士山，北を甲武信山地と八ヶ岳連峰，東を丹沢山塊から道志山地に続く山並み，西を赤石山脈（南アルプス）の急峻な峰々で限られている。霊峰富士をはじめとして，赤石山脈には3000m級の峰々が連立し，県北部の甲武信山地にも甲武信ヶ岳や雲取山などの高山がめぐり，日本の屋根とうたわれる山岳地域の一部を構成している。甲府盆地東方には，大菩薩連嶺から南に延びる山並みが，富士山北西の御坂山地へと続いており，県東部の郡内地方と甲府盆地とを隔てている。水系の上でも盆地を中心とする国中地方は富士川水系に属し，一方県東部は関東地方に続く相模川，多摩川水系の上流の地となっている。

郡内地方は相模川の上流にあたり桂川流域を中心とした山がちな地域であり，富士山の山麓地と桂川やその支流域の河岸段丘に多くの遺跡が認められる。郡内の東南部に位置する富士吉田市は南限に富士山，北部に御坂，北東部に道志両山地があり，富士山の豊富な湧き水を集めて流下する桂川は市域の南東部で北に流路を変えて道志山地の山裾部を貫流する（第１図）。

写真１　富士吉田市遠景（御坂山地より道志山地を望む）

南方に富士山麓を望み，東西に御坂山地と道志山地によって囲まれた富士吉田市は，盆地状の地形を形成し，各山地では樹枝状の丘陵が発達し，市街地のある盆地部へとのびる。新期富士火山活動によって流出した熔岩流と土石流はこの盆地部を流路として北へと流出している。この流末により堰き止められた谷口は幾度か堰止湖を形成し，古屋敷遺跡はこの堰止湖に面して立地したと推定されている。

御坂山地は甲府盆地と桂川流域の中間に位置する起伏の大きい山地である。富士山との間には裾合谷が形成され，新期富士火山活動の熔岩流に堰き止められてできた富士五湖が展開する。道志山地は桂川と道志川にはさまれた山地であり，丹沢山地の西南部に位置し，同山地に含められる場合もある。

地形区分をすると市域は火山地，山地，低地の３つに分かれる。火山地は富士山とその噴出物に覆われた山麓地，御坂・道志両山地および扇状地性の低地である。また，富士山腹から低地へ向かって新期熔岩（丸尾）が流れている。

市域の遺跡の分布状況をみていくと，縄文時代から平安時代までの遺跡は，御坂・道志両山地の山麓部に集中的に立地する傾向がみうけられる。市全体では，現在47ヶ所(註1)の遺跡が確認されている。

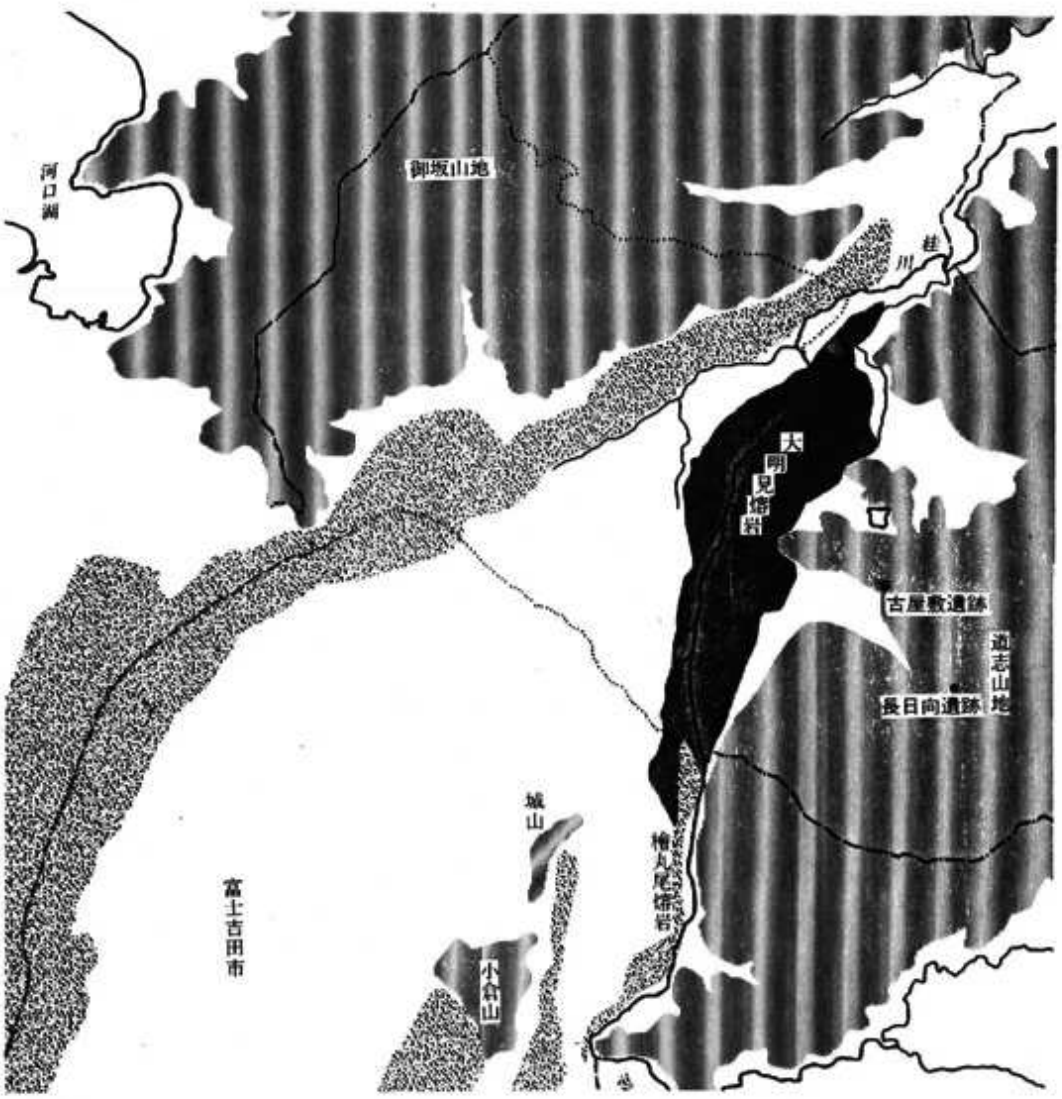
先土器時代の遺跡，遺物としては，今回の調査地である古屋敷遺跡の出土と伝えられる黒曜石製の両面加工の尖頭器が市内唯一のものである。

縄文時代の遺跡は御坂・道志山地両山麓の緩斜面や段丘上に存在し，市街地の占地する沖積扇状地においては確認するに至っていない。御坂山麓の拠点的な集落址には，新倉地区の池之元，上暮地の日影遺跡，いっぽう道志山地の同様の遺跡には古屋敷，長日向遺跡などが挙げられる。そのほかの遺跡は一時的に営まれたキャンプサイト的なありようを示している。表採遺物からみる限り，早期後半の遺跡がもっとも多く，次いで中期から後期初頭にかけての時期に前述の拠点的な遺跡を中心に小ピークがあり，それ以降しばらくは遺跡の空白期となる。

弥生時代になると，市内では明見地区の山ノ神戸，古屋敷遺跡からは条痕文系(註2)の土器が，古屋敷遺跡からは中期の土器も出土している。目を市外へ転じると，河口湖の鵜の島，同町小立地区島原，同宝司ヶ塚遺跡等の条痕文系(註3)の土器を出土する遺跡が河口湖の汀線付近に出現する。河口湖と同様に，市域にあってはこの時期の遺跡は明見地区の沼沢地周辺に存在する。それらの遺跡のありようは，郡内南部へ比較的はやい時期に弥生文化が波及した事実を伺わせており，稲作など農耕の可能性を示唆しているように考えられる。

降って弥生時代後期は明見地区の遺跡に加え，新倉地区西沢，同池之元遺跡においても該期の遺跡が確認され，御坂山麓側にも生活の舞台が拡大してゆく。それらの遺跡は五領式期まで継続するが，以後しばらくはふたたび無人の地となっていたようである。

桂川流域において，古墳および同期の集落遺跡は，大月市の子の神古墳(註4)，宮谷金山古墳，鳥沢金山古墳や北都留郡上野原町の塚場古墳群など終末期の古墳やその周辺に立地する遺跡が存在するが，いずれも下流域に限定される。奈良時代には都留市域まで遺跡の分布が拡大してくる。さらに平安時代になると，桂川上流域の富士山麓の地にも次第に開発が進展し，広く遺跡の存在が認められる。その立地は旧来の御坂・道志両山地の山麓部ばかりでなく，山間部の小平坦地や市街地の占地する沖積扇状地にも遺跡が進出し，平安期の富士山噴火にともなう剣丸尾熔岩流下の西丸尾遺跡や檜丸尾熔岩流下の堰林遺跡などが検出されている。




第1図　富士吉田市内地形図

江戸時代にはいり郡内地域は，谷村（都留市）勝山城を支配の根拠地とした秋元氏の支配するところとなり，宝永2年（1705）に幕府の直轄領となるまで藩政がおこなわれた。

大明見村は郡内領111ヶ村の一村として調査対象地である古屋敷一帯に村落を形成していたが，貞享3年（1686）に一村を挙げて今日の大明見の地（大明見熔岩上）に移転したことが『甲斐国志』に記されている。前述のように旧地は藩政期を中心としたムラの一部にあたり，かつての屋敷跡と耕地，および同族神の祠堂などが点在していた様子が当時の記録類からうかがえる。

このように古屋敷の地は先史時代から近世にいたるまでの歴史が重層的に存在する複合遺跡となっており，その周辺部を含めて市域の歴史のうえではひときわ重要な場所といえよう。

（堀内）

## 第2節　古屋敷遺跡周辺の環境

富士吉田市大明見地区は，先史時代より古代さらに中・近世に至るまでの遺跡が濃密に分布する地域である。とりわけ，その中心をなす場所が本遺跡の立地する字古屋敷の一帯である。

古屋敷遺跡は，道志山地の東南にそびえる杓子山から北西へ派生する尾根である通称「背戸山」南麓部の緩斜面に立地し，その東側の埋没谷付近は，現在水田となっているが，かつては「御釜」と呼ばれる湧水があって，そこから南側に向かって小さな河原が延びていたといわれる。

遺跡の現状は耕作地として利用されているが，中・近世には「大明見」の村落と寺院が存在した。そのような経緯から傾斜地は雛段状に造成され，とくに南に傾斜する台地上や，東西にある谷状の微地形など，本来の形状が相当改変されているものと考えられる。

鳥居地（鳥打）峠付近に源を発する古屋川は，杓子山と高座（権現）山の谷間を西流して，山の神社付近で大明見地区に向かって小規模な扇状地を形成している。

さらに，古屋敷遺跡の前面では堰止湖の痕跡をとどめた湿地帯となっており，湿田およびアシ原がモザイク状に広がっている。現在の古屋川の流路は人工的に付け変えられたもので，湿地帯より一段高い背戸山裾部を灌漑用水として耕地を潤しているが，以前は沼沢地の中央部を流下していたものと推定される。遺跡の立地する台地は本来は現在よりも谷部に突出するように発達しており，現在は水田となっているこの部分にも遺跡が広がる可能性が高い。

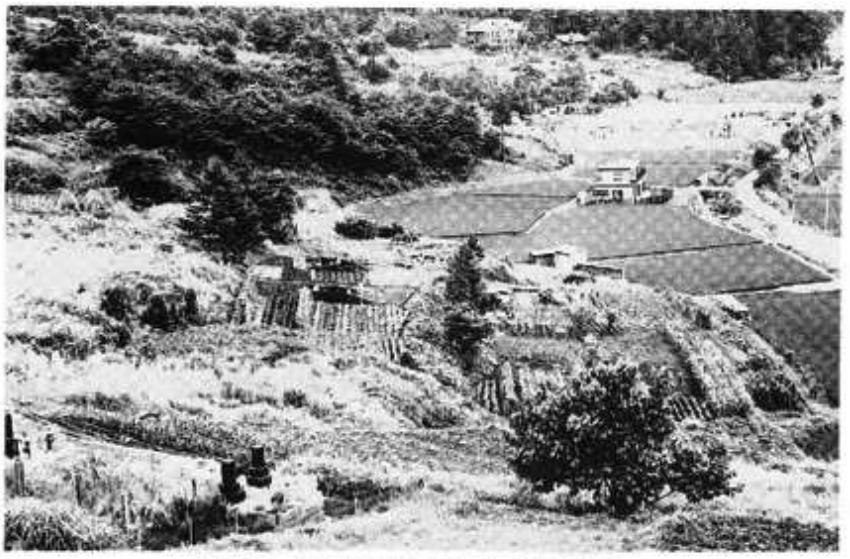
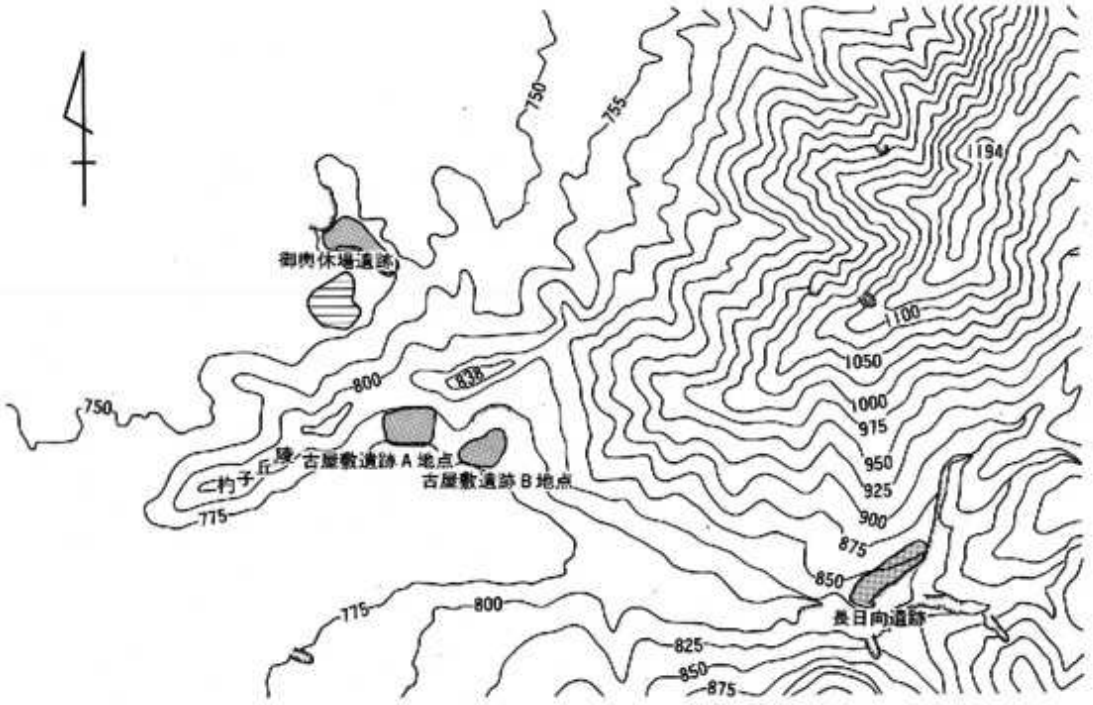


写真2　古屋敷遺跡遠景（西方丘陵上より）

遺跡は2つの段丘を形成する杓子丘陵の南面に位置している。第二段丘面は現水田に面しており，縄文時代早期，前期を主体とした遺構と遺物が発見された。第一段丘面に近世の寺院址があり，これに伴うと思われる墓域の一部を検出している。




第２図　古屋敷遺跡周辺の遺跡と地形

先土器時代の後半，今から約１万5000年前頃に古富士泥流が桂川に沿って流下し，杓子山西南麓の裾合谷が堰き止められて一時的な湖沼群が形成された。泥流は古屋敷のある古屋川の谷を塞ぐとともに，その流末は谷の南縁部の高座山裾部を段丘崖状に削りとりながら遡上し，さらにその対岸にあたる古屋敷遺跡付近の背戸山傾斜面をも段状に削りだした。谷の両側に続く段丘状地形はその痕跡と考えられている。

縄文時代の初頭には，富士山の新期火山活動による猿橋熔岩が市域西側を流下した。この熔岩は梨ヶ原熔岩と同一の熔岩といわれ，まず忍野盆地の山裾を堰き止め，桂川に沿って流下し，道志山地の裾合谷を塞ぐことにより，大明見，明見湖（蓮池），向原付近に大小の湖沼が再び形成された。

古屋敷遺跡をはじめとする縄文時代の遺跡群は，それらの汀線近くに存在したものと推定される。おそらく水際には一面にアシが繁茂し，当時の縄文人たちはこうした環境に適応した生活を営んだものと推測される。

縄文時代後期前葉の堀之内１，２式期以降になると，富士山は湯舟第１スコリアや大室スコリア等を噴出して火山活動が活発化したことが，遺跡やその周辺の露頭観察の結果から理解される。市内の池之元遺跡はこの時期に形成された代表的な集落址である。

古屋敷遺跡の主な形成時期にあたる縄文時代やそれ以降の時代においても，本地域の一帯はたえず新期富士火山活動の影響を受け，周辺の環境は大きく変化したようである。ただ本遺跡がいくつかの空白の時期をおきながらも，長期にわたる断続的な生活の場とされたのは，この地域が彼らの生活に良好な条件を備えていたからに他ならなかったのであろう。　　（堀内）

# 第II章　調査の経過と概要

古屋敷遺跡はその地名がしめすように中世，近世において村落の存在がつたえられる地である。そうした地点における発掘は中近世の村落の考古学的な確認と，それ以前の縄文時代や弥生，古墳時代の生活址を明らかにする目的で計画された。

## 第1節　発掘調査の経過と概要

古屋敷遺跡は1981年におこなわれた市内遺跡分布調査によってその存在が明らかにされた遺跡のひとつである。同年には本遺跡の西方が開発のために発掘調査がおこなわれた。その結果，平安時代と中世，近世の遺物や遺構が検出され，平安時代の竪穴住居の発見はこの地点を中心とした当該期の集落の存在を暗示するものであった。こうした成果はすでに1983年に古屋敷遺跡B地点として報告されている（富士吉田市教委1983）。

今回の調査はB地点とのあいだに小さな谷状の地形を隔て，南に緩やかに傾斜する台地部分がおもな対象とされた。

富士吉田市教育委員会では今回の発掘調査に先立ち，富士吉田市史編纂事業の一環として市内全域にわたる遺跡分布調査をおこない，この地域についても表面採集と一部の試掘調査をおこなった。そしてその際には縄文時代早期から後期，そして弥生時代から平安時代にいたる時期の遺物が採集され，市内では池之元遺跡とともに屈指の規模と内容をもつ遺跡であることが予測された。この様な経過を経て，市史編纂事業のなかで本遺跡の内容をさらに詳細に明らかにするために今回の発掘調査が計画されたのである。

発掘調査は1988年7月26日から8月11日までの期間に実施され，段丘崖をもつ古屋敷の台地を上段（第一段丘面），下段（第二段丘面）とに区分し，それぞれに調査区を設定した。

発掘調査に先立つ地形観察や表面採集の結果から，当初は弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構の検出が期待されるとともに，新期富士火山活動と各時代文化層の堆積層準を把握することが調査目的のひとつでもあった。

発掘はふたつの段丘面に7ヶ所のトレンチを設定しておこない，遺構の検出された部分については，その性格を把握するために必要に応じて拡張することにした。

調査は第一段丘面から順次開始され，第一段丘面では近世の土坑墓を検出するとともに，台地の東側に存在する供養塔や文書類から推定された寺院址の存在を確認した。またこの段丘面においては基盤層の青柳ローム層の上部に縄文時代の堆積層に相当する富士黒色土層が確認されたが，この層からはわずかな縄文早期と中期の遺物が検出されたにとどまり，それ以後の時期の遺物や遺構は，まったく発見されなかった。

写真３　Ⅳ区１トレンチ調査状況

第二段丘面では表土（１層）下に良好な縄文時代の文化層（Ⅱ層）が安定した堆積をしめして確認された。Ⅳ区１トレンチでは前期後半の文化層（Ⅱ層）の下に早期の文化層（Ⅲａ，Ⅲｂ層）と住居址が検出された。写真は第Ⅱ層とした前期の文化層の調査状況である。

第二段丘面においてもこうした層位的な所見は同様であり，縄文時代以降の文化層は中，近世にいたるまで確認することができなかった。第二段丘面では表土（Ⅰ層）の下にわれわれがⅡ層と呼称した縄文時代前期の文化層が確認された。第二段丘面には四ヶ所のトレンチを設定したが，各トレンチでこうした状況が確認でき，またこの層の下部にⅢ層とした早期後半の文化層が良好な状況で遺存することも共通していた。さらに発掘区の一部にはⅡ層とⅢ層の間には純層に近いスコリア層の堆積が認められ，こうした層を分層の際の鍵層として各トレンチで前期と早期の文化層を層位的に調査することができた。

前期の層からは焼けた礫が散漫に出土する傾向があり，Ⅲ区１トレンチではそうした礫を用いた集石遺構の検出があった。同様の遺構は早期のⅢ層中にも検出され，近接して炉穴が発見されたことは，そうした焼礫をもちいた作業との関係を髣髴とさせるものであった。

Ⅲ層においてはさらに台地中央付近のⅣ区２トレンチで重複した六軒の竪穴住居址の検出があった。これらの遺構はⅢ層を注意深く精査した結果，早期終末の神之木台式土器をともなうものと，これより幾分古い時期の野島式土器をともなうものに分けられ，出土土器とともに層位的にもこうした重複した遺構面を区別することができた。また野島式土器とともに出土した土器は早期第Ⅳ群土器と分類したが，その特徴は従来あまり明らかにされたことのないこの時期の土器群の実態をしめすものとして注目されるものであった。

こうした調査成果は本遺跡がとくに縄文時代早期後半から前期にかけて，周辺地域では例の少ない核的な遺跡であったことを暗示するものであり，また良好な遺存状況とともに遺跡の重要性を示唆するものであった。　（阿部）

# 第2節　調査と出土遺物の概要

## (1)　遺跡の形成と性格

古屋敷遺跡は市内遺跡分布調査の際におこなわれた表面採集と一部の試掘調査により，その存在が明らかにされたが，そうした調査によって推測された遺跡の主な形成時期は，弥生時代後期から平安時代を主体として，それに若干の縄文時代早期，前期後半，中期，後期の遺物が採集されたにとどまっていた（堀内1981，末木1987）。しかしながら，今回の発掘調査の成果は，今までに推測されてきた遺跡の性格や形成時期を，新たな重要性とともに再確認する結果となった。

**a．立地とひろがり**　遺跡は杓子丘陵の南側に発達する南傾斜面に位置し，この斜面は段丘状の崖線を区分として上下（第一段丘面，第二段丘面）に分けられる。遺跡のひろがりの中心は，この斜面のなかでも東西を小さい谷により区切られ，舌状を呈して南側の谷部へ突出する第二段丘面の緩斜面を中心としているようである。

段丘崖は約5mの比高差をもつが，こうした雛段状の急峻な地形は段丘崖を利用した農地開発などの後世の土地改良の結果である可能性も考えられる。

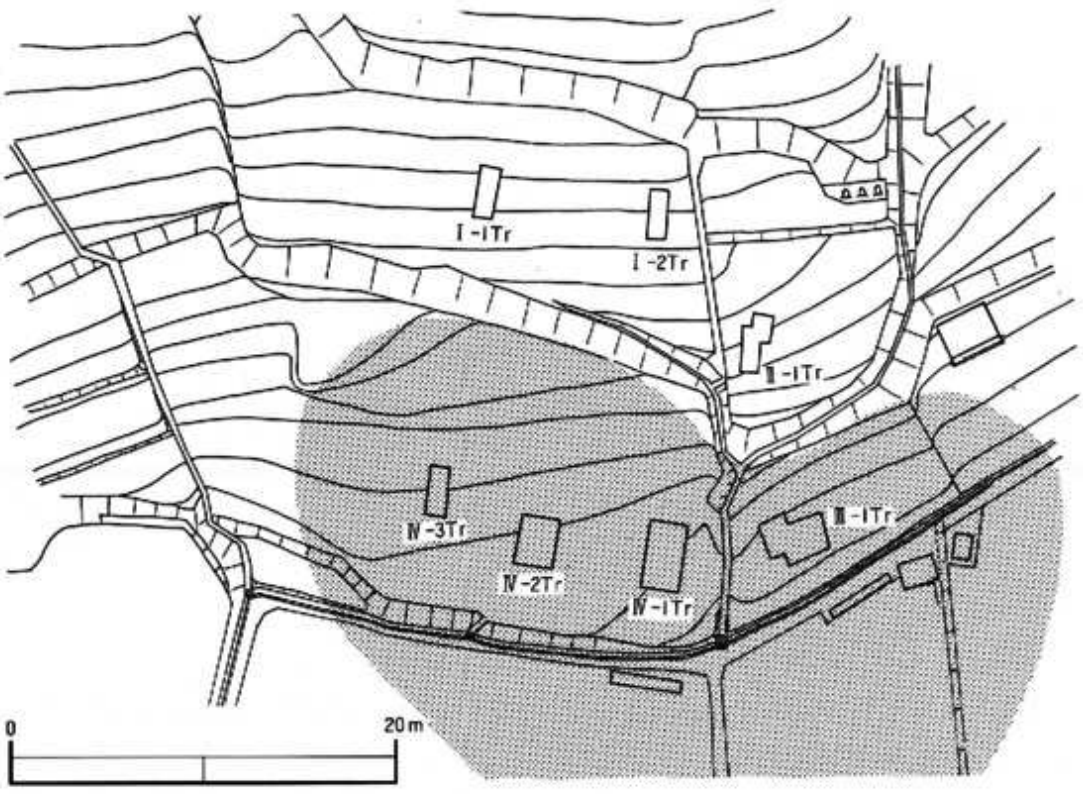
遺跡は古屋敷という土地字名にみるように，近世においては村落経営の中心的な地域であったことが推測されるとともに，そうした事は近世文書の記録からも知ることができる。

現在においても第一段丘面の東側斜面付近には供養塔がのこされており，この地点が近世寺院址の一角であったことは容易に推定される。なお供養塔脇には桜の枯古木があり，古くはかなり遠隔地からもこの桜が寺院の存在を示したという。過去における表面採集調査の結果では第一段丘面の遺物分布は希薄で，その中心は第二段丘面にあることが指摘されている。今回の発掘調査に先立つ表面観察においても同様の傾向が観察された。

第一段丘面においては，縄文土器，土師器および陶磁器片が採集されたのみであり，その量もわずかなものであった。こうした表面観察の結果は今回設定された3箇所のトレンチの調査によっても追認されることになった。第一段丘面においては，縄文時代の主包含層に対比される富士黒土層の安定した堆積が確認されたが，遺物の出土も稀少で遺構の検出もなかったため，第一段丘面は縄文時代においては生活址の中心からはずれた場であったことが推測された。

一方，同段丘面の西端に設けたII区2トレンチにおいては近世の土坑墓が検出されている。土坑墓は2基が重複しており，その周辺にはさらに複数の土坑が存在するものと推測され，これらは共伴した貨幣の年代や，近接する供養塔の存在などから近世寺院に伴う墓域の存在を示すものと考えられた。

第二段丘面は東西約100mの幅をもつ舌状の低い台地であり，眼前を流れる古屋川の水位面との比高差は4mと小さい。現状においては水田開発と河川改修工事により，旧来の台地の形状と，谷部にいたる地形の特徴を観察することは難しいが，現水田の傾斜やひろがりから推定して，比




第3図　遺跡の立地と広がり

較的なだらかな傾斜が南方に続いていたものと考えられる。

一方，台地の東側は現状では比較的深い谷部を形成している。しかし西側においては現状の地表面は比較的平坦な地形が続き，同様の段丘面が西側へ連続するように推測されたが，調査区の西端に設定したⅣ区3トレンチは地表下2,6mまでの調査にもかかわらず，ついに基盤の青柳ローム層に至ることはなかった。こうした事実はⅣ区1，2トレンチを含む台地の西側にきわめて急峻な谷状の地形が発達していた事実を伝えるものであった。

この様な深い谷状の地形の埋没は，傾斜面における自然埋没の結果とともに，表土層の厚い堆積が示すような近世村落の経営にともなう整地作業の結果に因った可能性が強い。

第二段丘面には4箇所のトレンチを設定して調査をおこなったが，そのいずれからも縄文時代早期後半から前期にかけての遺物と遺構が検出され，とくに早期後半においては竪穴住居や炉穴が複雑に重複した状況で発見され，規模の大きい集落が形成されていたことが推測された。

またそうした資料を含む土層はきわめて安定した堆積をしめすことが確認された。こうした状況から，縄文時代の文化層や遺構群は近世の村落経営においても，ほとんど破壊されることなく遺存すること，そしてその中心が第二段丘面の南側に緩やかに傾斜する舌状の台地にあったことが推測されるのである。　（阿部）

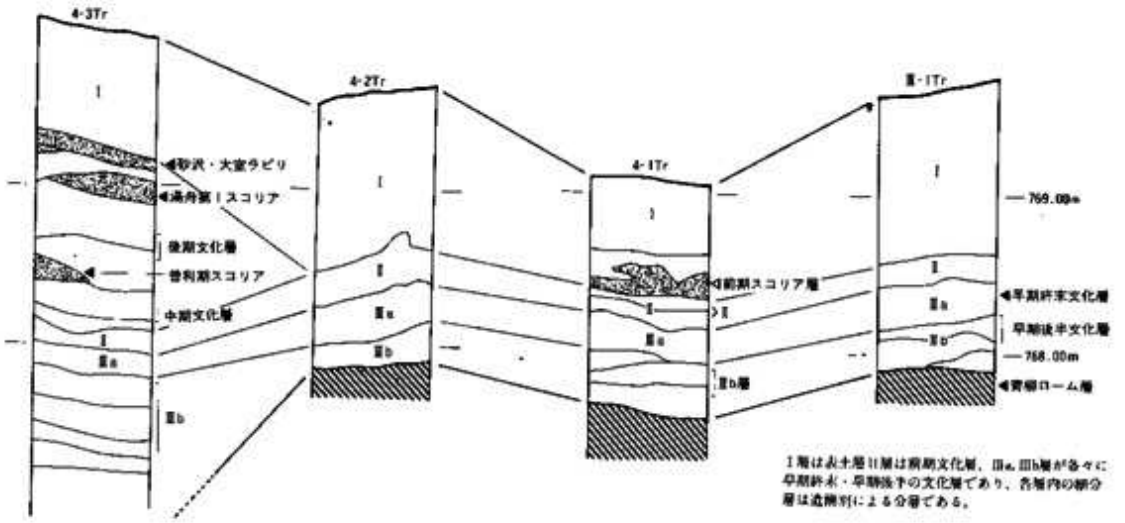
**b．文化層の形成と土層の堆積**　古屋敷遺跡の発掘調査によって明らかにされた遺跡の形成時期は，縄文時代早期に遡る年代をしめすものであった。

土層の観察とともに掘りさげられた最下層の青柳ローム層面には，早期の遺構が掘り込まれる状況が第二段丘面の各トレンチにおいて確認されたが，各時期の生活面や，そうした遺構群を構築した面（当時の地表面）は，ローム層の上に堆積している色調の黒い土層の中に求められるものであった。

各時期の遺構や遺物を層位的に発掘し，そうした状況を詳らかに記録するためには，表土層（Ⅰ層）の下の土層を慎重に掘り下げる必要があった。その経過のなかで，本遺跡の土層のなかに何枚かの火山性堆積物の単純層を確認することができ，同時に周辺の地質学的なデータと比較検討することによって，ローム層上の遺物包含層を地質学的な観点から年代的な序列のもとに分層することができた。

我々はそうした地質学的な成果を土層の区分の指標として，同時に出土土器型式の年代学的序列を手がかりに，それぞれのトレンチで遺構の調査をすることができたことは幸運であった。こうした調査環境は，土器群の分類や編年を推進する上で層位的な根拠を得ることを可能なものとしてくれた。

青柳ローム層上に堆積した黒色の縄文時代包含層は，従来より富士黒色土層と呼称される土層で，この層中には火山性堆積物の混入は少なく，腐食の発達した土質を示す。そうした状況から，この土層の堆積時期においては富士山の火山活動は比較的穏やかであったものと推測されている。




第４図　第二段丘面における土層の堆積層準

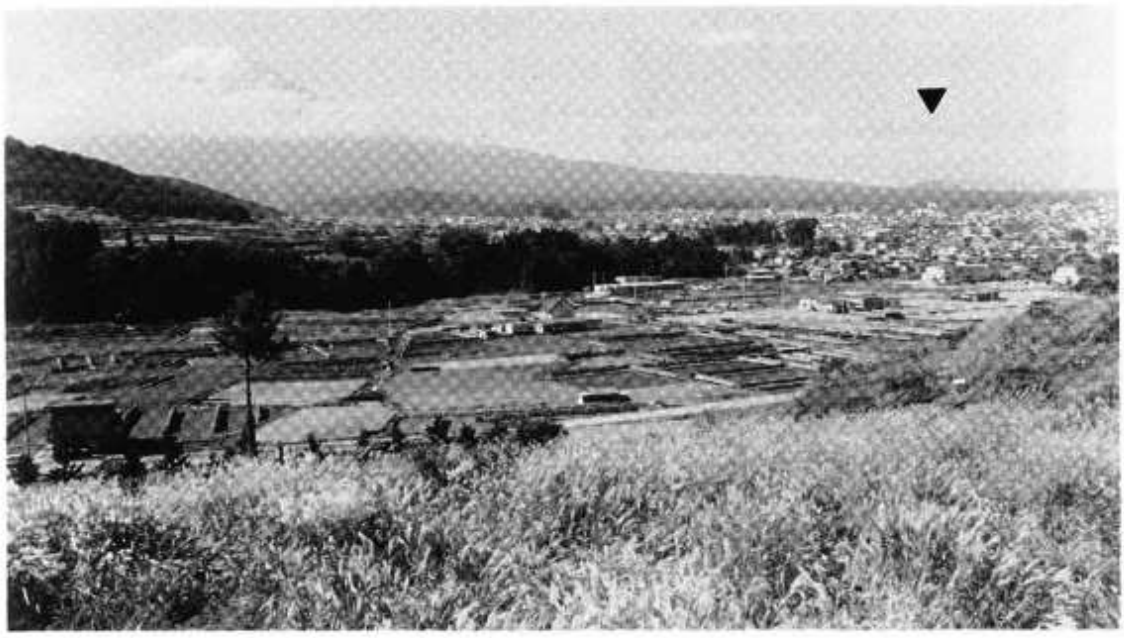


写真４　古屋敷遺跡の周辺地形（第二段丘面より南方を望む）

遺跡の南方には谷部が広がり，対岸の台地の遠方には富士山麓が望める。縄文時代の早期，前期，中期，後期に噴火があり，本遺跡では後期と中期，前期の時期の火山性堆積物の層が確認され，この層により各文化層は明確に区分される。正面右側の裾野に位置する小山は縄文時代後期に噴火した大室山である（▼印下）。

縄文時代の文化層がもっとも安定して検出された第二段丘面の４ヶ所のトレンチでは，Ⅲ区１トレンチとⅣ区１，２トレンチにおいて表土層（Ⅰ層）の直下に縄文時代前期の文化層（Ⅱ層）が確認され，ここからは前期前葉の関山式と後葉の諸磯ａ，同ｂ式が出土している。この土層は暗褐色の色調を呈し，またⅣ区１トレンチの一部では，この層の上にスコリア層が堆積していた（第22図）。これらの状況は縄文時代前期の，少なくとも後葉の諸磯ｂ式の時期もしくは，その直後に規模の大きい富士山の噴火のあった事実を跡づけている。火山の噴火とともに流出する熔岩流の分析成果からは大明見熔岩の年代（C14. 6070±170 BP）がほぼ対応するようである。

我々がⅢ区１トレンチおよびⅣ区１，２トレンチでⅡ層と呼称した前期の文化層には，その下位面付近に被熱した礫が散漫に出土し，Ⅳ区２トレンチではそれらの中に集石と焼土址が検出され，縄文時代前期の生活址の一部を確認することができた。

Ⅱ層の直下には黒味のつよく粒子の細かい土層が堆積している。いわゆる富士黒土層と呼ばれるこの層をわれわれはⅢ層とした。Ⅲ層の上部には下位の層にくらべて色調が幾分明るく，またスコリアの混入もみられる。これらの特性はおそらくⅡ層とその上に降下したスコリアの漸移的な混入と考えられた。Ⅳ区１，２トレンチではこの層中からは早期終末の神之木台式土器が出土し，Ⅳ区１トレンチではこの時期の竪穴住居址の一部を検出している。調査中においてはこのような遺物の出土状態と，土層の特徴を各トレンチ内において確認し，これをⅢ層上部と呼称し，整理分析の際にⅢａ層とした。

Ⅲａ層は以上のような遺物のしめす年代から早期終末の堆積時期を想定することができる。古

**写真5　第二段丘面の土層堆積（IV区2トレンチ）**

屋敷遺跡においては早期集落の終末段階の様相を伝える文化層にあたる。

III a層の下には富士黒土層の一般的な性状を示す黒色土の堆積があり，遺物の出土はさらに豊富であった。とくに早期後半の条痕文系土器群初頭の野島式土器を共伴して，縄文施文の土器と無文の土器が多く出土した。野島式土器を共伴するこれらの土器群の出土状況は，他の時期の型式を殆ど混じえないものであった。とくに野島式土器に後続する鵜ヶ島台式，茅山下層式土器などが全く出土しなかったことは明記されて良い。

いっぽう，これに先行するものとして押型文土器が少量出土しているが，遺構の検出はなく，その中心は今回の調査区域の周辺に存在したものと推測された。

III b層は第二段丘面の各トレンチの最下層に安定して堆積しているもので，検出された早期後半の遺構の覆土を形成している。各トレンチではいずれも早期後半の遺構が自然堆積層を掘り込んでいるために，今回の調査では早期後半を遡る時期の土層の堆積状況を明確に確認するには至らなかった。

縄文時代前期以降の土層は，IV区3トレンチの2.3mにもおよぶ土層堆積がしめすように，中期の曽利II式土器の時期に降下したスコリア層がII層の上層を覆っている。また間層を挟んで，その上層に縄文後期の土器片をわずかに含む土層が堆積し，その上に大室スコリア層，湯舟第1スコリア層，部分的に砂沢ラピリ層が堆積するといった状況が観察できた。前期以降の遺物の出土が少ないため，それらは他の遺跡の層位との比較によったものであるが，ほぼ整合した年代序列をしめしている。これらの詳細は事実記載と考察で検討することにする。　（阿部）

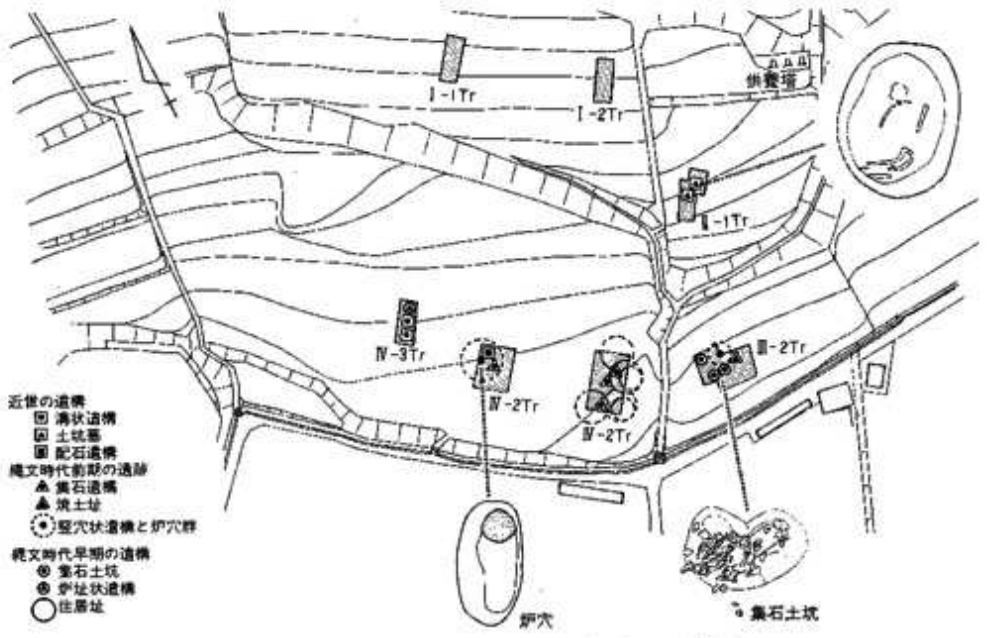
**c．遺構の性格と分布**　今回の発掘調査では，第二段丘面を中心として縄文時代早期，前期そして中世の遺構や遺物が検出された。これらの遺構や遺物は各トレンチ内でその一部が調査された

にすぎないが，その種類や分布状況から遺跡の性格をある程度予測することができる（第５図）。縄文時代早期の遺構は，竪穴住居址６軒，炉穴10基，集石遺構３基，竪穴状遺構２基が検出された。これらはいずれも第二段丘面において検出されたもので，調査した全てのトレンチからこうした早期の遺構が重複して検出されたことは，規模の大きなこの時期の集落の存在を暗示するものである。とくにⅣ区１トレンチでは早期後半の第Ⅳ群土器を伴うものが５軒と第Ⅴ群土器をともなう早期終末の１軒の竪穴住居址がそれぞれ重複して検出されており，この場所が居住地点の中心であった事を予測させる。

また住居の位置するⅣ区１トレンチをはさむように，竪穴状遺構が１基ずつとⅣ区１トレンチで７基とⅣ区２トレンチで３基の炉穴がそれぞれ検出された。細長い土坑の一端に焼土の堆積が示す燃焼部をもつ炉穴は，従来より調理加工施設の機能が推測されてきたが，Ⅲ区１トレンチでは炉穴に近接して焼礫を土坑に集積させた集石土坑が３基検出されており，こうした地点の性格の一端を示すものとして注目された。

この他にⅣ区３トレンチでは地表下2.6mにこの時期の炉址状遺構が１基検出されている。トレンチの壁際に位置するため全体の構造は不明であり，炉の周辺に床状の硬化面が存在することから，あるいは住居の炉址かとも思われる。こうした早期の遺構群の分布状況からは台地西側と東側に炉穴や集石遺構などの調理施設が存在し，それに挟まれる台地中央の平坦部に居住施設が配置されるという集落形態が予測される。

縄文時代前期の遺構には焼土址２基，集石遺構３基がある。焼土址はⅢ区１トレンチとⅣ区１トレンチから１基ずつが検出された。Ⅲ区１トレンチの焼土址は近接して大型の石皿と諸磯ａ式の土器片が出土している。集石遺構はⅣ区１トレンチに２基，Ⅳ区２トレンチに１基が検出され




第５図　古屋敷遺跡における遺構群のひろがり

写真6　重複する早期後半の住居址群（Ⅳ区1トレンチ　西方より）

Ⅱ層とした前期文化層を掘り下げると，早期終末，後半と年代的な序列を示して2枚の文化層が確認され，さらにその下にローム層を掘り込んだ早期の住居址群が検出された。写真正面の土層断面には灰白色の前期のスコリア層が埋没した早期住居址のわずかな窪みに堆積しているのがみえる。

た。前期ではこうした遺構が検出されたのみで竪穴住居などの集落遺構は今回の調査範囲からは発見されていない。しかしⅡ層とした層中より比較的多くの前期の遺物が出土しているので，周辺に住居の存在する可能性もあろう。

近世の遺構は土坑墓2基，配石遺構1基，溝状遺構2基が検出された。土坑墓は第二段丘面に設けられたⅡ区1トレンチから貨幣，人骨をともなって検出された。配石遺構は第二段丘面のⅣ区2トレンチで検出されている。溝状遺構も近接するⅣ区3トレンチで検出されているが，これらは遺物の出土がなく，遺構の構築面からその時期が推定されるにすぎない。

以上のように主体となる縄文時代の遺構群は，いずれも第二段丘面に設定した4ヶ所のトレンチから検出され，各トレンチでは前期と早期の生活面や文化層が明確な層位差をもって検出された。こうしたことから，古屋敷遺跡の縄文時代の生活址は，近世の村落経営においてもほとんど破壊されることなく，良好な状態で遺存しており，その中心は第二段丘面にあるものと推察された。そして早期の遺構群は，機能の違いが予測できる竪穴住居址や炉穴，集石土坑などがそれぞれに分布の中心を異にして存在するものと考えられる。また前期の遺構群は台地のいくぶん東にその中心があることが各トレンチの調査成果から推察されるのである。　（田中貴）

## 註・参考文献


註1　1986　末木建「富士吉田市内遺跡分布調査報告」富士吉田市史研究2

註2　1981　富士吉田市教育委員会『富士吉田市の遺跡』

註3　1968　山本寿々雄『山梨県の考古学』

註4　1976　岡本勇「大月市史」史料編

参考文献

『甲斐国志』

## (2)　出土遺物の概要と分類

ここではまず，出土した主要な遺物である土器，石器類の概要とそれらの分類を示しておく。調査の記録とそれ以降におこなう個別的な分析，考察は本節で示した分類を基本的な単位として用い，さらに細かな分類は，その視点や方法とともに研究編において示す。

**a．縄文土器の分類概要**　発掘調査によって出土した縄文土器は1079点を数える。これらの土器群は縄文時代早期を主体として，さらに前期のものを含んでいる。

縄文土器の分類は早期，前期の区分を基本として，さらに各時期の内部を型式学的なまとまりを単位に「群」に分け，各型式内の形態や文様等の特徴により分類されるものを「類」とし，さらに細部の特徴の違いを「種」として分類した（第6図）。

本遺跡出土の縄文土器の主体を成すものは早期後半から終末段階の土器群であるが，それらはある時期において，他の地域の土器型式を共伴しており，これらの土器群も群別の単位としているために，第Ⅰ群からⅤ群に分類した土器はただちに年代的な序列を示すものではなく，いくつかは年代的に併行関係におかれるものである。

第Ⅰ群は早期中葉の時期に位置づけられる。1類は押型文，2類はそれに共伴すると思われる撚糸文土器である。出土量は極めて少なく，早期後半の文化層に混入していたものである。

第Ⅱ群は刺突文や沈線文により構成される文様をもち，薄手のものを含み，胎土に繊維を含むが焼成の良好な土器である。当地域の沈線文系土器群終末段階を構成する土器と推察されるが，資料は多くはなかった。

第Ⅲ群は微隆起線と沈線を装飾要素とするもので，その一部に絡条体圧痕文を用いるものがある。これらの特徴は関東地方の野島式の特徴を備え，また絡条体圧痕文の採用は沼津市清水柳遺跡第2群E類（瀬川1986）とされたものに対比される。1～4類はそうした要素の組み合わせのバラエティである。5類は同質の胎土の無文土器である。第二段丘面の各トレンチのⅢb層と早期後半の遺構を中心として出土したが，全体量は少なく，第Ⅳ群土器に共伴する状況が各トレンチで確認できたことは注意されてよい。いずれも胎土に繊維を含んでいる。

第Ⅳ群は1～3類に分類される。いずれも胎土に繊維を含むほか，1～3類土器は厚手で金色の雲母片を多く含むなど酷似した特徴をもつ。それらのなかでも1，2類は口縁部周辺に段帯部をもつ尖底の深鉢で，縄文を主な装飾要素とする。2類は同様の段帯部に沈線による文様を描くものである。3類は口唇部が肥厚して，断面形が外削状を呈する特徴的な無文土器で，口唇部の形態からa，b種に分けられる。以上の土器群は第二段丘面において少量のⅢ群を伴う状況で出

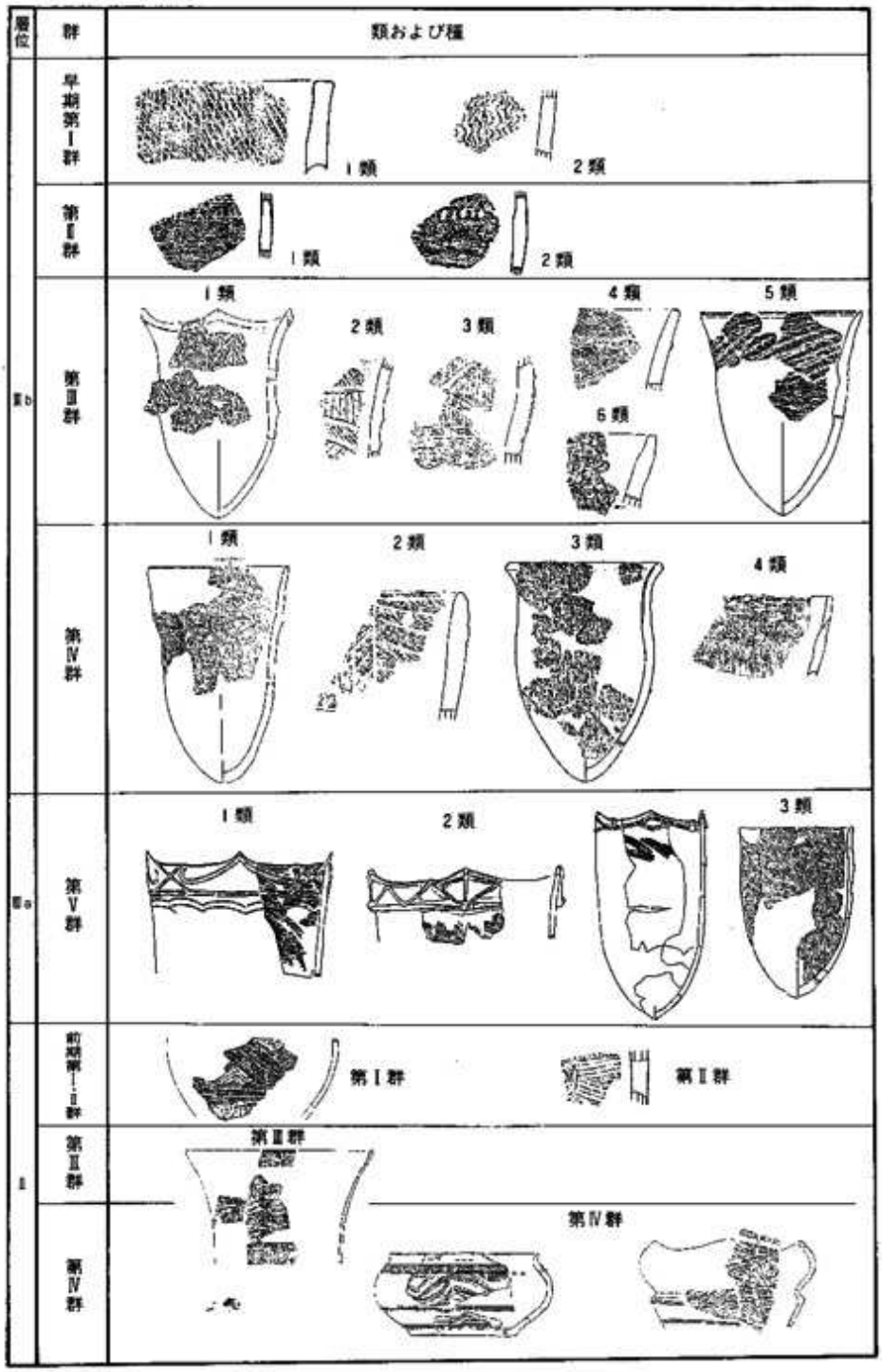
土し，本遺跡の早期後半段階の土器群の主体を成すものである。Ⅲ区１トレンチの集石土坑，炉穴やⅣ区１トレンチの１～４，６号住居址はこの時期の所産である。

第Ⅴ群は早期終末段階の神之木台式土器に比定される。Ⅲ区１トレンチ，Ⅳ区１，２トレンチのⅢａ層から主体的に出土し，Ⅳ区１トレンチでは，５号住居址がこの時期の所産である。口縁部付近に隆帯による装飾を行うものが多く，１類は胴部に貝殻腹縁文をもつもの，２類は隆帯のみのもので，隆帯のこまかな特徴よりａ～ｃ類に分類できる。３類は条痕のみを残すものである。いずれも胎土に少量の繊維を含む。

前期の土器群はⅡ層から主体的に検出され，４群に分類できる。第Ⅰ群は関山式に，Ⅱ群は神之木式土器に対比されようが，資料は非常に少ない。第Ⅲ，Ⅳ群は諸磯式に比定される。第Ⅲ群１類は胴上部に竹管状工具や櫛歯状工具によって文様帯を形成するもので，諸磯ａ式土器に相当する。第Ⅳ群は諸磯ｂ式土器に該当し，細い粘土紐の貼り付けや竹管状工具によって口縁部から胴部に文様が描かれる。第Ⅲ群２類は単節縄文のみが施されたもので，諸磯ａ，ｂ式土器に伴うものであろう。（阿部，恩田，中村）

**第１表　古屋敷遺跡出土縄文土器分類概要**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 早期土器群 | Ⅰ群 | １類　押型文<br>２類　撚糸文 | | |
| | Ⅱ群 | １類　沈線文<br>２類　刺突文 | | |
| | Ⅲ群 | １類　微隆起線文<br>２類　微隆起線文＋沈線文<br>３類　微隆起線文＋絡条体圧痕文<br>４類　沈線文　５類　絡条体圧痕文<br>６類　無文 | Ⅳ群 | １類　縄文<br>２類　縄文＋沈線文<br>３類　無文　ａ種．口唇部肥厚<br>ｂ種．〃　外削 |
| | Ⅴ群 | １類　隆帯＋貝殻腹縁文<br>２類　隆帯　ａ種．隆帯上貝殻腹縁文　ｂ種．隆帯上磨き　ｃ種．加飾なし<br>３類　条痕 | | |
| 前期土器群 | Ⅰ群 | 縄文＋半截竹管文 | | |
| | Ⅱ群 | 櫛歯状沈線 | | |
| | Ⅲ群 | １類　櫛歯状沈線＋縄文<br>２類　半截竹管文＋縄文 | | |
| | Ⅳ群 | １類　半截竹管文＋縄文<br>２類　浮線文＋縄文 | | |




第6図　古屋敷遺跡出土の縄文土器の分類と序列

**b．石器群の概要と分類**　今回の調査で出土した石器群は，石器105点，剥片・砕片320点の総計425点である。この石器群の大部分は，第二段丘面のⅢ区１トレンチとⅣ区１～３トレンチの縄文時代前期と早期後半の文化層（Ⅱ・Ⅲ層）と住居址内より出土している。出土した石器の大半は，早期後半の文化層と住居址内より出土しており，そうした状況から本遺跡より出土した石器の多くは縄文時代早期後半のものと考えられる。以下に，出土した石器の器種分類とその概要を述べる（第７図）。

石鏃（第７図―１，２）　28点出土している。全て凹基無茎石鏃である。石材は黒曜石24，水晶２点，緑色凝灰岩２点の３種類である。

削器（第７図―３）　７点出土している。石材は黒曜石１点，砂岩６点である。

掻器（第７図―４）　１点出土している。石材は黒曜石である。

石匙（第７図―５）　１点出土している。石材は緑色凝灰岩である。Ⅳ区２トレンチの縄文時代前期の集石と同一面より出土した。

ピエス・エスキーユ（第７図―６）　31点出土している。石材は黒曜石18点，水晶２点，チャート８点，緑色凝灰岩３点である。

二次加工を有する剥片・使用痕を有する剥片　17点出土している。石材は黒曜石13点，チャート１点，緑色凝灰岩２点，不明１点である。

磨石・凹石（第７図―11～13）　11点出土している。石材は凝灰岩２点，安山岩９点である。研磨面と全体の形状によりⅠ～Ⅲ類に分類される。Ⅰ類は断面三角形の河原石の稜上に平坦狭長研磨面を有するいわゆる「特殊磨石」である。１点出土している。Ⅱ類は平面形が楕円形を呈し，四つの側面にⅠ類に類似するザラザラした機能面を有するものである。凹痕を有するものがある。４点出土している。Ⅲ類は平面型が円形を呈し全面が滑らかなものである。６点出土している。

石皿（第７図―14）　３点出土している。機能面が平坦なものと凹んでいるものがある。全て安山岩である。

打製石斧　１点出土している。石材は砂岩である。

局部磨製石斧（第７図―８）　１点出土している。石材は粘板岩である。

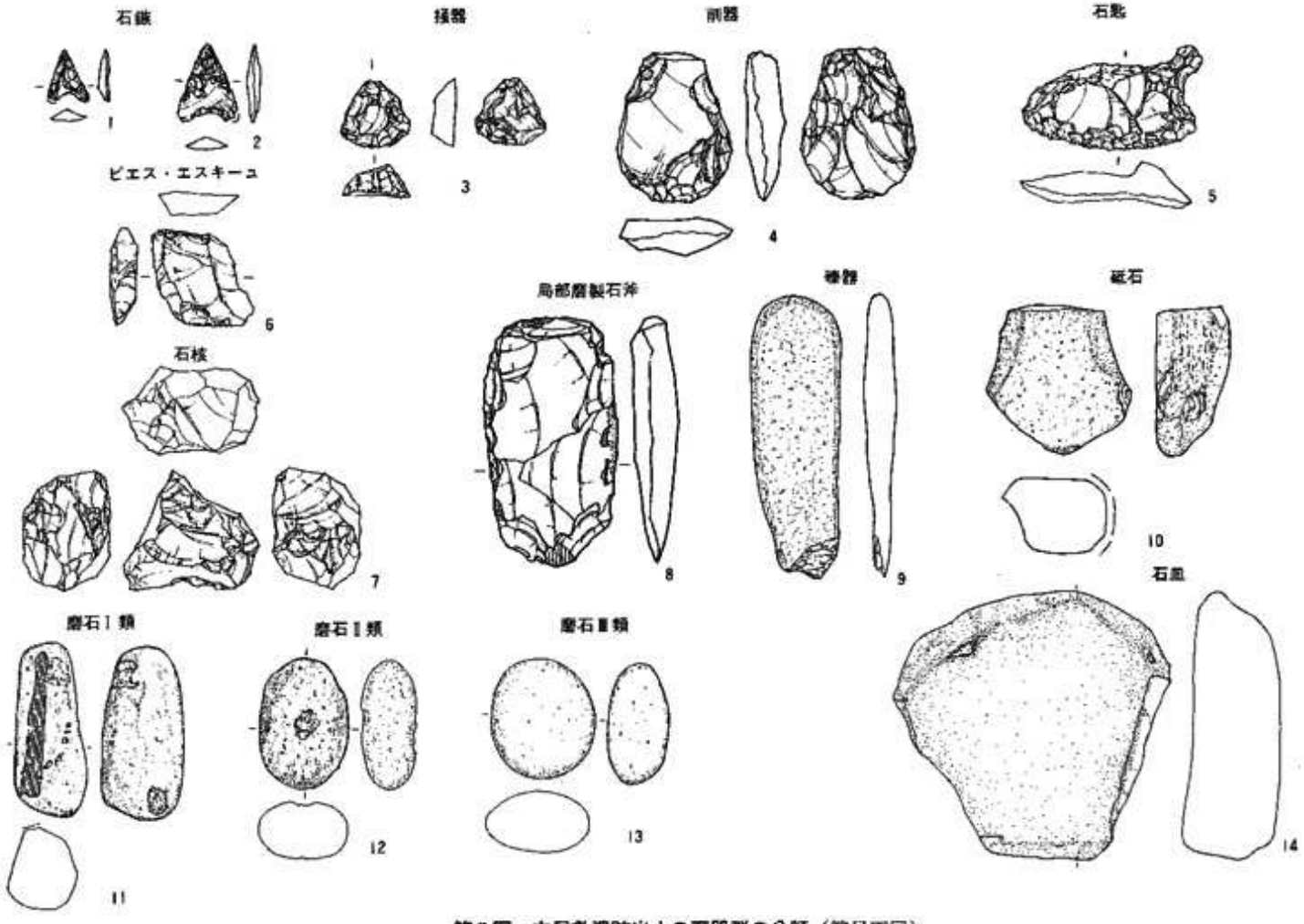
礫器（第７図―９）　１点出土している。石材は安山岩である。

砥石（第７図―10）　１点出土している。石材は砂岩である。

石核（第７図―７）　17点出土している。石材は黒曜石15点，緑色凝灰岩２点である。

原石　３点出土している。石材は黒曜石２点，水晶１点である。

剥片・砕片は320点出土している。石材は黒曜石222点，水晶15点，チャート11点，緑色凝灰岩42点，砂岩３点，安山岩２点，不明25点である。　（鶴田）




第7図　古屋敷遺跡出土の石器群の分類（縮尺不同）

# 第III章　調査の記録

## 第1節　第一段丘面における調査

第一段丘面はIII，IV区の位置する第二段丘面を見下ろす段丘崖の上にひろがる緩やかな傾斜地である。

調査は畑の区分を目安として，西側にひろがる畑地をI区，そして東側斜面をII区として，I区にはこの傾斜面にほぼ直交するように東西2m×南北5mのトレンチを2本設定し，II区には同様にして1本のトレンチを設定して調査を進めた。

### (1)　I区1トレンチの調査

本トレンチは第一段丘面の西側の緩やかな傾斜面に，南北5m×東西2mの規模で設定し，土層の堆積状況に注意しながら富士黒土層まで掘り下げたが，縄文土器の破片2点が出土したのみで遺構を検出することができなかった。また，土層の堆積を観察するために南北0.8m×0.4mの範囲でローム層まで掘り下げた。

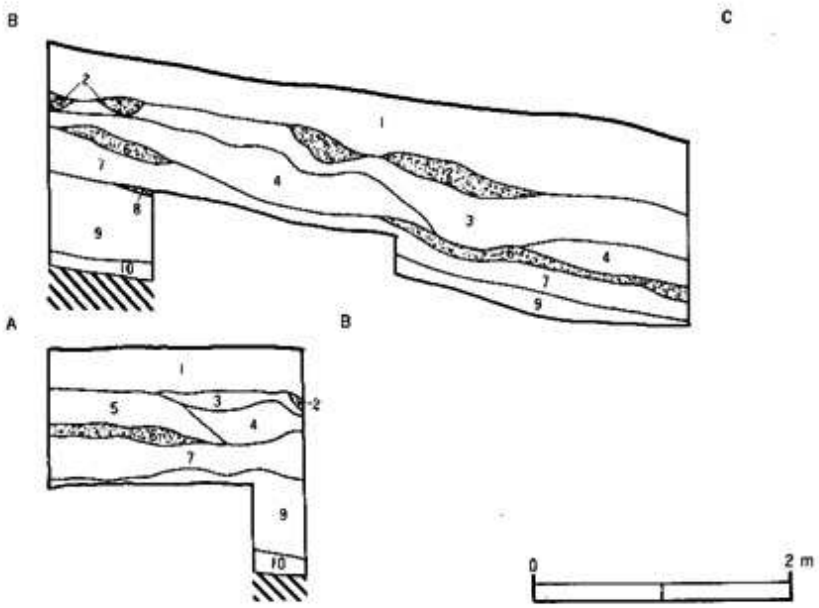
**a．土層の堆積と遺物の出土状態**　第1層は40～60cmの黒褐色の表土層である。第2層は明褐色の1～3cm大のスコリアからなる層が点在し，その最厚部は20cmに達する。このスコリアは乾燥すると灰白色となる。こうした特徴から本層は湯舟第1スコリア層に対比される。第3層は2層のスコリアを含む黒褐色土層で，縄文時代後期の包含層に対比されるが，遺構や遺物を確認することはできなかった。第4層は暗褐色土層で，1～2cm大の褐色のスコリアを多く含む。この層より縄文時代中期の土器が2点出土していることから，本層は中期の包含層と考えられる。

第5層はトレンチの北壁にのみ観察できる土層である。色調は第3層と近似した黒褐色土層であり，1cm大のスコリアを含む。

第6層は0.5～1.5cm大のスコリアを中心に，0.5～1.5cm大の赤褐色のスコリアを少量ふくむ土層である。最厚部は約15cmで，部分的に途切れる箇所もあるが，帯状に堆積している。このスコリアは縄文時代中期の曽利期に降下したものと推測される。

第7層は褐色土層で，下部ほど色調が暗くなる。他の土層に比べてスコリアをあまり含まない。この層は縄文時代前期の層であるII層に対比されるが，遺構や遺物を確認することができなかった。

第8層は暗褐色のスコリアからなる層である。スコリアの粒の大きさは不揃いで，大きいものでも0.3cm程である。層の厚さは約4cmであるが，本トレンチで確認できたのは一部分であるため，堆積状態は不明である。




第8図　Ⅰ区1トレンチの土層堆積図

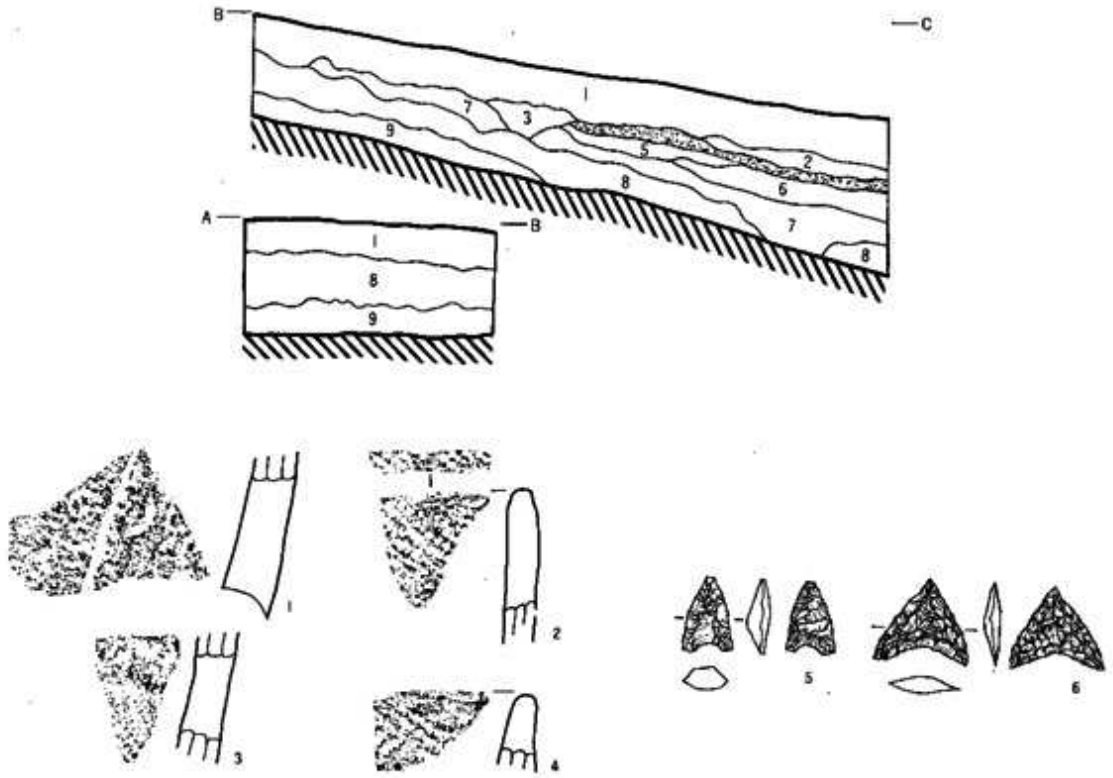
第9層は黒色土層である。粘性があり，スコリア粒子を殆ど含まない。厚さ約60cmと他の層に比べて厚い。本層は縄文時代早期の包含層である第Ⅲ層に対比されるが，遺構や遺物を検出することはできなかった。第10層は褐色土層であり，ソフトロームに対比される。

**b．出土した遺物**　遺物は前述したように，第4層中から縄文時代中期の曽利式の口縁部破片が2点出土したのみである。1点は縄文が施文されており，もう1点は表面が剝落していて文様は判然としないが胎土に金色の雲母片を含んでいる。（久保田）

## (2)　Ⅰ区2トレンチの調査

本トレンチは遺跡の第一段丘面のほぼ中央の緩斜面に対し，南北5m，東西2mの規模で設定された。調査は表土層から順次掘り下げをおこない，遺物・遺構の検出を中心にローム層上面までおこなわれた。

**a．土層の堆積と遺物の出土状態**　土層は耕作地ということもあり，1層は明褐色を呈する厚さ約30cmの耕作土である。本遺跡の基本層序に確実に対応する土層として，8層がⅢ層に比定され，縄文時代早期の包含層となる。それ以外の土層から遺物は出土せず，また，基本層序との対応も判然としない。土層の堆積は，トレンチの北側ではⅢ層の上部の大半が削平されているが，斜面下方に向かうにしたがいその厚さを増す。そして，トレンチの中央付近から安定した層位をしめすようになる。2・3層は色調・土質とも1層に近似する。4層は火山灰層であり，暗褐色を呈




第9図　1区2トレンチの土層堆積と出土遺物（1/2）

する。直径0.5～1cmのスコリアがほぼ純粋に含まれ，縄文時代中期後半のスコリア層に対比される。5・6層は4層の下層であり，中期以前に堆積した層であることが推定される。うち6層は明褐色を呈し，色調がII層に近似することから前期の文化層である可能性が強い。7層は8層を基調とし，褐色を呈する。9層は暗褐色を呈し，8層とローム層の漸移層である。

なお8層において土層断面の一部に7層から掘り込まれたような痕跡がみられたが，その形状が遺構として明確でないため，何らかの自然的な要因による撹乱と推察した。

遺物は土器と石器が8層の比較的下部から遺構に伴わずに出土した。

**b．出土した遺物**　出土遺物は縄文土器が5点，石器は石鏃が2点である。1は無文の土器である。外面は剥落が著しく，文様は判然としない。内面は比較的平滑に仕上げられている。胎土に若干の繊維および石英を含み，焼成は良好である。2～4は縄文の施される土器であり，早期第IV群1類に帰属する。いずれも胎土に金色の雲母，繊維を含み，焼成は良好である。2・4は口縁部破片であり，2は器面と口唇面にRLの縄文が，4は縦位と横位にLRの縄文がそれぞれ施文される。3は胴部破片と思われ，RLの縄文施文後に器面を磨いている。

石鏃はいずれも完形品であり，基部に抉りを有する。石質は5が黒曜石，6がチャートである。

（田中総）

### (3) II区１トレンチの調査

II区は第一段丘面の東端部に位置し，段丘面下にはIII区１トレンチを見下ろすことができる。現在の地表面はなだらかに南東に傾斜し，段丘崖に至る。

トレンチはほぼ地表面の傾斜に直行した方位に長軸を設け，南北５ｍ×東西２ｍの規模で設定し，調査の進行とともに検出された近世の土坑墓の完掘のために北東部を拡張した。

**ａ．土層の堆積と遺物の出土状態**　本地点は南東にゆるやかに傾斜する地形を示し，調査により観察，記録のおこなわれた土層の堆積状況も，ほぼ地表面の傾斜に対応したものであった。

近世の土坑墓と人骨が４層下面から５層上面において検出されたため，トレンチの北側は遺構の保存を考慮し，調査は５層上面までとして斜面下方を掘り下げ，11層までの層位を確認した。しかしこのレベルにおいても基盤のローム層には至らず，また遺物の出土も皆無な状況であったため調査を中止した。

土層は11枚に分層され，３層が本来的な旧表土であり，１層は整地にともなう盛土と考えられた。４層以下は撹乱を受けていない土層で，４～８層はスコリアを多く含み，暗褐色を呈する粘性に乏しい土層である。各層は相対的な色調の違いにより分層し，色調は下層ほど暗い。９層は0.5～１㎜ほどのスコリアの純層で曽利期のスコリア層に対比される。９層は７層に近似する。

10，11層は褐色を呈し，幾分明るい。また４層以下からは遺物の出土は無かった。　（河部）

**ｂ．検出された遺構と遺物**　近世の土坑墓　第一段丘面には現在南都留郡西桂町小沼に所在する福善寺（浄土真宗）がもともとは存在したことがつたえられており，古屋敷付近の古い字名として「阿彌陀堂」「堂の前」などがうかがえる。

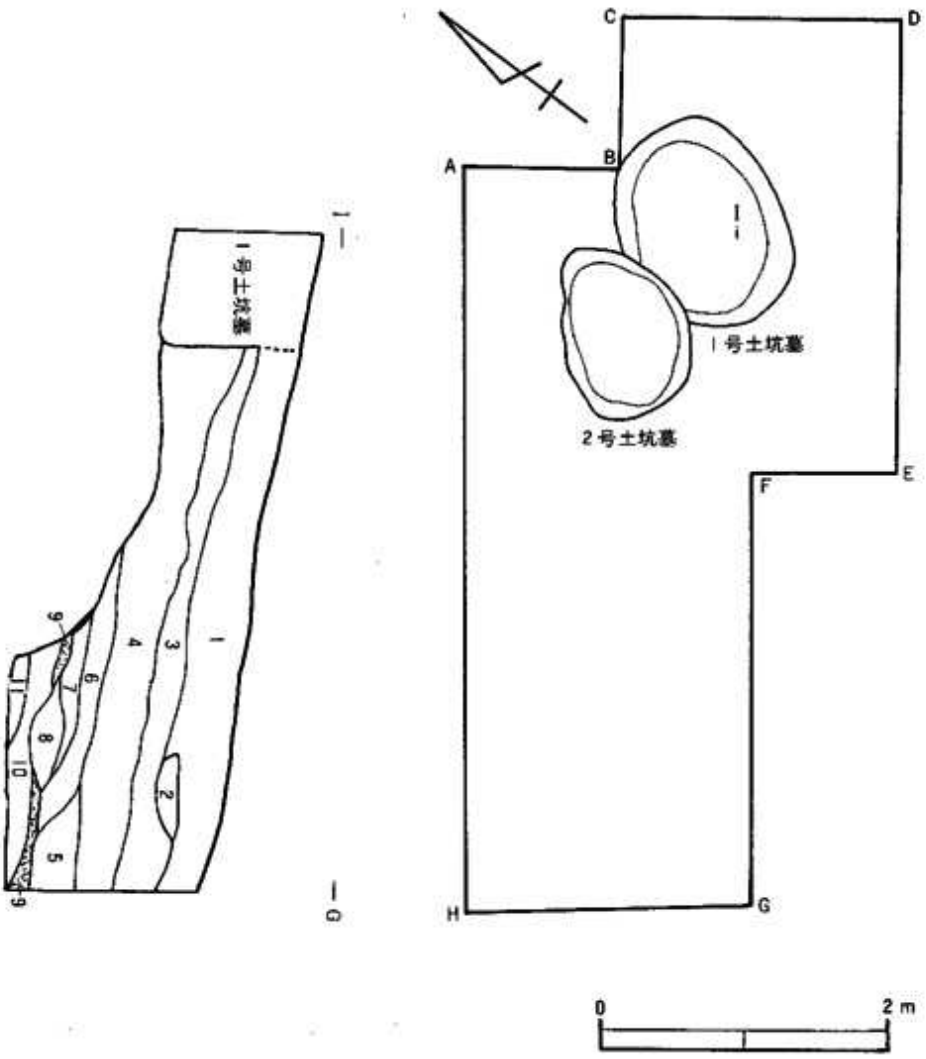
江戸時代中期の文化年間編纂の『甲斐国志』には「土人ノ相伝フ古福善寺ト称ス此寺小沼村ヘ遷リシ後元禄二年上吉田ヨリ慈光院ト云小刹ヲ移シ来リテ其跡ニ建立シ月江寺ノ末トスト云」（巻之八十九，仏寺部第十七上）と記されることから，おそらく福善寺の前身をなす阿彌陀堂がこの地にあったことはほぼ確実であろう。

II区はＩ区の東に接する畑地であるが，その北縁部の山際には六字名号塔をはじめとする石造物群が存在する。地元ではここを「ミョウゴノ森」（名号の森）といい，阿彌陀信仰を持った者の墓地であったと伝承されている。

II区１トレンチでは，重複して２基の土坑墓が確認された。また，２号墓の東側ではさらに別の土坑の一部が検出され，墓坑が面的に広がる状況が窺われた。

１号土坑墓は２号土坑墓を切って構築され，南北方向に長軸を有する南北126㎝×東西90㎝の不整楕円形プランを呈する。現存壁高は南壁で耕作土（Ｉ層）の下底面から70㎝を測る。南側に向かって傾斜をもつ皿状の平坦な坑底に人骨が検出された。骨は腐食が進んで，粉状になり，多くは土と同化している。

遺構の北側に頭蓋骨と歯の一部が残存し，南側で下肢骨が足を折り曲げた状態で部分的に確認



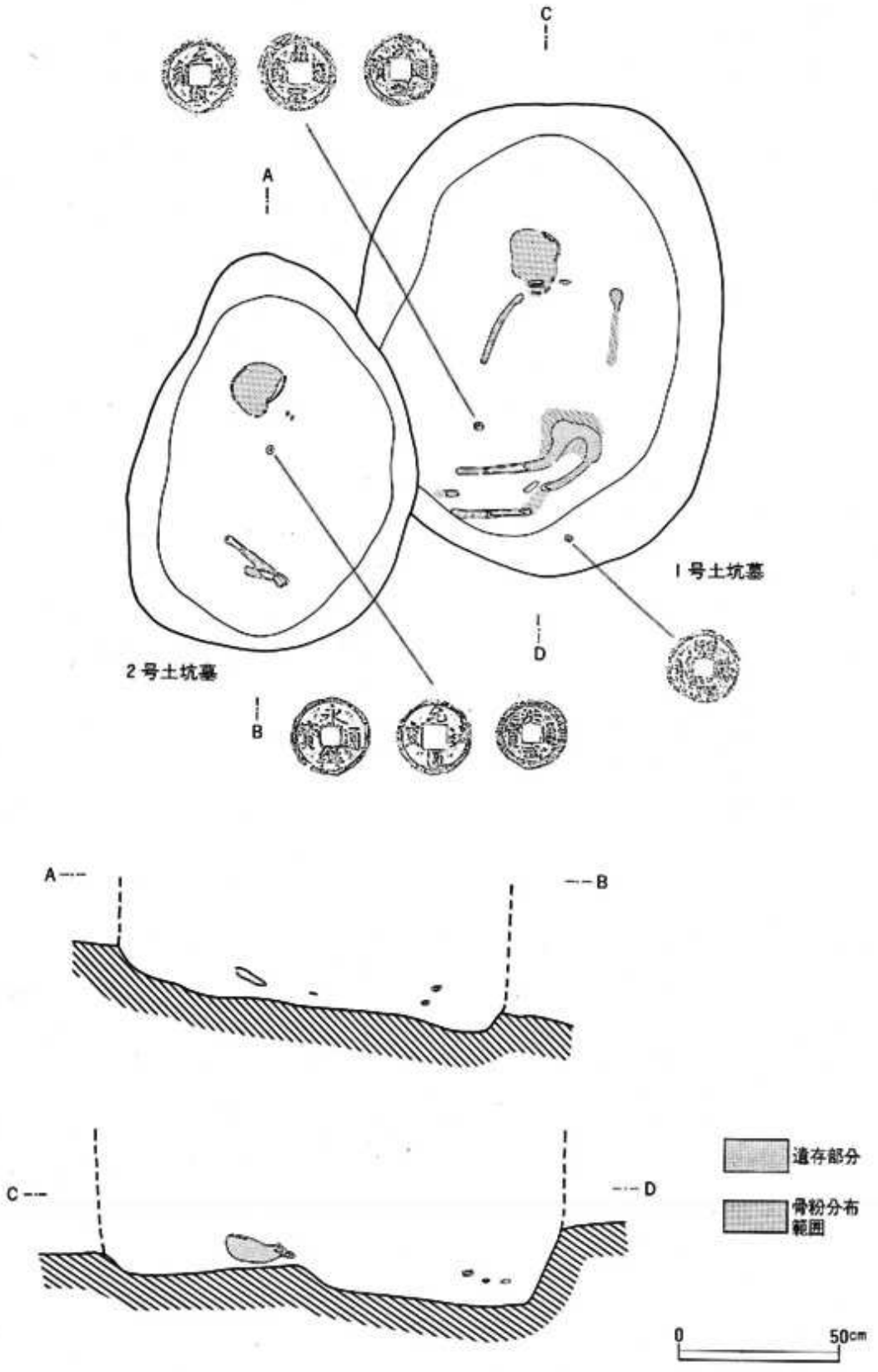

第10図　II区1トレンチの土層堆積と遺構配置

された。また頭部下で古銭3枚が重なって出土した。

2号土坑墓は1号土坑墓と同じく南北方向に長軸を有し，南北149cm×東西113cmの楕円形プランを呈する。推定壁高は耕作土（I層）の下底面から約70cmである。坑底は南北方向に傾斜をもち平坦である。

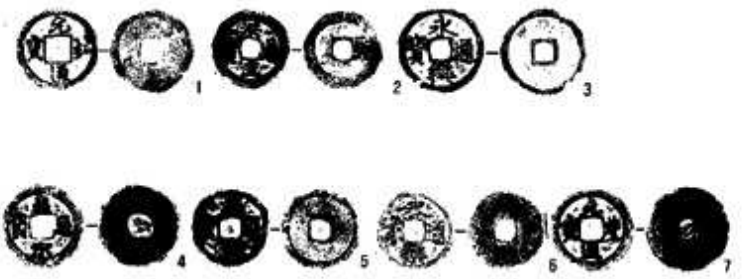
人骨は頭蓋骨と上顎骨および上歯と下歯の一部，上肢，大腿骨が部分的に残存する。また，上肢骨と大腿骨の間で古銭が3枚重なり，さらに南壁付近で1枚が出土した。

これらの2つの墓に共通するのは，楕円形の墓坑に頭を北側に向けた北枕にして足を折り曲げた屈葬位であることと，検出状態からはこれらの遺体が直葬した様子が観察されることである。また，出土した古銭は，その出土位置からして，首から下げられた頭陀袋に納められた六道銭と推定される。（堀内）



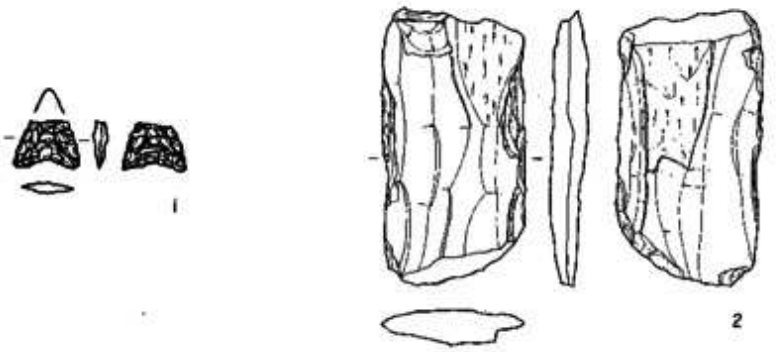

第11図　近世土坑墓実測図

**c．土坑墓出土の遺物**　II区1トレンチからは合計7点の古銭が出土したが，それらはすべて土坑墓にともなって検出されたものである。第12図1～3は1号土坑墓から，4～7は2号土坑墓から出土したものである。1は「元祐通宝」であり，元祐元年（1086）初鋳の北宋銭。2は「洪武通宝」（銅銭）で，裏側右に一字（「銭」か）鋳出されている。大きさは通常の永楽銭より一回り小さく国内鋳造の鐚銭の可能性が高い。鐚銭であれば，その流通年代は天正～元禄期とされる。3は明銭の「永楽通宝」の銅銭であり，永楽6年（1408）以降の鋳造銭である。4は南宋銭「嘉定通宝」（銅銭）と推定される。初鋳は嘉定元年（1208）である。5は2と同様の「洪武通宝」で，同じく鐚銭と考えられる。裏に文字はない。6は「永楽通宝」の鐚銭と考えられ，天正15年（1587）頃の鋳造銭である。7は長崎貿易銭の「元豊通宝」と考えられ，初鋳は万治2年（1659）である。以上の古銭の初鋳および流通年代から推定して，2号土坑墓は万治2年（1659）以降の墓と推定される。1号土坑墓は2号土坑墓に壊されており，さらに後出の時期の遺構と考えられるが，その下限は元禄期を下らない。それらは文献資料による大明見村の貞享3年（1686）移転の記録とも対応した年代を示している。（堀内）



第12図　近世土坑墓出土遺物（1/2）

**d．遺構外出土の遺物**　遺構外から出土した遺物は非常に少なく，第13図に示した縄文時代の石器が2点あるのみである。これらはいずれも表土（I層）から出土したものであり，本来の位置にはない。1は石鏃で先端部を欠損する。黒曜石製である。2は部厚な剝片を素材とした打製石斧で，上下両端の刃部を欠損している。安山岩製である。（鶴田）



第13図　II区1トレンチ遺構外出土遺物（1/2）

## 第2節　第二段丘面における調査

第二段丘面においては，遺跡の地形および現地の状況を考慮し，計4本のトレンチを設け調査をおこなった。これらは，東からIII区1トレンチ・IV区1～3トレンチと便宜的に命名した（第3図）。各トレンチからは，縄文時代早期後半および前期の遺構・遺物が検出されている。以下では，a土層の堆積と遺物の出土状態，b検出された遺構と遺物の順に詳述していく。

### (1)　III区1トレンチの調査

III区1トレンチは第二段丘面の最も東側に設定された（第3図）。当初は地形の等高線に沿って東西に長軸をもつ3×1.3m規模のトレンチで調査を開始したが，3a層を掘り下げる過程で，遺構を検出したため北側に2.6×0.6m，南側に1.4×0.6mの拡張をおこなった（第5図）。

**a．土層の堆積と遺物の出土状態**　本トレンチにおける層序は，地表から1層（表土層）・2層・3a～c層・4層・5層までが確認された。土層の堆積状態は，地形に沿って東西方向では，ほぼ水平に堆積し，南北方向では，北から南に向かって傾斜している。

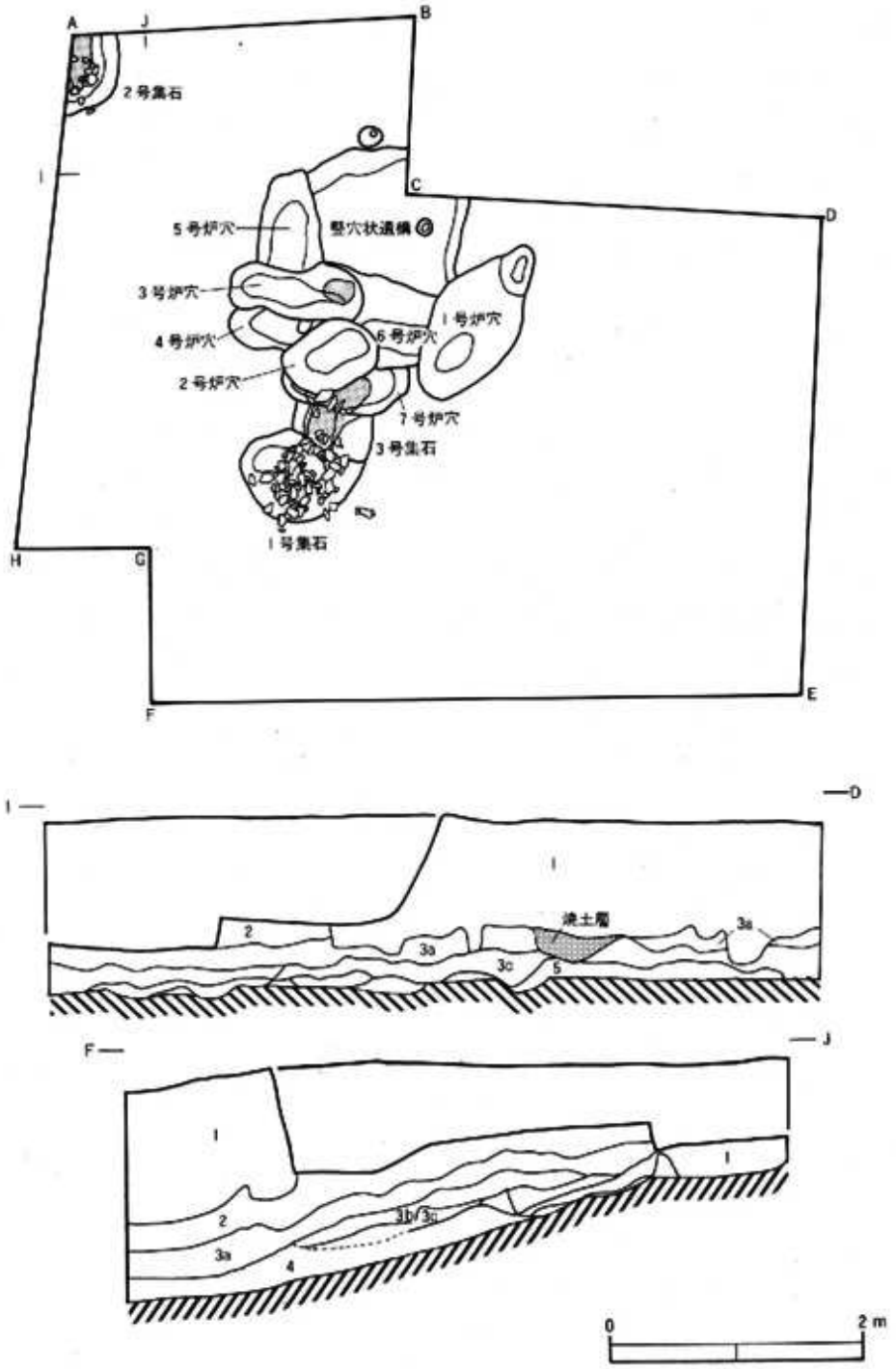
1層は表土層で，基本層序I層に対比される。この層によって，北側では2層の大半が失われ，さらに下層まで及んでいる箇所も見受けられる。

2層は，基本層序II層に対比される前期の文化層である。赤色のスコリアを多く含み，粘性が強くしまりの良い明褐色土層である。下層の3a層とは色調において明瞭に識別できる。1層（表土層）によってかなりの削平を受けている。遺物は東西の土層断面にみえる焼土址に伴って，前期第III群土器と石皿が検出されている。

3a～c層は早期の文化層である。3a・b層が基本層序IIIa層に，3c層が基本層序IIIb層に対比される。3a・b層は，しまりの良い暗褐色土層である。3b層は3a層に比べて粘性が弱く，北側の土層断面には観察されない。3c層は，粘性が強くしまりの良い黒褐色土層である。北から南に向かって層厚を減じながら消滅している。なお，いずれの層においても赤色のスコリアを多く含むことを特徴とする。遺物は，早期第IV群土器が主体的に出土し，次いで早期第II・III群の順で比較的まとまった資料が得られている。出土石器群の大半はこれらの時期の所産とおもわれる。早期第I群土器は調査所見から3c層下部からの出土が確認されているが，他の各群は細分層での際立った偏在性は認められない。

4層は赤色のスコリアを多く含み，粘性が極めて強くしまりの良い暗褐色土層で，他のトレンチではみられない。北側の土層断面には観察されず，遺物も検出されていない。

5層は赤色スコリアを多く含み，粘性が強くしまりの良い暗赤褐色土層である。ローム層への漸移層にあたり，遺構の大半はこの層の上面においてようやく確認できる状況にある。遺物は検出されていない。　（恩田）

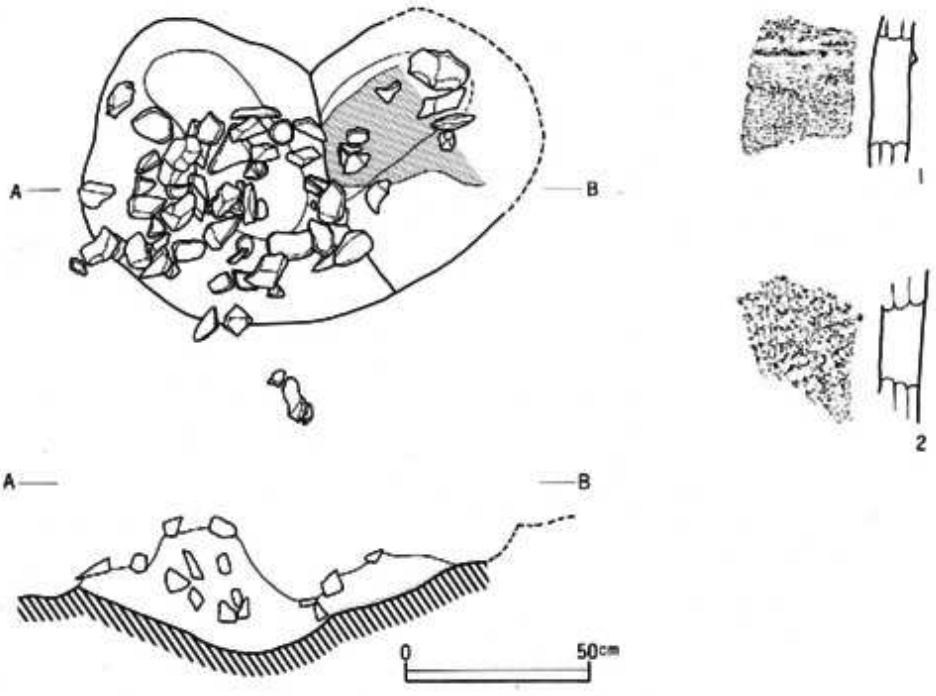



第14図　Ⅲ区１トレンチの土層堆積と遺構配置

**b．検出された遺構と遺物**　早期の遺構は，竪穴状遺構１基・炉穴７基・集石土坑３基が検出されている（第14図）。いずれも３層～４層上面に遺構構築面を有し，複雑な重複関係をもっている。３層からは早期第Ⅳ群土器が７割強を占めて出土している。前期の遺構は，２層中から焼土址１基が検出されている（第16図）。

**早期の遺構と遺物―竪穴状遺構と炉穴・集石土坑―**　竪穴状遺構は，５層上面において明確に確認ができた。本来の遺構構築面は，３ｃ層中に存在するものと思われる。遺構は南側を１・６号炉穴，西側を５号炉穴によって壊されているため，全体の規模・形態は不明であるが，残存している部分から察すると方形を呈すると思われる。東側の壁の立ち上がりは約10cmと低く，また北側の部分では，明確な壁の立ち上がりは認められなかった。床面は比較的平坦であるが，硬化面は確認されていない。遺構内東側と遺構外北側に柱穴らしい掘り込みがあるが，いずれも掘り込みが浅く柱穴と認定するのは難しい。以上のような状況に加えて，炉址も検出されていないことから，竪穴状遺構として判断した。床面上から遺物は検出されていない。

炉穴は７基が検出された。竪穴状遺構と同様に遺構確認面は５層上面である。本来の遺構構築面は，土層断面によって確認できた３～５号については，３・５号が３ｃ層上面，４号が４層上部にもとめられる。各炉穴は竪穴状遺構の南半・西半を切り崩しながら，複雑な重複関係をもっている。そのため遺構確認時点では竪穴状遺構の一部と考えられ，結果的に遺構覆土を掘りあげたあとでの確認となった。従って新旧関係の認定は，主に炉穴を掘りあげた状態での観察所見に




第15図　集石土坑と出土遺物（１・３号）

よる。それによれば遺構構築順に７号→４号→５号→３号→２号（４号→５号は遺構構築面の違いによる。），７号→６号→３号→２号，７号→６号→１号という新旧関係が捉えられる。４・５号と６号，３・２号と１号との新旧関係が不明のため，一時点における同時存在の炉穴数の把握までには至らなかった。遺構配置は１・５号が南北の傾斜に対して平行に構築され，その他は直交するかたちで構築されている傾向にある。平面形態については，全体を窺えるものが少ないが，概ね楕円形を呈する。ただし１号のみは北側に，径の小さい浅い掘り込み施設を有する。断面形態はいずれも底面が明確でなく，３号は東側底面に，７号は中央部底面に焼土がみられる。出土遺物は２号炉穴覆土から早期第Ⅲ群と早期第Ⅳ群１類と思われる小破片が各１点検出されているにすぎない。

集石土坑は３基が検出された。遺構確認面は礫の存在によって，遺構構築面とほぼ同様の面において捉えられた。１・２号が３ｂ層上面に遺構構築面をもつことが観察された。３号は遺構構築面は確認できなかったが，１号（第16図左）が３号（第16図右）の南半を切り崩していることから新旧関係が明らかとなった。また３号は礫の遺存状況から判断して７号炉穴より後に構築されたものと考えられる。１号は楕円形を呈する土坑内に拳大から乳児頭大の円礫が比較的密集した状態で検出された。覆土は，粘性が強くしまりのよい暗褐色土で，炭化物粒は少ない。円礫は大半のものが加熱をうけており，なかには礫表面にタール状付着物の観察されるものがある。土坑底面には，２・３号にみられるような火床面は認められない。３号は土坑内に拳大の円礫が散在し，いずれも加熱の痕跡が認められる。礫の数量は相対的に少ない。覆土は粘性が強くしまりの良い黒褐色土である。土坑底面には明確な火床面が認められる。２号は調査区の北西隅に検出されたため，１／４程度が調査されたにとどまる。土坑内からは拳大の円礫が比較的密に検出された。円礫はやはり大半のものが加熱をうけており，タール状付着物が観察される礫が多い。土坑底面は皿状を呈し，３号同様に明確な火床面が認められる。出土遺物は１号で早期第Ⅲ群４類（第15図１），早期第Ⅳ群１類（第15図２）が，３号で早期第Ⅳ群３類と思われる小破片が，覆土から検出されている。

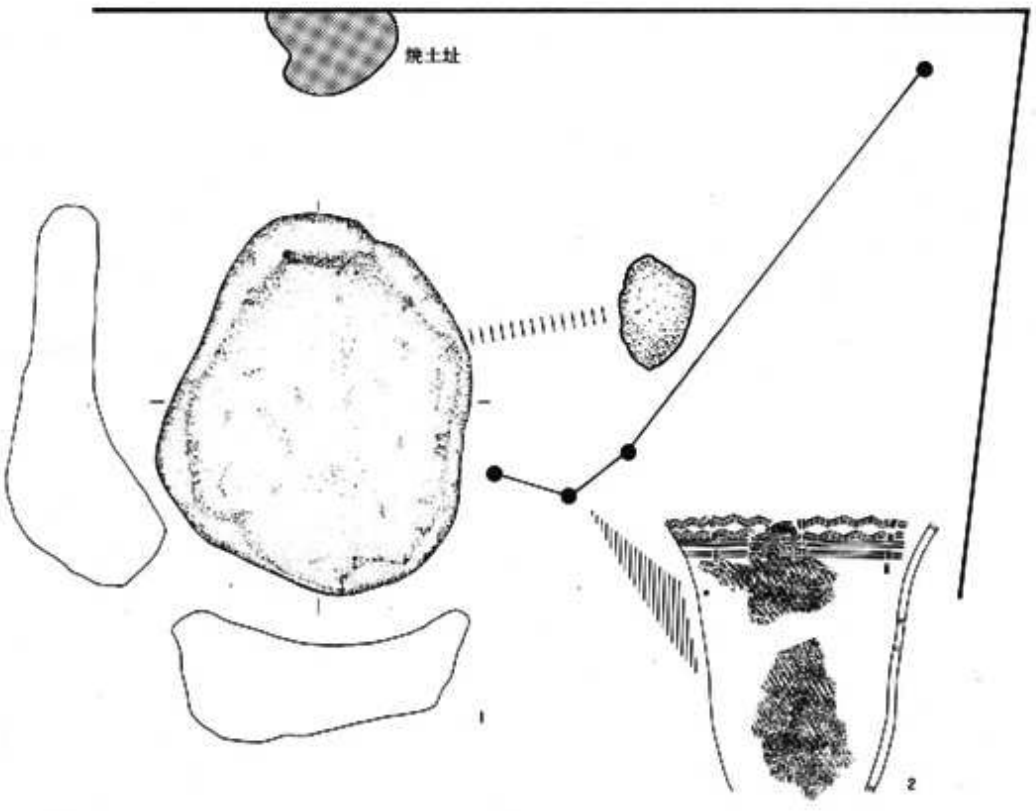
以上のように，本トレンチからは各遺構が複雑な重複関係を有して検出された。このような重複のありさまは，調査所見から竪穴状遺構→炉穴→集石土坑の時間的順序で構築・使用された累積の結果と判断された。また炉穴・集石土坑は３基以上の同時存在は認めがたく，１ないし２基ごとに時間的な間隙をおいて順次形成されたものと推測される。遺構群の重複関係は地形の斜面を上下に移動する傾向がうかがわれ，Ⅳ区１トレンチの傾向と共通する点があることは注意を引く。各遺構を時間的に位置づける遺物は稀少であったが，包含層からは早期第Ⅳ群土器が主体を占めて出土しており，これらに関連した諸活動はこの土器型式の時間幅のなかでおこなわれたと考えてよかろう。興味を引くことに，西側に隣接するⅣ区１トレンチからは，本トレンチ遺構群と同時期と考えられる竪穴住居址が検出されている。このような事実は，この場所がそれらに関係した屋外活動の場として機能していた可能性を示唆するものである。（恩田）

**前期の遺構と遺物—焼土址と石皿をともなう生活面—**　前期の遺構および遺物が含まれる２層は，耕作によって大幅に削平されており，良好な状態で確認されたとは言えない。しかしトレンチ北壁断面にかかるかたちで焼土址が検出された（第16図）。直径約80cm，深さ約20cmの皿状の掘り込みに堆積した暗褐色土中に焼土の小塊が多量に含まれている状態が観察された。構築面は削平により失われている。

２層からは，焼土址の確認面レベル付近で，前期に属する同一個体の土器破片と石皿が出土している（第16図１・２）。これらは焼土址の時期を示唆する唯一の資料である。他にも早期の土器や剥片が出土しているが，これらは本来３層に包含されていた可能性が強い。

個体復元をおこなった土器（第16図２）は，口縁部がやや外反する深鉢で，前期第Ⅰ群に比定される。半截竹管状の工具による波状の平行沈線が周回し，文様帯下端の区画に２条の平行沈線が引かれている。また波状文に交わって縦区画の断続的な平行沈線が垂下している。器面全面には沈線に先立って縄文が施されている。石皿（第16図１）は，機能面を伏せた状態で出土している。安山岩製で，長軸43cm、短軸29cmを測る。

以上のように，前期の包含層である２層中に構築面が予測される焼土址とそれに伴うと思われる遺物が検出された。包含層の遺存状況が良好とはいえないが，このように前期における生活の痕跡が認められたことは，おおきな成果といえよう。　（田嶋）




**第16図　第Ⅱ層下面に検出された焼土址と遺物（１：1/8，２：1/6）**

**第Ⅲ層（早期文化層）出土の遺物**　本トレンチにおける縄文時代の遺物包含層は2・3a～c層が該当する。2層は前期の包含層（第Ⅱ層）に対比されるが，遺存状況がわるく，この時期の遺物は稀少であった。3a～c層は，竪穴状遺構・炉穴・集石土坑が検出された層に該当し，早期の土器だけが出土している。早期の土器は1・2層からの出土も少量認められるが，これらは本来的に3層（第Ⅲ層に対応）に包含されていたものと思われる。

**早期の土器**　早期の土器を主体的に包含する3層はa～c層に細分されているが，細分層における偏在は認められず，層位学的に分離不可能である。よって分類は専ら型式学的観点によるものである。各層の分類別出土点数は第1表のとおりである。第Ⅳ群の出土比率が多いことは他のトレンチの傾向と良く合致する。一方第Ⅴ群は検出されておらず，この傾向はⅣ区3トレンチの状況に近似する。平面的な分布状況は，遺構周辺に出土量が比較的多い傾向がうかがえるが，調査範囲が狭小のため明確な把握はできない。なお出土土器の大半は細片で，全てを図示できなかった。従ってここでは良好な資料をできるかぎり掲載した。

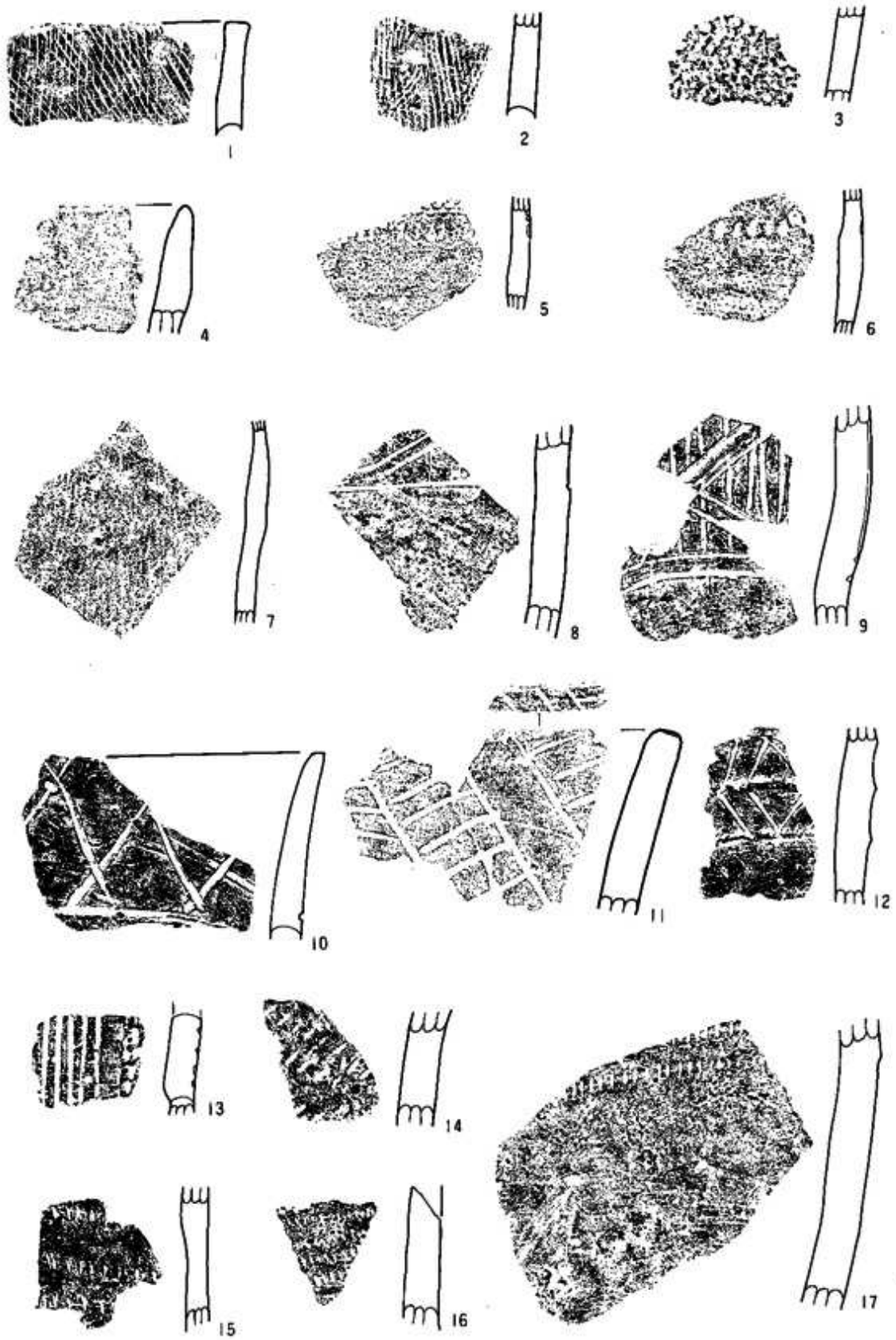
第17図3は第Ⅰ群1類に比定される。格子目押型文が施文されているが，施文ののち器面を撫で整形しているため文様が不鮮明となっている。胎土に金色の雲母片を多く含む。

1・2は第Ⅰ群2類である。ともにR撚りの撚糸文原体を交差させて施文することによって網目状としている。1は縦位→斜位，2は右傾→左傾の順で施文をおこなっている。1は口縁部破片で，角頭状の口縁部断面を呈する。

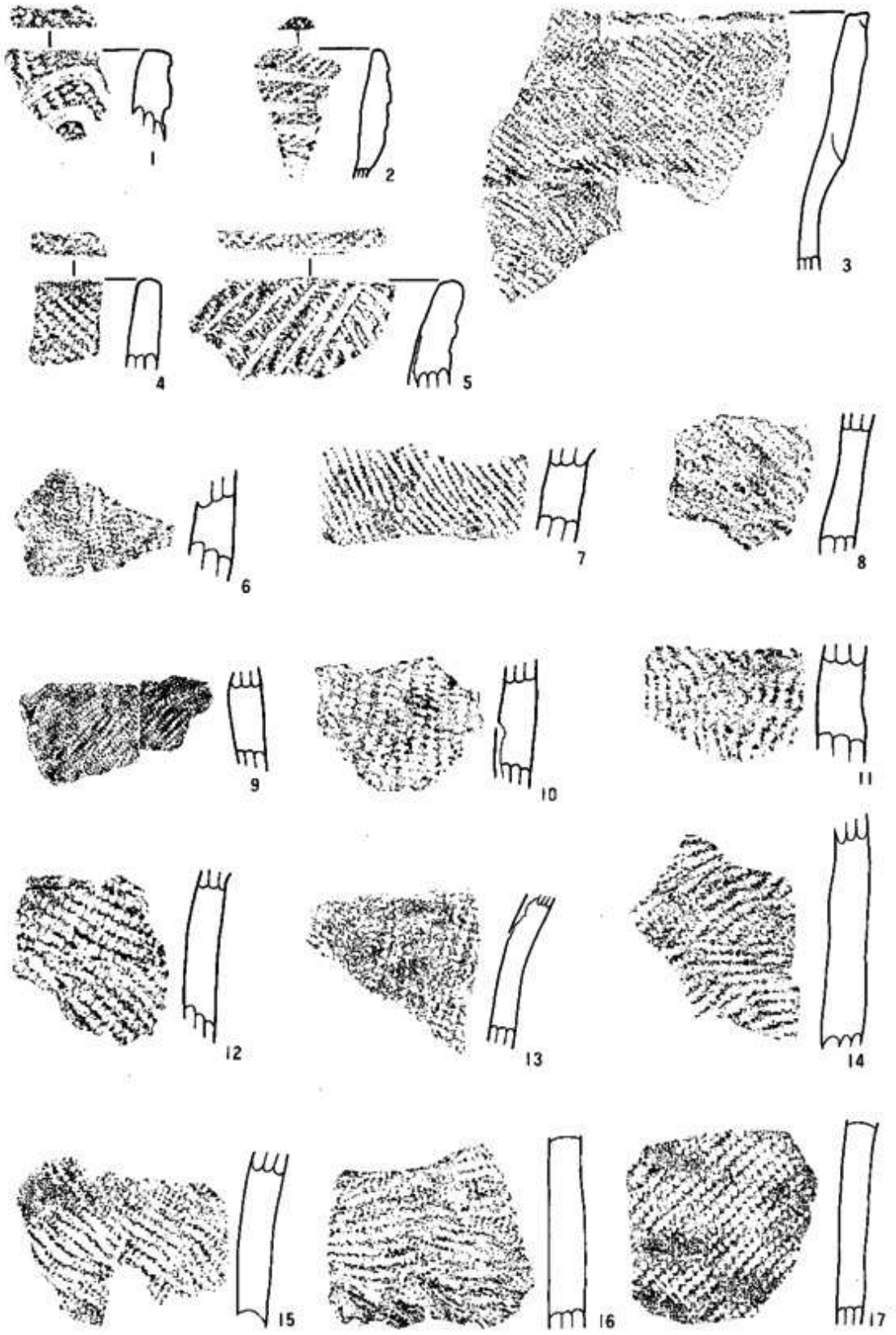
5～7は第Ⅱ群に比定される。器壁が薄く，堅緻な胎土を有することを特徴とする。5・6は先端がささくれだった篦状工具で浅い押し引き状の刺突を横位に巡らせる。5は刺突列が2段巡るようである。7は器表面に縦位の擦痕を残す無文土器で，成形・胎土等の特徴から本類に含めた。ともに胎土に石英を多く含んでおり，6・7の器裏面には成形の際の指頭状圧痕が観察される。

4は第Ⅲ群6類に比定される。尖頭状の口縁部断面を呈し，器表面は横位の撫で調整がなされている。胎土には，繊維および石英を多く含む。

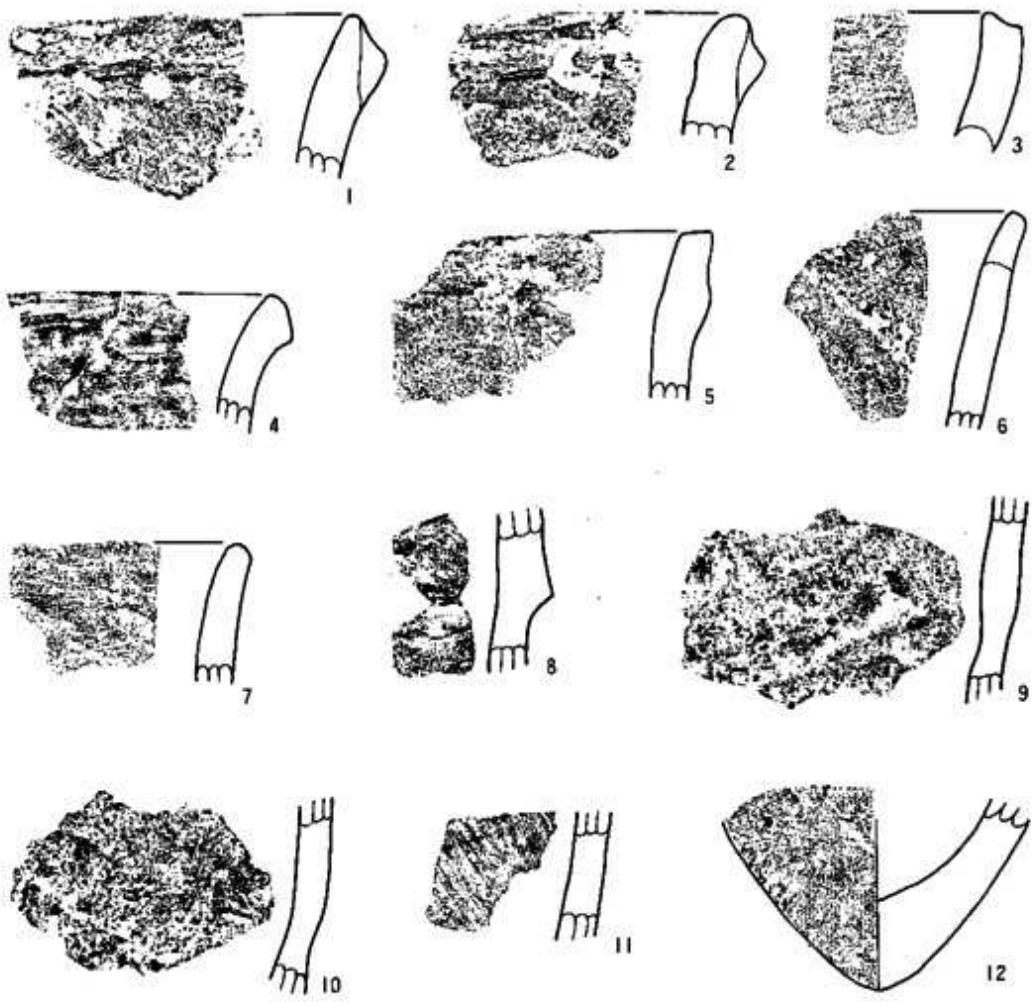
8～17は第Ⅲ群に比定される。12は1類，14～17は3類，8～11・13は4類である。12は横位の微隆起線を巡らせ，その間には沈線による鋸歯状のモチーフが描かれる。8・9は地文に縦位の沈線を施したのち，文様帯下端の区画線と文様モチーフが描かれている。8は地文には細沈線を，文様帯下端の区画線には太沈線を，文様モチーフには半截竹管状工具を用い，9は地文に太沈線を，文様帯下端の区画線と襷状の文様モチーフに半截竹管状工具を用いている。このように施文工具をそれぞれ使いわけていることを特徴とする。9は文様帯下端に対応して緩やかな屈曲部をもつ。10・11は口縁部破片で，11は口唇部に斜位の刻みが施される。10は下端に横位の文様帯区画線がみられ，区画内に沈線で格子目状のモチーフを描く。右傾を引いた後，左傾を引いてモチーフを完成させている。11は空白部を挟ませて，左傾する梯子状のモチーフが描かれる。破片左端をみると梯子状モチーフが隣接して綾杉状を呈するようである。13は凹線で幾何学状に区




第17図　第III層出土遺物（土器1）



第18図　第Ⅲ層出土遺物（土器２）



第19図　第III層出土遺物（土器３）

画し，内部を沈線で充填する類の破片と思われる。凹線の右側には，これを縁取る刺突列がみられる。14～17は微隆起線がみられないが，胎土や絡条体原体等の特徴から４類に帰属させた。原体は全てＲ撚りで，撚りは固く細い。押圧は浅く，節と節の間隙が開いている。８～17はいずれも丁寧な撫で整形がなされ，胎土には繊維を含む。

第18図１～17は第Ⅳ群１・２類に比定される。３・４・６～17は１類，１・２・５は２類である。６以下の胴部破片は１類と２類の区別が困難なため，沈線文がみられないものは全て１類に含めて扱った。いずれも胎土に金色の雲母片および繊維を多量に含み，縄文を多用することが特徴としてあげられる。

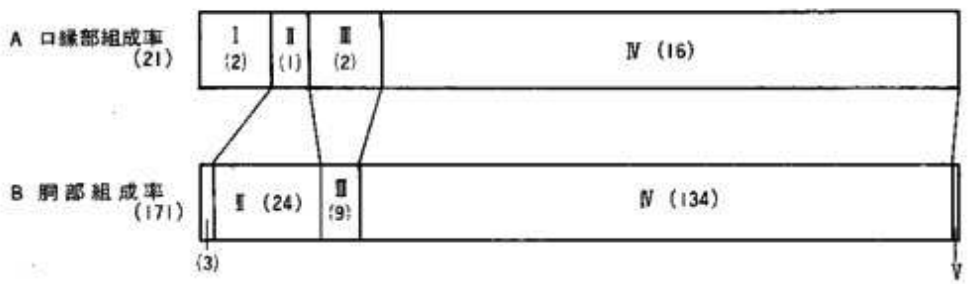
３・４は口縁部破片である。３は屈曲部を有し，４は口唇部にＲＬ撚りの縄文を施文している。３・４・７～９・11・15・17は原体を横位に，６・10・16は斜位に回転させて施文をおこなっている。13・14は横位・斜位の両回転を併用した施文がみられる。原体は３・４・７・８・12・13・

15がＲＬ，６・９・10・11・14・16・17がＬＲを使用している。１・２・５は口縁部の沈線による文様施文を除けば，成形・胎土・器面調整等において１類と型式学的特徴を同じくする。いずれも地文に縄文を施文したのち，口縁部に沈線によって文様を描くことを特徴としている。１は２条の波状モチーフが，５は鋸歯状モチーフが描かれる。２は３条の横位沈線が引かれ，緩やかな屈曲部以下は無文部となる。地文の縄文原体は１がＲＬ，２・５がＬＲを使用している。さらに口唇部には器表面と同様の撚りの縄文が施文されている。

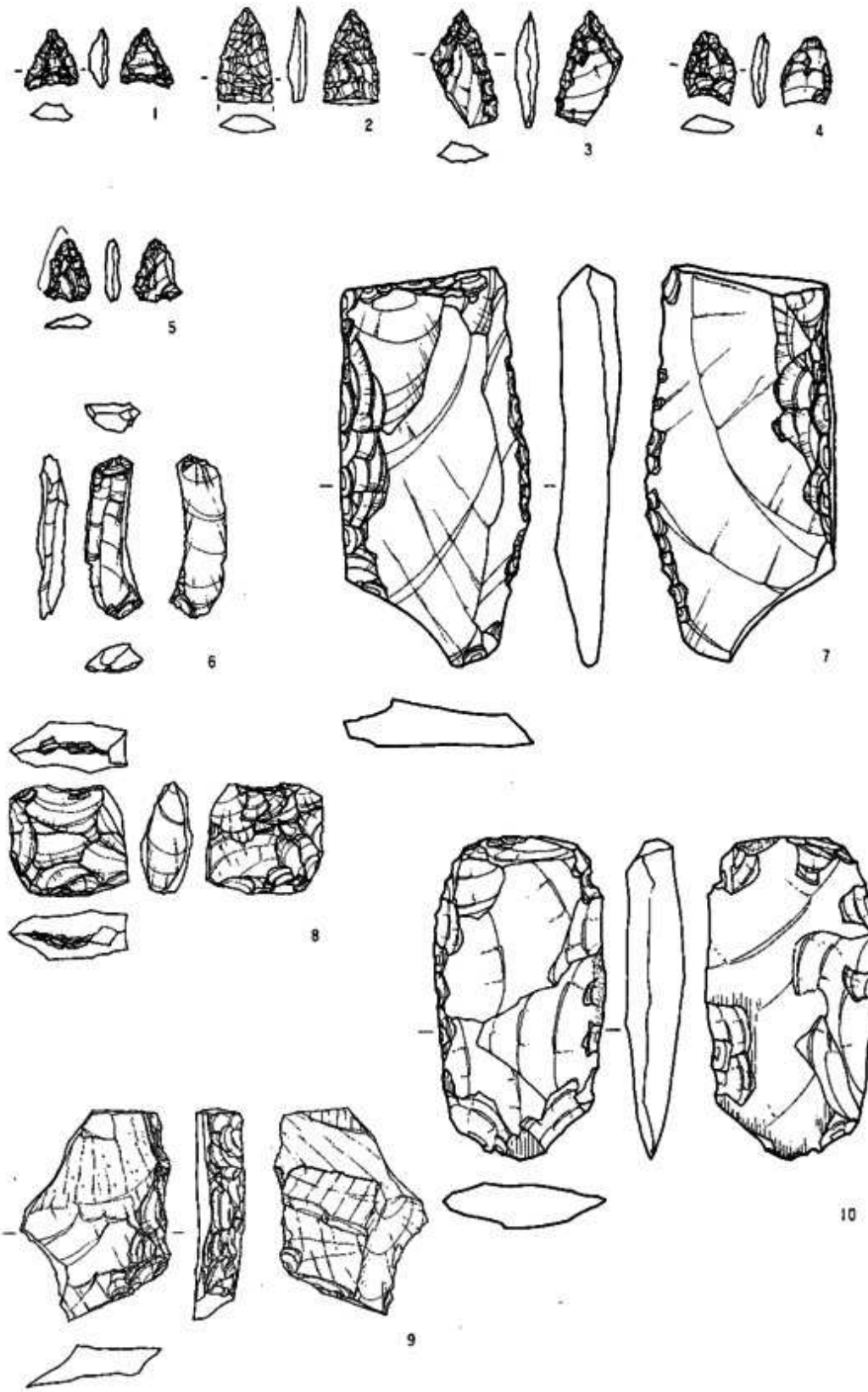
第18図１～12は第Ⅳ群３類である。共通した特徴として，胎土に金色の雲母片および繊維を多量に含み，器表面は無文で撫で調整による擦痕が顕著にみられる。これらの特徴は第Ⅴ群１・２類に酷似している。１・２・４の口縁部上端の肥厚部は粘土紐をはりつけることによって成形していることが観察される。７は屈曲部を有する破片で，他に例をみない。（恩田）

**石器**　Ⅲ区１トレンチでは，石鏃４点，削器２点，二次加工を有する剥片２点，使用痕を有する剥片３点，ピエス・エスキーユ６点，石皿１点，局部磨製石斧１点，礫器１点，石核２点，剥片・砕片75点が出土している。第20図に主な石器を示している。

１～４は石鏃である。石材は全て黒曜石である。１と３は周辺加工が施され両面に素材剥片の剥離面が残されている。４は未製品である。５・６は二次加工を有する剥片，７は使用痕を有する剥片である。石材はいずれも黒曜石である。８・９はピエス・エスキーユである。上下両端に両極打法による階段状剥離とつぶれが認められる。石材は，８がチャート，９が緑色凝灰岩である。10は削器である。剥片の鋭利な縁辺にわずかに調整加工を施し刃部を作出している。さらに裏面の打面方向より調整加工によりバルブの厚みを取り除いている。石材は安山岩である。11は局部磨製石斧である。剥片を素材としたもので，刃部に研磨痕が認められる。また側縁に敲打痕または摩滅痕が認められる。石材は粘板岩である。12は礫器である。扁平な角礫を用い一側縁に一定方向より剥片剥離を行ない刃部を作り出している。石材は安山岩である。図示した石器の出土層位は３は１層，12は不明，その他は全て縄文時代早期後半遺物包含層の３層より出土している。（鶴田）




第２表　Ⅲ区１トレンチ出土土器組成（　）は総点数




第20図　III区１トレンチ第II層およびIII層出土遺物（石器１）

## (2) Ⅳ区1トレンチの調査

本トレンチは第二段丘面の東側の平坦面に位置し，Ⅲ区1トレンチの西方約10mの地点にあたる。トレンチは当初南北5m×東西2mの規模で，緩やかに水田にむかう傾斜面に直行した長軸を設け，第2層面の調査段階で北側と東側にそれぞれ拡張をおこなった。

トレンチ内の調査はⅠ層の除去ののち，Ⅱ層以下を層位的に掘り下げるため，各壁際に土層観察用のサブトレンチを入れ，下部の状況を観察しながら掘り下げるといった手順をとった。

**a．土層の堆積と遺物の出土状態**　本トレンチは，富士黒土層に構築面をもち，青柳ローム層を掘り込んで床面とする早期の竪穴住居址が複雑な重複関係をもって検出されている。したがってⅢ層に対応する土層の大半が，これらの遺構の覆土として細かく分層され，トレンチの壁面には住居覆土の複雑な堆積状況が観察できた。

Ⅰ層の下面にはトレンチのほぼ全面にⅡ層とした暗褐色の土層が堆積し，3号住居址と5号住居址の窪みに堆積したこの層中には，純層に近いスコリア層が挟まる状況が観察された。

Ⅱ層中には前期第Ⅰ～Ⅳ群土器が出土し，とくに本層の下位面には焼礫が散漫に出土する状況が観察され，トレンチの北寄りには集石が2基検出された。

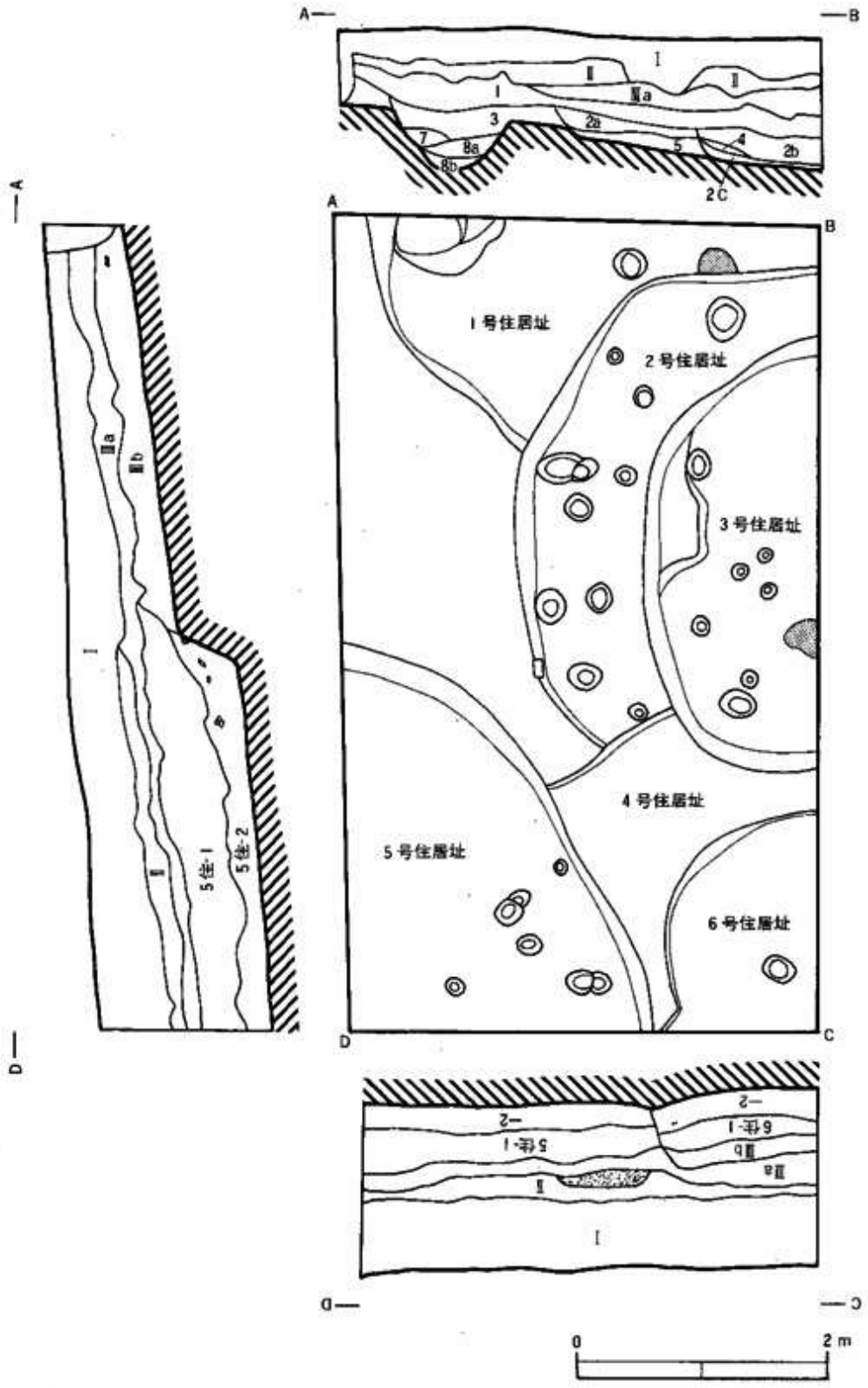
第Ⅲ層は上部と下部に分層され，上部をⅢa層，下部をⅢb層と呼称した。Ⅲa層は1～4，6号住居址の覆土の最上層に比較的安定した堆積が観察されたほか，5号住居址はこの層が覆土の大半を形成するもので，出土した土器から早期終末の第Ⅴ群土器の時期に比定されるものであった。また1～4，6号住居址の窪みに堆積したⅢa層からも同様に早期第Ⅳ群土器が比較的まとまって検出されており，そうした状況からもⅢa層の堆積時期を推定することができた。

Ⅲb層はこの下に比較的安定した堆積をしめすが，住居の構築によって自然の堆積層が掘りこまれているため，単純にⅢb層の堆積のみとめられたのはトレンチの北西部の遺構外であり，遺物の出土は少なかった。各住居の覆土はⅢb層と酷似した性状を示し，焼土や木炭の混入や，色調の違いから分層したもので，1，2，3，4，6号住居址ではⅢ，Ⅳ群土器が主体的に検出されている。また1，2，3，4，6号住居址の重複関係は，それぞれの覆土の掘り下げと分層の時点に比較的明確に確認することができ，その状況はさらに住居床面の精査によって追認されることになった。

遺構群の全体の重複傾向は斜面上方の北側より順次斜面の下方に移動していく状況が予測されそして各住居の床面の高低は新しいものほど深くなるものが多いようである。

いずれの住居址も床面は基盤層の青柳ロームを掘り込むもので，プランや構造は比較的明確に捉えることができた。各遺構はⅢb層の調査中に確認されたものであるが，本来の遺構構築面はこれよりも幾分高いレベルにあった可能性がある。また，各住居には貼り床の痕跡は全く認められなかった。

（阿部）




第21図　Ⅳ区１トレンチの土層堆積と遺構配置

**b．検出された遺構と遺物**　本トレンチから出土した遺物は縄文時代の早期と前期の遺物で，それらは前期がII層に，そして早期がIII層を中心として出土している。II層は前期の文化層であるが，なかには早期後半から終末の土器が散漫に出土している。これらはいずれもIII層とした早期文化層からの混入と考えられるものである。

III層は数枚に分層されるべき複雑な土層の堆積から成り，これらの多くの層は早期の住居址の覆土であった。

**早期の遺構と遺物**　III層の上面において確認された遺構は，トレンチの南西隅の５号住居址である。この住居は上面においてII層の堆積が厚く，また前期のスコリア層の堆積も確認された部分であり，当初は傾斜面の窪みにこのような土層の堆積がみられるものかと推定していたが，不整円形のプランの一部がIII a 層上面の掘り下げ時点で確認されたため，竪穴住居と判断した。

III a 層からは早期第V群土器が主体的に出土した。この住居址（５号住居址）の中に堆積した覆土は２枚あり，床面を覆う２層は多量の木炭を含み，床面付近には木材の形状を残すものもみられた。とくに北側の壁際にその傾向は顕著で，床面も被熱して赤く焼けた部分が拡がっており，焼失家屋と推定された。

遺物の出土は覆土の２層に多く，炭化材と同一のレベルで出土したものが大半である（第22図）。壁の高さは北側で床面から40cmあり，遺存の良好な住居址である。また東側で４号，６号住居址を壊している。調査部分は全体の約４分の１程度であるが，全体のプランは不整円形と推定される。

III a 層下に堆積するIII b 層からは早期第III，IV群土器が出土しているが，この層を掘り込む住居址が５軒検出されている。いずれも重複しており，住居の全体を明らかにすることができなかったが，平面プランは不整円形になるものと推定される。各住居址は掘り込みが明確にとらえられ，かつ床面がローム層に構築されているため，相互の新旧関係は比較的明確にとらえることができた。重複は住居址の検出状況と覆土の堆積状態から１―２―３―４―６号住居址という新旧関係が想定されるが，床面の最も深いものは３号住居址である。１―２―３号住居址の床面は階段状に明確な段差をもつもので，各床面は堅く踏み固められている。

１号住居址はトレンチの北側に位置し，西隅の床面に不整形の土坑が設けられており，内部と覆土から絡条体圧痕文を施した早期第III群土器の出土がある（第22図１）（第23図５）。また東側には２号住居址に一部を壊される状態で焼土の堆積と床面の焼け込みが認められ，炉址と判断された。柱穴と推定されるものは炉址の西側に発見された１個のピットのみである。覆土は10枚に分層されたが，住居址の中央付近には早期VI群土器を包含するIII a 層が部分的に堆積している。覆土は住居址のほぼ中央にむかいレンズ状の自然堆積を示す。大別して８枚に分層され，２層と８層は色調から細別された。全体にIII b 層に近似し，４層のみは焼土がブロック状に堆積したものである。７，８a，８b層はロームの混入が目立ち、第23図５の土器がまとまって出土した。５，６層はロームの混入が多いが，他の層は，全体に炭化物が多く，下位ほど色調が暗い。

2号住居址は1号住居址の南半分を壊している。また中央部分を3号住居址に壊されており，壁際を中心とした部分が残存するのみである。床面までの掘り込みは約30cmをはかる。壁際には11個の柱穴と思われるピットが巡る。また南側の壁には約半分に割れた石皿が立てかけた状態で発見された。遺物は42点の土器片があり，とくに床面に張りつく状態で早期第Ⅴ群3類とした無文土器（第22図2，第24図14）と2類土器（第24図6）が出土している。

覆土は2層に分層され1層は暗褐色を呈し，1号住居址の覆土に近似し焼土粒子の混入が目立つ。2層は褐色土層でスコリアの混入が目立ち，木炭粒子や焼土粒子を含んでいる。

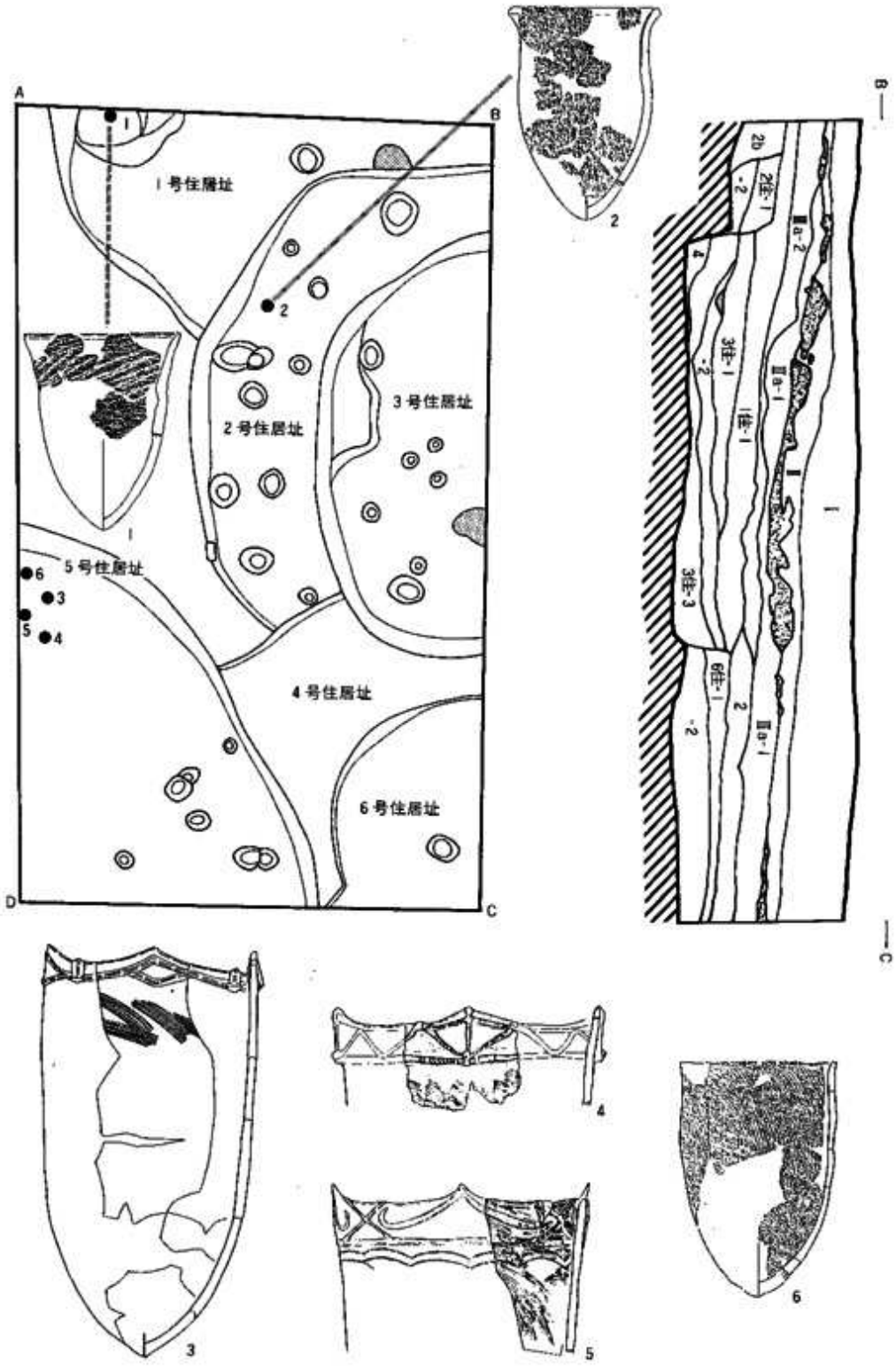
3号住居址は2，4号住居址を壊して構築されており，全体の約半分を調査した。床面は壁際付近で2号住居址の床面よりも60cmほど低く明確な段差をもっている。床面には壁際を中心として不規則に7個のピットが発見され，それらは大小の別から2種類に分類でき，配列に規則性が読み取りにくいが，柱穴と推定される。また住居の南寄りに地床炉が確認できた。焼土の堆積は厚くはないが，焼土内から炭化したクルミの殻が検出された。

4号，6号住居址は多くの住居に壊され，またその一部分のみが調査されたために，規模や構造が不明確な部分が多い。床面の高低からすると6号住居址が低く，プランからも6号住居址が4号住居址を壊すようである。4号住居址は床面に柱穴などの施設は発見できず，6号住居址においては，わずかに1個のピットが検出されたにすぎない。

5号住居址はトレンチの南西隅に検出され，4，6号住居址を壊して構築されている。掘り込みは深く，プランの確認は明確にできた。覆土は上層がⅢa層であり，下層はその亜層である。この層は床面付近で多量の木炭や炭化材を含み，北隅の覆土中にはまとまった土器の出土があった（第22図3～6）。

床面はほぼ水平でローム面に設けられ，良く踏み固められている。また壁際周辺では熱を受けており，赤化している部分が多い。柱穴と思われるピットは南西に集中して7個が発見されているが，いずれも浅く主柱穴といえるものは調査範囲内には確認できなかった。　（阿部）

写真7　Ⅳ区1トレンチ完掘状況（Ⅲa・Ⅲb層に構築面をもつ早期住居群）




第22図　Ⅳ区Ⅰトレンチにおける早期の遺物出土現況

**出土遺物**　本トレンチでは遺構やその覆土，各文化層から多くの遺物が出土した。ここでは土器と石器の別に各住居址単位の記述をおこなう。また大量に出土した土器は型式学的な特徴をもつ資料については極力資料化に努め，細片や無文部分などについてはその数量を示しておく。

**1号住居址**　総数20点の土器片が出土した。覆土自体が薄いため，本住居址にともなう遺物はすくなかったが，住居の西隅に発見された掘り込みと，その周辺からは第23図5に示した深鉢が出土した。全体の約4分の1程が残存している。器形は胴部上半が緩く外反する尖底の深鉢になるものと思われる。口縁部には指頭による成形痕が幅約30㎜の無文部分として残され，一部に微隆起線状の粘土の隆起がある。この隆起が以下の装飾部との分帯をしめすものかは判然としない。胴部上半には粒の大きい絡条体圧痕文が左傾位に施文されている。現存部分から推すと絡条体はR撚りの撚り紐を軸に巻つけているようであり，1回の施文単位は6条と推定される。胴部以下は無文部となり，横位の成形痕が残されている。内面は指頭による押圧や成形による凹凸がのこされており器厚は約15㎜と厚手である。口縁部分は比較的薄く，尖頭状の口唇部を特徴としている。胎土には若干の繊維を含み，焼成は良好である。1～4は覆土から出土している。これらはいずれも第Ⅳ群3類土器に比定される。

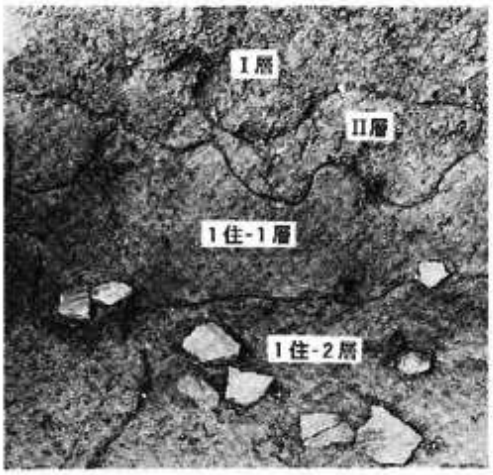
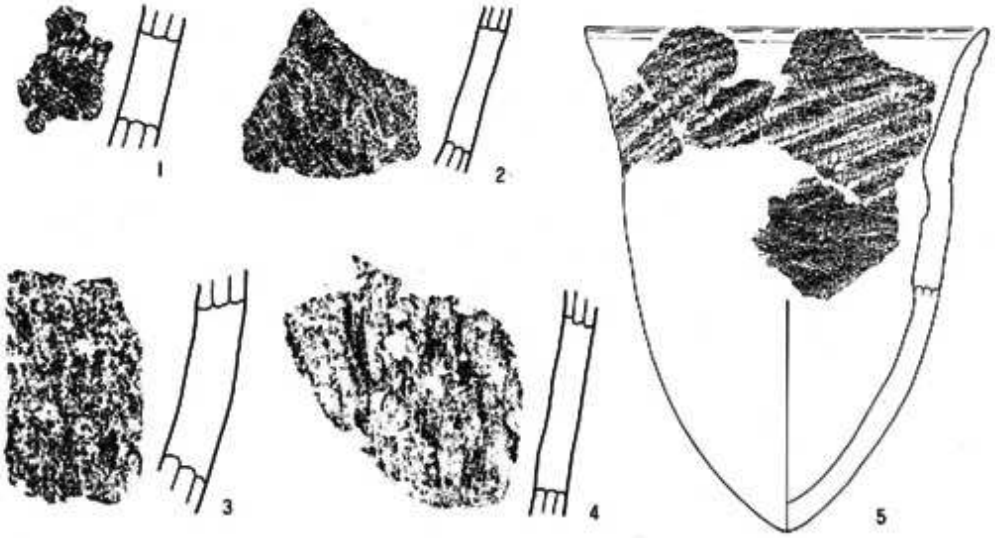



**写真8　1号住居址における遺物出土状態**
II層（前期）の下には2枚の文化層（IIIa、IIIb層）が堆積しており1号住居址はIIIb層に近似した土層により埋没している。この層からは第III群の絡条体圧痕文土器が纏まって出土した。

**2号住居址**　総数23点の土器が出土している。覆土中には第24図1に示した第Ⅰ群2類の撚糸文土器や同図2の第Ⅲ群1類の絡条体圧痕文土器を少




**第23図　1号住居址出土遺物（土器）**

量含んでいる。これらは数量や出土状況から混入と考えられるものである。

床面直上から出土しているのは6，14であり，両者は住居址の北西の床面に折り重なる状態で出土している。他の資料は覆土からの出土である。

第24図3，4は第Ⅲ群4類で，直線的な文様に刺突文や沈線を充填する特徴をもつ。胎土には少量の繊維を含み，内面には条痕による調整痕が観察できる。5，6は地文に縄文を施文し，太い沈線文を描くもので，5は口唇部に縄文を施文している。6は口縁部下に屈曲をもつ。7，8は沈線による文様を欠いているが同類であろう。5，6は第Ⅳ群2類に7，8は第Ⅳ群1類に比定される。13は同類の胴部である。縄文の条が縦位になる施文のくせがある。胎土には少量の繊維を含む他，大量の金色の雲母片の混入が観察できる。9～11，14はとくに文様を描かない無文土器で，胎土の特徴は第Ⅳ群1，2類と酷似している。9はこの類の口縁部であるが，口唇部に粘土紐を張りつけ，外観は外削状を呈する。12は胎土や器厚が2と酷似しており，第Ⅳ群3類に比定される無文土器であろう。

以上に示した土器の出土状態やその特徴より本住居址は早期第Ⅲ，Ⅳ群の時期の所産と考えられる。

**3号住居址**　総数82点の土器片が出土しているが，床面付近から出土しているのは第25図4，5，7である。

第25図1は異方向に撚糸文を重ねて施文したもので，網目状撚糸文と似た効果をもつ。2，7は縄文のみを施文したもので第Ⅳ群1類に比定される。胎土には少量の繊維と金色の雲母片を多く含む特徴がある。3は口唇部が肥厚しないが，胎土や成形の特徴から第Ⅳ群3類とした無文土器に含まれるであろう。4，5は口縁部下に細隆線を一条ほどこし，口縁部に独立した文様帯をもち，5はここに斜めの沈線文を描く。4，5ともこの隆線上には絡条体の押捺があり，一見刻みにみえる。胴部には左下がりの絡条体圧痕文が施文されている。また両者は口唇部に刻みが施されている。6も同様の口縁部と思われる。胎土には少量の繊維を含むほか，丁寧な成形が行われ，焼成は良好である。

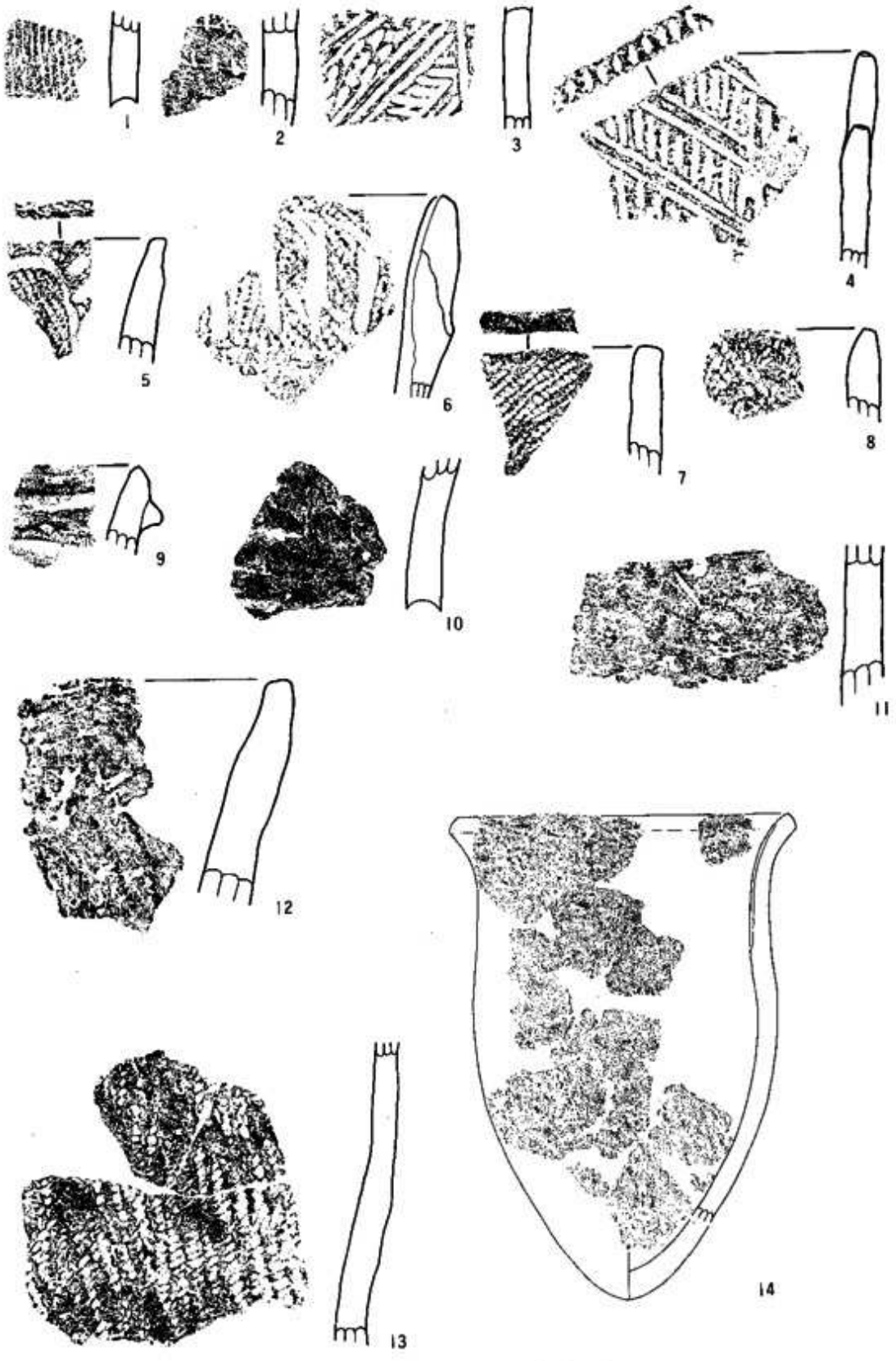
出土した土器の特徴から本遺構は早期第Ⅲ，Ⅳ群土器の時期と考えられる。

**4，6号住居址**　住居のごく一部分の調査であったが，56点の出土があった。小破片が多く，図示できたものは3点と少ない。第25図8が4号住居址で他は6号住居址出土である。

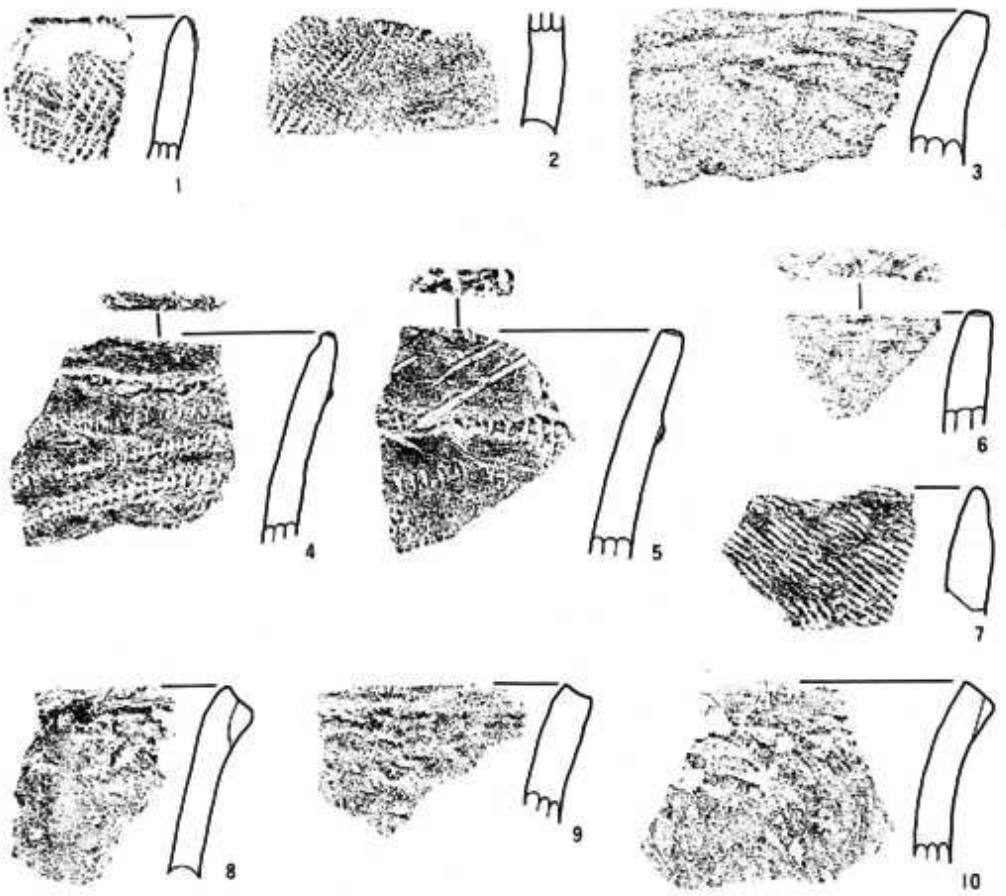
いずれも第Ⅳ群3類として分類した無文土器で，8，10の口唇部は肥厚して断面形態は外削状を呈する。9も含めて，これらは口唇部が横位の撫でにより成形され，こうした口縁部の断面形態がかなり意図的なものであったことを窺わせる。外面は丁寧な撫で成形が行われているが，胎土が脆弱なせいもあり，剝落している部分もある。胎土には少量の繊維と大量の金色の雲母片を含んでいる。

少ない遺物ではあるが覆土や遺物の特徴から本遺構は早期第Ⅲ，Ⅳ群土器の所産と推測できる。

（阿部）




第24図　2号住居址出土遺物（土器）



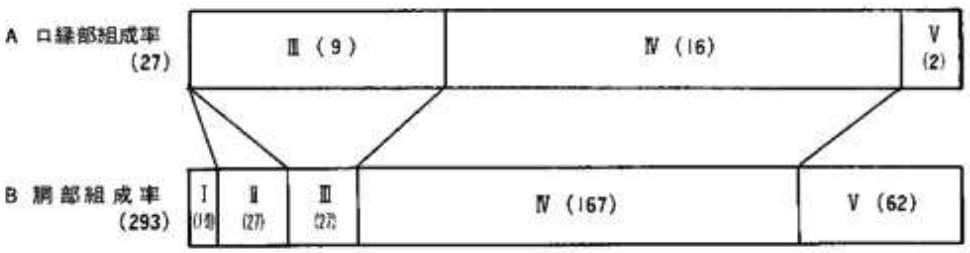

第25図　3，4，6号住居址出土遺物（土器）

2号住居址は中央部分を3号住居址に切られており重複は顕著な床面の段差を作りだしている。床面には早期第Ⅳ群Ⅰ類，Ⅲ類土器が折り重なるようにして出土している。

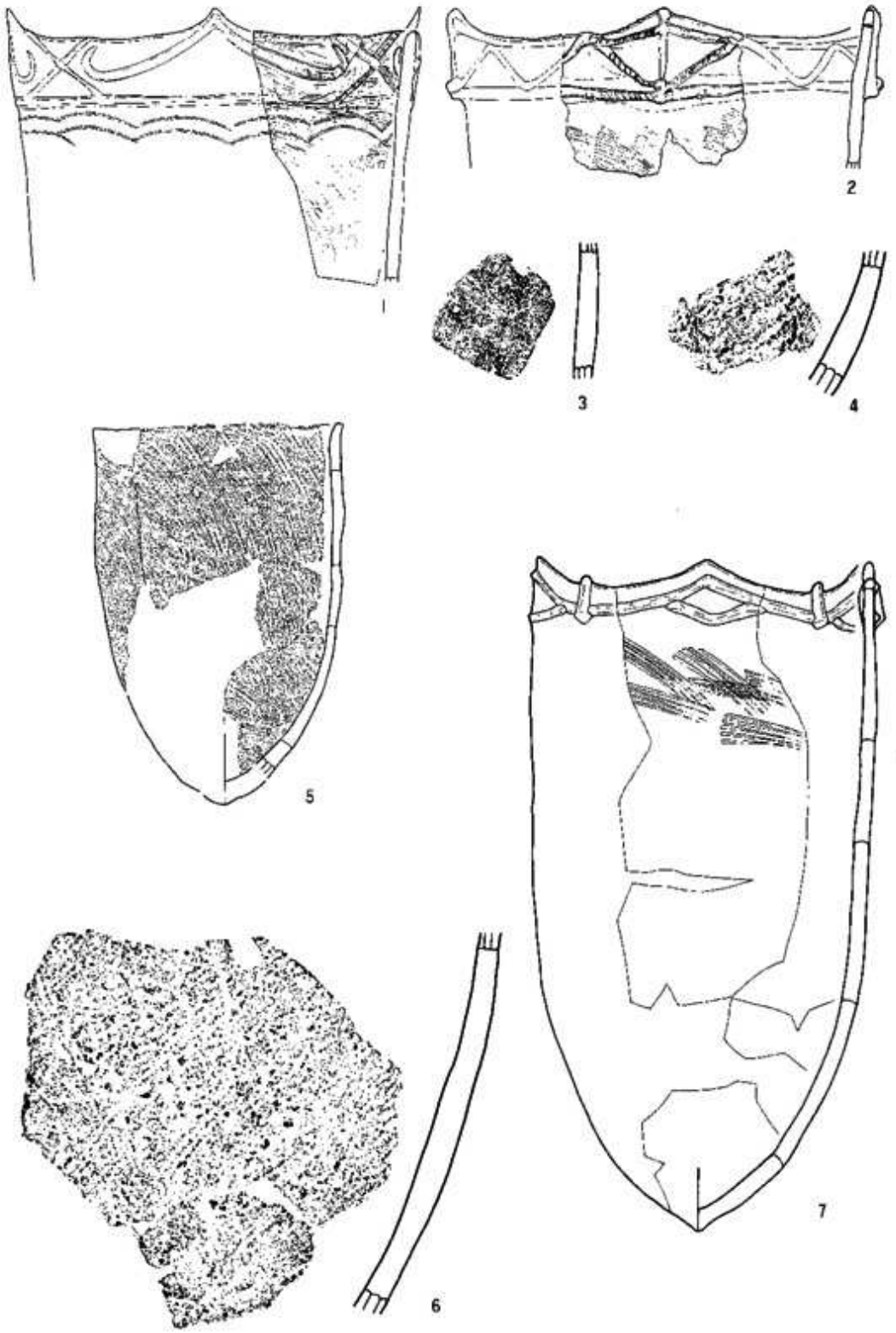
写真9　2号住居址床面付近における遺物出土状況

5号住居址　第24図1・2・5～7は早期第V群土器に比定される。1は1類，2・7は2類，4～6は3類に属する。1は4単位の波状口縁を有する器形の波底部破片と思われる。水平な一条の隆帯を巡らせ文様帯を区画し，区画内をさらに隆帯によってモチーフを描く。隆帯は概して低い。波頂部からは蹼手状の隆帯が垂れ下がり，波底部にはX字状の隆帯が配されるものとおもわれる。モチーフの空間部は隆帯の脇を器面に撫でつけるように貝殻条痕が加えられる。口唇部および隆帯にはアナダラ属の貝殻腹縁で刻みを加える。隆帯下には，左傾して弧をえがく貝殻条痕を地文にして，左から右へ連弧状の貝殻腹縁の刺突をおこなっている。なお弧の1単位は貝殻腹縁の2回の刺突を弧の中央部付近で接続することによっている。地文の貝殻条痕は下方において若干の磨り消しがおこなわれているらしい。裏面には明瞭な横位の貝殻条痕が施され，一部に条痕を施す際についたとおもわれる貝殻腹縁の圧痕が観察される。2は4単位の波状口縁をもつと思われる器形の波頂部破片である。隆帯を水平に一条巡らせ，文様帯区画としている。上端にも波状口縁に添って隆帯が巡るが，破片左端にはこの延長がみられず一周するかどうか不明である。区画内には，波頂部からの垂線を挟んで隆帯による鋸歯状のモチーフが展開するようである。隆帯は比較的太めで高い。隆帯および口唇部には不規則に篦状工具による刻みが加えられる。また隆帯の下には左傾する浅い条痕が残る。7は丈高で4単位の波状口縁をもつ器形をなし，波状口縁に添って一条の隆帯を巡らす。波頂部には横“く”の字状の，波底部には垂下する隆帯が貼付される。隆帯に加飾はなく，断面形は低い三角形を呈する。隆帯下には左傾する浅い条痕が残る。底部には同心円状擦痕が観察される。5は他と比較して小型の土器である。隣の4区2トレンチから出土した破片と接合関係をもつ。口縁部上端から底部に向かって左傾した条痕を施文している。4・6は器面が荒れているが，かすかに横位の条痕が認められる。6は底部付近の破片であると思われる。1・5・7は繊維をほとんど含まず，焼成も良好で堅緻な胎土を有する。これに対し，2・4・6は胎土に繊維および白色粒子を多く含み，焼成もあまり良くない。

3は成形・胎土等の型式学的特徴から早期第III群に比定される。胎土に貝殻の破片を含んでいることが肉眼で観察された。　（恩田）




第3表　IV区1トレンチ出土土器組成（　）は総点数




第26図　5号住居址出土遺物（土器）

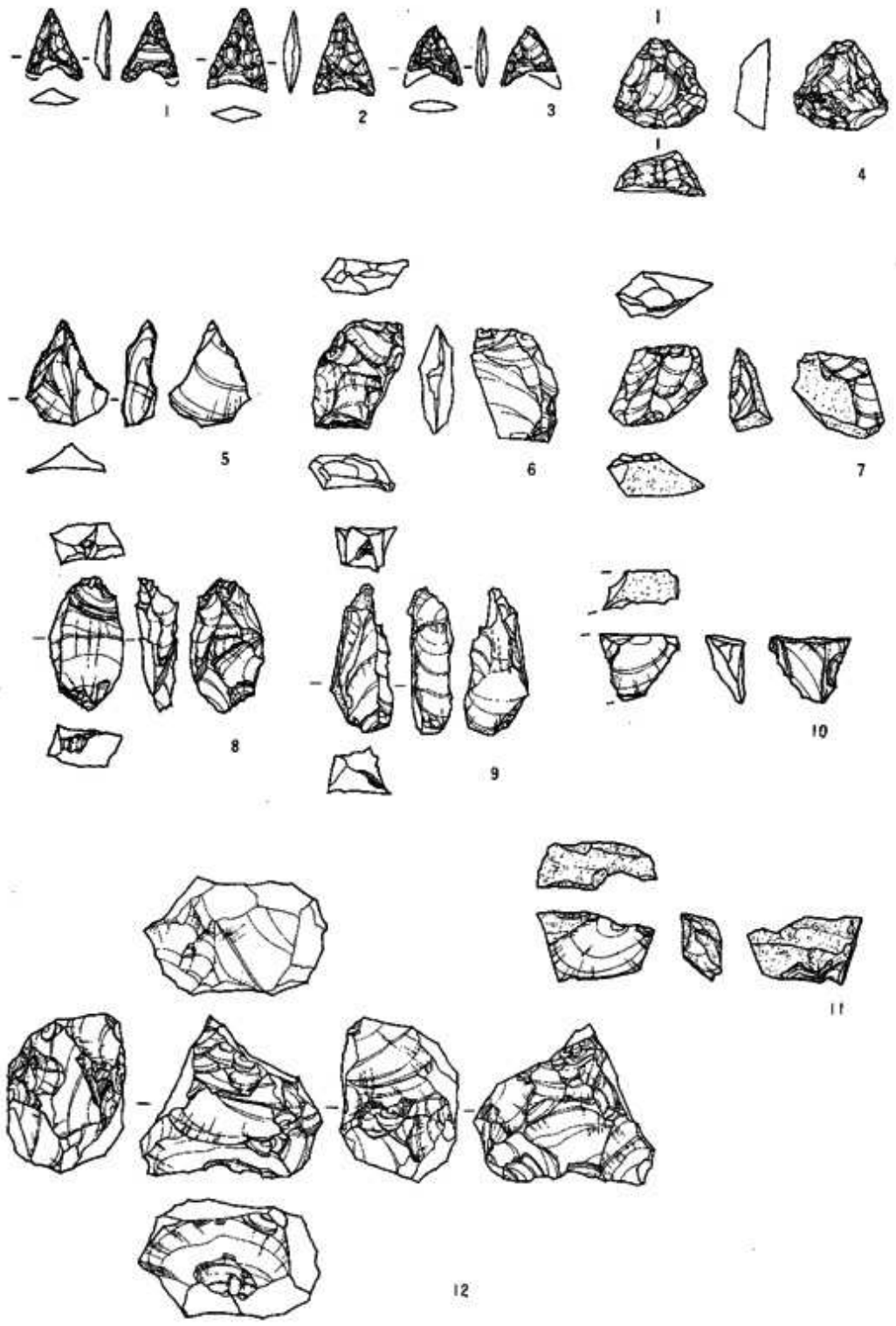
**住居址出土の石器**　Ⅳ区1トレンチ住居址覆土内からは，石鏃3点，削器1点，掻器1点，ピエス・エスキーユ12点，二次加工を有する剝片5点，使用痕を有する剝片2点，磨石2点，石皿2点，砥石1点，石核5点，剝片・砕片42点が出土している。図示したもののうち，第27図3・4が神之木台式期の5号住居址からの出土で，他は子母口・野島式並行期の1～4・6号住居址より出土したものである。

第27図1～3は石鏃である。3点とも凹基無茎石鏃であるが，全体の形状はそれぞれ異なっている。石材は1・3が黒曜石，2が緑色凝灰岩である。4は掻器である。主剝離面から打撃を加え縦縞状剝離を全周に施し刃部を作り出している。石材は黒曜石である。5は使用痕を有する剝片である。先端が尖た剝片の2側縁に，連続した1～2㎜程度の微細な剝離痕がみられる。石材は黒曜石である。6～9はピエス・エスキーユである。対峙する側縁または点に，階段状剝離または非常に細かな剝離痕が集まってできているツブレが認められる。6・7は上下両端より小さな剝片がいくつか剝離された例であり，8・9は両極打法により，剝離面が比較的平坦となりバルブまたはそのネガティブな面を持たない例である。石材は6・8がチャート，7が黒曜石，9が水晶である。

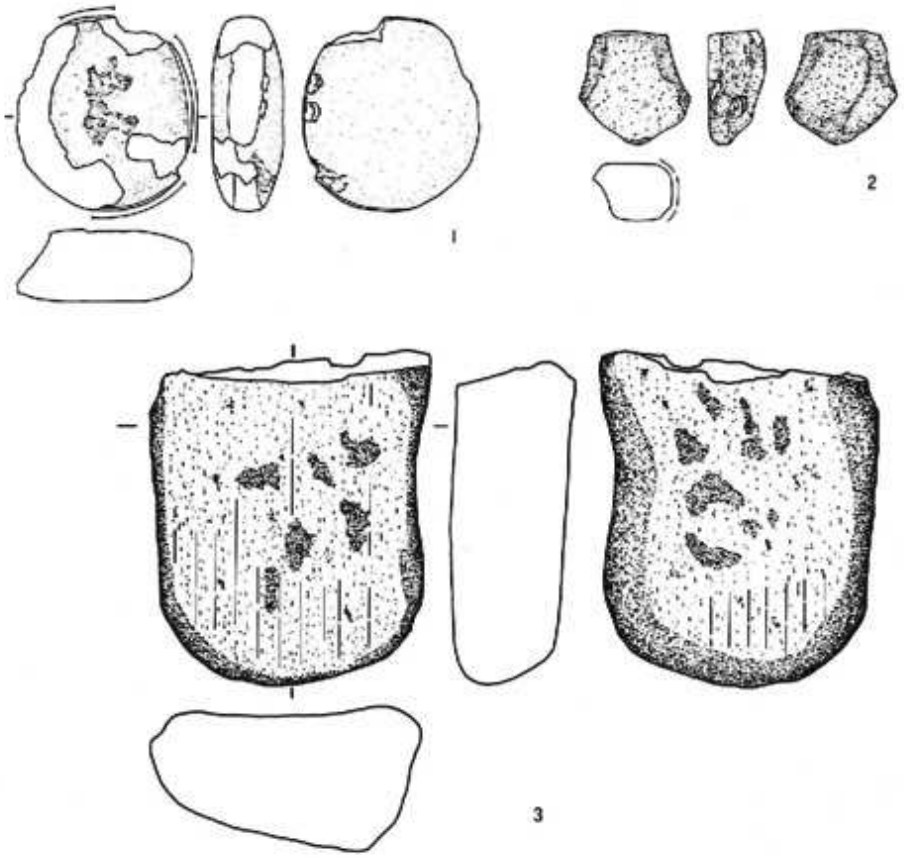
10～12は石核である。10・11は自然面を打面にしており，特に11は自然面を多く残し，小さく扁平な原石から1回のみの剝片剝離を行なっている。12は打面転移を行い，多方向から剝片剝離がなされ，自然面を残していない。石材は10・11は黒曜石，12は緑色凝灰岩である。

第28図1は磨石Ⅱ類である。一部が欠損しているが，四側面がザラザラした磨面をもち，正面と裏面は滑らかな研磨面をもつ。正面には敲打による浅いくぼみが認められる。さらに裏面には側面への敲打によると思われる剝離痕がいくつか認められることから，側面では擦るという機能とともに叩くという機能があったと推定される。石材は石英閃緑石である。2は砥石である。側面部に，いくつかの擦り面により陵が生じている。おそらく半分が欠損しており全体の形状は明らかではないが，両端にたいして中央部がくびれたものであると思われる。折れた面もやや擦れており，欠損後折れ面が機能面となったものであろう。石材は砂岩である。3は3号住居址の壁際に直立して出土した石皿である。表裏両面に滑らかな擦痕と敲打による小さな凹みが数カ所認められる。凹みは5㎜前後の深さで比較的深くくぼんでいる。表裏両面ともわずかに凹んでいるが，殆ど平坦である。石材は安山岩である。剝片・砕片は図示していないが，黒曜石37点と緑色凝灰岩，水晶，チャート，砂岩がそれぞれ1点ずつ出土している。

以上の石器は早期第Ⅲ～Ⅴ群の土器に伴出しており，縄文時代早期後半の野島式並行期及び早期末の神之木台式期の石器である。さらに土器の出土量を考慮するならば，5号住居址以外の石器は早期第Ⅳ群土器に伴う石器と考えてよいだろう。　（鶴田）




第27図　1.～5号住居址出土遺物（石器1）




第28図　1～5号住居址出土遺物（石器2）

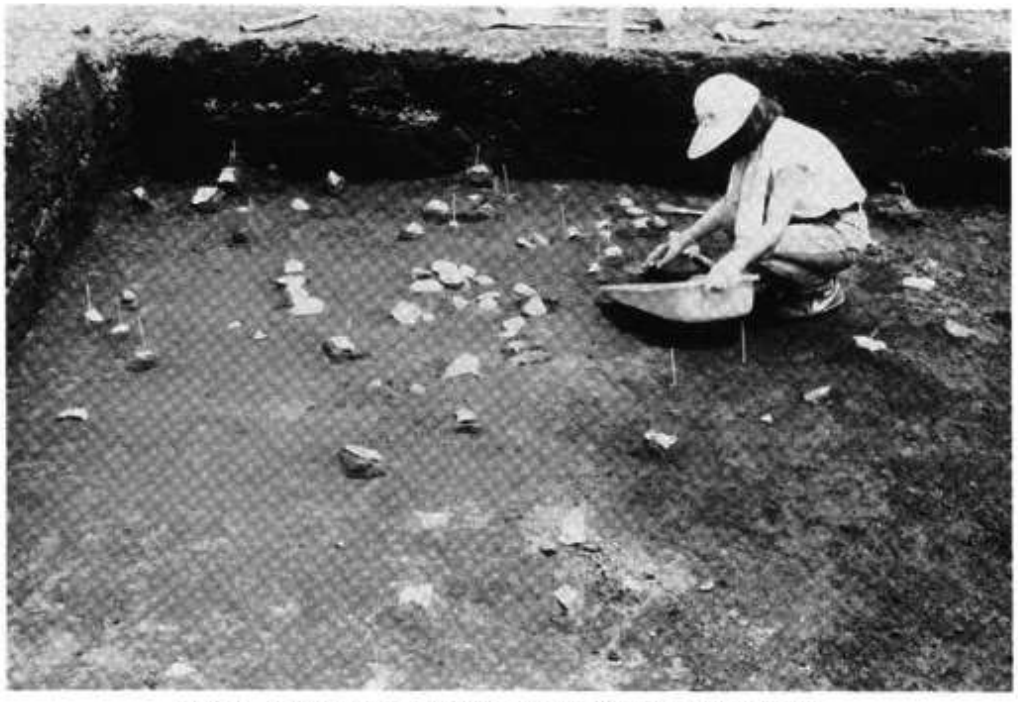
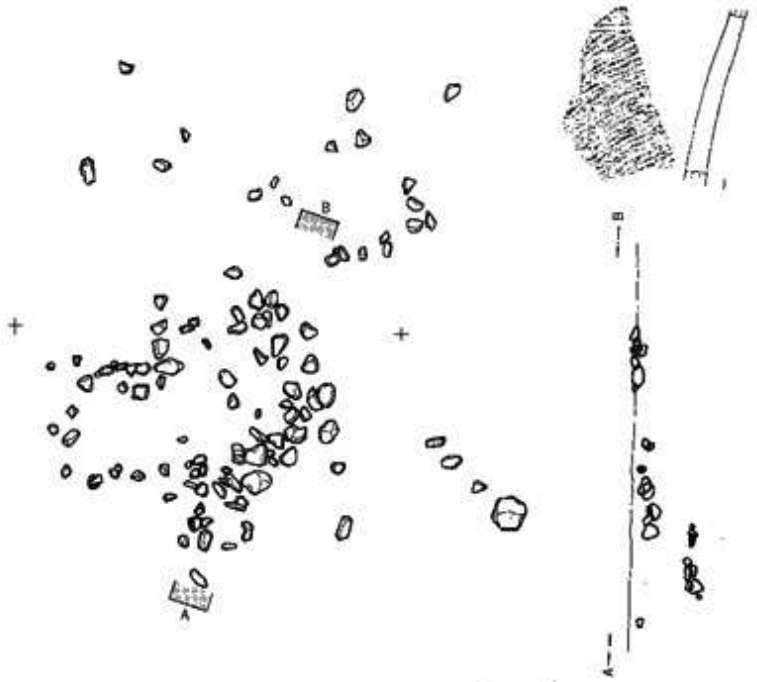


写真10　Ⅳ区2トレンチにおける縄文時代前期文化層の調査状況
Ⅱ層とした前期文化層の下位面には焼けた礫が多く散在し，またいくつかの集石をつくっていた。

**前期の遺構と遺物—焼土址と集石遺構—**　トレンチの北西部の前期の文化層である第II層下面からは集石遺構が検出されている。礫は1.5mの範囲に不整形に約80個が集中し，その周辺にも散在している（第29図）。礫の大きさは直径約5cmから大きなもので18cmほどのもので，殆どは熱を受けて赤化していたり，割れているものも多い。礫が集中する部分は大きく東群と西群とに分けることができる。そのなかでも東群は西群よりも幾分上部から検出されたもので約40個の礫で構成されている。西群は東群を掘り下げる過程で検出されたもので約30個の礫の集中から成り，集中度も東群に比べると低い。両者の礫の集中レベルは約10cmの差があるが，同一の層位であることや掘り込みや焼土を伴わない構造上の特徴から考えてほぼ同一の時期のものと考えられよう。出土遺物は東群より諸磯a式に比定される土器片の出土がある。

なおII層の上面からは礫は殆ど出土しておらず，下面において焼礫が散漫な分布をしめして検出される傾向がある。こうしたことは同じ第二段丘面のIII区1トレンチ，IV区2トレンチにおいても確認され，本トレンチの集石遺構もそうした生活面の中に検出されたものであった。

焼土址はトレンチ南側より検出されたが，掘り込みなどが認められず，また出土遺物もないことからその性格は不明である。検出された層位はII層下面であり，集石遺構とほぼ同じ時期のものと推定されるが，両者の関係は加熱された礫と焼土との間にいくつかの想像ができるにすぎない。




第29図　第II層下面の集石と出土遺物

**第Ⅲ層（早期文化層）出土の遺物**　本トレンチのⅢ層とした早期の文化層からは487点におよぶ大量の遺物が出土している。

Ⅲ層は２枚に分層することができ，Ⅲａ層は６号住居址の覆土上層と斜面下方のトレンチの南側と早期後半の住居の最終埋没土として堆積が確認されている。一方，Ⅲｂ層は早期第Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ群の時期の住居覆土の一部とその上層に堆積が確認されている。

Ⅲ層出土の土器は第Ⅰ群からⅤ群までの各型式の大半の類を出土しているが，層位と出土土器の型式の対応関係が明確に捉えられたものは少ない。土器の出土量や状態，土層の堆積状況と調査時点における観察と分析から明確に認識された関係は，Ⅲａ層が早期第Ⅴ群（神之木台式土器）の主包含層であること。その下層のⅢｂ層が早期第Ⅲ群（野島式土器）と第Ⅳ群の主包含層であるという２点に要約される。このことはまた，上述した住居と土層の堆積関係からも証左されよう。

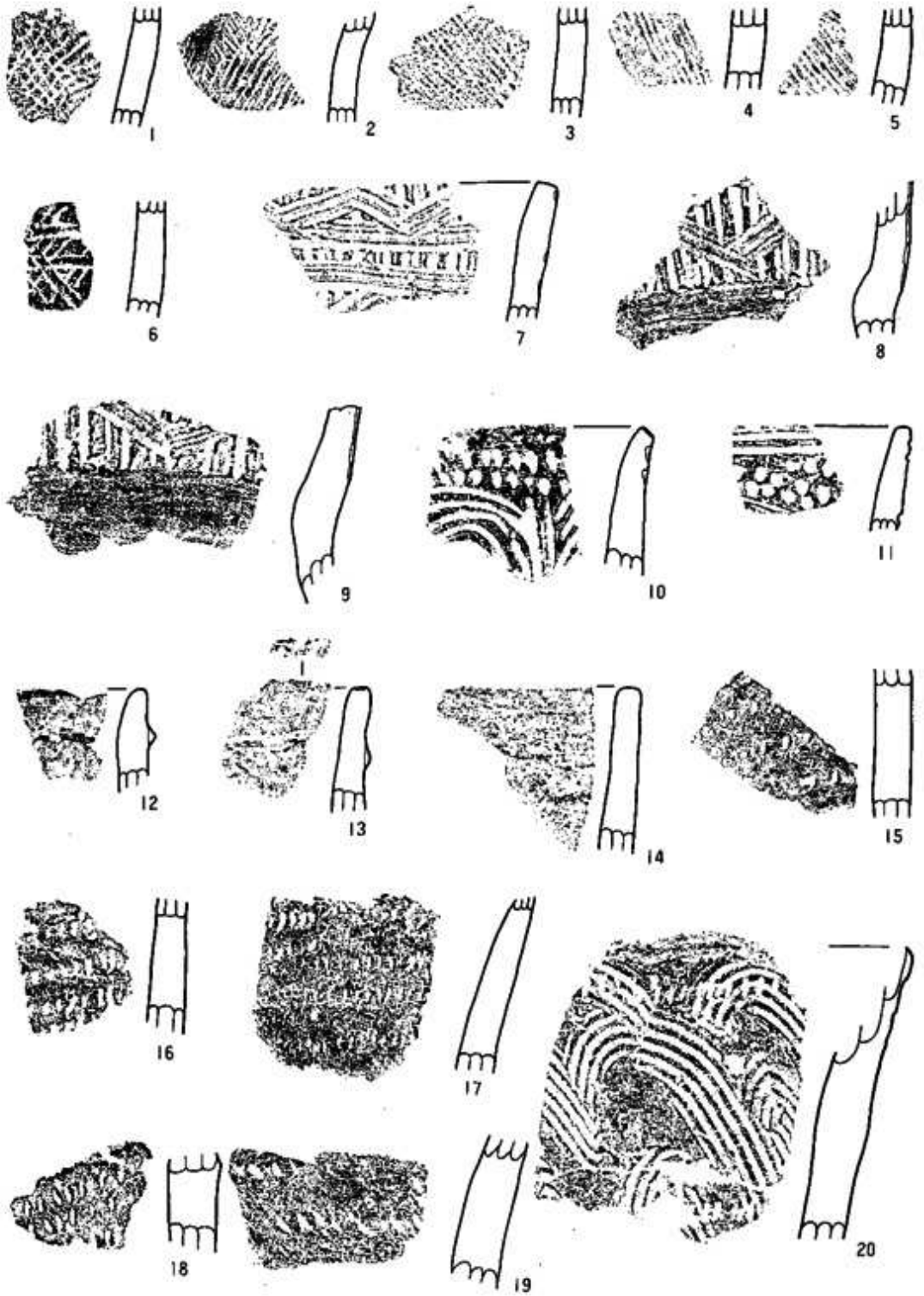
**土器**　第30図１～５は撚糸文を施文した土器で第Ⅰ群２類に比定できる。１～３は異方向に撚糸文を重ね併せて格子状に配している。４，５は縦位に撚糸文を施文するもの。胎土には繊維を含まず，比較的薄手で焼成は良好である。

６～９は半截竹管状の原体をもちいた併行沈線により幾何学的な文様を描く一群である。６は格子状の文様を描くほか，７～９は縦位の沈線を地文にして，同一の原体による横位の幾何学的な文様を描いている。７は口縁部であり，２段の文様構成をしめす。８，９は同一個体と考えられるもので，屈曲をもつ胴部の上半部に文様帯が設けられている。屈曲部は無文帯をつくり，横位の成形痕が残る。

10，11は刺突文を用いる類で10は口縁部の上端に２列の刺突列があり，以下には曲線的なモチーフが描かれる。同様の文様構成は同図の20と似ている。11は沈線で区画した内部に刺突文を充填するものであろう。

第32図７，９は同一個体の破片から推定復元を行ったもので，共に第Ⅲ群１類に対比することができる。７は胴部に緩い屈曲をもつもので，４単位の波状口縁になるであろう。口唇部には刻みが巡る。胴部の資料からは胴部下半部が幾分膨らみをもつ器形に復元される。波頂部からは刻みを施す隆線が垂下し胴部文様を縦に４分割している。胴部文様は屈曲部の無文帯を挟んで上下に分帯され，上半部にはＸ状の無文部がモチーフを構成し，この無文部の外郭に一列の列点が描かれる。そしてこの無文部により区画された内部に沈線が充填される。下半部の文様帯は縦位の条線が施されている。またこの土器の口縁内面には細い沈線による鋸歯状の文様が描かれており，この時期の土器群においてはあまり類例を知らない。これに先行する時期のものでは，沈線文系終末のものに長野県栃原岩陰に類例があり，後出する茅山下層式期には同御座岩遺跡の資料がある。口縁内面の施文は中部地方の押型文土器の内面施文との関係が想像されるが，いまのところその連続は明らかではない。

９は４単位の波状口縁になるものと推定され，胴部中位に屈曲部があり，以下が無文部となり




第30図　第III層出土遺物（土器1）

この屈曲が文様帯の下端を分帯している。胴部上半の文様は逆V字状の無文部が主要なモチーフを構成し，区画内は細い沈線が充填される。無文部が主要なモチーフを描く特徴は7と共通する点である。両者とも胎土に少量の繊維を含み，薄手で焼成の良好な土器である。12，13は口縁部に一条の隆起線が巡るもので，13は口唇部に刻みが施される。14は無文土器の口縁部分である。

15～20は絡条体圧痕文を施文する類で，15は絡条体の粒が大きく，疎らな施文を特徴としている。16～19は絡条体が細く細かい特徴を示し，その点が前者とは異なる。

20は口縁部付近の破片で口唇部は失われている。口縁の直下に一条の絡条体圧痕文を施文し以下に5，6条を単位とした条線による波状文を描き，その下端に一条の絡条体圧痕文を施文しており，波状文の上下を絡条体圧痕文で区画しているようである。

以上6～20に示した土器群は胎土に微量の繊維を含み，焼成の良好な土器である。またこれらの土器の器面は比較的丁寧な成形がおこなわれ，貝殻条痕は認められない。そうした特徴は，早期第II，III群土器の一般的特徴であり，またこうした点が第IV群と分類した土器群とのあいだに際立つ違いをあらわす要素の一つであることも見逃せない。

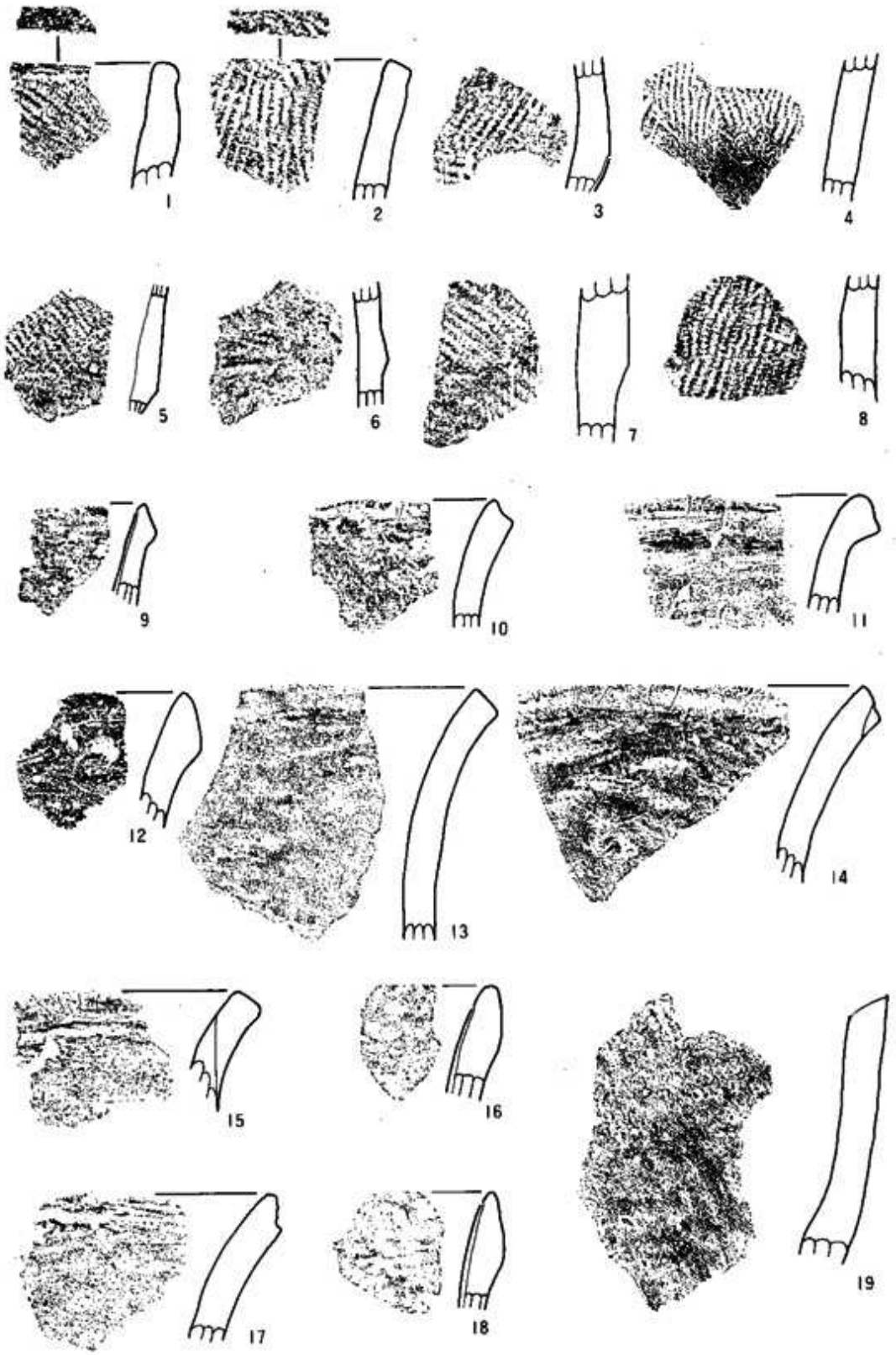
第31図1～8は縄文のみを施文した一群であり，第IV群1類としたものに該当する。1，2は口縁部の資料で，口唇部にも縄文の施文がみられる。3～7は胴部上半の資料であり，3，5～7は屈曲部をもつ。4は屈曲をもたないが，口縁部付近に疑似羽状縄文を施文し，以下を無文としたもので，他の屈曲部分にほぼ相当する部位になろう。

9～19は無文の土器で第IV群3類としたものである。口縁部が外反し，口唇部の断面形態が外削状を呈する特徴がある。とくに口唇部は横位に撫でがおこなわれ，なかには10，14のように断面形が段をもつものもある。器表面は丁寧な成形がおこなわれており，擦痕の顕著なものは無い。また条痕成形も全くみとめられない。19は同類の胴部である。第IV群1類と第IV群3類土器は胎土に繊維を少量含むほかに大量の金色の雲母片を含有し，胎土の選択に共通した特徴を指摘することができる。またこうした胎土の土器は一般に厚手である点も特徴の一つとなろう。

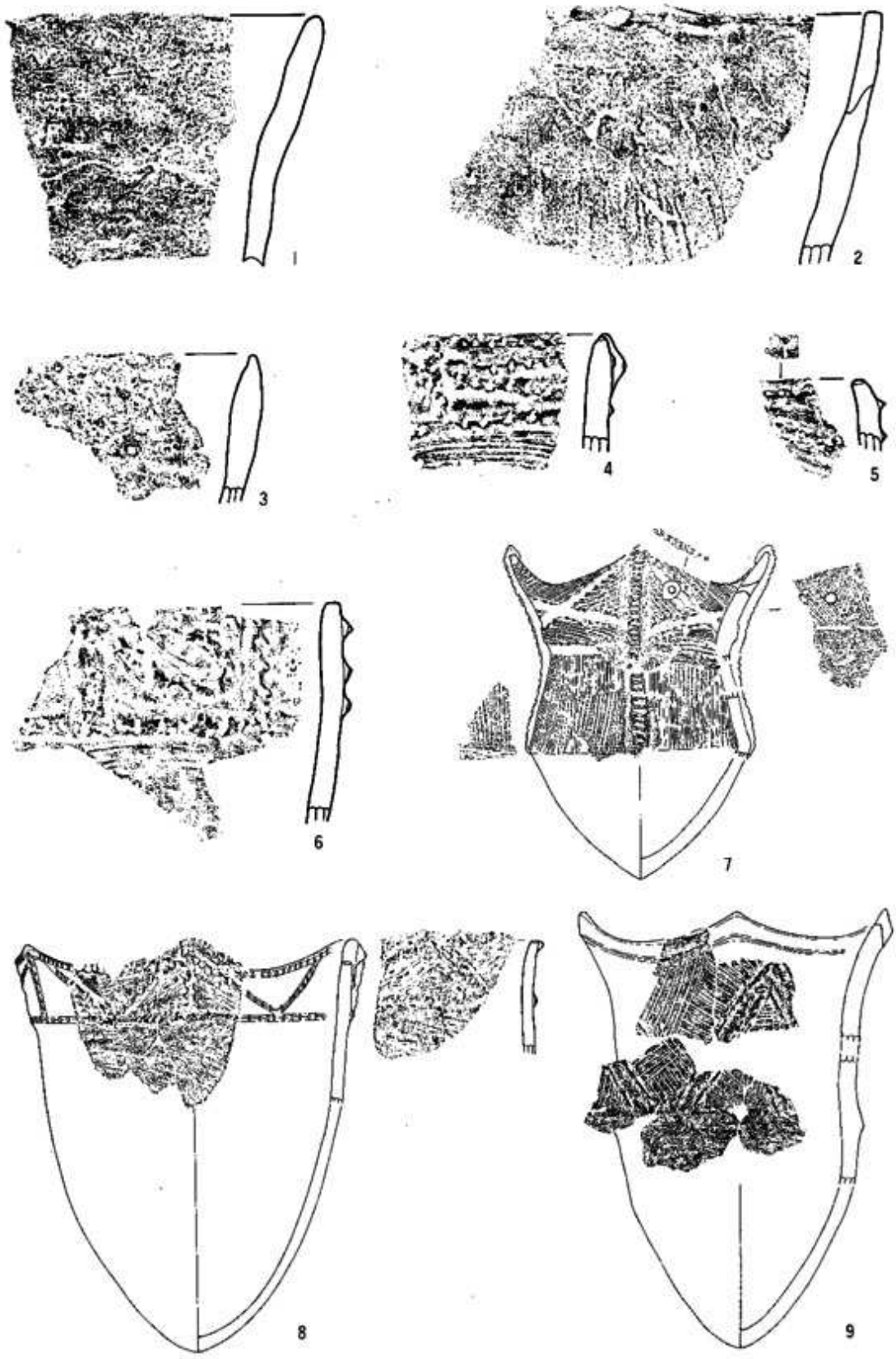
第32図1～2は先に指摘した無文土器とは異なる類である。口唇部は肥厚せず前者に比べて薄手で，器面には縦位の撫で成形が行われる。また胎土中には若干の繊維のほか，小砂を多く含むもので金色の雲母片の含有は目立たない。

3，4，5，6，8は第V群とした早期終末の神之木台式土器である。4，6は口縁部に2条の隆線を巡らせ，一部を縦位の隆線によって連結するもの。隆線には篦伏の工具による刻みが施されているほか口唇部にも刻みが巡る。4は隆線以下に貝殻条痕が横位に認められる。

8は5片の同一個体の口縁部付近の破片から復元した個体である。口縁付近に隆線により文様帯を区画し，内部に波形の隆線文を描き，一部に隆線が渦巻状に配される部分がある。口縁は4単位の波状口縁になると思われ，波頂下に縦位に隆線が垂下する。隆線上と口唇部には貝殻の腹縁による刻みが施されている。胴部は斜位の成形痕が認められる。胎土に繊維の混入は極めて少なく，薄手で焼成は良好である。（阿部）



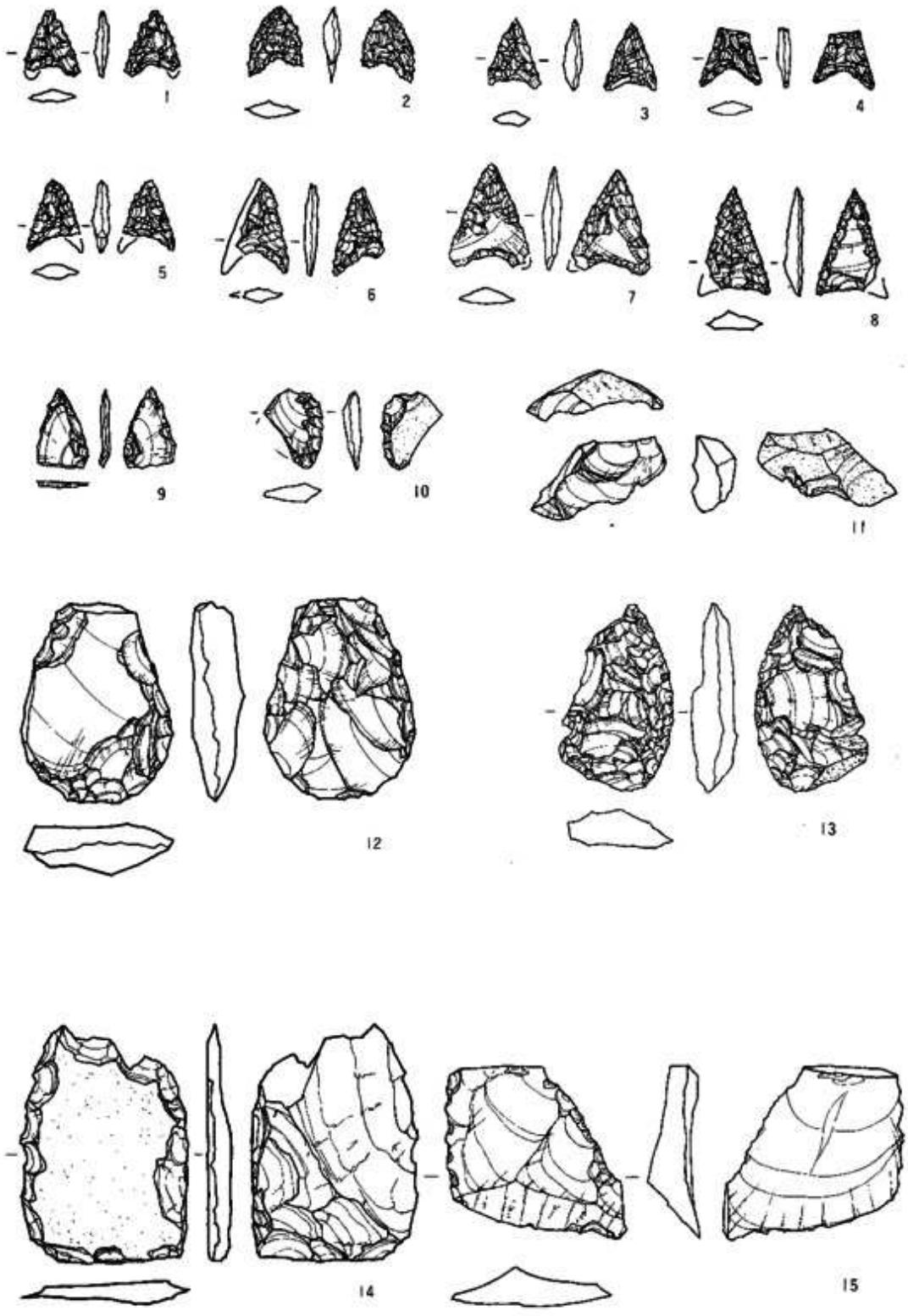

第31図　第III層出土遺物（土器２）



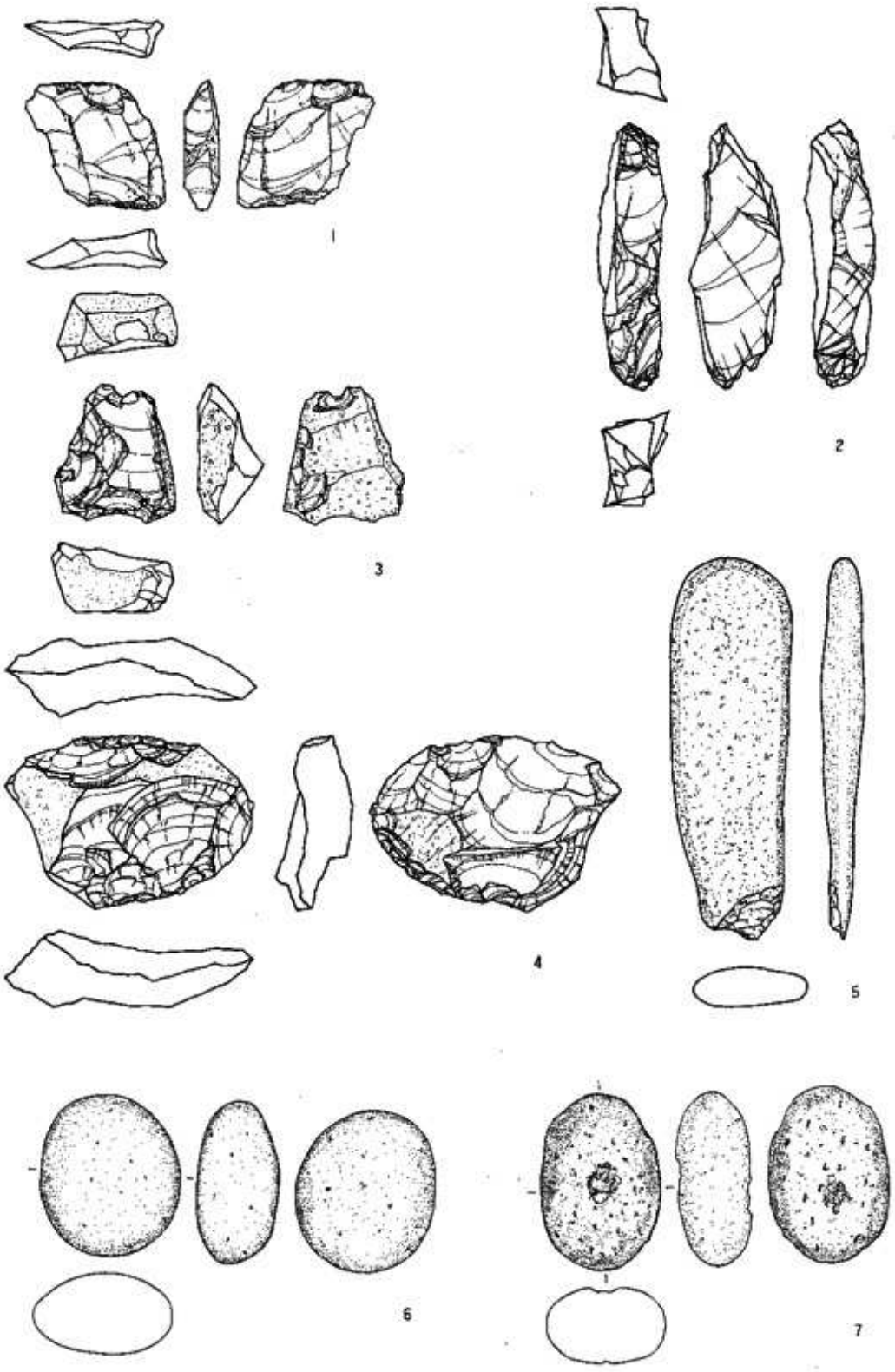

第32図　第III層出土遺物（土器３）

**文化層出土の石器**　Ⅳ区１トレンチの文化層からは，石鏃11点，削器４点，二次加工を有する剥片７点，ピエス・エスキーユ10点，磨石・凹石２点，ハンマーストーン１点，石核５点，原石１点，剥片・砕片126点が出土している。これらの石器の多くは縄文時代早期後半，終末の文化層であるⅢ層より出土しており，Ⅰ・Ⅱ層から出土した石器は数少ない。

第33図１～８は石鏃である。４は先端の３分の１が欠損しているが，側縁が内側に湾曲しており，本遺跡では稀な例である。７と８は両面または片面に素材剥片の剥離面を残しており，石鏃を作る際の剥片の使い方が観察される。７は実測図の左側が素材剥片の主剥離面であり，打撃の方向とやや角度をずらして石鏃の中心線を設定し，薄い縁辺部に二次加工を施し基部を作り出している。８は実測図の右側が素材剥片の主剥離面と思われ，打撃の方向と石鏃の中心線は一致している。打点側に頭部を設定しているが，打点は頭部尖端のかなり先にあったと思われる。石材は３と７が水晶，それ以外は黒曜石である。９と10は使用痕を有する剥片である。９は横長の剥片を用い尖端部を作り出しているが，実測図下方は欠損している。10は剥片の縁辺の表裏両面に二次加工を施している。二次加工は欠損部まで及んでおり，剥片のほぼ全周に施されていた可能性がある。石材は２点とも黒曜石である。11は石核である。自然面を打面とし，作業面を１面のみに設けている。石材は黒曜石である。12～15は削器である。12は一側縁の表裏両面に二次加工を施し外湾する刃部を作り出している。13はほぼ全周にわたって二次加工が施されているが，刃部となりうる鋭い縁辺は一側縁のみで，直線的な刃部である。実測図上端は欠損しており全体の形状は不明であるが，尖頭部をもった削器である可能性もある。14は薄く剥がれた剥片の片面のみ全周に二次加工を施し刃部としたものである。15は剥片の形状を殆ど変えずに，二側縁にわずかな二次加工を加えて刃部としているものである。加工したというよりは使用による刃こぼれであるとも思われ，使用痕を有する剥片に分類されるべき石器なのかもしれない。石材は12が黒曜石，13がシルト岩，14が粘板岩，15が緑色凝灰岩である。第34図１～４はピエス・エスキーユである。１は断面がレンズ状になり，上下両端の陵上が白く潰れている。２は上下両端に微細な剥離が集まって白く潰れている。さらに両極打法による剥片剥離の後，他の側縁より二次加工が加えられている。このピエス・エスキーユは両極打法により大きな剥片が剥離されたもので，両極石核といわれるものであろう。３は本遺跡出土のピエス・エスキーユのなかで一番長いものである。両端に階段状剥離が見られる。石材は２が黒曜石，他の３点はチャートである。５は礫器としたものである。６と７は磨石・凹石である。６は全面滑らかな面である。７は表裏両面にそれぞれ一つずつ凹みがあるが，擦り面は認められない。　（鶴田）




第33図　第Ⅲ層出土遺物（石器１）




第34図　第III層出土遺物（石器２）

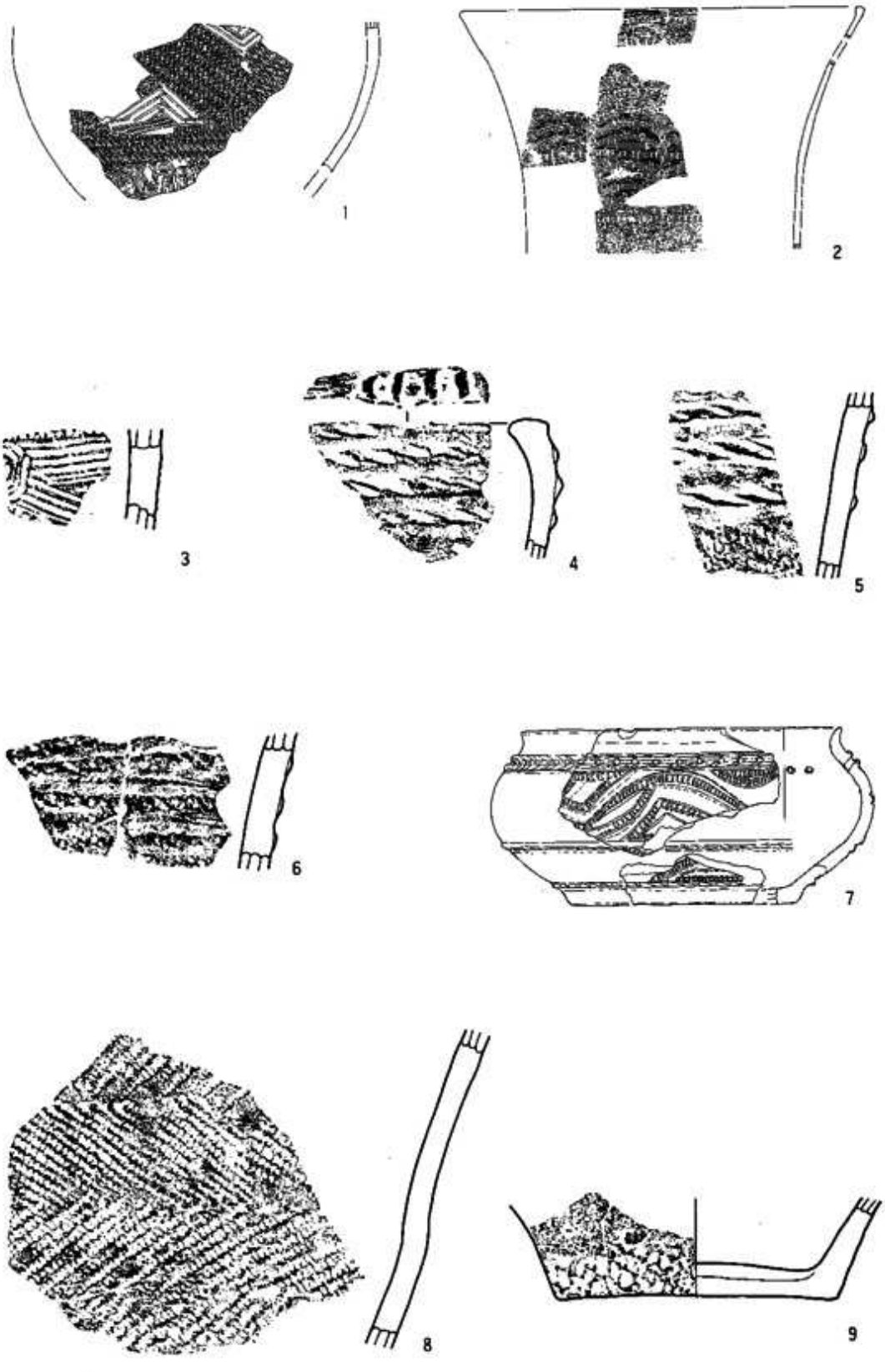
**第II層（前期文化層）出土の遺物**　Ⅳ区1トレンチのII層中からは，縄文時代早期第II群土器10点，第III群土器2点，第Ⅳ群土器21点，縄文時代前期第I群土器1点，第II群土器4点，第III群1類土器9点，同2類土器6点，第Ⅳ群土器18点の計71点の土器が出土している。これらの土器は調査区全域から検出されたが，出土点数が少ないこともあって，各土器群の出土状態に平面・レベル的に有意な片寄りは見られない。

第35図はⅣ区1トレンチII層から出土した縄文時代前期に属する土器である。3は神之木式に該当する第I群土器である。6本を単位とする櫛歯状工具によって集合沈線，列点文を表出しており，集合沈線の交点の部分には円形の文様が描かれている。内面は繊維束のような工具によってナデ整形が施され，胎土は緻密で雲母片を含む。1は関山式に比定される第II群土器で，II層最下部から出土したものである。幾段にも重ねたループ文によって大きな鋸歯状の文様が描かれ，その鋸歯状文の谷にあたる部分に半截竹管状工具による「V」字状の文様が施されている。胴下部には先のささくれた様な幅の広い工具を使って描いたコンパス文がみられる。ループ文は縄文RLの条の閉じた端につくられた環を回転させて表出している。施文順序は，ループ文→「V」字状文・コンパス文の順である。胎土に繊維を含み，内面は丁寧に磨かれている。

2は諸磯a式に該当する第III群1類土器である。破片の多くは調査区南西よりのII層最下部にまとまって存在していた。胴上部の文様帯には，12単位になると思われる縦位の区画線を基点に弧線状の文様と横位の区画線を配したいわゆる「肋骨文」が描かれ，胴下部には単節RLの縄文が施されている。また，縦位の区画線上には，竹管状工具による円形刺突文が施文されている。肋骨文は4本の棒状工具を束ねたものと思われる櫛歯状工具によって描かれており，横位の区画線の上には同一工具による刺突が加えられている。施文順序は，文様帯の上下の区画線→縦位の区画線→弧線状の文様→文様帯内の横位の区画線・円形刺突文の順である。金色雲母を多く含む。

4～7は第Ⅳ群土器で諸磯b式に相当する。4，5は胎土に白色鉱物を多く含むのに対し，5～7は金色雲母片を多く含む。4～6は細い粘土紐を貼り付けたいわゆる「浮線文」が施されたものである。4，5の浮線文上には刻みが，6の浮線文上にはRLの単節縄文がみられる。また，5，6には単節RLの縄文が地文として施されている。7は浅鉢形土器である。胴上部に2本，胴下部に1本，それに底部の直ぐ上に1本の浮線文が横に巡らされており，胴上部と底部直上の浮線文上には，刻みが施文されている。浮線文に区切られた区画には，弧線を中心にかたちづくられたいわゆる「木の葉状入り組み文」が爪形文によって描かれている。爪形文は1本ずつ引いた平行沈線の間に，多截竹管状工具の内側を器面に向けて施文した刺突を加えて表出している。また，胴上部の2本の浮線文の間には，焼成前に穿孔された穴が巡っている。施文順序は，浮線文の貼り付け→浮線文上の刻み→木の葉状入り組み文・穿孔の順である。なお，爪形文を用いた第Ⅳ群土器は今回の調査ではこの個体のみであった。

8，9は第III群2類土器で，8には単節RLとLRの原体によって羽状の縄文が，9には単節RLの縄文が施されている。8は他の第III，Ⅳ群土器と異なり堅緻なつくりである。　（中村）




第35図　第II層出土遺物（土器4）（1，7：1/4，2：1/6）

### (3) Ⅳ区２トレンチの調査

本トレンチはⅣ区１トレンチの西方約10mの地点に設定した。この地点は地表面における地傾斜が緩く，縄文時代の遺構の検出が予測されていた地点である。トレンチは南北５m×東西２mの規模で設定し，Ⅲ層の調査段階で遺構の存在が予測されたため，西側に約1.5mの拡張をおこなった。

その結果，Ⅲ層を構築面とした重複関係をもつ早期の遺構群が，トレンチのほぼ全面に検出された。

**a．土層の堆積と遺物の出土状態**　調査の結果トレンチの全体に安定した堆積をしめす土層は３枚であり，表土下にはⅡ層とした前期の文化層があり，さらにその下にⅢ層とした早期の文化層の堆積が確認された。またⅢ層はａ層とｂ層とに分層されるが，下層については遺構覆土の上半を構成する土層との区分は不明瞭な部分もあった。

Ⅰ層は表土としてその性状が一括されるべきものであったが，土層の締まりや硬度から分層される可能性もあり，Ⅱ層面に掘りこまれた配石遺構はそうした所見をもとにすると，Ⅰ層の下位から掘り込まれたものであるらしい。

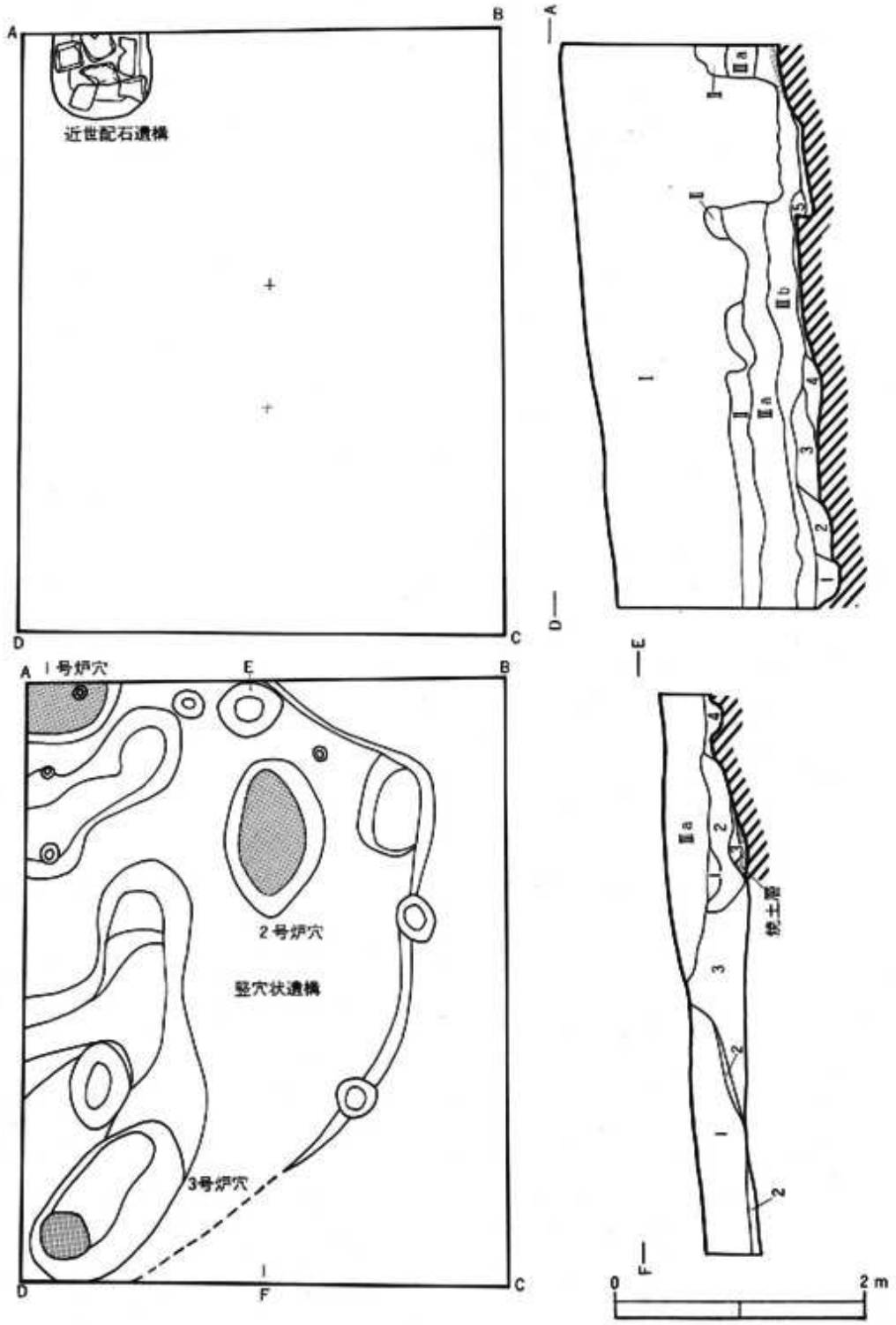
縄文時代の文化層の堆積層準はⅣ区１トレンチと良く一致しており，そうした状況からⅢ層上部をⅢａ層，下部をⅢｂ層と呼称することにした。

Ⅱ層には下位面において焼礫の出土が記録され，集石遺構が１基検出された。前期の遺物はこの焼礫の出土した面に比較的多く，またⅡ層の全体にわたり散漫に分布している。また早期の土器群が混入して出土することもあったが，逆にⅢ層内に前期の遺物の混入することは殆どなかった。したがって本トレンチのⅡ層，Ⅲ層の堆積層準は比較的良好な状態を保つものといえる。

**b．検出された遺構と遺物**　本トレンチで検出された遺構は近世の配石遺構１基，縄文時代前期の集石遺構１基，早期後半の第Ⅲ，Ⅳ群土器を伴う炉穴３基以上，竪穴状遺構１基である。炉穴と竪穴状遺構は重複して検出され，また炉穴の数は火床面の数を根拠としたもので，炉穴状の掘り込みの一部は他に３基確認できる。

**早期の遺構—炉穴と竪穴状遺構—**　炉穴は先述したように火床面の検出されたものは３基である。そのうち１号炉穴はトレンチの北西隅に一部が確認されたもので，全体の規模は不明である。２号と３号炉穴は全体の構造がわかるもので，２号炉穴は長軸1.1mの楕円形の掘り込みの底面全体が焼けている。３号炉穴は臍玉形の掘り込みの南端に火床面が設けられるもので，２号と３号炉穴はその構造を異にしている。３号炉穴は他に２つの同様の掘り込みが重複しており，これらも炉穴の一部分である可能性が強い覆土は色調から５枚に分層され，１層が最も暗い褐色を呈する。

竪穴状遺構はトレンチの西側に中心部をもつようで，そのプランは不整形である。とくに南側は斜面の下位になるため，ローム層への掘り込みが浅く不明瞭であった。壁際には３個の柱穴状




第36図　Ⅳ区2トレンチの土層堆積と遺構配置

のピットがめぐる。また北東のコーナー付近と1号炉穴の東に接して浅い掘り込みがある。

早期の遺構はいずれもⅢb層に構築面が求められるものであり，炉穴と竪穴状遺構は，本遺跡の早期文化層の堆積経過のなかではⅢb層の堆積期間のなかで重複をもったもので，比較的短期間のうちに反復的に構築されたものと思われる。こうした頻繁な遺構の構築はⅢ区1トレンチやⅣ区1トレンチのⅢb層内の遺構の構築状況と良く一致している。遺構覆土は多くが富士黒土層であり，分層は焼土やロームブロックの混入の度合いにより識別した。（阿部）

**前期の遺構と遺物—集石遺構—** 集石遺構はトレンチの北部に位置し，Ⅱ層の下位面より検出された。礫の大きさはすべて拳大のもので，60cm四方の範囲に17個の礫が同一のレベルに纏まっている。礫は熱を受けて赤化していたり，割れたりしているが掘り込みや焼土等は検出されなかった。

第37図　Ⅱ層下面の集石実測図

出土遺物は礫の周辺や同一レベルから前期の諸磯b式土器が出土しており，明確な共伴は認められないものの，こうした状況を根拠として，本遺構の時期を前期後半と推定することができよう。

またこの集石のほかに，集中部分はもたないが，同様の焼礫がⅡ層の下位付近を中心にして出土している。（久保田）

**近世の配石遺構** トレンチの北西コーナー付近に全体の約2/3が検出されたもので，約20cmの深さの土坑をⅢ層の面まで掘り込んで，その土坑の上部に6枚の板状の自然石を配している。

土坑の内部を注意深く精査したが，出土遺物はなかった。土坑の上に配された板状の石は土坑上に面的に敷かれた状況が観察されることなどから，建物の土台かあるいは土台の根固めの施設の一部かとも推測される。土坑の掘り込み面はⅠ層とした表土層中にもとめられるが，明確な構築面を判断することはできなかった。ただ注意されて良いのは先述したようにⅠ層が硬度などから2枚に分離することが可能であることや，土坑の立ち上がりが地表面まで追えない点などから，この地点が耕作地として利用される以前の遺構である可能性が高い。同様の掘り込みはⅣ区1トレンチの北西コーナーにも1基確認されている。（阿部）

写真11　Ⅳ区2トレンチにおける近世の配石遺構

**第Ⅲ層（早期文化層）出土の遺物**　本トレンチにおける縄文時代の遺物包含層はⅡ・Ⅲ層が該当する。Ⅱ層は集石遺構が検出された前期の包含層にあたり，前期第Ⅳ群が若干量出土している。Ⅲ層は早期の包含層で，竪穴状遺構・炉穴が検出されている。Ⅲ層はⅢａ・Ⅲｂ層に細分されているが，遺物の層位的な出土状況を把握できなかった。早期の土器はⅠ・Ⅱ層からも出土しているが，逆にⅢ層においては前期の土器の混入をみない。

**早期の土器**：早期の土器はⅢ層に主体的に包含されている。本地点における分類別出土点数は第3表のとおりである。Ⅲ層からは早期の諸型式が出土しているが，層位学的な検証は不可能であった。従って分類は主として型式学的視点によっている。Ⅲ層における出土割合は第Ⅲ群が1割強，第Ⅳ群が6割弱を占めており，他のトレンチの状況と良く一致している。平面的な分布状況は調査範囲内に散漫に出土し，これといった集中部はみられない。なお出土した土器は細片が多く全てを図示するには至らなかったため，ここでは良好な資料を極力掲載するにとどめた。

第38図1・2は第Ⅰ群1類に比定される。ともに山形押型文を縦位に密接施文している。1は陽刻部が広い山形文である。破片中央部付近に縦の狭い空白部がみられ，それを境に山形文が半単位程ずれていることから，施文単位が密接していることがわかる。

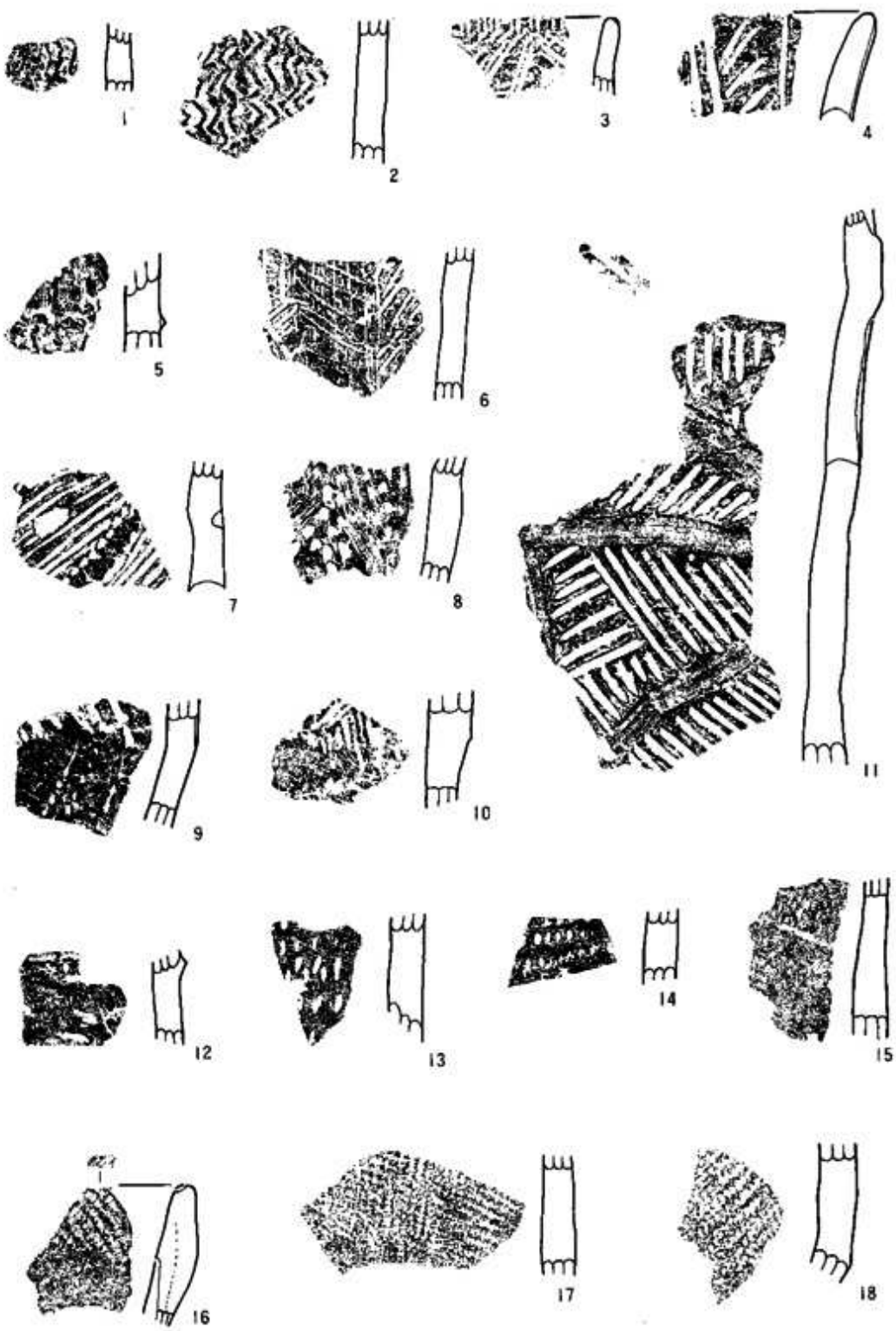
第39図13・14は胎土・色調・器面調整から第Ⅳ群に比定される。ともに底部付近の破片と思われる。繊維を多量に含んでいる。

第38図3～11は第Ⅲ群に比定される。5が1類，12～15が3類，3・4・6～9・11が4類に属する。いずれも胎土に繊維および石英を多く含む。

5は横位とそれに直交した縦位の微隆起線により文様が構成される。4本の縦位の微隆起線うち右側2本は横位の微隆起線と十字に交わり，左側2本はT字状に接続している。

12は横位に微隆起線がめぐり，その上部に絡条体の押捺がわずかに観察される。13～15は，微隆起線を有しないが，絡条体原体・胎土・器面調整等の特徴から3類に帰属させた。いずれも器面の丁寧な撫で調整を行ったのちに絡条体原体を横位または斜位に浅く押圧している。13・14がR撚り，15がL撚りの原体を使用している。

3・4は口縁部破片で，3は半截竹管状工具によって鋸歯状のモチーフが描かれている。はっきりとはしないがこのモチーフの地文には縄文が施されているらしい。口唇部から口縁部上端にかけては同様の工具で縦位の短沈線が加えられている。4は縦位の沈線の間を右傾の斜線で充填している。沈線の断面形はV字状を呈する。6は破片中央部には施文の浅い細沈線で乱雑な格子目文が描かれ，その左右にはこれとは原体の異なる沈線によって幾何学状あるいは斜位のモチーフが描かれる。7～9は凹線によって幾何学状の区画を行っている。区画内に7・8は太い沈線を，9は刺突を充填している。8は凹線に沿って刺突列が施される。なお7はⅢ区1トレンチと接合関係を有し，8の器面にはドングリの圧痕が観察されている。10・11は胴部下半の屈曲部の破片である。いずれも屈曲部より上部に文様が施文される。10は縦位の沈線を地文として半截竹管状工具によってモチーフを描き，14は斜位の沈線がひかれている。



第38図　第Ⅲ層出土遺物（土器1）

第16～18図・第39図１～15は第Ⅳ群に比定される。16～18・５～８が１類，１～４が２類，９～15が３類に属する。いずれも胎土に多量の金色の雲母片および繊維を含むことを特徴とする。

16が口縁部破片，17・18が口縁部付近の破片である。16は口縁部上部は原体を横位に回転させた斜位縄文が施され，以下を無文としている。17は縄文原体を回転方向を変えて施文し，乱雑な羽状モチーフを呈する。18は原体を横位回転させた斜位縄文が施され，下端には頸部の屈曲部がわずかに残っている。屈曲部以下は無文であるらしい。原体は16・17がRL，18がLRである。５～８は屈曲部以下の胴部破片で，５は縦位縄文が，６・８は斜位縄文が施される。７は回転方向の異なる縄文が施文されている。原体は５がLR，６～８がRLである。いずれも丁寧な撫で調整がおこなわれている。６は特にその特徴が良く観察される資料である。

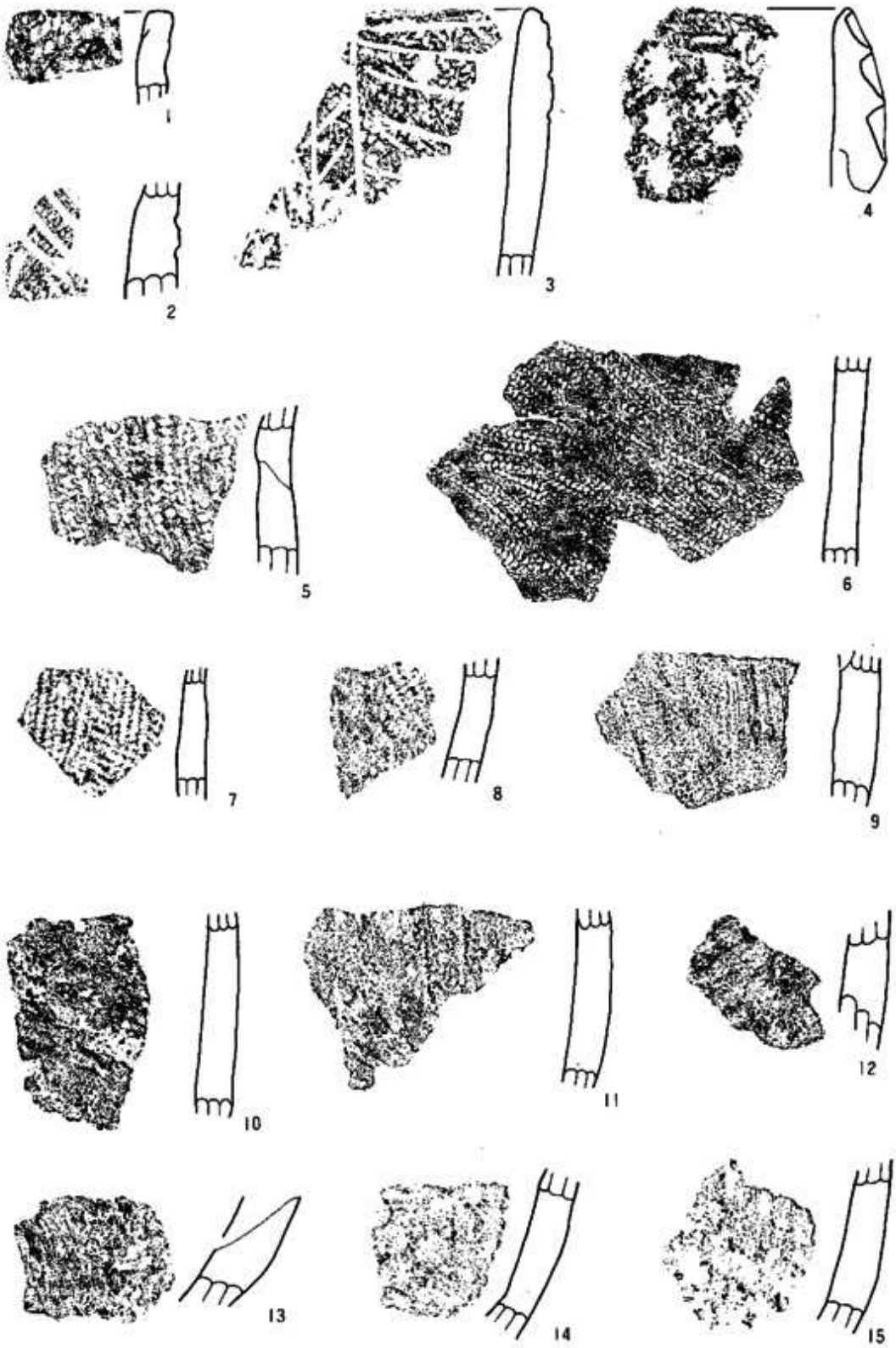
１～３は縄文を地文にして，沈線によりモチーフを描く。１は浅い凹線で波状のモチーフが描かれている。地文の縄文原体は不明瞭である。２は厚手で作りで，先端がささくれた工具で斜線をひいている。地文の縄文原体はRL撚りらしい。３は細い篦状工具で綾杉状のモチーフが描かれている。地文の縄文原体はLR撚りである。４はLR撚りの縄文を地文に刺突を加えたもので，この１点のみの出土である。刺突は下方からおこなっている。いずれにも口唇部に縄文は施されていない。１類とは沈線による施文を除けば，型式学的特徴は酷似している。

９～12・15は撫で調整による擦痕を顕著に残す無文土器である。胎土に金色の雲母片及び繊維を多量に含むことを特徴とする。９・15が縦位，10・12が斜位，11が縦位と横位の擦痕が残る。

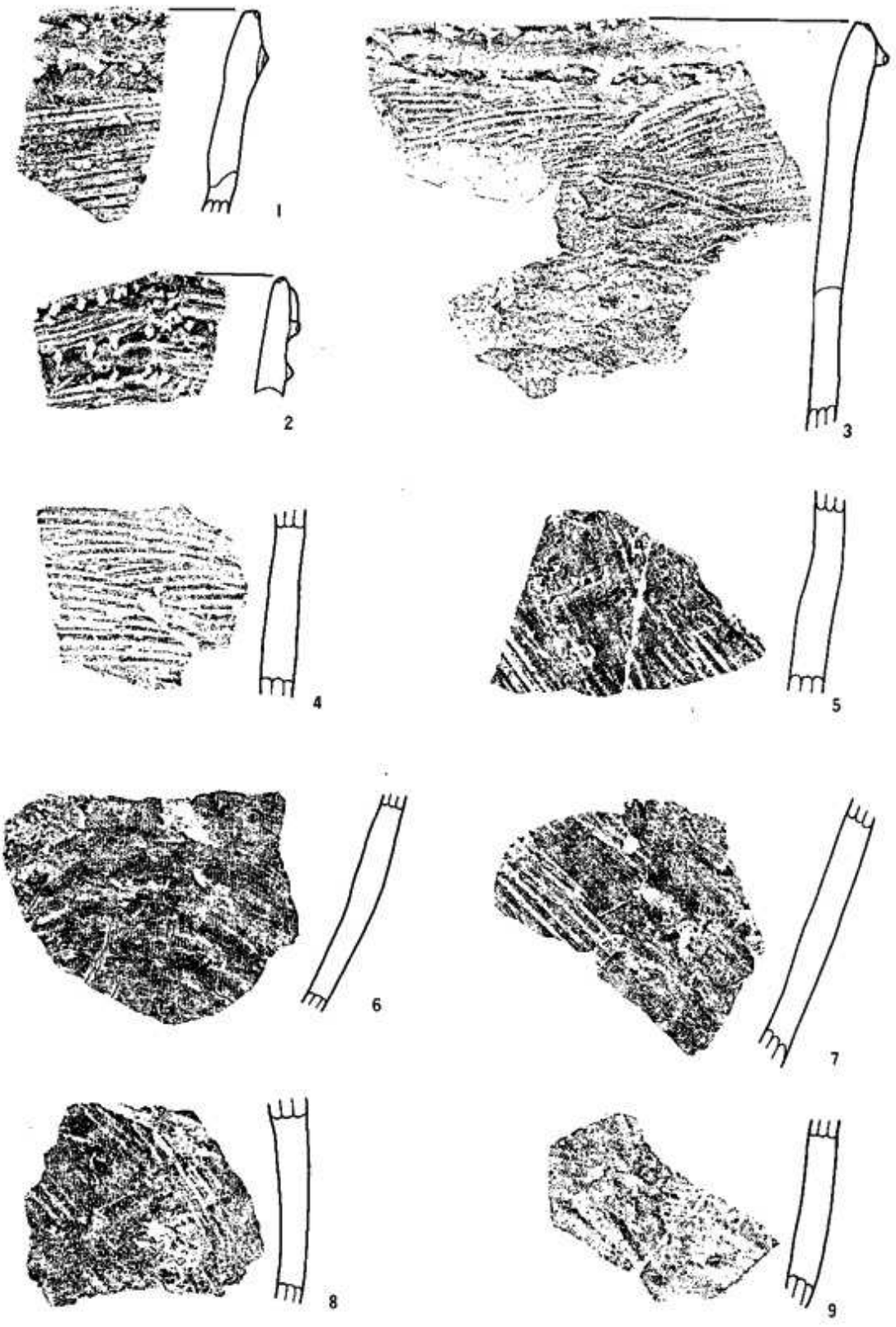
第40図１～９は第Ⅴ群に比定される。１～４が２類，５～９が３類に属する。３類には当然１・２類の胴部破片が含まれていることが予測されるが，その識別が俄にし難いため報告では３類に含めた扱いをしている。

１は篦状の工具で刻まれた低い隆帯を，口縁部上方に一条巡らせ，その下には貝殻条痕が斜位に施されている。施文順序は隆帯を貼付したのちに条痕が加えられている。口縁部上端および隆帯上には篦状工具による刻みが加えられている。２も同様に口縁部上方に隆帯が巡り，その下には弧状を描いて貝殻条痕が帯状に巡る。この帯状の下端は磨り消しが行われているかどうか判然としない。施文順序は１と同様隆帯貼付ののち条痕を施す。隆帯は破片左側で口唇部に向かって上昇しており，波頂部から隆帯が弧状に垂れ下がる文様構成となる可能性がある。隆帯の断面形は不整台形状を呈する。隆帯上と口縁部上端には篦状工具によって刻みが施される。３は波状口縁で，口縁部上端から２条の隆帯をめぐらせ上の１条は波頂部から垂下する隆帯と接続している。隆帯の間は貝殻による条痕調整がなされ，隆帯上および口唇部には貝殻腹縁による刻みが加えられている。４は隆帯直下の破片と思われ，条痕を顕著に残す。胎土・色調から２と同一個体と思われる。

５・７～９は胴部破片で条痕が施されているが，撫で調整のために部分的に磨り消されている。６は底部付近の破片と思われ，同心円状の擦痕が観察される。１～９はいずれも繊維をほとんど含まず，焼成は極めて良好である。（恩田）




第39図　第III層出土遺物（土器2）




第40図　第III層出土遺物（土器３）

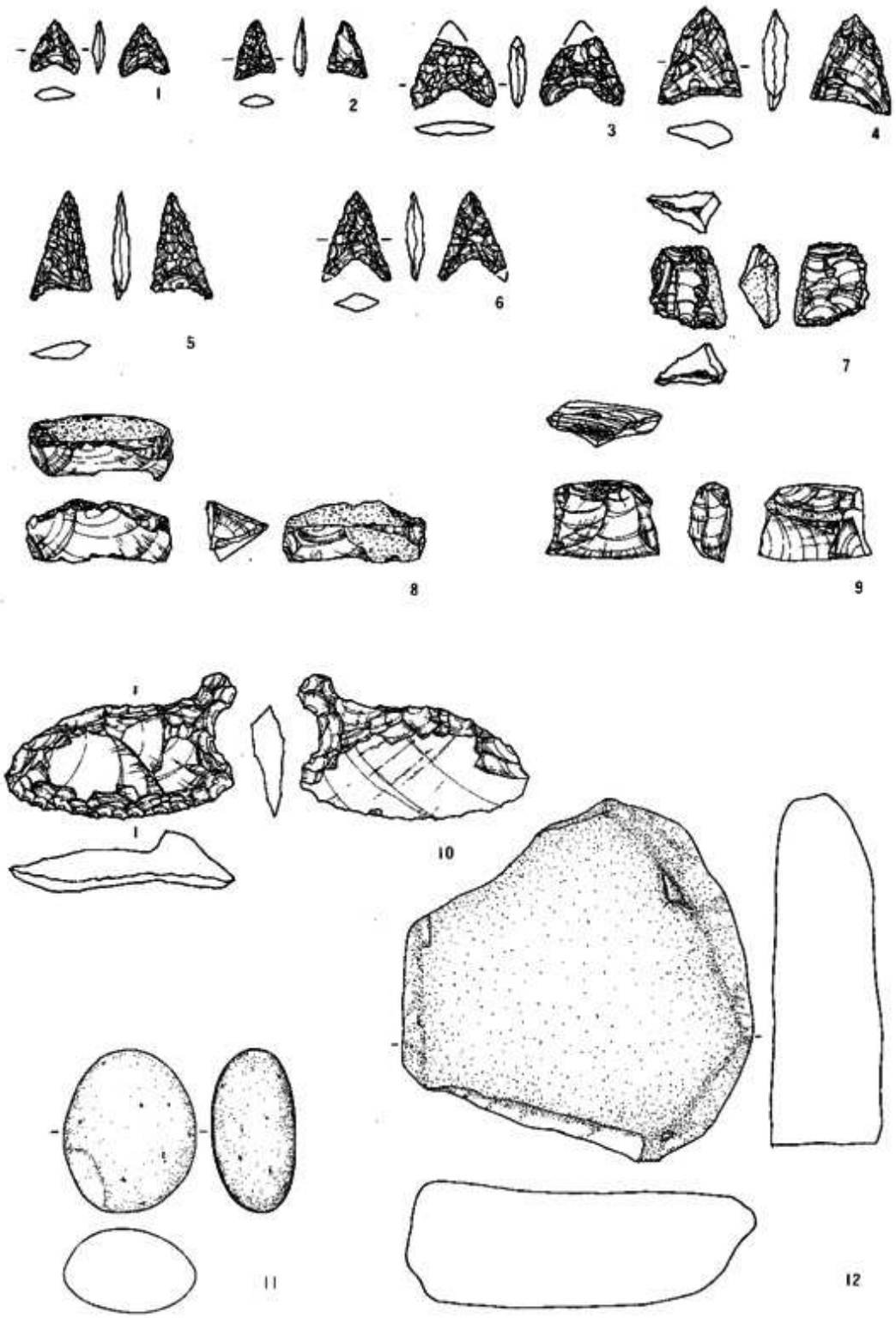
**早前期文化層（II，III層）出土の石器**　Ⅳ区2トレンチからは，石鏃7点，石匙1点，ピエス・エスキーユ3点，二次加工を有する剥片2点，使用痕を有する剥片1点，磨石・凹石5点，石皿1点，石核4点，剥片・砕片が66点出土している。これらの石器の多くは縄文時代早期後半と終末段階の遺物包含層であるIII層より出土している。しかし，他のトレンチに比べI・II層より出土したものが多く，とくにII層下面の縄文時代前期の集石遺構面より出土しているものがある。これらは縄文時代前期の石器であると考えておきたい。図示したものでは，第41図1・5の石鏃，10の石匙，11の磨石がそれに当たる。12の石皿は表土より採集されたもので，時期は不明である。

第41図1～6は石鏃である。2は表面に面的な加工を施し，裏面は素材剥片の剥離面を多く残している。石器が小さいため主剥離面がどちらであるか見分けられない。石材は4が緑色凝灰岩，他の5点は黒曜石である。7はピエス・エスキーユである。上下両端に微細な剥離痕が集まり白いツブレが認められ，断面はレンズ状を呈する。石材は黒曜石である。8と9は石核である。8は自然面を打面とし，作業面が表裏に2面あり，9は一度剥離された面を打面としている。石材は2点とも黒曜石である。10は石匙である。実測図右側が素材の剥片の主剥離面である。これを見ると素材の剥片がかなり大きかったことが窺える。つまみ部は，両面からの加工により作り出しているが，刃部は片面加工により作り出されている。この石匙は前述したように縄文時代前期の集石面より出土しているものであるが，集石そのものから出土したのではなく，集石からやや離れたところから出土しており，傾斜地であることもあり，レベルが集石よりやや低い。この石匙が層位的に早期のものである可能性も残しておきたい。石材は緑色凝灰岩である。

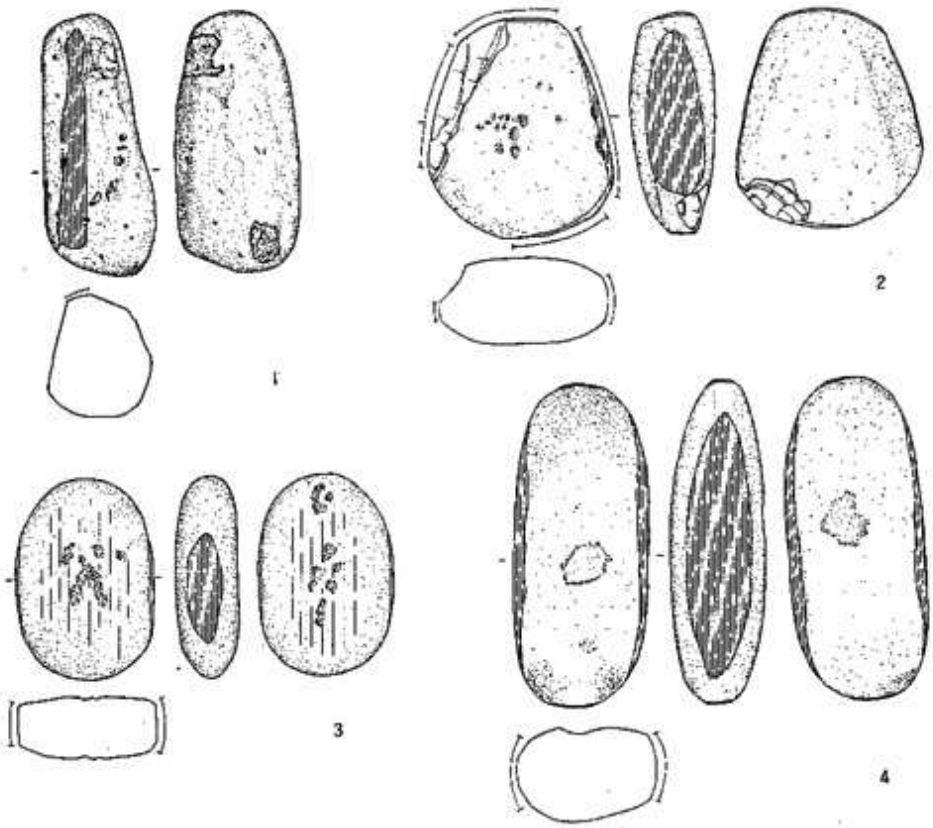
第41図11・第42図1～4は磨石・凹石である。11はIII類としたもので，全面滑らかな面である。第41図1はI類としたもので，断面D字形の細長い礫の腹状に幅1cmほどの帯状の機能面をもつ，いわゆる「特殊磨石」である。機能面は自然面よりザラザラしている。2～4はII類としたもので，平面形が楕円形を呈し四側面に特殊磨石と類似するザラザラした機能面を有するものである。この機能面は，I類に比べ幅が広く，断面形もやや湾曲して膨らみをもつ。表裏両面には擦り痕と凹痕が認められる。特に4は大きく明確な凹みがみられる。2は側面を一部欠損している。この欠損は側面を敲打することによって生じたものと考えられる。Ⅳ区1トレンチのもの（第27図—13）もこれと同じ例であり，磨石II類としたものが側面で何かを敲打する機能を持っていたと考えられる。石材は，第41図11・第41図3が凝灰岩，1が玄武岩，2が花崗岩，4が閃緑岩である。1・3・4は炉穴より出土したもので，おそらく縄文時代早期後半の石器として問題はないであろう。第41図12は石皿である。平坦な機能面全面に擦り痕が認められる。石材は玄武岩である。

本トレンチでは磨石・凹石が他の石器に比べて多く出土しているのが特徴的である。

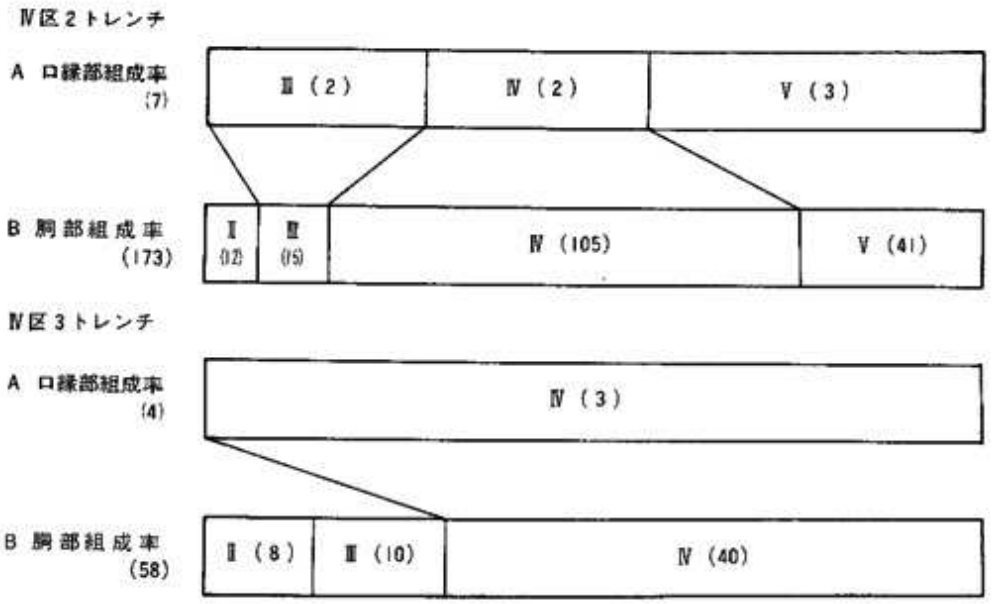
（鵜田）




第41図　第II，III層出土遺物（石器１）




第42図　第II，III層出土遺物（石器2）




第3表　Ⅳ区2，3トレンチ出土土器組成（　）は総点数

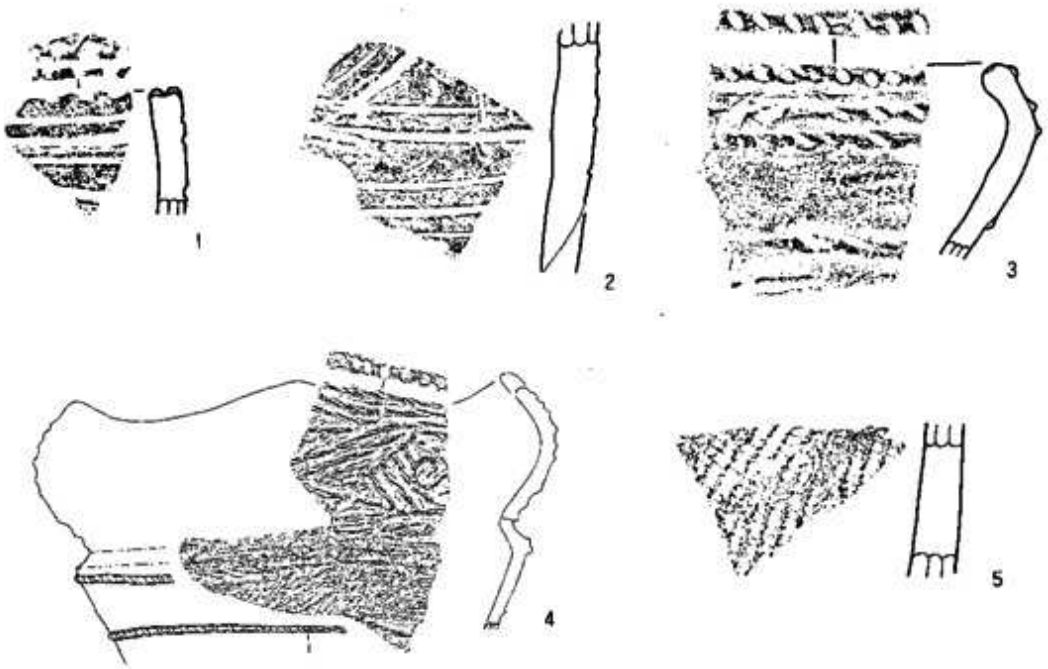
**第II層（前期文化層）出土の遺物**　Ⅳ区２トレンチのII層中からは，縄文時代早期第II群土器４点，第III群土器７点，第Ⅳ群土器28点，第Ⅴ群土器16点，縄文時代前期第III群１類土器１点，同２類土器２点，第Ⅳ群土器７点の計69点の土器が出土している。これらの土器は調査区全域から検出されたが，出土点数が少ないこともあって，各土器群の出土状態に平面・レベル的に有意な片寄りは見られない。

第43図はⅣ区２トレンチII層出土の縄文時代前期に属する土器である。１は第III群１類土器である。口唇部に幅の狭い半截竹管状工具の押し引きによる爪形状の刻みがついた隆帯が２列施されている。口縁に沿って３本の半截竹管状工具による平行沈線が認められるが，真ん中のものは押し引いて表出されている。胎土には金色の雲母片を含む。

２～４は諸磯ｂ式に該当する前期第Ⅳ群土器で，２は胎土に白色鉱物を多く含むのに対し，３，４は金色の雲母片を多く含む。２は胴部破片で，半截竹管状工具によって，大柄な鋸歯状の文様が描かれている。３，４は細い粘土紐を貼り付けたいわゆる「浮線文」が施文されたものである。３の浮線上と口唇部には刻みが付けられており，地文に縄文がみられる。４は単節ＬＲの縄文を地文として施文した後，刻みの付いた浮線文によって文様を描いている。屈曲より上部の口縁部には，弧線状の文様と蕨手状の文様が組み合わされて描かれており，屈曲より下の胴部には浮線文が数段にわたって横に巡らされている。また，口唇部には刻みが付けられている。内側は丁寧なナデ整形である。

５は前期第III群２類土器で，ＬＲの縄文が施されている。胎土には白色鉱物を多く含む。

（中村）




第43図　第II層出土遺物（土器４）

## (4) Ⅳ区３トレンチの調査

本トレンチは第二段丘面の西端部にあたり，Ⅳ区２トレンチの西方約10mに位置する。現状は耕作地として比較的平坦な地表面が東へと続いており，南北に緩やかに傾斜する斜面に直交するように東西２m南北５mのトレンチを設定して調査をおこなった。

**a．土層の堆積と遺物の出土状態**　本トレンチは地表下2.6mまでの調査をおこなったが基盤の青柳ローム層にまではいたらなかった。予想以上に深い土層の堆積は，Ⅳ区２トレンチとの間にきわめて大きな傾斜の変換点のあることを暗示するものであり，これは本トレンチの位置する台地の西側にかつては急峻な谷状の地形が発達していたとする推定を裏付けている。トレンチの東面セクションの観察では，新期富士火山活動による火山性堆積物の層を鍵層として比較的明確に26枚の土層を分けることができた。

第二段丘面の他のトレンチと同様に，本トレンチにおいても，縄文時代以降の堆積層は殆どが削平されており，遺物の出土もなかった。

火山性堆積物のスコリアやラピリ層を鍵層として土層を観察すると13層は前期後半に降下したスコリア層で，その直下には他のトレンチでも確認できた明褐色の前期の包含層が堆積している。さらにその下層の15層以下は早期の包含層であり，この層は黒褐色で粘性が強く粒子が細かい，いわゆる富士黒土層と呼称される層で，スコリアなどの混入は少なく，焼土，木炭粒子を多く含んでいる。また18層からは縄文時代早期第Ⅲ，Ⅳ群の土器片を出土したほか，炉址状遺構が検出された。

**写真12　Ⅳ区３トレンチ調査状況**
厚く堆積した土層の中には富士山を起源とする火山性堆積物の層が何枚にもわたり発見された。このトレンチでは縄文時代後期，中期，前期の時期のスコリア層が順序良く堆積している状況が確認された。

11層以上は縄文時代中期，後期の時期の堆積層であり10層は中期の曽利期のスコリア層である。その上には後期の堀之内１式期の堆積層がある。後期の土層の上には４，５層とした湯舟第１スコリア層の堆積がみとめられるほか，２層とした砂沢ラピリ層がこの上部に堆積している状況が観察できた。

本トレンチは以上のように当時の谷部の傾斜面に位置し，早期の生活址が存在するほか，他のトレンチで確認された早期，前期の文化層にくわえて遺物の出土はすくないが，中期，後期の土層の堆積を比較的明確に観察することができた。（横田）

◀ 火山性堆積物と土層の堆積状況の観察
（都留文化大学，上杉陽氏）

Ⅳ区Ⅲトレンチでは，早期第Ⅳ群土器を伴う生活址がトレンチの最下面に検出され，前・中・後期の文化層が順序良く堆積していた。

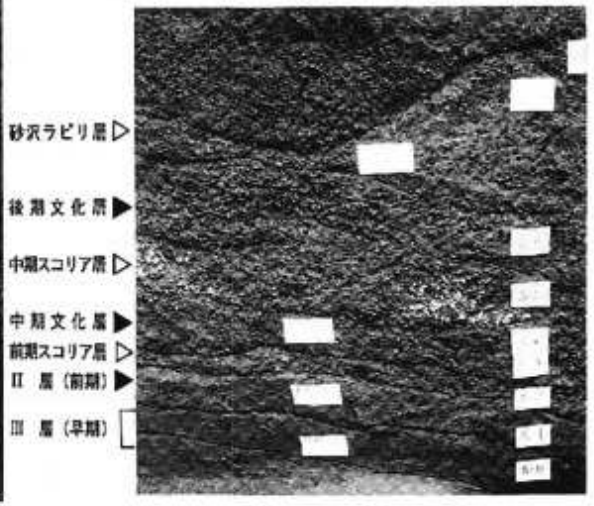
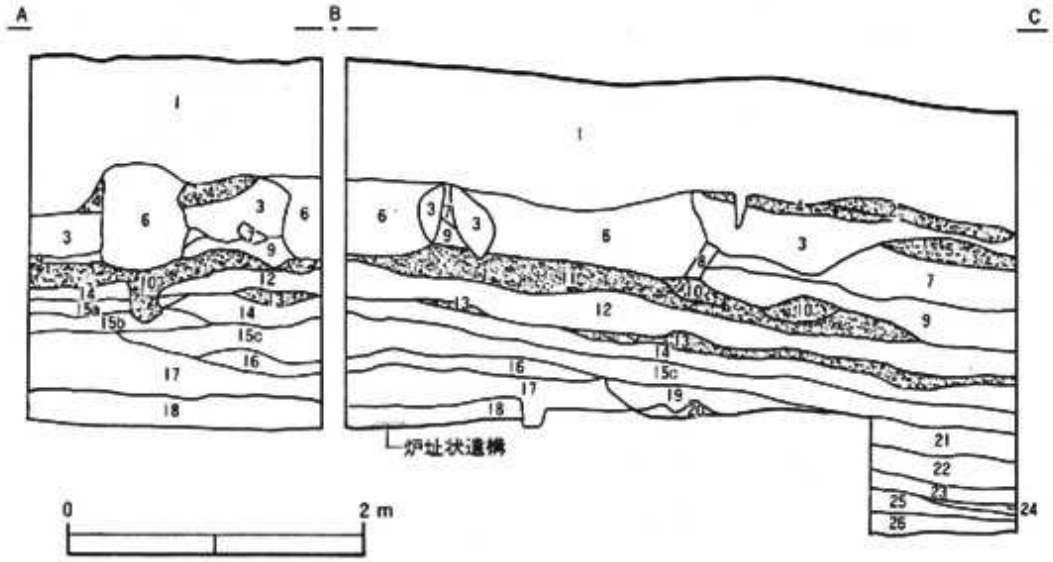



写真13　Ⅳ区３トレンチにおける土層堆積状況

Ⅳ区Ⅲトレンチでは，２，３ｍにもおよぶ厚い土層の堆積があり，それらは24枚の時期の異なる土層の堆積であることが明らかにされた。それらの中には，スコリアやラビリなど火山性堆積物の層が３枚あり，これを鍵層として縄文時代早・前・中・後期の土層の堆積が確認された。

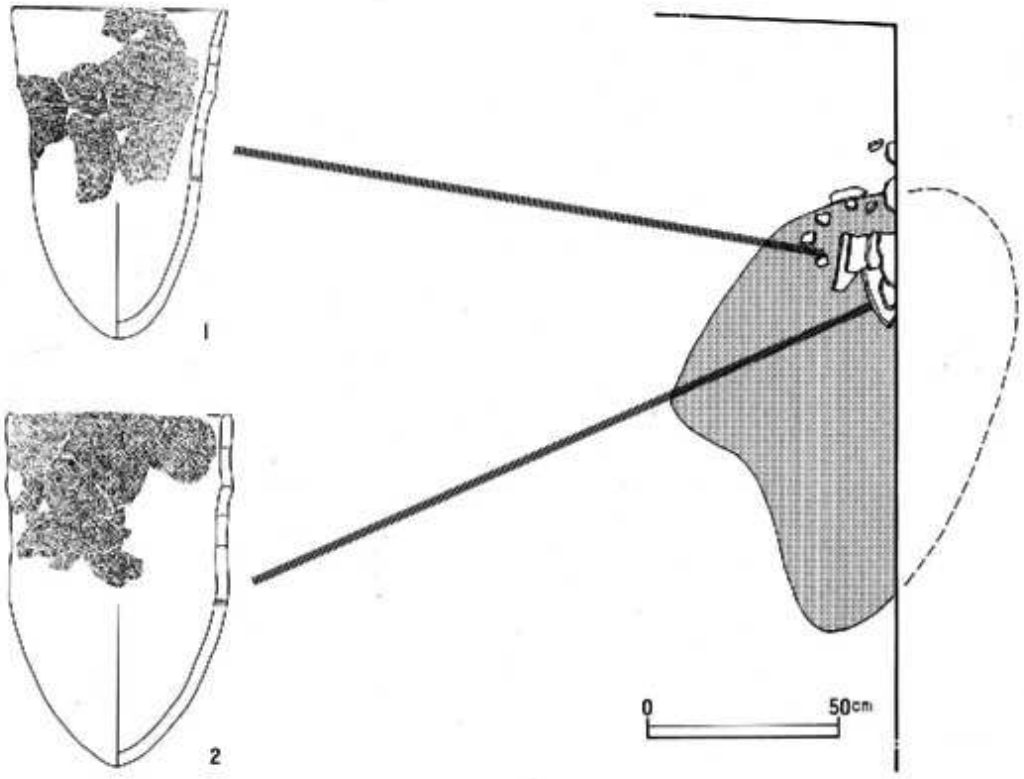



第44図　Ⅳ区３トレンチの土層堆積

**b．検出された遺構と遺物**　本トレンチで検出された遺構は，近世の溝状遺構２条，縄文時代早期第Ⅲ，Ⅳ群土器をともなう炉址状遺構１基である。本地点の現地表面は比較的平坦であるが，土層の堆積状況で指摘したようにⅠ層が非常に厚く，またⅠ層以下に縄文時代後期，中期の時期に堆積した土層が良好にのこっているために，早期の遺構面までは実に2.6mの深さをはかるもので，基盤のローム層まで調査が達しなかった。

**早期の遺構と遺物―炉址状遺構―**　トレンチの調査面の最下層にあたる18層において検出されたもので，トレンチの北東コーナー付近に位置し，その一部は東壁の奥につづくものと考えられる。焼土の堆積は100×50cmの範囲に確認されたが，黒色土層に設けられたため下部の掘り込みが不明確であるが焼土はレンズ状に堆積し，最も厚い部分では15cmを測る。赤化した土層は富士黒土層であり，二次的な堆積とは考えられなかった。また焼土の周辺は良く踏み固められており，一部には住居の床面のように固い部分があったが，トレンチ内の調査ではこの遺構の性格を判断することはできなかった。

焼土の上面および若干焼土の内部に入り込むかたちで２個体の深鉢の大型破片が折り重なるようにして検出された（第45図）。検出の当初は１個体分の破片かと考えられたが復元の結果２個体に由来するものであることが判った。また焼土面とほぼ同一の床状の硬化面からは早期第Ⅲ群に比定される土器の出土もあった。




第45図　Ⅳ区３トレンチ18層上面における炉址状遺構

c．出土した遺物　土器　炉址状遺構およびその周辺から出土した土器は総数61点があり，そのうち破片８点と復元された２個体を図示した（第46図）。またこの遺構の上に堆積した土層からは遺物の出土はまったく見られず，無遺物層が堆積していた。

第46図１，２は炉址状遺構の焼土面に密着して出土し，一部は焼土内部に入りこんだ状況で出土したものである。検出時点では非常に脆弱であったため，固定剤を塗布して周辺の土ごと取り上げた後にクリーニングをおこない復元し得たものである。

平縁の深鉢であり，底部を欠損しているが，おそらく尖底になるだろう。両者ともきわめて良く似た特徴をもち，早期第Ⅳ群１類土器の典型とすることができる。

口縁部はほぼ直行するが，胴部の上半部に弱い屈曲があり，段帯部をつくり出している。

装飾は縄文のみによっており，口唇部にも縄文の施文が観察できる。原体は各部位とも同一であり，単節のＲＬである。縄文は段帯部は原体の回転を意図的に変えて羽状の構成をとる特徴がある。胴部以下は縄文の条が縦位になる部分が多く，段帯部とは異なる施文をおこなう。また胴部は縄文施文の後に磨かれて，縄文がまばらに残る部分がある。現存する下半部までは縄文が施文され，推測にとどまるが，底部付近まで縄文が施文されていたものと思われる。両個体の胎土は少量の繊維を含むほか，多くの金色の雲母片を含む特徴があり器厚は15㎜と厚く，焼成が悪く脆い。また内面は凹凸が目立ち，充分な器面の整形がおこなわれていない。凹凸の多くは指頭による押圧痕と考えられる。

写真14　早期第Ⅳ群土器をともなう炉址状遺構

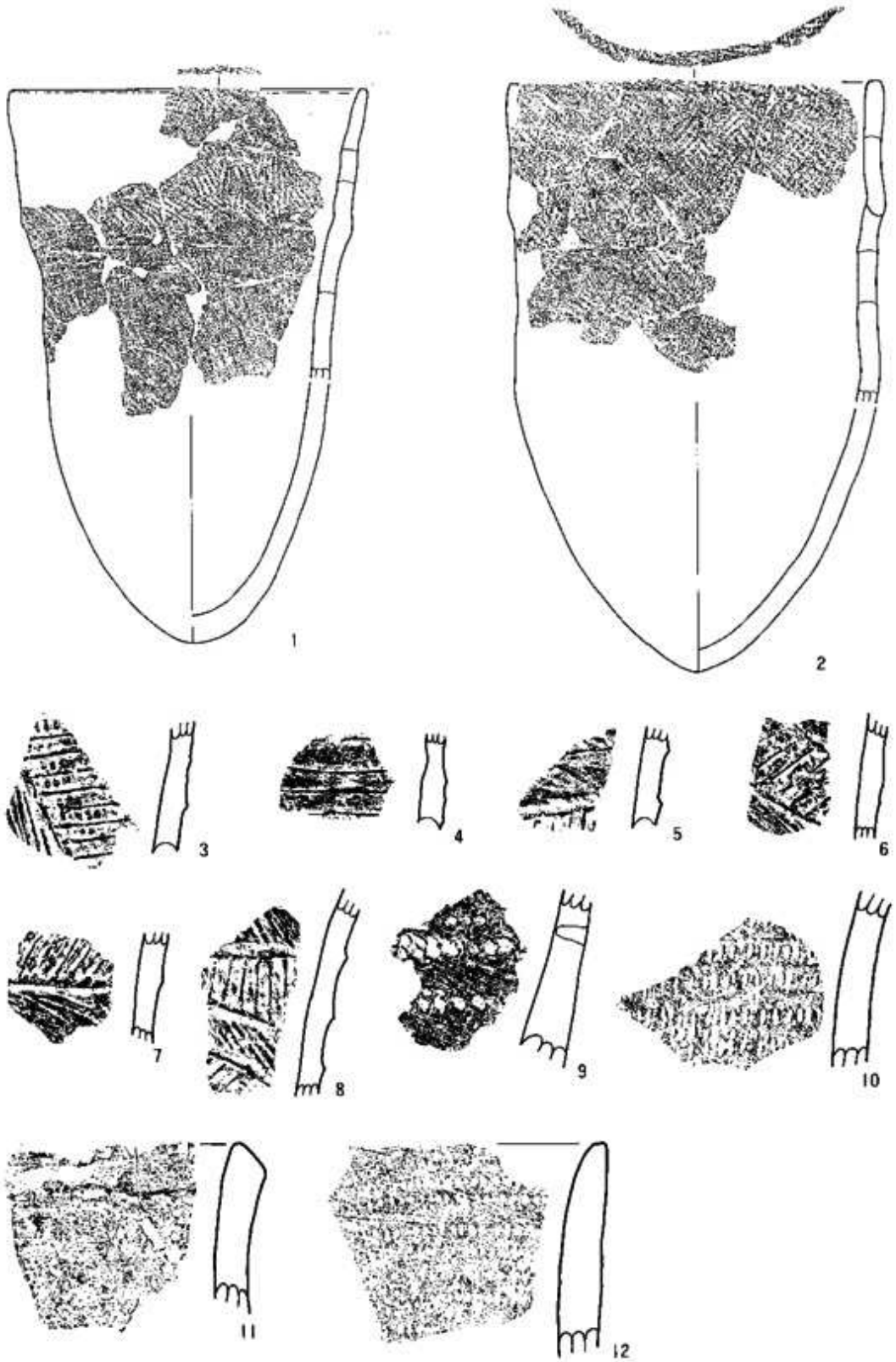
同図３～12は焼土の周辺から出土したものである。３～８は同一個体の破片でミミズ腫れ状の細隆起線により文様を描くもので，モチーフの区画，文様内の充填文の両方に細隆起線を用いる。先記した土器に比べて，器厚が薄く，条痕による整形が内外面に行われ焼成の良好な土器である。胎土には少量の繊維を含んでいる。第Ⅲ群２類に比定されよう。

９，10は絡条体圧痕文を施す胴部破片である。９は絡条体が太く疎らであるが，10は細く細かい点が異なる。９は早期第Ⅱ群，10は第Ⅲ群の絡条体圧痕文と思われる。

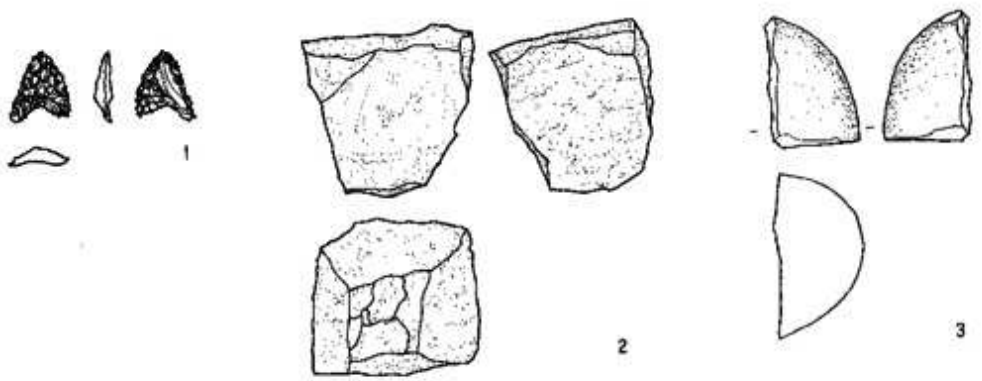
11は第Ⅳ群３類に対比される無文土器で口唇部の形態が外削状を呈し，本類の特徴を良くしめしている。胎土は１，２と酷似している。

12は土層堆積の変状剝離作業の際に掘り下げた時に第22層から出土したもので，10と同様の特徴をもつ絡条体圧痕文を施した土器の口縁部である。

９，12の胎土は少量の繊維を含むが金色の雲母片の混入は顕著ではなく，焼成も良好である。また整形も内外面ともに丁寧である点，第Ⅳ群土器とは際立つ違いとなっている。　（阿部）




第46図　炉址状遺構および周辺出土遺物（土器）



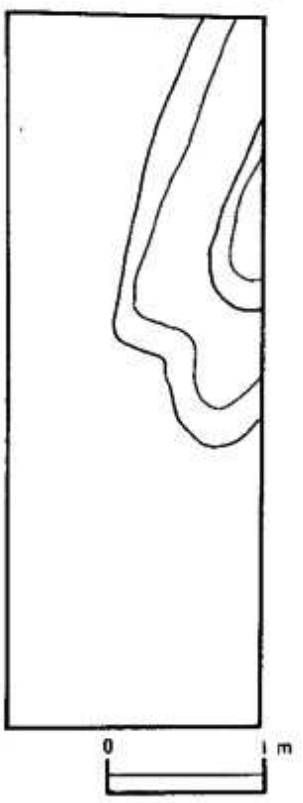

第47図　Ⅳ区Ⅲトレンチ出土遺物（石器）

**石器**　Ⅳ区３トレンチからは，石鏃２点，二次加工を有する剝片１点，使用痕を有する剝片１点，磨石１点，石核１点，原石１点，剝片・砕片11点が出土している。遺物包含層を完掘していないためか，出土石器数は少なく，縄文時代早期の遺物包含層出土の石器は第47図３の磨石片のみである。

１は石鏃，２は原石である。両者とも排土中より採集したもので，出土層位不明である。石材はともに黒曜石である。３は安山岩の磨石Ⅲ類の破片である。（鵜田）

**近世の溝状遺構**　溝状の遺構はⅠ層の下位面付近から掘りこまれているもので，トレンチの北西側に延びる。確認された端が一部重複したもの部分は２本の溝の南である。ごく一部の検出にすぎないが，溝は斜面に直行するように数本が並ぶようにして，また部分的には重複しながら掘りこまれている状況が推測されようか。

掘り込み面はⅣ区２トレンチの配石遺構と同様に，Ⅰ層の下半部と思われ，年代的に近い構築時期が推定されるかもしれない。なお遺構の内部およびその周辺からは遺物の出土はなく，遺物からこの遺構の時期を推測することはできなかった。ただ注意されてよいのは，こうした遺構の構築面が現地表面よりもかなり深いことであり本遺構の構築後に大量の土砂の堆積がこの地点において行われた可能性が高いことである。（阿部）




第48図　近世の溝状遺構

# 第Ⅳ章　研　究　編

## 第１節　古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の型式学的検討

阿部芳郎

### はじめに

古屋敷遺跡では早期の文化層が大別して２枚（Ⅲａ，Ⅲｂ層）に分層され，Ⅲａ層からは早期終末の神之木台式土器が、そしてⅢｂ層からは野島式土器と，第Ⅳ群土器の出土が確認された。とくにⅣ区１トレンチのⅢｂ層からは５軒の住居址が検出され，第１，２，３，４，５号住居址からは野島式土器（第Ⅲ群）を伴い第Ⅳ群土器が検出された。

これらの出土状況は基本的に第二段丘面のⅢ区１トレンチとⅣ区１，２，３トレンチにおいて共通に確認されたことであった。そしてまた，Ⅲｂ層からは野島式土器（第Ⅲ群）とともに，組成の上では第Ⅳ群土器とした無文土器と縄文施文を特徴とする土器群が相当量共伴することを確認したのである。

これらの土器群の構成は早期後半の型式群のなかにあって，従来あまり明らかにされたことのない土器型式の存在を暗示するものと考えられた。

出土した早期後半の第Ⅳ群土器は，各地点の調査の記録において記したように，第二段丘面上にひろく展開する早期集落の主要な形成時期を表徴するものである。前期の包含層の下に良好な堆積層準をもって出土した第Ⅳ群土器は，竪穴住居址内における出土状況や，整合的な堆積が示す文化層の年代的な限定性とともに，その型式学的特徴において独自性の強い土器群として理解されるものであった。

これらの土器群の年代的な位置については，野島式土器（第Ⅲ群）の明らかな共伴を根拠に関東編年との対比が可能である。先述した型式学的な検討の視点と方法からは縄文および無文の土器（第Ⅳ群土器）の型式学的特徴の指摘と，それらの系譜，分布の解明といった課題が設定される。そしてこの軌上に野島式土器分布圏とのあいだにおける地域間の関係を見据えることもできよう。

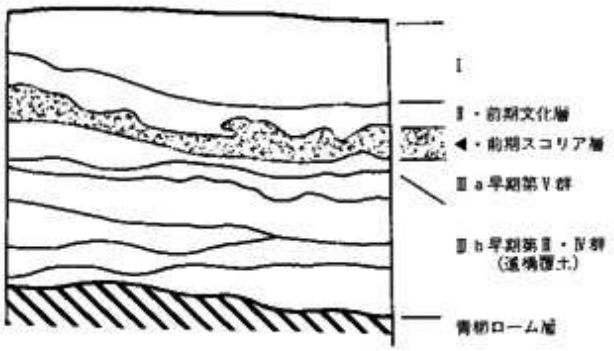
### １　早期第Ⅳ群土器の構成

第Ⅳ群土器の出土状態を観察することにより，本土器群の年代的な限定性を確認しておく。そして次に層位学的に限定された状態の土器群を構成している型式学的特徴を明らかにし，周辺地域の型式群との比較検討をおこない，当該土器群の型式編年学的な位相を明らかにしていくという手順をとることにする。

〔1〕　早期第Ⅳ群土器の出土状況

**第二段丘面における文化層の堆積状態**　事実記載において記録したように，縄文時代早期の生活址の中心は第二段丘面を主体として形成されており，そこには基本的に第II層とした前期の文化層を最上層にして早期終末の神之木台式土器を包含するIII a 層が堆積し，その下面に第Ⅳ群土器を主体的に包含するIII b 層が堆積している。このような遺物と文化層の堆積状況は第二段丘面の各トレンチにおいて共通に確認され，こうした年代的な序列をもつ文化層の堆積が本遺跡の消長を本来的にしめす層位学的な根拠でもあることを示している（第49図）。

さらに，Ⅳ区１トレンチにおいては，こうした文化層の堆積状況に加えて，II層下面に前期の集石遺構が検出されたほか，III a 層中に構築面をもち，III b 層とローム層を掘り込んで構築された神之木台式土器を単純にともなう竪穴住居址の一部が，またIII b 層中には第Ⅳ群土器をともなう重複した５軒の竪穴住居址の一部が検出された。こうした層位的な堆積状況と各時期の遺構の構築状況は相互に整合的な状況をしめしており，こうした観点から第Ⅳ群土器を層位学的な根拠のもとに年代的に限定された土器群であることを理解することができる。



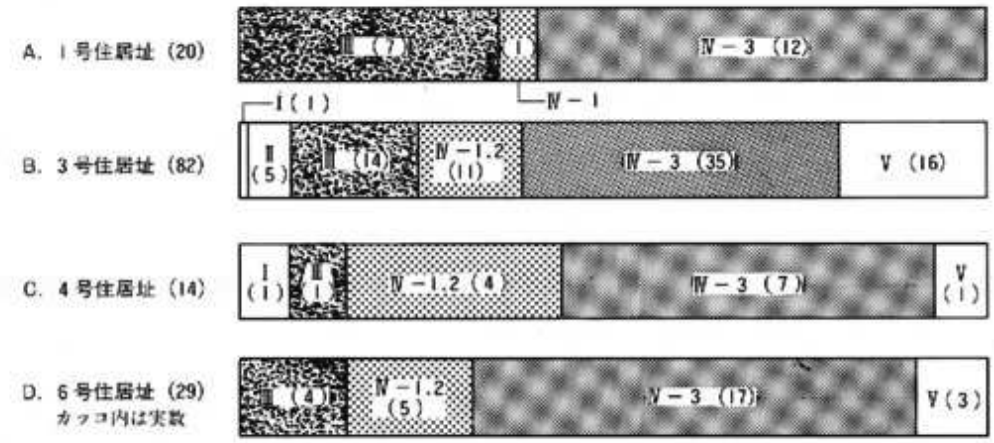

第49図　文化層の堆積状況

**III b 層における土器群の構成**　つぎにIII b 層と，この面に構築された遺構から出土した土器群の構成を観察してみよう。土器群の類別は事実記載においてもちいた分類を基本としている（15頁参照）。

比較の対象としてII，III層出土の土器群を示しておく。第50図に示したように各トレンチ出土の土器群は先述した様に一致または近似した組成をしめして包含されていることがわかる。古い文化層の遺物が上層に混入する状況が観察されるが，これは後世の部分的な撹乱か，あるいは遺物の取り上げ時点における誤認であろう。一方下層に上層の遺物の混入がきわめて少ないことは，これらの土層の堆積が安定したものであることを示しているものといえる。

第二段丘面の各トレンチではIII b 層から第Ⅳ群土器が主体的に出土しており，これに第III群とした野島式土器がともなう状況が確認できる。第Ⅳ群土器は大別して段帯部をもつ特徴的な形態とともに，縄文施文を特徴とする１，２類と無文の砲弾形の尖底の深鉢から構成されるが，各トレンチの土器組成にみるように両者のあいだに出土状況から年代的な違いを推定することはできず，むしろ第III群土器とともにIII b 層の時期において共存していたものとみるのが妥当であろう。

またⅣ区１トレンチの第２号住居址の床面直上では３類の大型破片に１類土器が共伴していることや，おなじくⅣ区３トレンチの炉址状遺構の焼土上に折り重なって出土した２個体の２類土器に３類土器が共伴しているなど，両者のあいだに同時性を証左する出土状況が確認された。




第50図　遺構別土器組成（カッコ内は実数）

第Ⅳ群土器は以上のように本遺跡のⅢb層において主体的に出土し，1，2類とした縄文施文の土器と3類に分類した無文土器は時間的に分離できない状況で出土したこと，および第Ⅲ群とした野島式土器を各地点において共伴している事情が理解される（第50図）。つぎにこうした土器群の型式学的な特徴を観察してみよう。

〔2〕　早期第Ⅳ群土器の型式学的特徴

第Ⅳ群土器はすでにのべたように，大別して段帯部をもつ尖底の深鉢形土器と砲弾形の無文土器から構成され，前者はさらに段帯部に単節の斜縄文あるいは，同原体による擬似羽状縄文のみのもの（1類）と，この部分に縄文を地文として沈線による文様を描くもの（2類）に分類される。以下に各類の形態，文様帯構成，モチーフおよび文様表出技法の特徴を観察しておく。

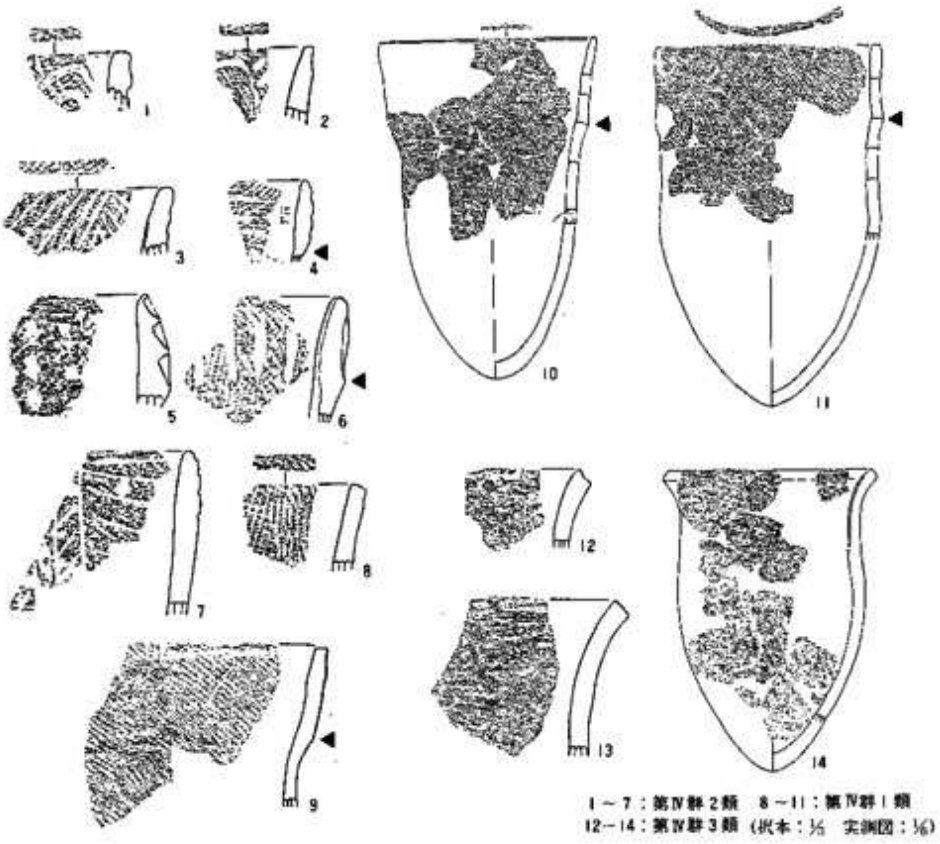
1類と2類土器の段帯部には擬似羽状縄文や，それに加えて沈線による文様が描かれることから，この部位は以下の胴部とは区分される文様帯として理解できるだろう。また両者の口唇部には縄文が施文されるものがあり，観察可能な口縁部資料では19片中12片に施文が観察された。

復元された2個体の土器は，胎土や成形，縄文施文のくせが酷似するもので，胴部の縄文は条が縦位に位置するように回転施文され，施文の後にその一部を磨いている。また段帯部の成形は粘土帯をはりつけるものもあり，意図的な成形によるものである。

1類土器は段帯部に沈線による文様が描かれる一群である。沈線文の基本的なモチーフは重三角文や波状文とも呼称できる幾何学文であり，なかには第51図7のように縦位の区画線をもつものもある。また曲線的な波状文を描くものには1のように段帯部の幅が狭いものもある。さらに1点ではあるが5は太い棒状工具による縦位の刺突文を施している。

なお両類とも口唇部には縄文以外の加飾をおこなうものはみられない。胎土には金色雲母の混入が目立ち，また微量の繊維を含む特徴があり，これは3類土器とも共通する。

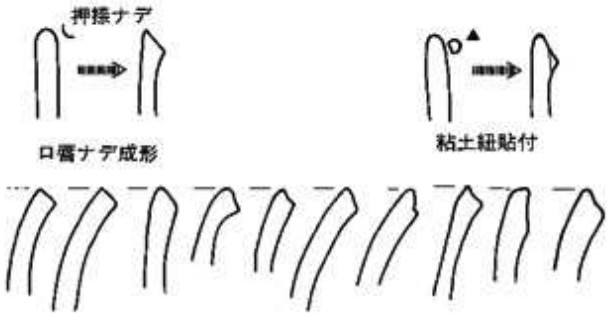
3類土器は口縁部が外反する砲弾形の尖底の深鉢である。Ⅳ区1トレンチの第2号住居址の床面より出土した大型の破片から復元された個体は，その特徴をよく伝えるものである（第51図）。またこの個体には2類土器が共伴している。本類は器面が無文のままのこされ，何ら装飾的な要




第51図　早期第Ⅳ群土器の構成

素をもたない所謂無文の土器である。形態的な特徴は外反する口縁部とともに肥厚した口唇部の形状であり，その断面形は角頭状を呈し，角を作りだして，外削ぎ状を呈する特徴がある。

口唇部の肥厚部分は細かく観察すると，器面成形の際の削りだしによるもの（a種）と，粘土紐を貼りつけて肥厚させるもの（b種）があり，後者は鋭角な口唇部の断面形態をつくりだすものが多い（第52図）。なお肥厚した口唇部に加飾をほどこしたものは全くない（第51図）。




第52図　早期第Ⅳ群Ⅲ類土器の口唇部形態

器面は丁寧な撫で成形がほどこされ，成形には指頭あるいは軟質の素材をもちいた工具によったものと思われる。また貝殻や篦状工具による成形痕はまったく観られない。なお胎土は肉眼観察においては1，2類土器と酷似するほか，内面には成形作業時の指頭圧痕が顕著に観られ，そのために器厚が一定しないものが多い。この点も1，2類土器と共通している。

## 2　早期第Ⅳ群土器の型式学的位相と編年的位置

第Ⅳ群土器の出土状態からそれらを構成している1，2，3，4類土器が年代的な限定性をもつことを確認し，各類土器の特徴を観察してきた。第Ⅳ群土器はⅢb層に構築された遺構を単位として，または層位的な出土状況の観察から，第Ⅲ群として分類した野島式土器を共伴しており，その年代的な位置を推測することができる。こうした関係はまた第Ⅳ群土器の系譜を推測する際の比較対象のひとつが，野島式土器の構成の理解に関わることを暗示しているものといえる。

第Ⅳ群土器の系譜を推測するために，共伴およびその可能性のある第Ⅲ群土器についての型式学的な理解を深めておこう。

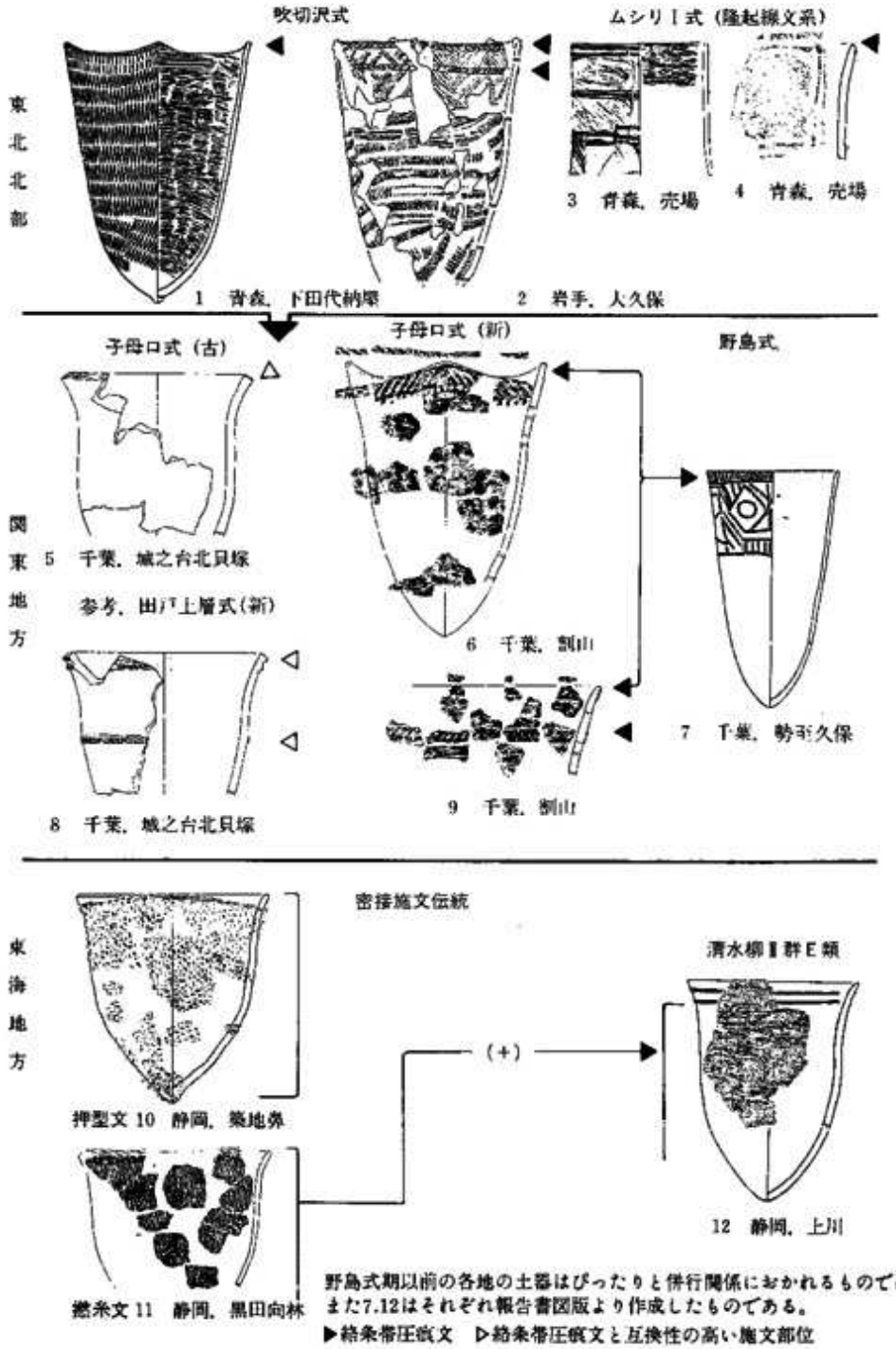
### 〔1〕　子母口式から野島式土器への変遷

関東地方において早期中葉から後葉への移行を象徴する変化は，沈線文系土器群から条痕文系土器群への変遷として具体的に論じられてきた。田戸上層式土器から子母口式土器への型式変化は，そうした変遷をつたえる型式序列であるが，そのあいだの連続性は関東地方においても詳らかなあとづけが確認されたわけではない。とくに子母口式土器の研究においては，細別を推進する研究（安孫子1967,1982.田村1985等）や学史的混乱をふくめて，また稀少な資料群の評価をめぐり，型式の存在自体に否定的な意見（瀬川1982,1983）も呈示されている状況がある。こうした動向のなかで学史的整理とその評価をおこなう研究（小川1981，壽島1983）は今後の研究の指針を担うものとして評価されよう。

筆者は以前に子母口式土器の評価の前提に，型式学的な特徴である絡条体圧痕文の評価とともに，土器個体を構成する文様帯や文様表出技法，モチーフなどの相互の関係の変化として沈線文系土器群から条痕文系土器群の変遷を明らかにする必要性を指摘した（阿部1989）[(註1)]。

また本節の問題の核心である野島式期における絡条体圧痕文の系譜についても，一元論ではなく，多元的な系譜が想定される。そしてこうした子母口式から野島式土器への変遷における重畳した土器群の系統関係の認識自体が，古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の系譜の理解に連動するものとも考えるのである[(註2)]。

**子母口式―野島式における絡条体圧痕文の系譜―**　子母口式土器の構成についてはその概要について以前に述べたことがあるが，その際に検討の対象としたのは，主に東関東地方の資料の蓄積を前提とした指摘にとどまり，東海，中部地方の動向について触れることがなかった（阿部1989）。東関東地方の動向は，安孫子氏による細別の変遷案がすでに提出されており（安孫子1982），千葉県城之台北貝塚における土器群の構成を評価点として，絡条体圧痕文の存在しない段階（古段階）から，出現，定着段階（新段階）という変遷案を基本的に再確認した。そして城之台北貝塚における土器群の構成において注目したのは，田戸上層式土器からの変遷において文様帯構成や文様の変遷の上で，この段階において肥厚する外削状の断面形態を成す口唇部文様帯が確立していることである（第53図5，8）。




第53図　子母口式土器の生成と結条体圧痕文の系譜

このことは以後の土器変遷を追跡する際に重要である。なぜならば，子母口式土器の後半の段階において定着する絡条体圧痕文は，この口唇部文様帯や口縁部の文様帯に施文されるくせが強いからである。併存して用いられる互換的な装飾技法には貝殻腹縁文や連続刺突文があり，これらの要素は関東地方ではすでに古段階において出現している。絡条体圧痕文の同様な用い方は東北地方の併行段階の土器群にも観察され，東北北部の吹切沢式土器のなかには口唇部文様帯の装飾に絡条体圧痕文が使用され，また口縁部文様帯を区画する隆線上に施すものもある[註3]（第53図２）。

**野島式土器の地域性**　上述の諸例を概観して理解されることは，東関東地方の子母口式土器は絡条体圧痕文の定着と普及をひとつの評価点として新旧に弁別されること，絡条体圧痕文による装飾は，古段階に生成される刺突文や貝殻腹縁文と互換的な関係をもち，施文は口唇部および口縁部文様帯に集中するくせをもつことである。

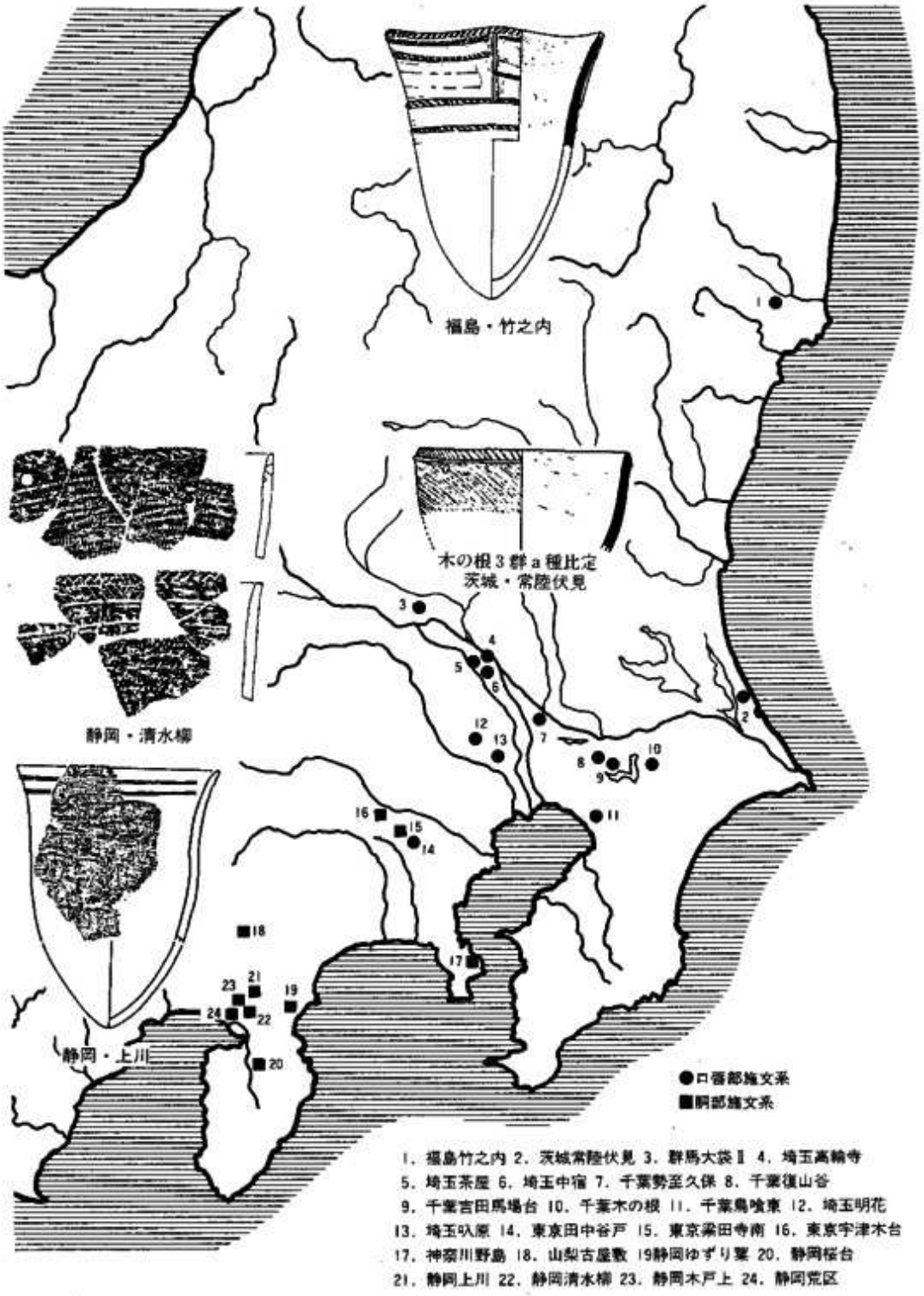
視点を移して東海地方の当該段階を概観すると，関東地方の子母口式土器に直接的に対比される資料が非常にすくない現状があるが，問題の絡条体圧痕文をほどこす土器群は，野島式の段階にきわめて安定した系列を構成していることがわかる。関東の子母口式土器に対比すべき土器群を抽出することはまだ充分な資料の蓄積があるわけではないが，野島式土器の時期に盛行する絡条体圧痕文は，静岡県沼津市清水柳遺跡の第２群Ｅ類として分類された土器群（瀬川1976）が該当する。

それらは先述した関東地方の絡条体圧痕文とは原体のくせが異なる[註4]。その中でも，口縁部に微隆起線による区画をもつ系列では，この微隆起線上と口縁部以下の胴部に絡条体圧痕文が多用され（第53図12），また口縁部文様帯をもたずに口縁部以下全面に絡条体圧痕文を施文する系列も安定している。これらは施文部位の相違から絡条体圧痕文が関東地方の子母口式土器とはことなる系譜をもつことを暗示している。

したがってこうした地域間の土器個体にみられる相違点を理解の前提とせずに，いたずらに絡条体圧痕文のみを評価点とした分析は当該土器型式の理解において生産的な方法とはいえないであろう。

東海地方におけるこうした施文法をもつ絡条体圧痕文の系譜は，いまだ資料が少なく明確なあとづけが辿れないが，関野氏の指摘するように東海地方の押型文期に存在する撚糸文土器の回転施文から押捺施文への変化に系譜するものと考えることができる（関野1988）。東海地方の絡条体圧痕文が胴部の全面に施文されるくせは，こうした撚糸文土器の施文部位をそのまま継承したものと考えると文様系統の理解のうえでも矛盾はしない。

以上に概観したように，子母口式および野島式土器の理解をめぐって，つねに論点のひとつとして重要視されてきた絡条体圧痕文は，関東地方の子母口式土器には後半段階に普及・定着し，その施文法は東北地方の貝殻沈線文系土器群の変遷と基本的な対応をしめすこと，そして東海地方では，押型文期の撚糸文土器の継承の変化により絡条体圧痕文が独自に生成される背景が予測され，さらに両者の違いは施文法や施文部位の違いとして区別されることに理解がおよぶのであ




第54図　野島式期における絡条体圧痕文土器の地域性

る。子母口式の時期におけるこうした絡条体圧痕文の系譜の違いは，野島式土器の初頭の時期にも継承される。関東地方では千葉県木の根遺跡第３群ａ種土器や同県勢至窪遺跡や東京都田中谷戸遺跡の野島式土器のように口唇部および口縁部文様帯への施文法が継承され，他方で東海地方では先述した清水柳遺跡第２群Ｅ類土器のように絡条体圧痕文を胴部の全面に施文することを特徴とする土器群がそれぞれに独立した分布圏を形成しているのである（第54図）。したがって野島式土器の理解も，相互地域に対応する土器系列の理解とともに，こうした地域的な伝統を背景とした地方差を考慮する必要があろう。

子母口式期における絡条体圧痕文の系譜において指摘したように，東海地方では清水柳第２群Ｅ類土器や関東東部の木の根遺跡第３群ａ種土器に表徴されるように，野島式期の関東地方と東海地方においては，相互に系譜を異にする系列の土器群が独自に存在する。

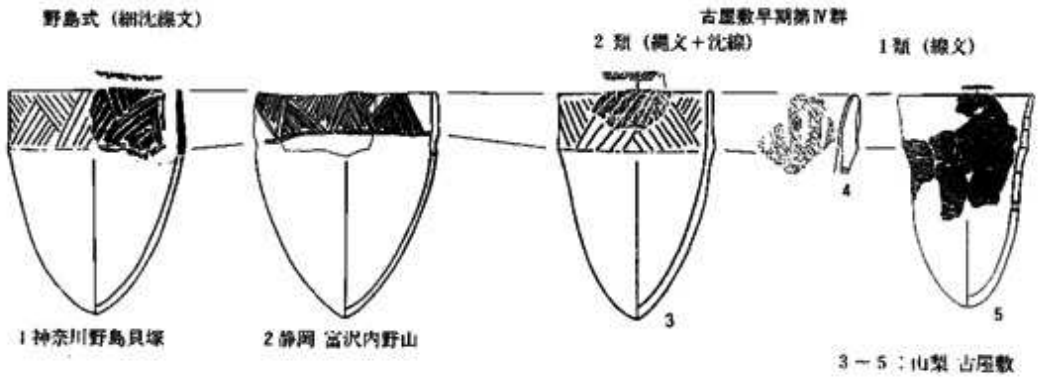
東海地方においては押型文土器の終末の問題をふくめて，また絡条体圧痕文の系譜等を具体的課題として，関東地方の田戸上層式土器―子母口式土器との系列とは別系の変遷をたどる土器群[註6]を明確にする必要がある。

〔２〕　早期第Ⅳ群土器の構成と野島式土器の関係

第Ⅳ群土器の型式学的特徴についてはすでに述べた。ここではそうした特徴と野島式土器との比較検討をおこない，当該型式の特質について考えをめぐらせてみようと思う。

**野島式土器との対応関係**　共伴する野島式土器との関係において注意されるのは，第Ⅳ群１，２類とした段帯部をもつ縄文施文の深鉢である。すでに述べたように，この段帯部は胴部とは別文様帯として区別され疑似羽状縄文を施文し，また１類では沈線文を描く特徴がある。１類の段帯部の沈線文が野島式土器の胴部上半の文様モチーフに酷似するのは偶然ではあるまい。とくに複数の沈線による重三角文を描く資料（第55図３）は，神奈川県野島貝塚の野島式土器に類例がある他，近隣では静岡県裾野市富沢内野山遺跡にも類例が存在する（第55図２）。

野島式の胴部文様帯は古段階においては上半部に限定され，胴部下半は無文部として残されるものが多く，以後の変遷のなかで次第に胴部に広く展開し，鵜ヶ島台式の文様帯へと継承されるが，古屋敷遺跡の第Ⅳ群１，２類土器はそうした変遷の上では野島式の古い部分の文様帯との対応を示すものであろう（第55図３）。しかし本遺跡で第Ⅳ群土器に共伴した野島式土器（第Ⅲ群）は，胴部文様帯が拡幅化したものも含んでいるほか，文様描線が沈線以外に微隆起線によるもの，太沈線と細沈線，刺突文を併用するもの等多くのバラエティをもつものであった。こうしたバラエティが年代的な前後関係をもつものであるのかは出土状況から明らかにすることができなかったが，同時期に沈線文系と隆起線文系が併存するらしいことは多くの遺跡で確認されている。こうした状況を踏まえれば，第Ⅳ群土器との関係を示すものは，これらのなかで沈線文の系列とすることができよう。こうした比較において，第Ⅳ群土器は野島式土器のもつ土器構成のすべてを１～３類のなかに採り入れたのではなく，独自の構成のなかで２類土器の段帯部に野島式土器の沈線文の系列の文様帯との対応を保ったものと考えることができる。




第55図　野島式土器の文様帯と早期Ⅳ群1，2類土器の文様帯系統（ヨコの関係）

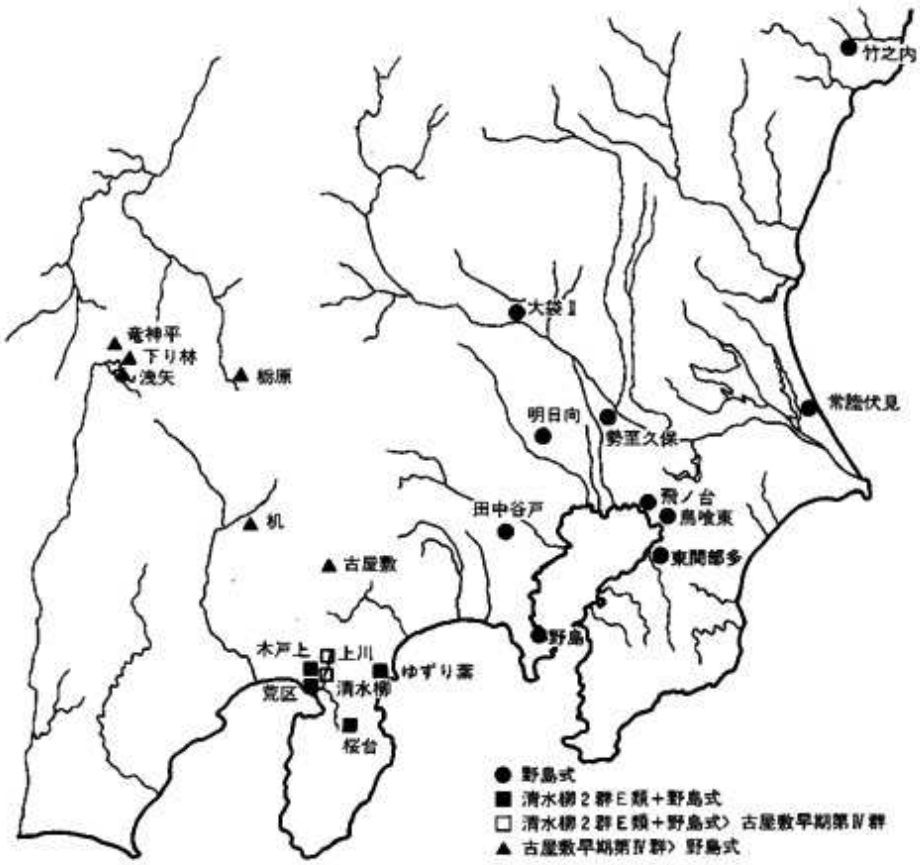
一方Ⅳ群3類とした無文の土器は，野島式土器の構成のなかには類例を求めることができず，その系譜についても今のところ明らかにすることができない。本遺跡の土器組成のなかでは安定した組成率をもつものであり，こうした土器組成率は条痕文系土器群にあっては条痕のみの粗製土器と対応した関係をもつようである。そういった推測をもとにすると，独自の位相をしめす第Ⅳ群土器も，前段階からの土器構成の変遷においては条痕文系土器群と近似した構成をもつ土器型式であったものと考えることができよう。

**分布と類例**　第Ⅳ群土器としてまとめた土器群が，独自の構成をもつ土器型式であることを前節までに述べてきた。これらの土器群は年代的には関東地方の野島式土器に併行する位置をもつものであることを指摘したが，こうした特徴をもつ土器群はいかなる分布をしめすのであるろうか。こうした分析は第Ⅳ群土器の型式学的な位相を象徴する現象のひとつを明らかにする作業でもある。

野島式土器の分布は関東地方を中心として東北地方南部から西は中部，東海地方にまでおよぶ広がりをもつ。問題は野島式土器を構成するいかなる系列の土器が分布をひろげるかであり，こうした視点のなかに第Ⅳ群土器の分布もその位置づけが可能なものとなろう。

現状の資料では未だ明確な分布範囲はわからないが，第Ⅳ群土器を主体とする遺跡と野島式土器のみを出土する遺跡，野島式土器を主体に第Ⅳ群土器が客体的に伴う遺跡といった類型から，その分布圏をおおまかに推定することは可能である（第56図）。

第Ⅳ群土器をまったく出土しない遺跡は，東北地方南部から関東地方のほぼ全域にかけての地域であり，この地域には野島式のみの単純遺跡も多く，この傾向は今後も変化することはないであろう。一方，関東西部から東海地方の太平洋岸地域においては第Ⅳ群1，2類土器をわずかに共伴する遺跡がある。神奈川県子合頭遺跡や静岡県清水柳遺跡などが類例となる。また富士山南麓の静岡県上川遺跡でも同じ様相を示す。これらの遺跡における第Ⅳ群土器の在り方は，土器群




第56図　早期第Ⅳ群土器の分布

の主体を成す野島式土器と胎土や焼成が全く異なることから，搬入品としてもたらされた可能性がつよい。(註6)

第Ⅳ群土器を主体的に出土する遺跡は古屋敷遺跡のほかに近隣の富士吉田市長日向遺跡(註7)があり，甲府盆地周辺では類例が少ないが寺平遺跡や机遺跡が該当しよう。

長野県では洩矢遺跡が前段階の沈線文系土器群終末の土器群を主体に，Ⅳ群2類土器を出土しており，金色雲母を多量に含む胎土の特徴も酷似している。長野県内でもっとも充実した資料は岡谷市下り林遺跡の一括資料で，ここでは野島式をともない第Ⅳ群1類と3類の復元個体が2点出土している（戸沢1973）。この資料を再報告した長崎元広氏は縄文施文や沈線文などの特徴から茅山下層式土器に併行する中部地方独自の型式として「下り林式」を提唱した（長崎1982）。

こうした特徴はすでに指摘してきたように古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の特徴でもあり，型式的な独自性の指摘は評価されるものの，年代的な帰属については野島式土器の共伴をも積極的に評価して野島式併行期とすべきであろう。この他に塩尻市堂の前遺跡や竜神平遺跡でも破片資料ながらも第Ⅳ群1，2類土器の出土がある。

長野県東部では北相木郡栃原遺跡でも沈線文系土器終末の土器群とともに，第Ⅳ群1類土器の出土が認められる。栃原遺跡では昭和58年度の調査において中期，前期の包含層の下に野島式土器(註8)をともない第Ⅳ群1類土器が出土している。現状では数少ない層位的な出土例である。以上

に掲げたものが第Ⅳ群土器を出土した遺跡であり，その分布の在り方から長野県中，南信から甲府盆地および富士山東麓におよぶ範囲が主要な分布圏と推測される。古屋敷遺跡と直線距離にして南方約30kmに位置する静岡県裾野市上川遺跡では先述したように野島式土器が主体的に出土していることから，この遺跡と古屋敷遺跡とのあいだに両型式の分布圏の境界が存在するものと推測される。

## 3 ま と め

古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器は，年代的に限定された独自の構成をもつ土器群であることが明らかとなった。その年代は共伴が明らかな野島式土器と併行関係に置かれ，関東地方では条痕文系土器群の初頭に対応する。しかしながら本土器群は器面成形に貝殻条痕調整を行わないほか，形態や文様，文様表出技法などの諸点からも関東地方の貝殻条痕文系土器群とは系統を異にする型式であることが推察された。

その一方で，第Ⅳ群1類土器には野島式の文様帯の影響が認められ，こうした土器分布圏がたがいに閉鎖的ではなかったことを予測させる。第Ⅳ群1，2類土器の特徴である縄文施文の特徴は，従来の条痕文系土器群のなかでは茅山下層式土器の時期に出現するものとされ，その系譜が明らかにされることなく，そうした特徴をもつ土器は，なかば機械的に茅山下層式土器に比定されてきた経緯がある。しかし第Ⅳ群2類土器にみるように口唇部における縄文施文や，胴部上半部の疑似羽状縄文などの特徴は，関東地方の茅山下層式土器とは明らかに異なるものであるし，加えて古屋敷遺跡では鵜ヶ島台式や茅山下層式土器の出土はなく，野島式土器がほぼ単純に共伴した事実から，こうした観点が茅山下層式土器の型式認定の充分な根拠とはならないことをも示唆している。

また中部地方において野島式土器の出土がきわめて貧弱な状況が指摘されているが，当該期の土器の多くが古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器により組成されていることを推測すると，野島式土器自体の在りかたと当該期の遺跡の分布は，別問題として捉え直す必要があろう。(註9)

今後は類例の検出とともに縄文施文などの独自の構成要素の変遷をたどることにより，当該土器群の系統について分析を重ねる必要があろう。

古屋敷遺跡早期第Ⅳ群1，2類土器にみる縄文施文の特徴は，押型文土器に共伴する撚糸文や縄文施文の土器との関係が推測されるが，そのあいだを埋める資料はいまのところ未発見である。口唇部における縄文施文のくせなどは押型文土器に共伴する縄文土器との関係を暗示する要素であろうし，分布圏もほぼ押型文土器分布圏の内部に位置することから，両者は無関係ではないものとも考えられる。(註10)

以上に検討を加えてきたように，古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器は独自の構成をもち，併行する異なる地域の土器型式が明らかである点，分布圏の独立性が予測される点などから，独自の土器型式として認定することが可能と思われる。

当該地域の土器編年は押型文期以降，古くより関東編年を基軸として推進されてきた経緯がある。その過程のなかでは，関東地方の型式群の連続性の確認や系統関係についての認識が深化することなく，比較と対応が試みられてきた。今後は各地域単位での土器群の年代的，系統的な連続を明確にし，従来の編年観や型式認定の方法自体の吟味を重ねる必要があろう。そうした意味では既出資料の再検討も重要な分析となるはずである。

## あとがき

本論の作成に際しては会田進　小林康男　西沢寿晃，宮下健司　関野哲夫　瀬川裕一郎　大竹憲昭の諸氏から資料の実見や御助言および文献の紹介を頂いた。記して感謝の意を表するものである。また本論の資料収集や分析，挿図の作成等は古屋敷遺跡調査団縄文土器研究班（横田和美，田中総，須賀博子）が担当した。

註1　とくに子母口式土器の評価をめぐり，学史的にも重要視されてきた文様要素である絡条体圧痕文については，装飾効果としての使用法や，互換的な装飾技法の観察，施文部位（文様帯）との関係を明確化する必要性を指摘した。筆者は絡条体圧痕文という装飾技術を単一時期を画する文様要素であることを規定する以前に，土器個体を構成する要素全体のなかでの評価をおこなうことにより，近年その存在が指摘されつつある東北地方の常世II式，関東地方の茅山上層式土器以降の絡条体圧痕文土器群との弁別もはたされるものと考えるのである。

註2　こうした視野に立つ筆者にとっては，現段階の土器型式の編年研究における型式の系統的，地域的動態の検討が最重要な課題であるとともに，図式的な表記法に終始する土器分布圏や土器変遷の再検討を急務な課題として認識している。

註3　東北地方北半の吹切沢式土器のなかには口縁部に隆線による区画文をもつ一群がある。青森県下田代納屋遺跡の個体はこの隆線上と口縁部文様帯内に絡条体圧痕文をほどこすものがある（三宅1976）。

註4　東北地方から関東東部地域に分布する絡条体圧痕文は節の間隔が密接して，施文が深く，縄の粒の大きいものが多い。このことは太い縄を棒状の原体に密に巻きつけたことを示している。

いっぽう東海地方のものは原体に間隔をあけて巻きつけ，また縄も細い特徴がある。こうした細い撚り紐はこの地方の前段階の押型文期の撚糸文の原体と共通している。

註5　中部地方における沈線文系土器群の終末段階の様相はいまだ不明な部分が多い。田戸上層式土器の出土は断片的な報告があるが，そうした典型的な形態の土器に伴い，いくつかの沈線文土器が存在する。田戸上層式土器は屈曲の強い深鉢が典型とされるが，その他に砲弾形の形態が安定して存在していることは以前に指摘した（阿部1989）。田戸上層式に後続する一群には屈曲部の退化したものと，こうした砲弾形の形態の土器群が主流をなし，栃原洞窟や判の木山西遺跡の沈線文土器はこの段階を充当するものと推測される。この段階は文様帯が胴部上半にせりあがり，鋸歯状や幾何学的なモチーフの沈線文を描くものが多い。

註6　古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器は形態や装飾の特徴とともに胎土に金色雲母を大量にふくみ，条痕調整をまったくほどこさないという特徴をもつ。この特徴は搬出先の野島式土器の分布圏内においても共通している。

註7　長日向遺跡は古屋敷遺跡の西方約2㎞に位置する遺跡で，露頭に包含層が発見された。早期の包含層は最下層に押型文土器をともなう住居が発見され，その上層に古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の包含層が堆積している。またこれに後続する鵜ヶ島台式や茅山下層式土器は全く検出されていない。

註8　報文のなかでは早期の包含層とされる14～19層より古屋敷遺跡早期第Ⅳ群の出土があり，共伴した条痕文系土器は茅山下層式土器と記述されているが，図示された土器はいずれも野島式土器に比定されるものである。し

たがってこの層中においては野島式土器と古屋敷遺跡早期第Ⅳ群1，2類土器が共伴したものと考えることができる。なお3・4類とした無文土器の出土は明確ではない。

註9　長野県内では数少ない条痕文系土器群を出土した遺跡である八窪遺跡では，その報告書考察において，長野県内における子母口式から天神山式にいたる変遷案が示された（百瀬1988）。そのなかでは野島式土器自体の稀少性を検出例の少なさとして評価している。八窪遺跡においても古屋敷遺跡早期第Ⅳ群1，2類土器に比定される資料が多く出土しているが，これらはことごとく茅山下層式土器の古段階に編入された。型式認定の根拠は縄文地に沈線で文様を描く特徴がおおきな評価点とされているようである。しかしながらこれらの特徴は，古屋敷遺跡早期第Ⅳ群1，2類土器に通有の特徴であり，また野島式土器の出土を考慮すると，これらの大半は野島式土器を共伴する本地域の主体的な土器群であったものと思われる。こうした観点が正しいものとするならば，野島式土器自体は本来的に当地方において客体的な存在と考えるべきであり，従来の指摘にあった野島式期の遺跡の稀少性は，比定土器型式の認識自体に問題を孕んでいるものといえる。この時期の良好な資料と目される岡谷市下り林遺跡では，古屋敷遺跡早期第Ⅳ群1類，3類の復元個体とともに約80点の破片が出土しているが，その内訳は「無文のもの34，縄文のもの21，太い条痕のもの6，中細の条痕のもの7，極細の条痕のもの8，太い沈線文のもの4であった」という（長崎1984）。こうした土器群の組成は古屋敷遺跡と近似しており，単なる資料のばらつきとは考えられない。中部地方における当該期の土器変遷は上述の問題を含めて再検討を要する。なお下り林遺跡の土器にみられる「条痕」は，明らかに貝殻条痕とは異なるもので，軟質の繊維束の様な工具による整形痕と思われる（筆者実見）。

註10　筆者は従来より表裏面に縄文を施文する「表裏縄文土器」を分類し，草創期に帰属するものと，それ以後の押型文土器と施文構成に互換性をもつ縄文土器，撚糸文土器を表裏縄文の伝統を継承した後出の土器群として評価したことがある（阿部1988）。またこうした土器群のなかには口唇部施文や粒の大きな縄文をもちいるものがあり，古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の縄文と近似するものもある。

## 参考，引用文献


赤星直忠　1948「神奈川県野島貝塚」考古学集刊Ⅰ

赤星直忠
岡本　勇　1957「茅山貝塚」横須賀市立博物館研究報告（人文科学1）

安孫子昭二1967『No269 遺跡　縄文早期後半の土器』多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ

〃　1976『田中谷戸遺跡』町田市田中谷戸遺跡調査会

〃　1982「子母口式土器の再検討」東京考古1

阿部芳郎　1989「表裏縄文系土器群の再検討」富士吉田市史研究　第3号

〃　1989『半蔵窪遺跡発掘調査報告書』半蔵窪遺跡調査団

飯塚博和　1982『半貝・倉之橋・勢至窪』野田市遺跡調査会

馬目順一　1982『竹之内遺跡』いわき市教育文化事業団

小川和博　1981「子母口式土器についての覚書(1)」なわ第19号

小野真一　1975『ゆずり葉』加藤学園考古学研究会

〃　1976『桜台―田方群修善寺町桜台遺跡発掘調査報告―』修善寺町教育委員会

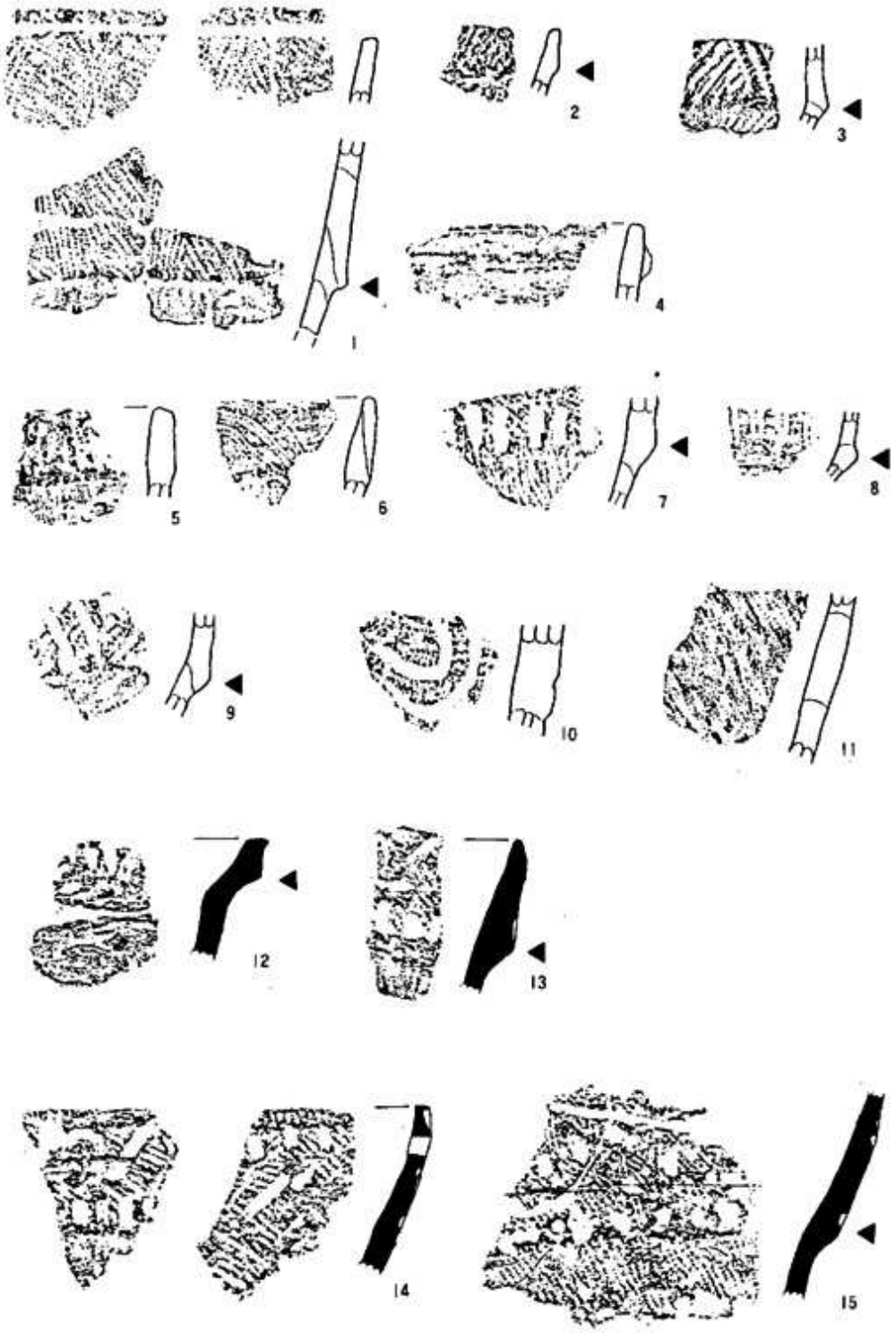
〃　1987「常陸伏見」伏見遺跡調査会

金子直行　1982「野島式土器について―金平遺跡出土土器を中心として―」

瀬川裕一郎1976「清水柳遺跡の土器と石器」沼津市歴史民俗資料館紀要1

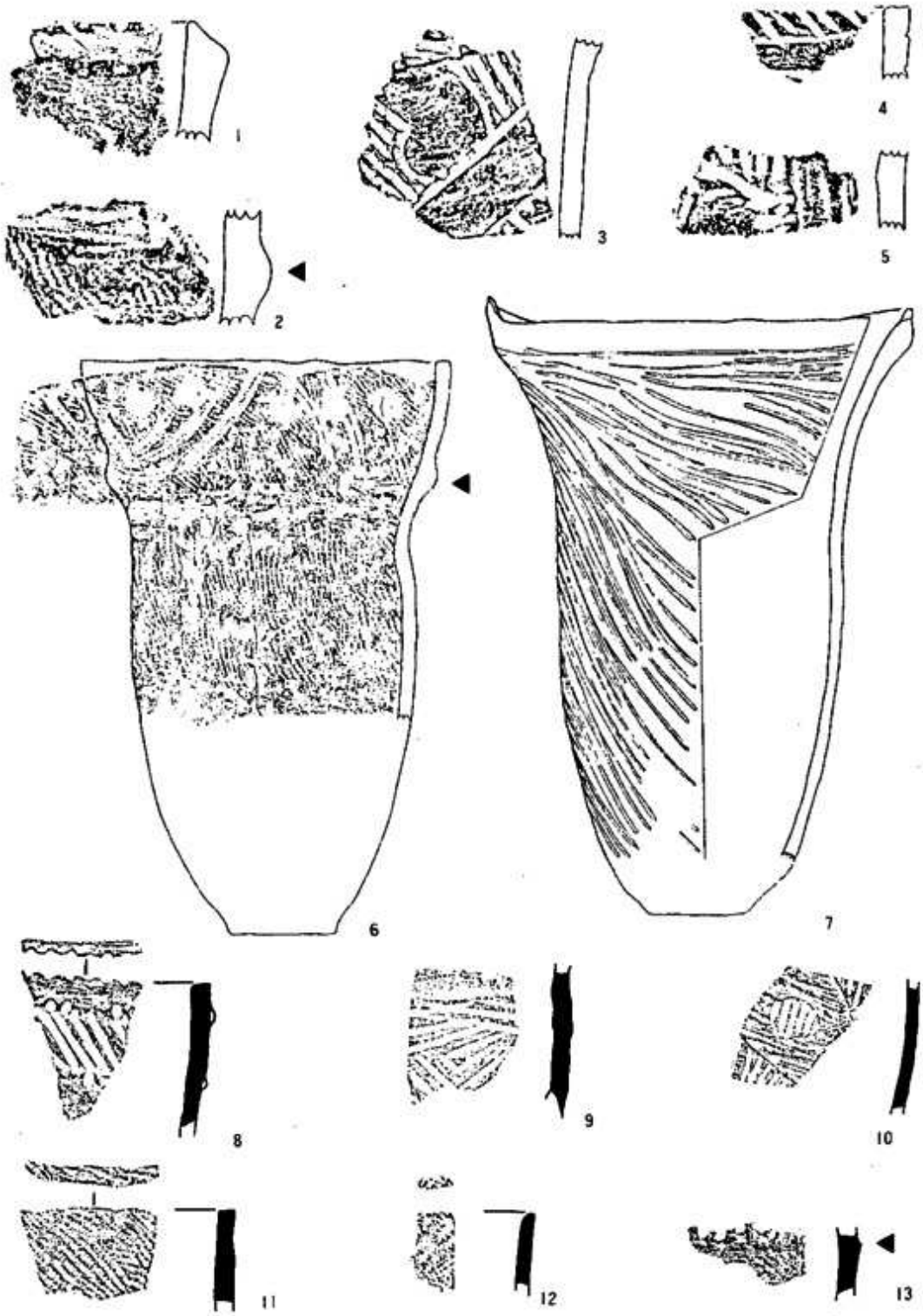
〃　1982「子母口式土器再考」沼津市歴史民俗資料館紀要6

〃　1983「野島式土器に関する２～３の覚書」沼津市歴史民俗資料館紀要７
関野哲夫　1988「高山寺式土器の編年」先史考古学研究１
芹沢長介　1965「岩手県蛇王堂洞穴」石器時代７
芹沢充寛　1986『福野市富沢内野山遺跡』福野市教育委員会
高橋雄三　1981「子母口式土器研究史における問題点」福島考古　第22号
中野国雄　1987『上川遺跡』静岡県教育委員会
名久井文明1974「北日本縄文式早期編年に関する一考察」考古学雑誌60－３
芳賀英一　1977「常世遺跡出土の早期縄文土器をめぐる２，３の問題点」福島考古　第18号
林　謙作　1962「東北地方早期縄文式文化の展望」考古学研究９－２
平野　功　1988『城之台北貝塚』小見川町内遺跡群発掘調査報告書
三浦圭介　1985「売場遺跡発掘調査報告書」青森県教育委員会
三宅徹也　1976『小田野沢下田代納屋Ｂ遺跡発掘調査報告書』
宮　重行　1981「木の根」千葉県文化財センター
長崎元広　1984「長野県岡谷市下り林遺跡の早期縄文土器」長野県考古学会誌48号
山内清男　1941「日本先史土器図譜」第Ⅷ集
吉田　格　1955「千葉県城之台貝塚」石器時代第１号



1～6：山梨寺平　5～11：山梨机　12～15：長野浅矢

第57図　早期第Ⅳ群土器の類例(1)




1～7：長野下り林　8～13：長野栃原岩陰

**第58図　早期第Ⅳ群土器の類例(2)**

# 第２節　古屋敷遺跡早期第Ⅳ群土器の胎土・製作技法の特徴

河西学・中村哲也

## はじめに

従来，土器の分類や型式設定は器形や文様及びその施文技法といった型式学的特徴が主な基準となっていたが，胎土やその調達地，製作技法といった属性にも分類・設定基準となるような独自の特徴がみられる場合が多い。さらに，これらの属性は器形や施文技法などの型式学的特徴と相互に密接な関係を有していると思われ，その関係を把握することは土器型式の特徴を理解する上で重要な視点となるであろう。本稿の目的は，古屋敷遺跡出土早期第Ⅳ群土器の胎土とその産地，および製作技法を明らかにし，そのことから該当土器群の特徴を把握しようとするものである。

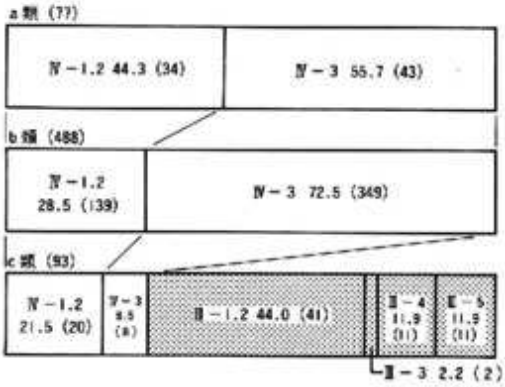
今回，胎土の分析にあたっては岩石学的分析を主体におこなったが，古屋敷遺跡出土第Ⅳ群土器の胎土そのものの岩石鉱物組成の特徴を明らかにするほか，対比資料として共伴している第Ⅲ群（野島式）土器と周辺他遺跡出土の同時期・同類土器の分析，さらに，河川砂試料の岩石鉱物組成との比較による土器原料の産地の推定をも試みた。これらの結果は，在地製作・搬入といった土器の製作地や土器の移動に関わる問題の基礎的な情報となるであろう。

## １　早期第Ⅲ・Ⅳ群土器胎土の肉眼による観察・分類と型式学的分類との対応

今回，胎土分析の対象とした土器は，型式学的に野島式に比定される早期第Ⅲ群土器と，早期第Ⅳ群土器である。両群土器は遺構において共伴しており，同時期の所産と考えられる。

まず，岩石学的分析をおこなう前に対象土器群全点にわたって肉眼による観察・分類をおこなった。これには２つの理由がある。１つは肉眼で確認できる胎土の違いが，当時の胎土選択の基準になっていた可能性が考えられること。２つめは岩石学的分析にかけられる試料点数が限られることから，対象土器群全体のなかで胎土の特徴と型式学的特徴がどのように対応するかを量的に摑んでおくためにおこなったもので，岩石学的分析試料のピックアップの際も型式学的特徴とともにこの肉眼観察による分類を基準にした。肉眼観察による分類はどうしても精度が落ちることはいなめないが，第２項で詳しく述べるように岩石学的分析の結果とほぼ対応することから，以下に記述する肉眼観察の結果とその傾向は意味を持つものと思われる。

観察内容は肉眼で確認できる石英，長石，雲母といった鉱物粒の有無や多少に着眼しておこない，その結果次のａ～ｃの３つの類に分類された。ａ類は石英，長石粒を含み，細粒の金色雲母粒を多く含む。ｂ類は基本的にはａ類と同様であるが，ａ類より金色雲母粒の量が多く，大きなものを含む。ｃ類は石英，長石粒，それに黒色雲母粒を微量含み，ａ，ｂ類に比べて胎土が緻密である。ａ，ｂ類は似通った印象を与えるが，ｃ類は見た目にもａ，ｂ類と明らかに異なる。な




第59図　肉眼観察による胎土分類と形式学的分類との対応関係　（　）内は点数，小数点の付いた数字は％

お，a～c類とも胎土に繊維を混入した痕跡が認められるが，その量や混入の仕方に違いは認められなった。

さて，類別した胎土と，型式学的分類との対応関係を見てみよう。

第59図に示したのが，肉眼による胎土分類と型式学的分類の対応関係である。なお，第Ⅲ群6類とした野島式の無文の土器は，その型式学的分類の際，肉眼による胎土分類をも基準としたため，集計から除いた（他の型式学的分類は，器形や文様，整形技法でおこない，胎土は分類基準としていない）。a，b類の胎土を持つものは第Ⅳ群土器に限られ，同群内の1，2類土器（縄文施文）と3類土器（無文）の違いによってもa，b類どちらかへの片寄りはみられない。一方，c類の胎土を持つものは，一部に第Ⅳ群土器が対応するものの，その大部分が野島式とした第Ⅲ群土器である。言い換えれば第Ⅲ群1～5類土器（文様が描かれたもの）全てがc類の胎土を有していることになる。この理由から，第Ⅲ群の無文の土器の分類に際して，胎土を基準の一つに加えた訳である。なお，c類の胎土を有する第Ⅳ群土器の存在は，古屋敷遺跡の当該土器の原料産地が複数であった可能性を示すが，量的には第Ⅳ群土器総数の5％と非常に少いことから，他遺跡で製作されたものとも考えられる。しかし，対象土器のほとんどは細片であり，その詳細な検証はできなかった。

以上みてきたように，a，b類胎土が第Ⅳ群土器に，c類胎土が第Ⅲ群土器（野島式土器）に対応し，それぞれの土器群の特徴になっていることがわかる。

## 2　早期第Ⅲ・Ⅳ群土器胎土の岩石学的分析

土器の産地推定は，土器と地質との対応関係から推定される。それは岩石学的手法ではもちろんであるが，化学的手法における元素組成も地質の特徴を反映しているからである。地質は，均質な部分と不均質な部分とから複雑に構成されている複合体といえる。地図上で認識できる地質単位はかなり大きな範囲に分布する地層や岩石であるが，土器として使用される原料はおそらく限定された少範囲の地質と推定される。土器中に含まれている砂粒子は，これらの地質が壊れて小さくなった物質（砕屑物）からなる。岩石として存在する砂粒子は，本来の地質の組織をかなり良好に保持している。ただし礫岩・砂岩など堆積岩の砕屑物は必ずしもその堆積岩の性質を示すとは限らない。また鉱物として存在している砂粒子は，本来の地質単位の組織を保持しているわけではないが，鉱物の諸特性から本来の地質を推定する情報をえられる場合がある。

ここでは岩石学的手法の胎土分析によって，古屋敷遺跡で出土した早期第Ⅳ群・第Ⅲ群土器（野島式土器）における岩石鉱物組成の特徴をとらえ，また同時代の縄文早期土器群との岩石鉱

物組成の関連性をみてみたい。比較遺跡として長野県では岡谷市下り林遺跡・塩尻市堂の前遺跡の2遺跡，および静岡県では沼津市清水柳遺跡を選択した。さらに古屋敷遺跡周辺の河川砂試料の分析結果をふまえ土器の産地について考えてみたい。

〔1〕　遺跡の立地

**古屋敷遺跡の立地**　本遺跡は富士吉田市街地東方の大明見にある。丹沢（道志）山地の南西部に位置する杓子山（1597.6m）から西方にのびる尾根は，大明見と小明見との間に半島状に突き出し両者を隔てる分水嶺になっている。この半島状の部分は背戸山と呼ばれている。古屋敷遺跡は背戸山の山麓南斜面下部に位置している（第60図）。

丹沢山地の基盤岩は主として緑色に変質した火山岩類，砂岩・泥岩などからなる新第三系，および丹沢型石英閃緑岩体から構成されている。丹沢岩体は，中粒～粗粒で優白色の黒雲母・角閃石を主体とする角閃石黒雲母石英閃緑岩であるが，岩相変化に富み，山中湖付近では角閃石をほとんど含まず風化が著しいとされる（山梨県地質図編纂委員会，1970）。また遺跡から南南西方向に第四紀の富士火山が存在しているため富士火山から噴出した多量のスコリア質火山砕屑物が丹沢山地の山麓斜面を厚く覆っている。古屋敷遺跡における富士黒土層以上の新期テフラ層は3mを越す。遺跡前面に広がる大明見の低地は，杓子山を水源とする大明見川が富士火山の溶岩流にせきとめられて形成された低湿地と考えられる。

**下り林・堂の前遺跡の立地**　この地域は，横河川変成岩が横河川流域に細長く分布し，これをおおって緑色に変質した火山岩類および堆積岩からなる新第三系が広く分布する。さらにその上位には安山岩質の溶岩・火山砕屑岩からなる上部鮮新統～下部更新統の塩嶺累層が美ケ原―霧ケ峰高原にかけて分布する。またこの周辺には松本・美ケ原・茅野・下諏訪・和田の深成岩体が中新統の内山層に貫入し，周囲に接触変成作用を与えている。松本・美ケ原岩体は主に中～細粒で均質の黒雲母角閃石花崗閃緑岩・石英閃緑岩から構成され，和田・下諏訪・茅野岩体は小規模で細～粗粒の花崗閃緑岩・石英閃緑岩からなる。

岡谷市下り林遺跡は，塩嶺累層を基盤とする山地の南東斜面

A古屋敷，B下り林，C堂の前，D清水柳

第60図　周辺地質と遺跡の位置

下部に位置している。遺跡の東側には，横河川・砥川によって形成された諏訪湖北方に広がる沖積地が分布している。また砥川の上流域には下諏訪岩体が分布している。

堂の前遺跡は塩尻市市街より約2㎞東で，高ボッチ山（1665m）を中心とする南北に走る稜線から西側にむかって緩やかに傾斜する斜面上に位置する。堂の前遺跡のそばを流れる小河川の上流域には塩嶺累層，および高ボッチ山を構成する新第三系が分布し，松本岩体はやや北側に露出する。遺跡周辺の山麓斜面には小坂田ローム層をのせる礫層が分布している。

**清水柳遺跡の立地**　遺跡は愛鷹山南麓を走る東名高速道路沼津インターチェンジの東端にあたる（笹津ほか，1976）。愛鷹山山麓は，山頂を中心とする放射状河川によって開析されている。遺跡周辺では桃沢川・沼川・高橋川などの河川が分布している。

愛鷹火山は，中央に爆裂火口があり，玄武岩・安山岩質の火砕物と溶岩とからなる成層火山である。その活動年代は，最下部の旧期噴出物の古地磁気資料から70万年前以降であることが明らかになっている。中期の活動は，約17万年以前に起こり，新期溶岩は17～10万年前の間に噴出し，約10万年前の長窪火砕流を最後に活動を終了したとされる（藤井・由井，1985）。愛鷹火山は旧期中期新期Ⅰ期を通じ玄武岩質の噴出物で特徴づけられる。新期Ⅱ期の溶岩は両輝石安山岩～デイサイトである。最新期の噴出物は袴腰岳・黒岳からの角閃石デイサイト質の溶岩および袴腰岳付近からの角閃石デイサイト質の長窪火砕流である（藤井・由井，1985）。愛鷹火山周辺には60mにも及ぶテフラ層が堆積している。また狩野川左岸には中新世の白浜層群と中新世後期～鮮新世に貫入したデイサイト岩体とが分布している。この地域に分布する新第三系は，主に火山岩・火山砕屑岩からなり，堆積岩類は少ない。伊豆半島の北半部は第四紀の火山噴出物が広く分布している。

### 〔2〕 試　　料

古屋敷遺跡試料20点は，考古学的観点から分類し，グループごとに代表的な試料を選択して分析に供した（第4表）。古屋敷遺跡の早期土器試料と比較するために，下り林遺跡，堂の前遺跡，および清水柳遺跡の3遺跡から縄文早期土器試料を選択し分析した。分析試料の実測・拓本を第61図に示す。また地質試料として古屋敷遺跡を中心とする富士山北東麓地域の河川砂に限定して18点を分析した。

### 〔3〕 分析方法

考古学的記載の終了した土器試料は，切断機で3×2.5cm程度の大きさに切断し，残りの試料は保存した。脆弱な試料はエポキシ樹脂を含浸させて補強し，岩石薄片と同じ要領で土器の器壁に平行する薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし，コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色し，次の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行った。偏光顕微鏡下において，オートマチックポイントカウンタを用い各薄片で2,000ポイントを計測した。ステージの移動ピッチはプレパラートの長辺方向に0.33㎜，同短辺方向に0.40㎜である。計数対象は，粒径0.05㎜以上の岩石鉱物粒子，およびこれより細粒のマトリックス（“粘土”）

部分とする。植物珪酸体はすべてマトリックスに含めた。

河川砂は，分析篩を用いて1～1/16mm粒径の砂を分離した。乾燥後ポリエステル樹脂に包埋し，上記の方法で薄片作製およびカリ長石の染色を行なった。偏光顕微鏡下での計数は土器薄片の場合と同様であるが，土器のマトリックスに相当する部分がないので各薄片の計測は500ポイントとした。

顕微鏡下で以下の岩石鉱物を区別した。石英（単一結晶・多結晶）・カリ長石・斜長石・重鉱物・玄武岩・安山岩・デイサイト・変質火山岩類（凝灰岩を含む）・花崗岩類・ホルンフェルス・変成岩類・砂岩・泥岩（頁岩・粘板岩を含む）・珪質岩・炭酸塩岩・火山ガラス・変質鉱物・その他である。重鉱物は、黒雲母・無色雲母・角閃石・酸化角閃石・単斜輝石・斜方輝石・カンラン石・緑簾石・ジルコン・ザクロ石・スフェーン・炭酸塩鉱物・不透明鉱物が検出された。これらの岩石鉱物以外に鏡下で赤～褐色を呈する粒子が存在する。この赤褐色粒子は，内部が土器のマトリックスと極めて類似性の高い組織を持つものと，褐鉄鉱様粒子との2種類が認められるが，ここでは一括して扱う。

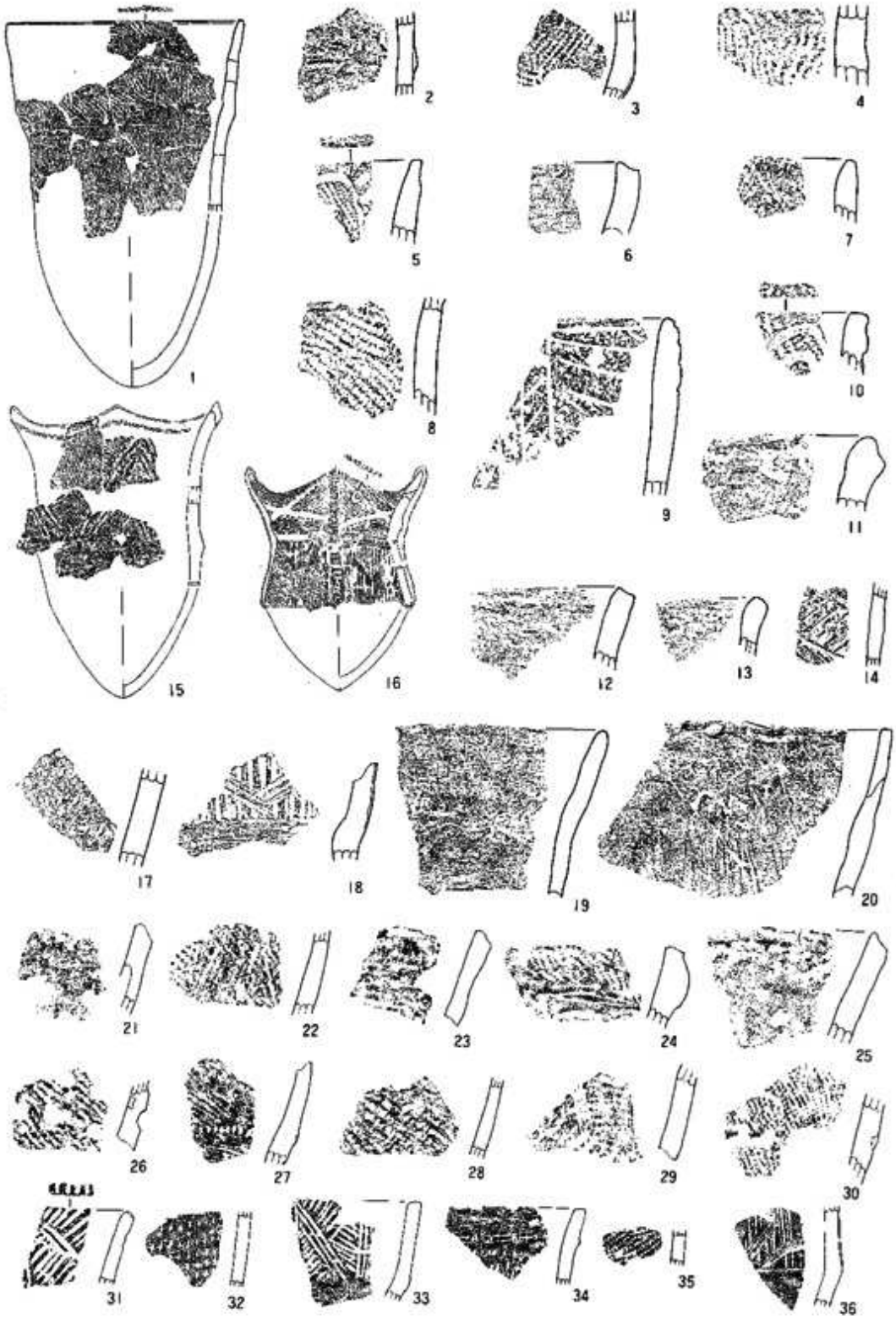
### 〔4〕　土器の岩石鉱物組成

分析結果を第5表に示す。これをもとに土器全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリックスの構成を示した全体構成図，および砂粒子の岩石鉱物組成・重鉱物組成などを第62・63図に示す。なお重鉱物組成では基数が極めて小さい場合があるので右側に基数を表示した。また岩石粒子は地質の地域的特徴を示すと考えられるので，変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩のポイント数の総数を基数とし，それぞれ

第5表　岩石学的胎土分析試料

| No. | 出土遺跡 | 出土位置 注記 | 型式学的分類 | 肉眼胎土分類 | 整形技法 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 古屋敷 | 4区3Tr | Ⅳ—1 | a | 指頭押圧→軟質原体ナデ | 本文第46図1 |
| 2 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | 〃 | a | 〃 | 本文第31図6 |
| 3 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | 〃 | a | 〃 | 本文第31図3 |
| 4 | 〃 | 3区1TrⅢ層 | 〃 | a | 〃 | 本文第18図11 |
| 5 | 〃 | 4区1Tr3住 | Ⅳ—2 | a | 〃 | 本文第24図5 |
| 6 | 〃 | 3区1TrⅢ層 | Ⅳ—3 | a | 〃 | 本文第19図3 |
| 7 | 〃 | 4区1Tr3住 | Ⅳ—1 | b | 〃 | 本文第24図8 |
| 8 | 〃 | 3区1TrⅢ層 | 〃 | b | 〃 | 本文第18図2 |
| 9 | 〃 | 4区2TrⅢ層 | Ⅳ—2 | b | 〃 | 本文第39図3 |
| 10 | 〃 | 3区1TrⅢ層 | 〃 | b | 〃 | 本文第18図1 |
| 11 | 〃 | 3区1TrⅢ層 | 〃 | b | 〃 | 本文第19図2 |
| 12 | 〃 | 4区1Tr6住 | Ⅳ—3 | b | 〃 | 本文第25図9 |
| 13 | 〃 | 4区1Tr3住 | 〃 | b | 〃 | |
| 14 | 〃 | 4区3Tr | Ⅲ—1 | c | 繊維束状原体ナデ | 本文第46図6 |
| 15 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | Ⅲ—2 | c | 〃 | 本文第32図9 |
| 16 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | 〃 | c | 〃・表面条痕 | 本文第32図7 |
| 17 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | Ⅲ—5 | c | 〃 | 本文第30図15 |
| 18 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | Ⅲ—4 | c | 〃 | 本文第30図8 |
| 19 | 〃 | 4区1TrⅢ層 | Ⅲ—6 | c | ヘラナデ | 本文第32図1 |
| 20 | 〃 | 3区1TrⅡ層 | 〃 | c | 〃 | 本文第32図2 |
| 21 | 下り林 | Y1 | Ⅳ—3 | e | | |
| 22 | 〃 | Y1 | Ⅳ—1 | d | 外面条痕？ | 縄文RL |
| 23 | 〃 | Y1 | Ⅳ—3 | d | 外面軟質原体ナデ | |
| 24 | 〃 | Y1 | Ⅳ—1 | d | 〃 | 縄文RL |
| 25 | 〃 | Y3 | Ⅳ—3 | e | 口唇部軟質原体ナデ | |
| 26 | 堂の前 | 17㉖ ？ | Ⅳ | f | | 縄文RL→円形刺突文 |
| 27 | 〃 | 17㉖(17A1,1?49) | Ⅳ | f | 内外面軟質原体ナデ | 縄文RL→段積部に刺突＊1 |
| 28 | 〃 | 17㉘(17,B3,34?) | Ⅳ—1 | f | | |
| 29 | 〃 | 17㉚(17,B2?) | Ⅳ—2 | g | 内面軟質原体ナデ | 縄文LR→沈線＊2→刺突＊3 |
| 30 | 〃 | 17㉚(17,B2 04) | Ⅳ | g | | 縄文RL→段積部に刺突＊4 |
| 31 | 清水柳 | 3 | Ⅲ—4 | c | 内面繊維束状原体ナデ | |
| 32 | 〃 | 3 | Ⅲ—5 | c | 〃・外面ナデ(丁寧) | |
| 33 | 〃 | 3EI 534 | Ⅲ—4 | c | 内面指頭押圧？ | |
| 34 | 〃 | 3EI 974 | Ⅲ—3 | c | 繊維束状原体ナデ | |
| 35 | 〃 | 3XD3—Ⅱ | Ⅳ—1 | b | | 縄文LR |
| 36 | 〃 | E3—P88 | Ⅲ—4 | c | 内外面繊維束状原体ナデ | |

型式学的分類は本報告の群—類に対応。
肉眼観察分類のa～c類は本章中の分類に対応する。d類は金色雲母粒を多く含み，長石・石英・黒色雲母粒を含む。e類は白色鉱物（長石？）粒が多く，石英粒も含む。f類は金色雲母粒を多く含み，長石・石英粒を含む。g類は金色雲母粒を極少量含み，長石・石英粒を少量含む。以上d～g類は繊維を含み，d・f類はa・b類に近似する。
註　＊1：ヘラ状工具による。　＊2：幅6mmの先のささくれだった棒状工具による。
＊3：半截竹管状工具による。　＊4：竹管状工具？による。



第61図　岩石学的分析試料

の岩石の構成比を折れ線グラフに表した（第64・65図）。各遺跡の土器胎土の特徴について以下に述べる。

**古屋敷遺跡**　考古学的な分類では大きく早期第Ⅳ群と野島式（早期第Ⅲ群）に分類された。早期第Ⅳ群の胎土は肉眼観察による分類の雲母が細粒であるａ類と，基本的にはａ類と同様であるが含有岩石粒子の量が多く特に雲母がａ類より大きく多量に含まれるｂ類とに対応される。また，野島式の胎土は肉眼観察のｃ類にあたる。

全体構成からみると砂粒子の含有量は，No.１～６のａ類では32～42%，No.７～13のｂ類では26～42%と早期第Ⅳ群ではａ類ｂ類とも多いのに対し，No.14～20の野島式では10～23%と早期第Ⅳ群と比較しておよそ半分から４分の１とかなり少ないことがわかる。

早期第Ⅳ群ａ・ｂ類は，岩石鉱物組成では花崗岩類が多く20～50%を占める。さらに重鉱物・石英・カリ長石・斜長石が普通に検出される。花崗岩類は花崗閃緑岩～石英閃緑岩組成である。重鉱物の含有量は13～36%と多く，重鉱物組成では黒雲母と角閃石が大部分を占めることが大きな特徴である。黒雲母は褐～赤褐色，角閃石は緑色を呈す。その他ジルコン・スフェーン・緑簾石をわずかに伴う。このように早期第Ⅳ群土器中の岩石鉱物は花崗岩類およびそれを構成している造岩鉱物によって大部分が占められている。なお単斜輝石・斜方輝石・カンラン石はきわめてわずかに検出され，とくに早期第Ⅳ群ａ類中にみられる傾向がある。

これに対し野島式は，変質火山岩類とデイサイトを伴うことが特徴である。変質火山岩類はおよそ10～50%，デイサイトはNo.15で57%ときわめて多いが他の試料で数%程度である。デイサイトの石基は脱ガラス化している。共通して斜長石・石英・カリ長石が検出されるが，花崗岩類はきわめて少ない。また重鉱物含有量も５～22%と早期第Ⅳ群に比較して少ない傾向がある。No.19・20では斜長石が50%あまりときわめて多く，岩石の含有量は少ない。重鉱物組成はNo.14～18において単斜輝石・斜方輝石・不透明鉱物などが多く含まれる。No.19・20では自形結晶を含む新鮮な角閃石が重鉱物の約８～９割を占める。黒雲母の検出はきわめてまれである。

No.19・20は，岩石鉱物組成・重鉱物組成ともきわめてよく類似するが折れ線グラフでは必ずしも一致せず，No.20とNo.15とが近く，No.19は異なるパターンを示している。岩石10種の基数が少ないため折れ線グラフのばらつきがあるかもしれない。

**下り林遺跡**　全体構成からみた砂の含有量は，No.21・22・25で24～29%，No.23・24で42～44%と高い値を示す。

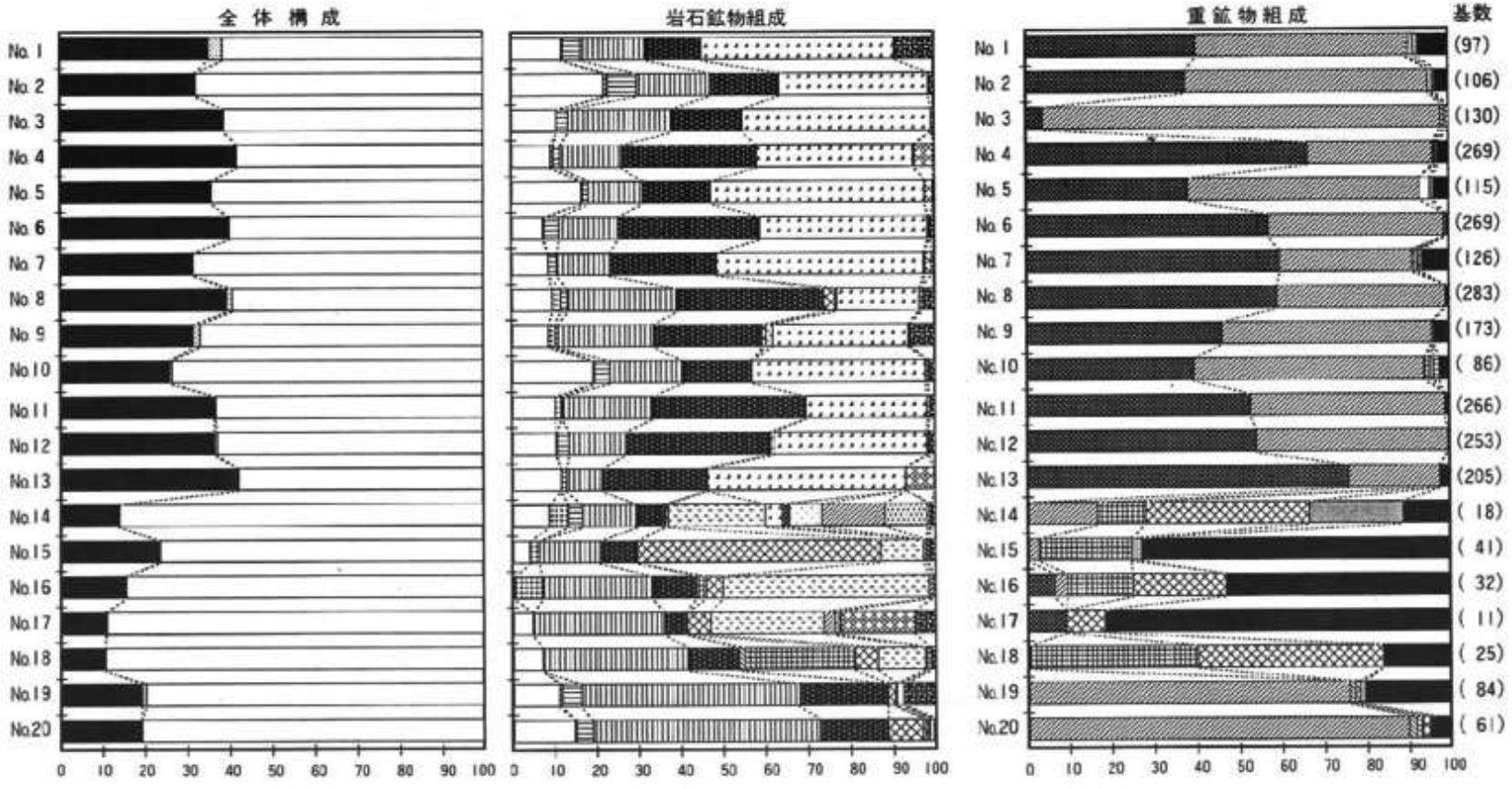
岩石鉱物組成では，花崗岩類が28～59%と多く含まれることで特徴づけられる。重鉱物含有量はNo.22～24で34～41%と高率であるが，No.21・25で数%と低率である。その他石英・斜長石・カリ長石などが検出される。重鉱物組成は，雲母類が約50～75%と高率に出現し，さらに数%から最大約50%の角閃石を伴う。雲母類は黒雲母がほとんどを占めるが，No.22・25では無色雲母がわずかに含まれる。また斜方輝石・緑簾石・ジルコン・スフェーン・不透明鉱物などがわずかに検出される。

第6表　土器および河川砂試料の岩石鉱物（数字はポイント数，＋は計数以外の検出を示す）

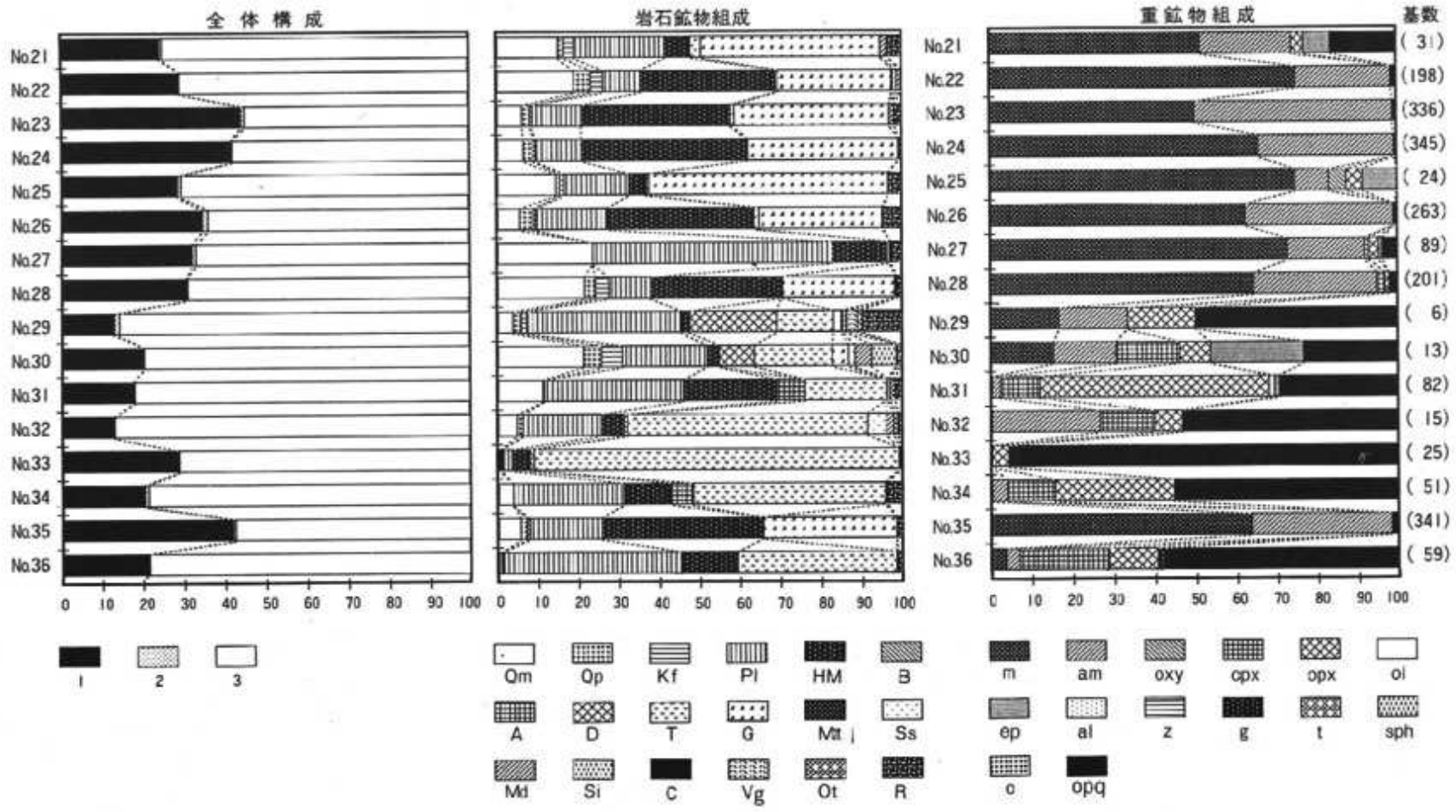
| 地点 | 吉尾敷遺跡 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 試料番号 | No.1 | No.2 | No.3 | No.4 | No.5 | No.6 | No.7 | No.8 | No.9 | No.10 | No.11 | No.12 | No.13 | No.14 | No.15 | No.16 | No.17 | No.18 |
| 石英（単結晶） | 92 | 141 | 84 | 78 | 119 | 60 | 54 | 79 | 57 | 102 | 76 | 77 | 89 | 24 | 19 | 1 | 10 | 15 |
| 石英（多結晶） | 3 | 6 | 1 | 6 | 1 | 2 | | 17 | 10 | 2 | 11 | 3 | 1 | 13 | 13 | 21 | | |
| カリ長石 | 33 | 45 | 20 | 15 | 12 | 30 | 15 | 13 | 7 | 19 | 2 | 26 | 8 | 9 | | | | |
| 斜長石 | 120 | 112 | 194 | 121 | 92 | 112 | 79 | 213 | 149 | 91 | 156 | 99 | 74 | 37 | 68 | 67 | 69 | 74 |
| 黒雲母 | 39 | 40 | 5 | 179 | 44 | 154 | 97 | 168 | 80 | 34 | 141 | 137 | 136 | | | 2 | 1 | |
| 無色雲母 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 角閃石 | 68 | 61 | 123 | 80 | 63 | 112 | 51 | 113 | 86 | 47 | 122 | 115 | 44 | 3 | 1 | 1 | + | + |
| 酸化角閃石 | | | | | | | | | 1 | | | | | + | | | | |
| 単斜輝石 | 1 | | 1 | | | | | | | 1 | | | | 2 | 9 | 5 | | 10 |
| 斜方輝石 | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | 1 | 7 | | 7 | 1 | 11 |
| カンラン石 | 1 | 1 | | 1 | 3 | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 緑簾石 | 1 | 1 | - | 2 | 1 | 2 | 1 | | | 1 | | | + | 4 | 1 | | | |
| 褐簾石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ジルコン | + | | + | | | + | | | | 1 | | | | | | | | |
| ザクロ石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 電気石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| スフェン | | | + | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 炭酸塩鉱物 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 不透明鉱物 | 7 | 3 | | 6 | 4 | 1 | 10 | 2 | 6 | 2 | 3 | 1 | 4 | 2 | 30 | 17 | 9 | 4 |
| 玄武岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| 安山岩 | | | | | | 2 | | | | | | | | 1 | | 7 | 1 | 53 |
| デイサイト | | | | | | | | 22 | 5 | | | 1 | 1 | 1 | 271 | 12 | 12 | 12 |
| 変質火山岩類 | 2 | | 1 | 1 | | 1 | | 3 | 11 | | 2 | 8 | 4 | 65 | 48 | 150 | 38 | 23 |
| 花崗岩類 | 353 | 326 | 347 | 309 | 362 | 317 | 368 | 155 | 212 | 214 | 298 | 205 | 393 | 11 | | | | |
| ホルンフェルス | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| 変成岩類 | | | | | | | 2 | | | | | | | 4 | | | | 1 |
| 砂岩 | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | 23 | | | | |
| 泥岩 | | | | 1 | | 1 | | 5 | 2 | | 1 | 1 | 1 | 41 | 3 | 2 | 6 | |
| 珪質岩 | | | | | | | | | | | | | | 28 | | | 2 | |
| 炭酸塩岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 火山ガラス（無色） | 1 | | | | | | | | 1 | 1 | | 1 | | 1 | | | 1 | |
| 火山ガラス（褐色） | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | |
| 粘土鉱物 | | | | | 1 | 1 | | | 2 | | 1 | | 1 | 1 | 2 | | 1 | |
| その他 | | | | 38 | 12 | 1 | 9 | | | 3 | 5 | | 54 | | | | 37 | 2 |
| 赤褐色粒子 | 67 | 6 | 3 | | 1 | 7 | 3 | 21 | 35 | 7 | 7 | 10 | 1 | 2 | 7 | 1 | 16 | 2 |
| マトリックス | 1233 | 1358 | 1220 | 1162 | 1295 | 1197 | 1368 | 1348 | 1336 | 1473 | 1266 | 1261 | 1128 | 1721 | 1534 | 1498 | 1782 | 1798 |
| 合計 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 |
| 重鉱物小計 | 97 | 106 | 130 | 269 | 115 | 269 | 162 | 283 | 173 | 86 | 266 | 253 | 205 | 18 | 41 | 32 | 11 | 25 |

| 地点 | 吉尾敷遺跡 | | ドラ林遺跡 | | | | | 堂の前遺跡 | | | | | 清水町遺跡 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 試料番号 | No.19 | No.20 | No.21 | No.22 | No.23 | No.24 | No.25 | No.26 | No.27 | No.28 | No.29 | No.30 | No.31 | No.32 | No.33 | No.34 | No.35 | No.36 |
| 石英（単結晶） | 46 | 56 | 76 | 111 | 56 | 51 | 85 | 40 | 157 | 134 | 11 | 86 | 39 | 12 | 3 | 16 | 47 | 3 |
| 石英（多結晶） | 2 | 2 | 7 | 26 | 16 | 21 | 5 | 24 | | 16 | 6 | 18 | 1 | 4 | 2 | | 15 | 2 |
| カリ長石 | 19 | 15 | 12 | 17 | 4 | 6 | 7 | 8 | | 22 | 3 | 21 | | | 1 | | 4 | |
| 斜長石 | 211 | 206 | 113 | 53 | 109 | 94 | 96 | 128 | 392 | 64 | 110 | 85 | 133 | 50 | 34 | 116 | 153 | 190 |
| 黒雲母 | | | 16 | 140 | 149 | 226 | 17 | 105 | 65 | 129 | 1 | 2 | | | | | 218 | 2 |
| 無色雲母 | | | | 5 | | | 1 | | | 1 | | + | | | | | | |
| 角閃石 | 64 | 55 | 7 | 46 | 164 | 115 | 2 | 96 | 17 | 61 | 1 | 2 | 2 | 4 | | 2 | 118 | 2 |
| 酸化角閃石 | 1 | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | + | | |
| 単斜輝石 | | 1 | | | | | | | 1 | 4 | | 2 | 8 | 2 | | 6 | | 13 |
| 斜方輝石 | 1 | 1 | 1 | | | | 1 | | 2 | 2 | 1 | 1 | 46 | 1 | 1 | 15 | | 7 |
| カンラン石 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | |
| 緑簾石 | 1 | | 2 | 1 | | + | 2 | 1 | 1 | | | 2 | 1 | | | | | |
| 褐簾石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ジルコン | | | | - | | | | | | | | | | | | | | |
| ザクロ石 | | 1 | | | | | | | | + | | | | | | | | 1 |
| 電気石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| スフェン | | | | | + | + | | | | + | | | | | | | | |
| 炭酸塩鉱物 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 不透明鉱物 | 17 | 2 | 5 | 2 | 3 | 2 | | 1 | 3 | 4 | 3 | 2 | 24 | 8 | 24 | 28 | 5 | 34 |
| 玄武岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 安山岩 | | | 1 | | | | | | | 1 | | | 25 | 2 | | 20 | | |
| デイサイト | 8 | 38 | | 1 | | | 1 | | | | 62 | 36 | | | 7 | 1 | | |
| 変質火山岩類 | 1 | 2 | 14 | 3 | 8 | 3 | 4 | 8 | 4 | 3 | 60 | 77 | 71 | 154 | 321 | 201 | 2 | 167 |
| 花崗岩類 | 7 | 3 | 221 | 163 | 343 | 309 | 349 | 219 | | 169 | 5 | 16 | | | | | 277 | |
| ホルンフェルス | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 変成岩類 | | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 砂岩 | | | | 4 | | 1 | | | | | 1 | 7 | | 12 | | | | |
| 泥岩 | | 1 | 7 | 6 | | | | | | 1 | 2 | 16 | 1 | 5 | 1 | | | |
| 珪質岩 | | | 1 | | | | | | 2 | 1 | 1 | 24 | | | | | | 1 |
| 炭酸塩岩 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 火山ガラス（無色） | | 3 | 1 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | 1 | 7 | 2 | 1 | 1 | 1 | 2 | | |
| 火山ガラス（褐色） | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | |
| 粘土鉱物 | | | | | 10 | 1 | | 3 | | 1 | 4 | 2 | 4 | 1 | 1 | 1 | | |
| その他 | 3 | 2 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 赤褐色粒子 | 27 | | 16 | | 16 | 4 | 18 | 31 | 17 | 7 | 27 | 2 | 6 | 2 | 1 | 15 | 12 | 5 |
| マトリックス | 1592 | 1619 | 1501 | 1415 | 1700 | 1154 | 1411 | 1378 | 1338 | 1379 | 1718 | 1595 | 1646 | 1749 | 1423 | 1577 | 1149 | 1572 |
| 合計 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 | 2000 |
| 重鉱物小計 | 84 | 61 | 31 | 298 | 336 | 345 | 24 | 263 | 89 | 201 | 6 | 13 | 82 | 15 | 25 | 51 | 341 | 59 |

| 地点 | 河川砂 | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 試料番号 | No.37 | No.38 | No.39 | No.40 | No.41 | No.42 | No.43 | No.44 | No.45 | No.46 | No.47 | No.48 | No.49 | No.50 | No.51 | No.52 | No.53 | No.54 |
| 石英（単結晶） | 1 | 5 | | 2 | 1 | | 1 | 22 | 36 | 33 | | 34 | 4 | 2 | 2 | | 4 | 1 |
| 石英（多結晶） | | 2 | | 2 | | | | 3 | 13 | 14 | | 3 | | 2 | | | 1 | |
| カリ長石 | | 2 | | 1 | | | | 1 | 2 | | | | 3 | | | | 1 | |
| 斜長石 | 18 | 40 | 30 | 90 | 61 | 34 | 46 | 53 | 68 | 81 | 1 | 54 | 32 | 31 | 53 | 33 | 29 | 13 |
| 黒雲母 | | | | | 1 | | | 11 | 8 | 12 | | | | 1 | 1 | | 1 | |
| 無色雲母 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| 角閃石 | | + | | 1 | | | | 6 | 14 | 10 | | 6 | | 3 | 6 | 1 | | |
| 酸化角閃石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 単斜輝石 | 3 | 6 | 4 | 7 | 3 | | 6 | 3 | | 1 | | 1 | 10 | 5 | 14 | 1 | 2 | 2 |
| 斜方輝石 | | 1 | 1 | 2 | | | 1 | 2 | 1 | 1 | | 4 | 1 | 2 | 8 | 1 | 3 | |
| カンラン石 | | 5 | | 12 | 3 | 1 | 27 | 6 | 4 | 5 | | 5 | 1 | 6 | 22 | 2 | 8 | 4 |
| 緑簾石 | | | 1 | | 1 | | | 1 | | | | | 1 | | | | 1 | |
| 褐簾石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ジルコン | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| ザクロ石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 電気石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| スフェン | | | | | | | | | + | | | | | | | | | |
| 炭酸塩鉱物 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 不透明鉱物 | | 1 | | 2 | | | | 3 | 2 | | | | | 1 | | 1 | | 2 |
| 玄武岩 | 467 | 420 | 449 | 224 | 382 | 432 | 402 | 261 | 99 | 156 | 499 | 263 | 258 | 288 | 335 | 439 | 143 | 435 |
| 安山岩 | | | | 13 | 1 | 1 | | | 2 | 1 | | | 3 | 2 | | | | |
| デイサイト | | | 1 | 10 | | | | | | | | | 2 | | | | 1 | |
| 変質火山岩類 | 3 | 8 | 2 | 59 | 21 | 9 | 4 | 1 | 2 | 34 | | 3 | 103 | 141 | 30 | 6 | 266 | 16 |
| 花崗岩類 | 3 | 3 | 3 | 13 | 8 | | 3 | 80 | 219 | 130 | | 118 | 38 | 26 | 17 | 9 | 7 | 9 |
| ホルンフェルス | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | | 4 | | | | | | |
| 変成岩類 | | | | 4 | | | | 1 | 27 | 3 | | | 1 | 6 | | 1 | | 1 |
| 砂岩 | | 3 | 3 | 19 | 4 | | | 1 | 1 | | | | 13 | 5 | | | | 2 |
| 泥岩 | | 3 | 2 | 26 | 4 | 1 | 2 | 1 | | 8 | | 4 | 25 | 16 | | 2 | 12 | 8 |
| 珪質岩 | | 1 | | 5 | | | | | | | | | 1 | | | | 2 | |
| 炭酸塩岩 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 火山ガラス（無色） | | | | 1 | 2 | 4 | | | | 2 | | | | | | | 3 | |
| 火山ガラス（褐色） | 2 | | 2 | 4 | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| 粘土鉱物 | | | | | | 1 | 1 | | 2 | 1 | | | | | 1 | | 1 | |
| その他 | | | | | 8 | 15 | 7 | 34 | | 8 | | 1 | 3 | 11 | 9 | 4 | 16 | 4 |
| 赤褐色粒子 | | | 2 | 1 | | | | | | | | | | | 1 | | 1 | 4 |
| マトリックス | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 合計 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 | 500 |
| 重鉱物小計 | 3 | 13 | 6 | 25 | 8 | 1 | 34 | 32 | 29 | 29 | | 16 | 13 | 18 | 12 | 6 | 13 | 8 |

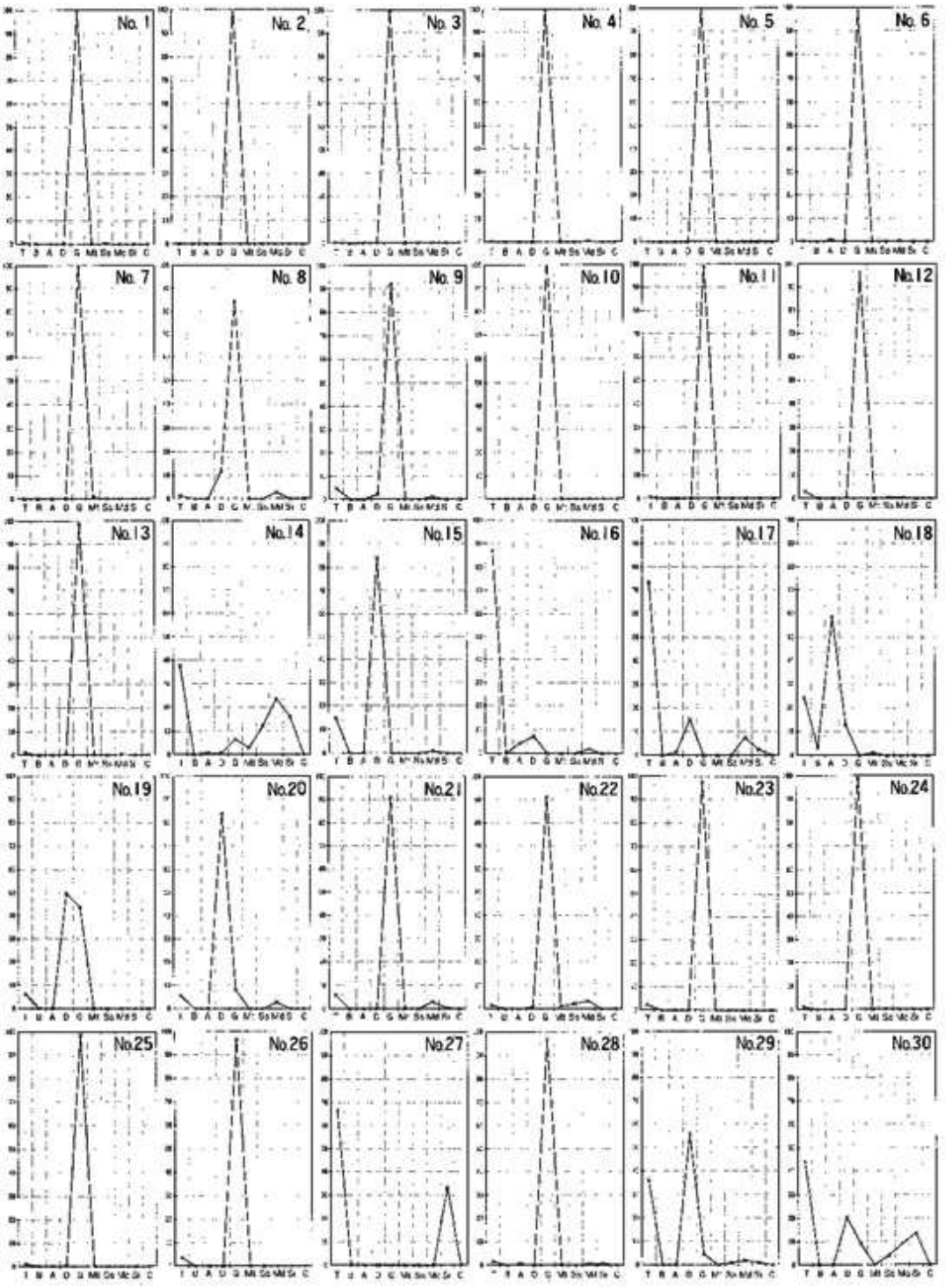



第62図　古屋敷遺跡出土土器の岩石鉱物組成（凡例は第63図に同じ）



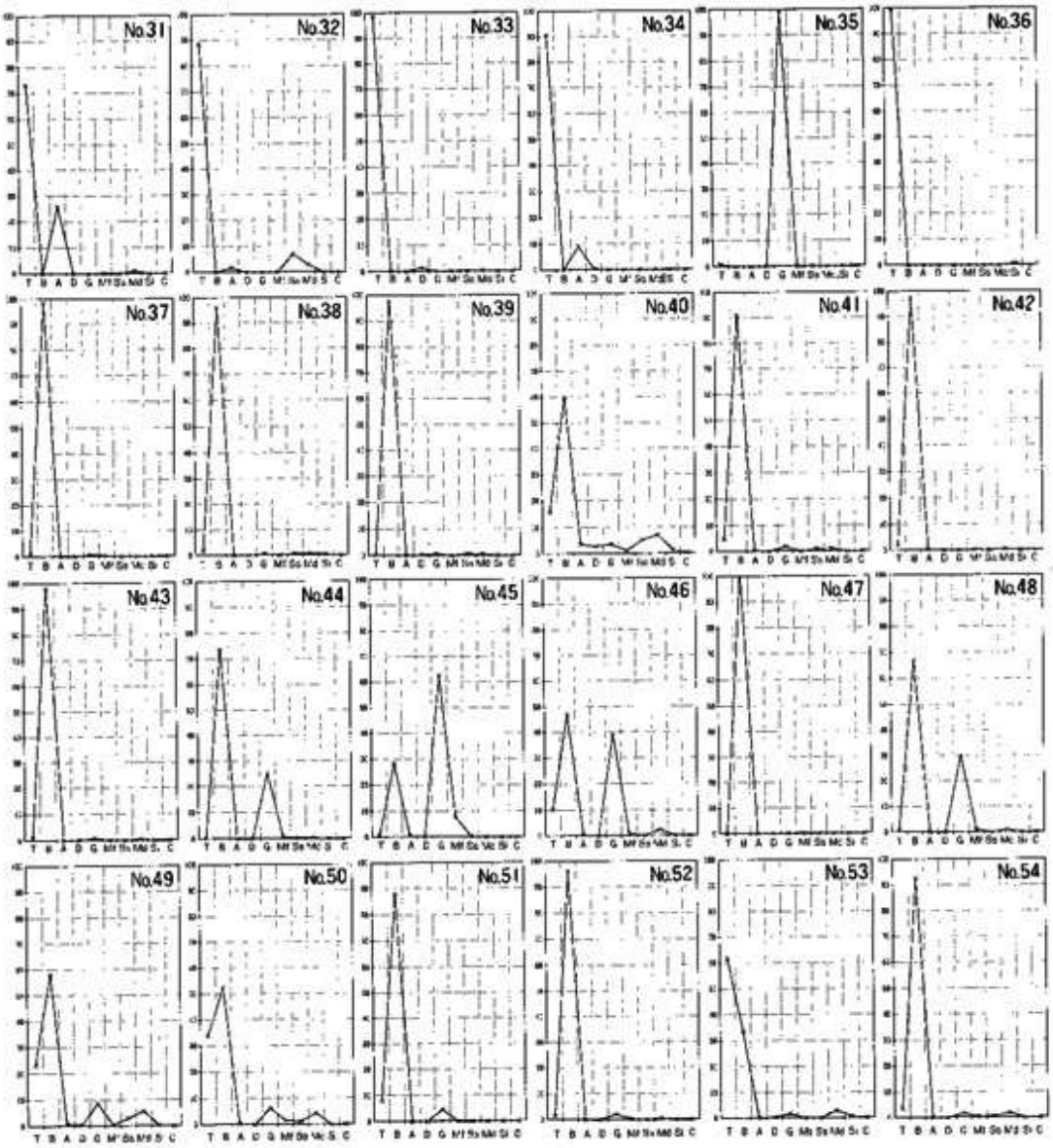

1 砂粒子，2 赤褐色粒子，3 マトリックス，Qm 石英（単結晶），Qp 石英（多結晶），Kf カリ長石，Pl 斜長石，HM 重鉱物，B 玄武岩，A 安山岩，D デイサイト，T 変質火山岩類，C 花崗岩類，Mt 変成岩類，Ss 砂岩，Md 泥岩，Si 珪質岩，C 炭酸塩岩，Ot その他，R 赤褐色粒子，m 雲母，am 角閃石，oxy 酸化角閃石，cpx 単斜輝石，opx 斜方輝石，ol カンラン石，ep 緑簾石，al 褐簾石，z ジルコン，g ザクロ石，t 電気石，sph スフェーン，c 炭酸塩鉱物，opq 不透明鉱物

第63図　土器の岩石鉱物組成（No.21～25下り林遺跡，No.26～30堂の前遺跡，No.31～36清水柳遺跡）




T変質火山岩類，B玄武岩，A安山岩，Dデイサイト，G花崗岩類，Mt変成岩類，Ss砂岩，Md泥岩，Si珪質岩，C炭酸塩岩

第64図　岩石組成折れ線グラフ(1)




第65図　岩石組成折れ線グラフ(2)

花崗岩類は，黒雲母・角閃石を含む石英閃緑岩～花崗閃緑岩組成の粒子が普通に検出されるが，No.22では花崗岩類粒子中に無色雲母が含まれる例が観察される。

**堂の前遺跡**　全体構成から見た砂の含有量は，No.26～28で31～35%と多く，No.29～30は13～20%と少ない。

岩石鉱物組成は試料ごとに多様である。No.26・28は花崗岩類が約20～30%，重鉱物含有量が30%あまりと高率に検出され，重鉱物組成では，黒雲母が60数%，角閃石が約30%ときわめて類似した組成を示す。

No.27は，大部分が黒雲母・角閃石からなり，No.26・28と類似性の高い重鉱物組成を示す。しか

し岩石鉱物組成ではNo.26・28と異なり花崗岩類が検出されず，斜長石が約60%を占め，石英・重鉱物を伴う。斜長石は累帯構造をもつ柱状自形結晶を含み，石英はときにβ型外形の自形結晶を含むなどが特徴的である。岩石粒子では変質火山岩類・珪質岩がわずかに検出される。

No.29・30は，変質火山岩類・デイサイトの検出で特徴づけられる。そのほか斜長石・石英・カリ長石などを普通に伴うが，花崗岩類・重鉱物などは少ない。重鉱物組成では，不透明鉱物が20～50%と多く単斜輝石・斜方輝石・黒雲母・角閃石・緑簾石などが検出される。

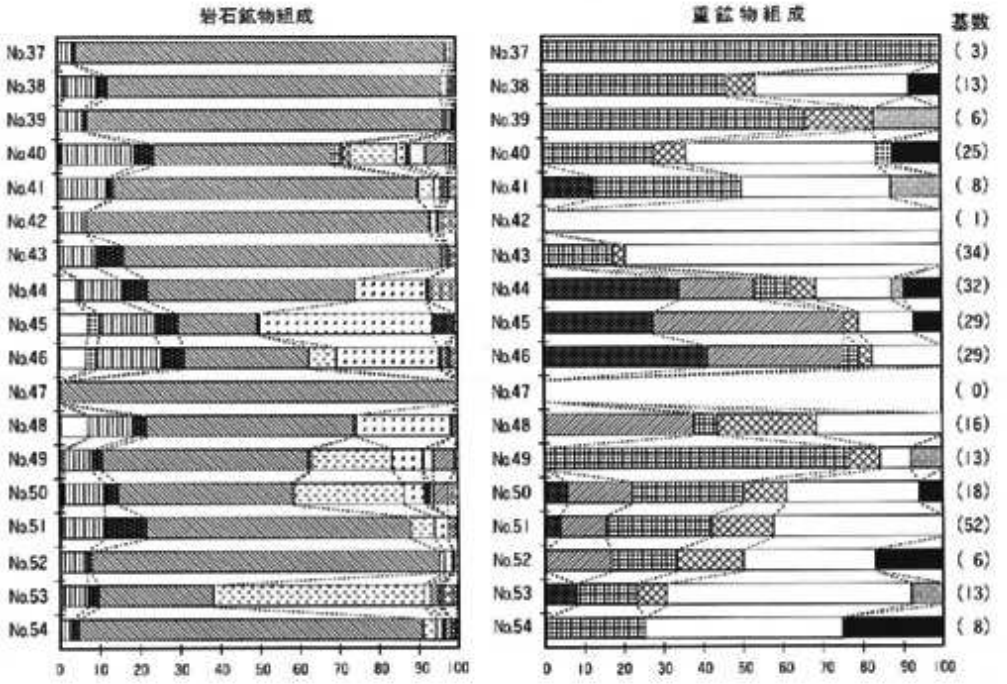
**清水柳遺跡**　全体構成から見た砂の含有量は，No.35が42%と高い値を示すが，他の土器は13～29%であり20%前後の値が多く見られる。

No.35は岩石鉱物組成において花崗岩類（33%）・重鉱物（40%）が多く含まれることで特徴づけられる。重鉱物組成は黒雲母（64%）と角閃石（35%）でほとんどが占められ，不透明鉱物をわずかに伴う。

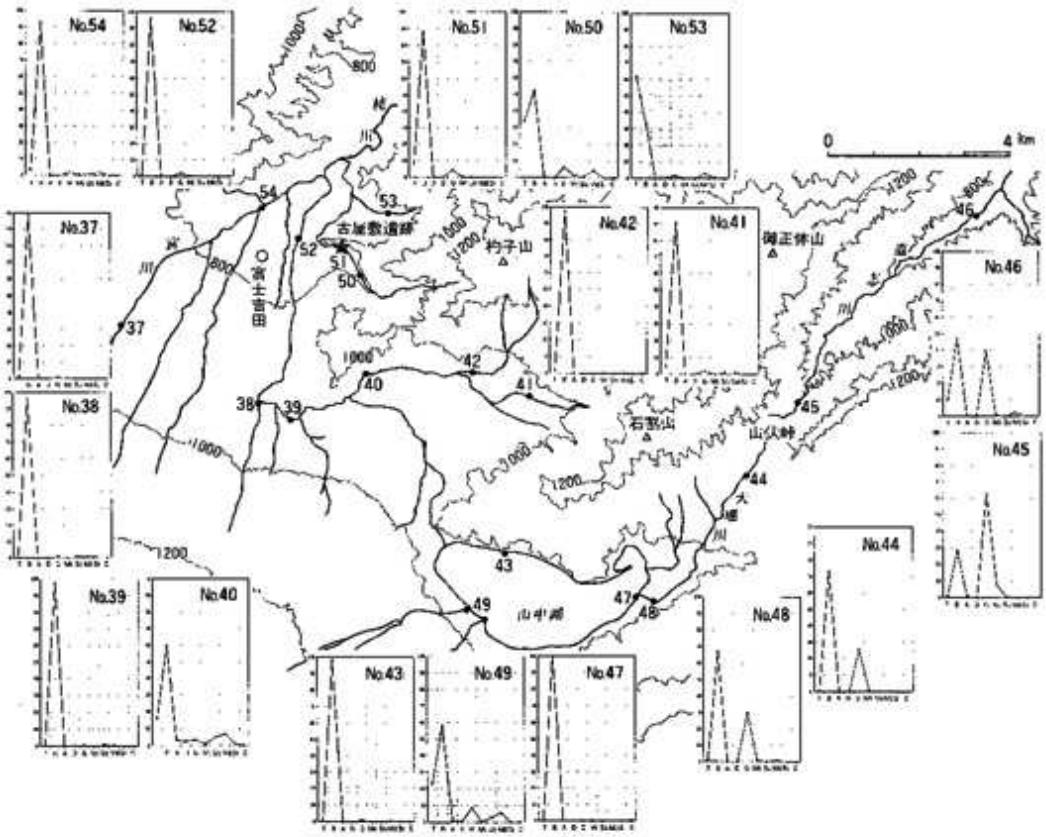
No.35を除く他の試料は，岩石鉱物組成において変質火山岩類を20～90%と多く含み，花崗岩類をほとんど含まないことで共通する。試料によっては安山岩・デイサイトがわずかに含まれ，重鉱物の含有量は数%から23%と比較的少ない。重鉱物組成は，不透明鉱物が30～60%で最大はNo.33の90数%と多く，そのほか単斜輝石・斜方輝石が普通に検出される。No.32で角閃石が20数%含まれている以外は雲母・角閃石の検出はきわめてまれである。

〔5〕　河川砂試料の特徴

河川砂試料の分析結果を第66，67図に示す。




第66図　富士山北東麓河川砂の岩石鉱物組成（凡例は第63図に同じ）




第67図　富士山北東麓河川砂の岩石組成（凡例は第64図に同じ）

この地域の河川砂は玄武岩が多く含有されることが特徴である。玄武岩は多くの場合多孔質で褐色ガラスに富み，斜長石・カンラン石・単斜輝石・斜方輝石の斑晶を含有する。これらの玄武岩の多くは富士火山に由来する降下スコリア粒子である。富士火山からのスコリアは東麓地域を中心に広い範囲で厚い堆積層をなしている。道志川流域や大明見・小明見などの基盤岩が第三系や丹沢石英閃緑岩体である地域でも約20％以上の玄武岩が検出される。降下テフラによってこの流域の基盤岩の特徴がそのまま河川砂の組成に反映しづらい傾向があるといえる。しかし逆にこのことが富士山東麓の地域的な特徴にもなっている。

流域の基盤に花崗岩類が分布する大堀川から道志川のNo.8・9・10・12は，18～44％の花崗岩類を含んでいる。流域に第三系が分布する河川のうち，No.4・10・13・14・15・17などで変質火山岩類が数％から最大53％含有される。

河川砂試料は土器試料に比較して重鉱物含有量が低いため重鉱物組成のばらつきがある。傾向としてカンラン石・単斜輝石・斜方輝石などの鉱物が多く含まれる。これは富士山起源のスコリアが多く含有されていることに対応している。花崗岩類が多く含まれるNo.8・9・10では黒雲母・角閃石が優勢である。

〔6〕　クラスター分析による分類と産地の推定

クラスター分析は，個体間の分類基準に関する情報が存在しない場合に，個体間の類似性の情報から個体を分類することができる。しかし類似性をどのように測定するかによって分類結果が異なるという問題がある。土器の産地を推定するとき，地域を限定することのできる情報を豊富に含んでいる粒子が存在することが望まれる。ここでは，変質火山岩類・玄武岩・安山岩・デイサイト・花崗岩類・変成岩類（含ホルンフェルス）・砂岩・泥岩・珪質岩・炭酸塩岩の10岩石種のポイント総数で各岩石のポイント数を除した値を変数とした。折れ線グラフと同様の変数を用いたことから，折れ線グラフのパターンの類似度がクラスター分析で視覚化されることにもなる。同一の産地の土器の折れ線グラフは同じパターンを示し，同一のクラスターに含まれることが前提になる。しかし異なる産地のデータでも地質が類似すれば同様の折れ線グラフパターンを示し同じクラスターに属することが予想される。

計算にはＮＥＣのコンピュータＰＣ－9801および「パソコン統計解析ハンドブックII　多変量解析編」（共立出版）所収のプログラム“ＣＬＵＳＴ”を用いた。個体間の非類似度を表す量としてユークリッド平方距離を用いた。試料ｉとｊとの類似度$d_{ij}$は，

$$d_{ij}=\sum_{k=1}^{m}(X_{ki}-X_{kj})^2$$

で定義される。

またクラスター間の非類似度は最短距離法およびメジアン法で定義しデンドログラムを作成した。クラスター（ｐ）とクラスター（ｑ）を融合して新しくクラスター（ｔ）をつくるとき，クラスター（ｔ）と，別の任意のクラスター（ｒ）との間の非類似度$d_{tr}$を，融合する前の段階のクラスター（ｐ），クラスター（ｑ）とクラスター（ｒ）との非類似度$d_{pr}$，$d_{qr}$で表すと，最短距離法では，

$$d_{tr}=\min(d_{pr},\ d_{qr})$$

で，メジアン法では，

$$d_{tr}=\frac{1}{2}d_{pr}+\frac{1}{2}d_{qr}-\frac{1}{4}d_{pq}$$

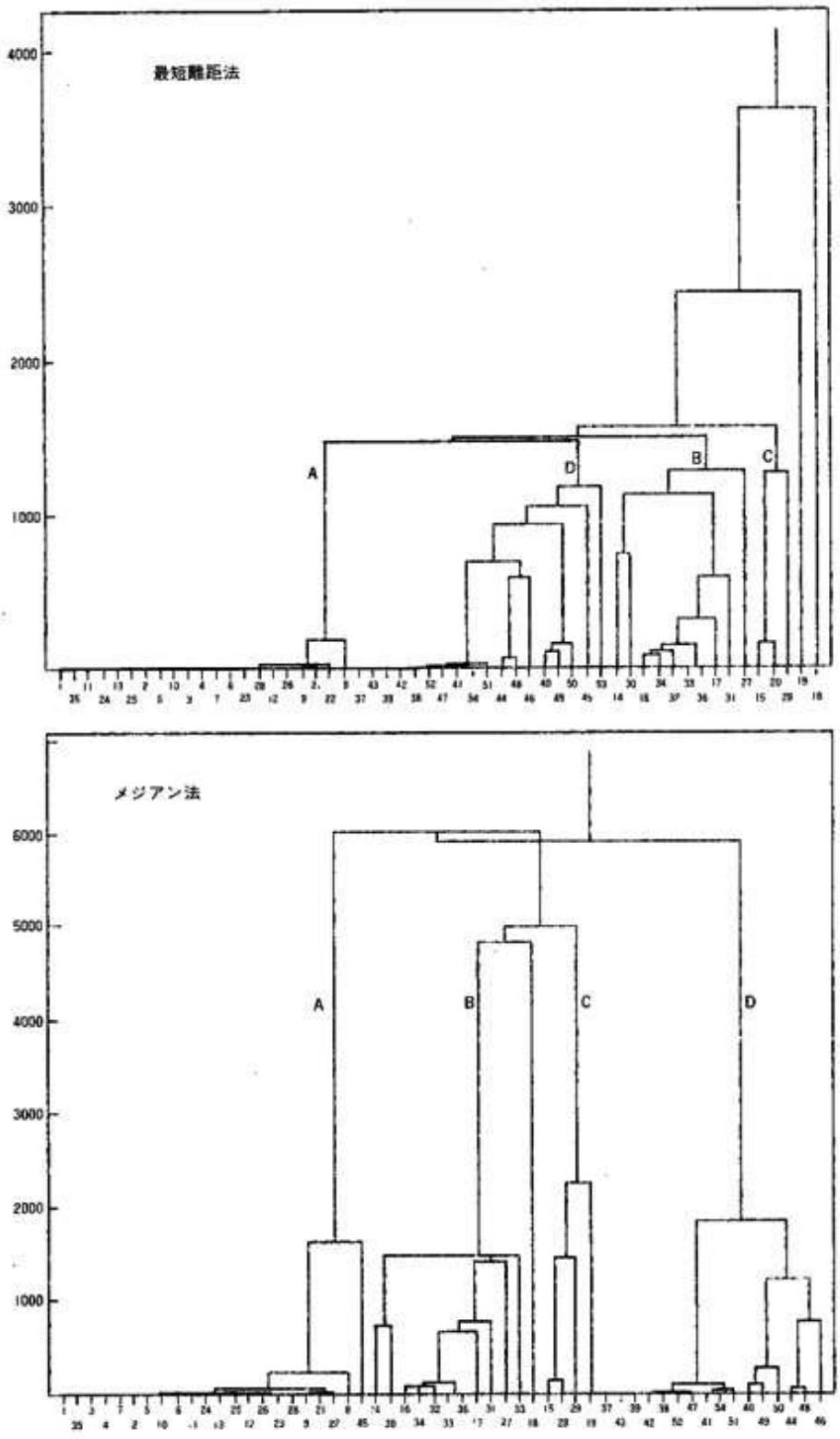
で定義される。

以上の２方法によるデンドログラム（第68図）は必ずしも同じではない。いくつかの群は両者に共通するが，いくつかの試料では帰属が大きく異なるものもある。そこで最短距離法とメジアン法とに共通するグループを便宜的にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ群とする（第６表）。

クラスター分析の分類は折れ線グラフの類似性をよく表現している。Ａ群は花崗岩類の多産で特徴づけられる。Ｂ群は変質火山岩類の多産で特徴づけられる。Ｃ群はデイサイトの多産と変質火山岩類の共伴で，またＤ群は玄武岩の多産でそれぞれ特徴づけられる。

各群ごとの土器の産地について以下に考察する。

**Ａ群**　Ａ群は花崗岩類地域において土器の原料を調達した土器と考えられる。




第68図　クラスター分析におけるデンドログラム

第7表　クラスター分析による分類（合計以外の数字は試料番号）

| 群 | 古屋敷遺跡 | 下り林遺跡 | 堂の前遺跡 | 清水柳遺跡 | 河川砂 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A群 | 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13 | 21・22・23・24・25 | 26・28 | 35 | | 21 |
| B群 | 14・16・17 | | 27・30 | 31・32・33・34・36 | | 10 |
| C群 | 15・20 | | 29 | | | 3 |
| D群 | | | | | 37・38・39・40・41・42・43・44・46・47・48・49・50・51・52・54 | 16 |
| その他 | 18・19 | | | | 45・53 | 4 |

早期第Ⅳ群土器のすべてがA群に属する。一方富士山北東麓地域の河川砂は大部分がD群に属しており，両者間の類似性が乏しい結果になっている。丹沢型石英閃緑岩の分布地域の道志川試料においても花崗岩類の検出量が最大で50%に充たない。北東麓地域の河川には玄武岩が多く含まれるが，早期第Ⅳ群土器には見られないなど相違点が多い。逆に甲府盆地笛吹川地域の河川砂の組成（河西，1989）と早期第Ⅳ群の組成は類似性が高いと考えられる。しかし土器の胎土中の砂粒子が河川砂だけに由来するかどうかは明らかでなく，またテフラの降灰によって基盤地質が河川砂組成に反映しにくい地域的特殊性もあることから，A群土器と河川砂の組成の相違をもって早期第Ⅳ群土器がこの富士山北東麓地域で製作されたことを否定するわけにはいかない。

早期第Ⅳ群土器の組成は，花崗岩類とそれを構成している造岩鉱物が大部分を占め単調な組成になっている。八ヶ岳南麓地域の出土土器では，安山岩が主体をしめる土器に交じって，花崗岩類・デイサイト・安山岩などが複雑に混合した組成をもつ土器も存在している（河西ほか，1989）。また甲府盆地の河川堆積物の岩石鉱物組成においても，上流域に異なる地質をもつ河川どうしの合流によって，合流後の河川堆積物の組成が複雑化する傾向がある（河西，1989）。複雑な組成は砕屑物の混合によるものであるとすると，単調な岩石鉱物組成は，限定された地質単位に由来する可能性があると推定される。花崗岩類の分布地域における風化物中，あるいはその地域を流れる河川堆積物の組成は，おそらく早期第Ⅳ群土器の岩石鉱物組成と類似したものと推定される。古屋敷遺跡の周辺では，丹沢岩体がもっとも近く，甲府盆地には甲府岩体・甲斐駒岩体などの花崗岩類が分布している。今のところ早期第Ⅳ群土器がどの地域の花崗岩類に由来するかは明らかでない。しかし，No.5・7・10でイディングサイト化した赤色のカンラン石が微量ながら検出されていることから，富士火山の噴出物降下地域との関係が暗示される。ただし富士火山の噴出物を特徴づけるスコリア粒子は検出されていない。まだ不明な点が多いため，類例をまって検討したい。

下り林遺跡試料もすべてA群に属する。また堂の前遺跡のNo.26・28もA群に属する。早期第Ⅳ群土器と同様に単調な組成を示す。花崗岩類地域に産地が推定される。周辺には下諏訪・茅野・

松本・美ケ原岩体が分布し，また天竜川沿いの南信地域には広範囲に花崗岩体が分布するため，産地の特定はできない。ただし下り林・堂の前遺跡の試料のいくつかには無色雲母が微量検出されているので，無色雲母が検出されなかった古屋敷遺跡出土の早期第Ⅳ群土器とは産地が異なるかもしれない。遺跡の立地する地点は塩嶺層が基盤とされているので少なくとも産地と遺跡との間にはなんらかの距離があろう。

清水柳遺跡のNo.35は花崗岩類地域が産地と推定されるが，もっとも近い丹沢岩体からでも約35㎞離れている。清水柳遺跡の他試料はすべてB群に属していること，および周辺に花崗岩体の分布が見られないことから，No.35はこの遺跡において異質の存在であり搬入土器と推定される。

**B群**　岩石折れ線グラフで変質火山岩類にピークをもつ試料がB群に属している。重鉱物組成では両輝石・不透明鉱物を多く含んでいる。今回分析した各遺跡はフォッサマグナ地域の中部から南部に位置し，緑色に変質した火山岩類で特徴づけられる新第三系の分布地域と重なる。B群の土器のあるものは，変質火山岩類のほかに変質がそれほど進行していない安山岩・デイサイト，あるいは堆積岩などを伴っている。これらのことからB群の土器の産地は新第三系分布地域に推定される。ただしいわゆるグリーンタフ地域と呼ばれるこの地域では新第三系の岩相変化が著しいため現在のところ細かい産地の特定はできない。したがって以下で在地性という場合にはかなり広範な地域を想定している。

古屋敷遺跡出土の野島式土器No.14・16・17および堂の前遺跡のNo.27・30は遺跡周辺に新第三系が分布しているので在地性の可能性がある。No.27は重鉱物組成ではA群の土器と区別しがたいが，おそらくデイサイト～流紋岩質の火山岩との関係が強いと推定される。

清水柳遺跡は愛鷹火山麓にあり直接新第三系分布地域に位置しているわけではない。No.31～34・36の土器に含まれる変質火山岩類は安山岩～デイサイト質と推定されるので，玄武岩～安山岩質の愛鷹火山噴出物が変質したものである可能性は低いと考えられる。したがってこれらの土器の産地は新第三系分布地域に求められる可能性が強い。狩野川から南には新第三系が広く分布しているので清水柳遺跡の土器は在地性的ではあるが，少なくとも産地と遺跡との間になんらかの移動が推定される。

**C群**　C群に属する土器は岩石折れ線グラフでデイサイトの第1ピークをもつ。しかし岩石鉱物組成・重鉱物組成からみるとB群の土器と共通性がある。堂の前遺跡のNo.29はNo.30の組成と類似性が高い。また古屋敷遺跡のNo.15の重鉱物組成はNo.16・17のそれと類似する。同じくNo.20はNo.19と岩石鉱物組成・重鉱物組成で類似する。またこれらNo.16・17・30はすべてB群に属しており，B・C群が類似していることが明らかである。なお両法によるクラスター分析でもB・C群の距離は他のどの群よりも近い関係にある。従ってB・Cの2群に分類したが両者を1群として分類することも可能である。B群との類似性から新第三系分布地に産地が推定され，特にその中でデイサイト～流紋岩との関係が強いと考えられる。

**D群**　D群は岩石折れ線グラフで玄武岩のピークをもち河川砂試料の大部分が属している。降下

スコリアに由来する特徴的な組成である。同一地域の堆積物が同じ折れ線グラフのパターンを示し同一クラスターに属するという典型的な例である。しかしこれらの河川堆積物は，地元の古屋敷遺跡出土土器組成と異なることから，土器の原料として使用された可能性はきわめて少ないと推定される。

**その他**　最短距離法とメジアン法とで帰属が大きく異なるのはNo.18・19・45・53の4試料である。No.18・19は最短距離法において最後にクラスターに融合された試料であり，メジアン法において，No.18はかなり距離は隔たってB群と結合し，No.19はそれほど大きな距離を持たずC群と融合している。No.18は折れ線グラフにおいて安山岩が優勢で，変質火山岩類・デイサイトを伴う。No.18は，変質火山岩類を主体とする“グリーンタフ地域”におそらく起源するものと推定される。B群もグリーンタフ地域起源と推定されることから，メジアン法によるNo.18の分類は妥当性があるといえよう。No.19は，折れ線グラフにおいて，デイサイトのピークと花崗岩類の共伴に特徴がある。デイサイトは変質しているものが存在することから変質火山岩類との関連性が強い。岩石鉱物組成・重鉱物組成においてNo.19とNo.20は類似性が高いことから，No.19はC群との結合がより強いと推定される。No.19の帰属のあいまいさは基数が小さいことに起因するものであろう。クラスター分析の課題のひとつである。

No.45は折れ線グラフにおいて花崗岩類の第1ピークと玄武岩の第2ピークともつ。土器試料中にはほとんどみられない玄武岩に注目すると最短距離法による分類のようにD群と類似性が高いと考えられる。また花崗岩類地域の道志川流域試料であるNo.45とA群とを結合させているメジアン法の分類にも妥当性がある。

No.53は，折れ線グラフにおいて変質火山岩類に第1ピークを持ち玄武岩も34%程度の値を示す。メジアン法は変質火山岩類に重点をおいた分類に，また最短距離法は玄武岩に重点をおいた分類になっている。

以上のように複数のクラスター分析法によって異なる分類になるという問題点が存在するが，反面各データのもつ多面性をよく反映している結果とも考えられる。したがっていまだに分類基準が明確化されていない現段階では多くの方法によって分類を試みることが有効であると考えられる。

### 〔7〕　考古学的分類と胎土分析結果

ある遺跡から出土した土器胎土の多様性についてみてみると，古屋敷遺跡出土早期第Ⅳ群土器や下り林遺跡などのように試料のすべてが花崗岩類分布地に産地が求められるというのは多様性に乏しく単調であるといえる。これに対し古屋敷遺跡の野島式土器，堂の前遺跡，清水柳遺跡の試料は，土器ごとの組成の変化があり多様性をもっている。これらの多様性の要因として以下のことが考えられる。①サンプリング②土器産地の地質③土器製作時の多様性④土器完成後の人間活動。

古屋敷遺跡の場合サンプリングの時点で考古学的な分類が，形態的な面ばかりでなく，肉眼観

察による土器胎土の違いによっても分類されていた。今回の胎土分析では早期第Ⅳ群のａ類ｂ類の区別はできなかったが，早期第Ⅳ群と野島式との違いは明瞭となった。このことは土器型式と胎土との関連性を示すとともに，肉眼観察による胎土分類の妥当性を示唆している。サンプリング以前に古屋敷遺跡で別の分類が行なわれていれば，サンプルも変化し分析データの多様性も変化したものと推定される。

新第三系は岩相の変化が著しい。新第三系地域が産地と推定されたＢ・Ｃ群の土器が多様性に富むのはこのような地質的特性に起因する可能性があると考えられる。土器製作時の多様性および土器完成後の人間活動については考古学の問題であるのでここでは触れない。

〔8〕　ま　と　め

古屋敷遺跡出土の早期第Ⅳ群と野島式とが異なる組成を示し推定産地もそれぞれ花崗岩類地域，新第三系地域と推定された。富士山北東麓地域の河川砂は古屋敷遺跡の土器とは類似性に乏しく土器原料とは考えられない。また下り林遺跡は花崗岩類地域，堂の前・清水柳遺跡は新第三系・花崗岩類地域に産地が推定された。クラスター分析がこの分析に有効であることがわかった。

## 3　早期第Ⅲ・Ⅳ群土器の製作技法

製作技法の観察は早期第Ⅳ群土器とともに，その比較資料として同時期の早期第Ⅲ群土器を対象におこなった。

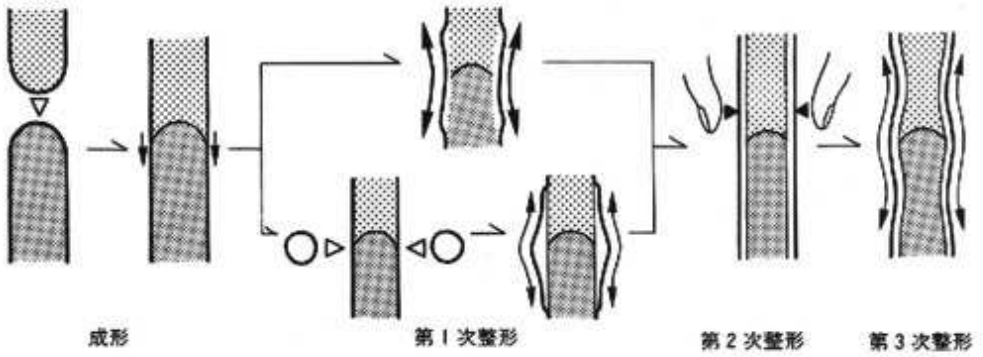
製作技法の観察に際し着目した点は，粘土紐を輪積みあるいは巻き上げによって成形した痕跡である擬口縁や擬口縁逆形などの接合痕，それにナデや削りといった整形の痕跡である。(註1) 成形技法については粘土の接合痕が観察できたものは全体資料の少数であったため，その量的な関係から成形技法と型式学的特徴を対比させることはできなかったが，型式学的分類ごとの成形の傾向はある程度把握できた。一方，整形技法についてはその一部が型式学的分類の基準として用いられているため，ここではその施され方や成形技法との関係を捉えて，型式学的に分類した土器群の特徴を明確にすることを目的とした。従って，本項では型式学的分類ごとに製作技法を記述していくことにする。

〔1〕　早期第Ⅳ群土器の製作技法

早期第Ⅳ群土器の器形は前節で述べたように，縄文が施された１，２類は段帯部を持つ尖底の深鉢形土器を有し，無文の３類は砲弾形を呈する。

基本的な成形・整形（第69図）　１～３類とも基本的には次のような成形・整形技法をとる。

成形については，少数ではあるがいくつかの資料でかまぼこ状の擬口縁や擬口縁逆形が観察され，粘土紐の輪積みもしくは巻き上げによって全体の器形が作られていることがわかる。擬口縁・擬口縁逆形が認められる資料のほとんどは底部近くの胴下部破片（写真15－１，２）であり，胴上部や口縁部の破片は少ない。また，擬口縁・擬口縁逆形の表面には余分な粘土が部分的に付着しているなど明瞭なものではない。このように粘土紐の接合痕が少ないことや接合痕が不明瞭な




第69図　第Ⅳ群土器の成形・整形

のは，積んだ粘土がよく乾燥する前に次の粘土紐を積み上げた結果と思われる。尖底部から胴部に移る屈曲率の大きな転換点にあたる胴下部で擬口縁・擬口縁逆形が多いのは，小杉康氏が指摘しているように形持ちをよくするために，他の部位より積み上げのタイミングを遅らせたためであろう(註2)。擬口縁は必ず土器破片の口縁部側に見られることから，底部側から口縁部方向にむけて粘土紐を積み上げていったと考えられる。なお，底部の成形については，出土資料が極僅かであったため不明である。

整形については，施す順序によって第1次整形，第2次整形，第3次整形に分けられる。

第1次整形は，土器内外面の薄い剝離痕によって確認される整形である（写真15－3，4）。この薄い剝離痕は厚さ1～2㎜であり，特に土器内面に多くみられる。また，擬口縁がみられるところでは内外面から1～2㎜部分だけは擬口縁の凸形曲線とは関係なく割れていること（写真15－1，2）も，剝離痕と共通する痕跡であろう。このような剝離は，土器本体と剝離した部分の粘土の乾燥度合の違いによって生じるものと思われ，その要因となった整形方法としては次の2通りが考えられる。1つは粘土紐をある程度積み上げた時点もしくは積み上げ終わった直後の粘土が余り乾燥していない時点で，土器表面付近の粘土をナデによって薄く延ばした場合である。ナデによって薄く延ばした部分は，土器内部より外気との接触が多くなり，乾燥が早まった可能性がある。2つめは成形後，粘性を有する別な粘土を土器内外面に薄くナデ付けた場合である。

上記2通りとも，粘土を薄く延ばすため，粘土にある程度粘性がなくてはならない。写真15－5は，第2，3次整形が施されなかった箇所の土器片外面であるが，第1次整形の痕跡と思われる薄い粘土カスが残っている（㊀印）。この粘土カスは，ナデをおこなった際，終点に余分な粘土がたまったものと思われ，第1次整形がナデによるものであったことと，ナデられた粘土に粘性があったことを物語る痕跡といえる。

以上の第1次整形は，粘土紐の積み上げによって形作られた器形の微調整と，粘土紐同士の接着を補強する意味があったものと考えられる。

第2次整形は指頭押圧によるもので，土器内外面に凹凸痕としてその痕跡が残る（写真15－6）凹凸痕は後から第3次整形が施されるため明瞭な形では残っておらず，全体としては，表面がデ

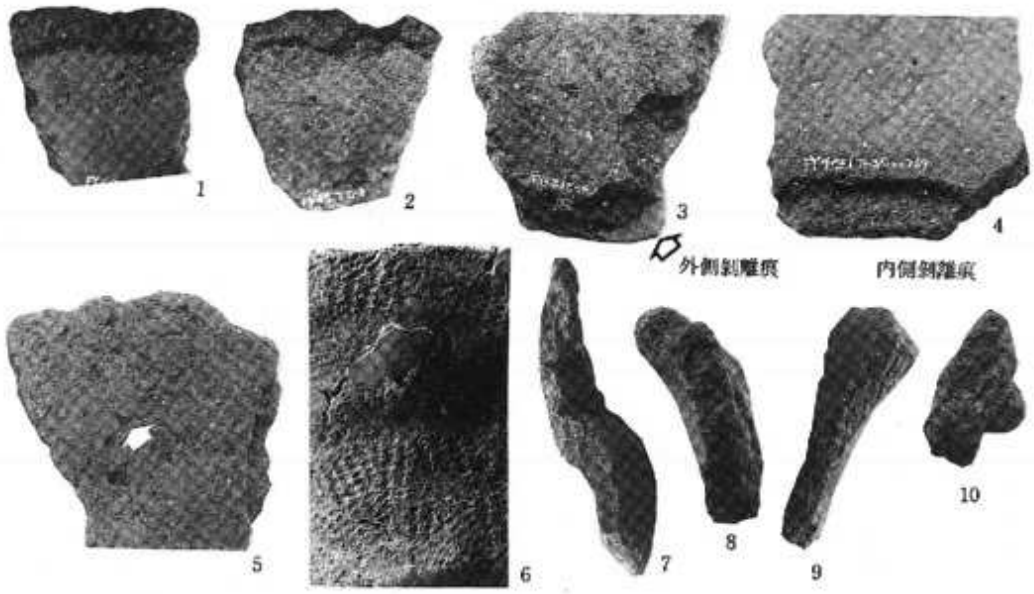
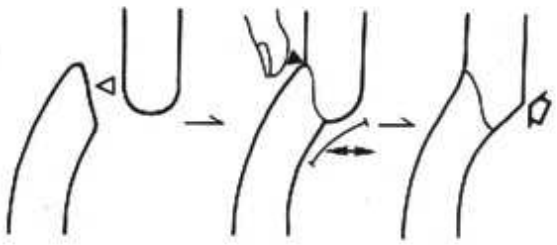



写真15　第Ⅳ群土器の成形・整形

コボコになっているという程度である。したがって，縄文時代早・前期の東海系土器にみられる明瞭な指頭押圧痕とは明らかに異なる。しかし，土器内面に残された比較的明瞭な凹凸痕は，直径2～3㎝程で，ちょうど親指をあてて押圧した大きさである。指頭押圧による第2次整形は，器形の微調整のためであろう。

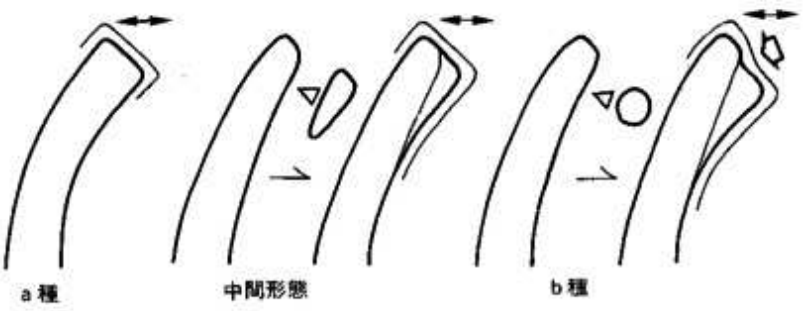
第3次整形は，土器内外面にナデを施したもので，特に，外面は入念に施されている。器表面には工具の形を示す痕跡がみられず，粘土に含まれている砂粒が動いた結果による極細かい筋状の痕跡しか認められない。おそらく指のような軟質の原体を用いたのであろう。第2次整形の後，縄文や沈線文の施文前におこなわれているが，縄文施文後に施されている例も僅かにみられる。この整形は，器表面の整形を目的としたものであろう。

**1，2類土器の段部の成形・整形**（第70図）　早期第Ⅳ群土器1，2類土器は段帯部を有し，それが当土器群の特徴になっている。段帯部の段部はその部分の粘土紐の接合痕の観察から，まず，内面から外面下位に向かって傾斜した撚口縁を用意し，そこに粘土紐を外側から貼り付けておおよその形が作られていることがわかる（写真15－7）。その後に，内面は第2次整形相当の指頭押圧によって，外面の段下部を第3次整形相当の横方向のナデにより他の部位より入念に形を整えている。このような製作技法をとると外面の段部の稜と粘土紐の接合痕とは一致しない。段部



第70図　第Ⅳ群1・2類土器の段部の成形・整形

の接合痕が認められた資料は少なかったが，他の資料でも段の稜の所で割れてるものはほとんどみられなかった。このことは上記の成形技法が第Ⅳ群1，2類土器の多くの個体で用いられている一つの根拠になると思われる。




第71図　第Ⅳ群3類土器の口唇部成形・整形

**3類土器の口唇部の成形・整形**（第71図）　早期第Ⅳ群3類土器は無文の土器で，口縁部が外反することと肥厚する口唇部が特徴である。口唇部の肥厚部分は前節で述べたように，その成形技法と断面形態の相違によってa種とb種に大別できる。a種はナデ等の整形によって断面形態が長方形型になるものであり（写真15－8），b種は棒状の粘土紐を元来の口唇部直下に貼り付け，ナデ整形することによって肥厚した口唇部を作りだしたもので（写真15－10），断面形態はa種のものより鋭角的で肥厚の度合が大きい。さらにb種は，粘土紐を貼り付けているため，口唇部上に溝状の窪みが残されることが多い（第71図↓印）。また，a，b種の中間的なものも存在する。断面形態はa種と同様であるが，薄い粘土帯を口唇部直下に貼り付けて成形しているものである（写真15－9）。以上，口唇部形態3種の違いが認められるが，3類土器の他部位の成形・整形技法については違いは認められない。

**〔2〕　早期第Ⅲ群土器の製作技法**　野島式に相当する早期第Ⅲ群土器は，隆帯，沈線，絡条体圧痕文が施文された1～5類土器と，無文の6類に型式学的に分類される。1～5類と6類の大部分については成形・整形技法はおおよそ共通するが，6類の中でも器厚が薄手の一群は他のものと異なる成形・整形技法をとる。ここでは前者を基本的な成形・整形，後者を薄手の無文土器の成形・整形として説明する。

**基本的な成形・整形**　第Ⅲ群土器も第Ⅳ群土器同様，擬口縁や擬口縁逆形が観察できる資料は少数であった。観察できた擬口縁・擬口縁逆形はカマボコ状を呈し（写真16－1），擬口縁は破片の口縁部側に，擬口縁逆形は破片の底部側にみられた。擬口縁・擬口縁逆形の表面は，部分的に余分な粘土の付着がみられるなど明瞭ではない。擬口縁・擬口縁逆形が少ないことや明瞭でないことからみて，下の粘土帯が余り乾燥しない段階で積み上げていったものと思われる。なお，第Ⅲ群土器には第Ⅳ群1，2類土器にみられるような段帯部を持つ土器も存在するが，段部の成形技法をうかがわせるような接合痕資料は確認できなかった。

整形痕として確認できるものは土器内外面に残る擦痕で，繊維束などの原体でナデ調整をしたものと思われる（写真16－2，3）。これは第Ⅳ群土器の第3次整形のナデと擦痕の有無によっ

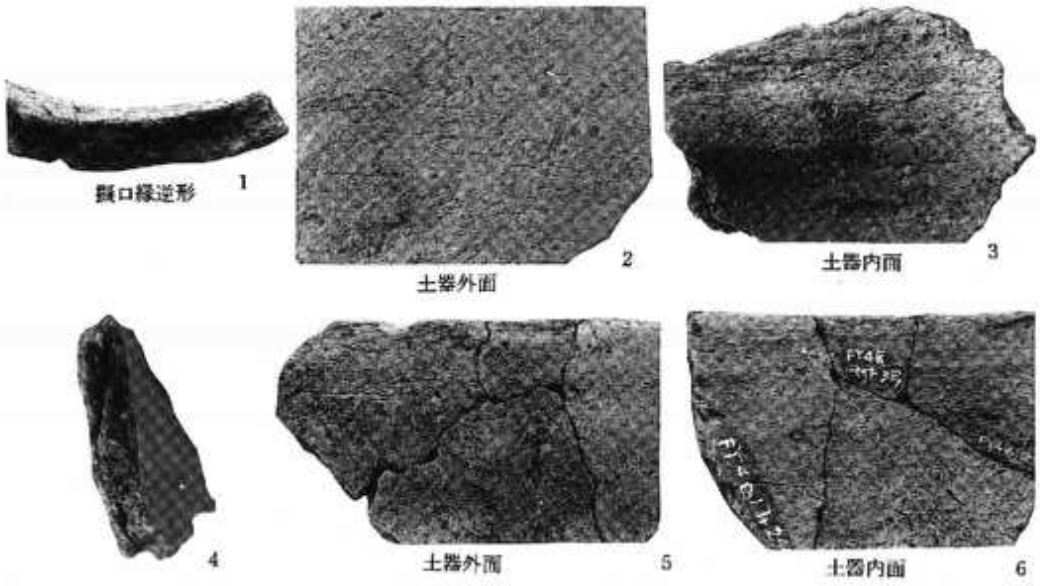



写真16　第Ⅲ群土器の成形・整形

て区別できる。この他に放射肋を持つ貝殻の背面を原体として用いたと考えられる条痕が施されたものがある。条痕が用いられたものは極少数であり，文様から野島式に比定される土器（1～5類）の中では僅かに2個体だけであった。ナデ，条痕整形とも隆帯，沈線，絡条体圧痕文の文様が施文される前におこなわれている。なお，第Ⅳ群土器の第1，2次整形でみられたナデや指頭圧痕を示すような薄い剝離痕，凹凸痕などの痕跡は認められない。

**薄手の無文土器の成形・整形**　薄手の無文土器としたものは器厚が7～9㎜程を呈し，他の第Ⅲ群土器の器厚より相対的に薄い。観察される擬口縁・擬口縁逆形は，土器の外面から下位の内面に向って傾斜する形を呈する（写真16－4）。擬口縁・擬口縁逆形の表面は明瞭な形で残る。これはある程度乾燥した状態の前述の擬口縁に，粘土紐を斜め上から接合したものであろう。このような成形技法は，薄手の器壁の製作を可能にするという指摘がある(註3)。

整形としては，土器の内外面ともヘラ状工具による削りに近いナデが施されている（写真16－5，6）。器表面にはヘラ状工具の痕跡が明瞭に残っている。

## 4　胎土・製作技法からみた早期第Ⅳ群土器の特徴と周辺遺跡出土土器との関係

### 〔1〕　胎土・製作技法からみた早期第Ⅳ群土器の特徴

1～3項でみてきた胎土・製作技法の観察・分析から，古屋敷遺跡出土早期第Ⅳ群土器の特徴をまとめてみたい。

胎土については，金色雲母片が目立つ肉眼観察a，b類が対応するが，この両類は岩石学的分析の結果，類似した岩石鉱物組成を示し，A群の花崗岩類地域という共通する産地から採取されたことが予測された。このように共通する胎土が，型式学的に分類された一定の土器群の大部分

に用いられていることからみて，上記のような胎土が古屋敷遺跡における第Ⅳ群土器の特徴になっていると考えてよいであろう。また，共伴する第Ⅲ群土器（野島式土器）が岩石学的に新第三系地域という他地域産であり，肉眼的にもｃ類という全く異なった胎土を有することは，第Ⅳ群土器が“粘土の質や採取地の選定”といった胎土選択の上では，第Ⅲ群土器と違う伝統のもとに作られたことを示している。

製作技法の点からも第Ⅳ群土器はある程度斉一性が捉えられた。成形技法については観察可能な資料が少なかったため，明確な対応関係について言及できないが，整形技法については第１次整形とした粘土を薄く延ばすナデや，第２次整形とした指頭押圧，第３次整形としたナデが特徴となる。一方，第Ⅲ群土器（野島式土器）の整形技法との比較では，最後に施されるナデ整形が，第Ⅲ群土器は明瞭な擦痕が残る原体を用いているのに対し，第Ⅳ群土器の第３次整形のナデは余り痕跡が残らない軟質な原体を使用しており，整形後の効果と原体の両面で異なる。また，第Ⅲ群土器では第１，２次整形とした粘土を薄く延ばすナデや指頭押圧が認められない。従って，第Ⅳ群土器の第１～３次整形は第Ⅲ群土器とは異なった伝統下に培われた技法といえるだろう。

なお，第Ⅳ群３類土器（無文土器）のａ，ｂ種の違いが，時間差によるものなのか同一時期におけるバラエティーなのかは今回の調査では把握できなかったが，その成形・整形技法の相違は第Ⅳ群１，２類土器（縄文施文）の段部の成形・整形技法とともに，今後の第Ⅳ群土器の時間的細分や系統的分析に際して重要な視点となると思われる。

〔２〕　胎土・製作技法からみた古屋敷遺跡出土早期第Ⅳ群土器と周辺遺跡出土土器との関係

今回おこなった胎土の岩石学的分析では，古屋敷遺跡出土の第Ⅳ群土器とⅢ群土器（野島式土器）の他に，周辺遺跡出土の野島式土器と第Ⅳ群相当土器も数点分析にかけた。土器の原料採取地の限定については明確な結果が得られなかったが，各試料の産地の共通性や違いについては興味深い成果が得られた。

**周辺遺跡出土の第Ⅳ群土器との関係**　第Ⅳ群土器の主要な分布圏内に存在する遺跡出土の第Ⅳ群土器として分析にかけた試料は，古屋敷遺跡13点，長野県下り林遺跡５点，同堂の前遺跡５点の計23点であった。このうち堂の前遺跡の３点を除く20点が，Ａ群とした花崗岩類地域から土器の原料を採取している。これは各遺跡出土土器の製作者が，偶然周辺の該当地質地域から同質の粘土を採取した結果とは考えがたい。同一の花崗岩類地域から採取しているか否かは別としても，各遺跡の第Ⅳ群土器製作者が胎土の選択に関して共通の伝統を保有していたと思われる。これらの遺跡を包括する第Ⅳ群土器の分布の広がりの有意性は，胎土選択の点からも認められる。

**野島式土器との関係**　前述したように，古屋敷遺跡における野島式土器（第Ⅲ群土器）は胎土選択と整形技法の点で第Ⅳ群土器とは異なる伝統のもとに製作されている。具体的な製作者としては，野島式土器が古屋敷遺跡において量的に客体的存在であることからみて，他の土器型式圏の人間が想定される。その場合，他土器型式圏の人間が，自分が有する胎土選択の伝統にあった粘土を古屋敷遺跡周辺において採取することが難しいと考えられるため，当土器群は他土器型式圏

で製作されて古屋敷遺跡に持ちこまれたものである可能性が強い。

また，第Ⅲ群土器の中でも，個体によって岩石学的分析の結果に細かい違いが見い出せる。試料No.19，20は，岩石鉱物組成や重鉱物組成において他の第Ⅲ群土器とは違う傾向にあるが，これらの土器は製作技法の面からも薄手の無文土器として区別されるものである。このことは第Ⅲ群土器の製作地が複数存在することを示しているのかもしれない。

一方，野島式土器を主体的に出土する静岡県清水柳遺跡の土器を比較試料として計6点岩石学的分析にかけた。うち5点が野島式に，1点が古屋敷第Ⅳ群1類に相当する土器である。野島式の試料（No.31～34，36）は，岩石鉱物組成の傾向やクラスター分析の結果（B群）が共通し，古屋敷遺跡の野島式土器試料（No.19，20を除く）との対比では，変質火山岩類が多く花崗岩類がきわめて少ないという岩石鉱物組成の傾向や，推定産地が共に新第三系地域と推定される点など，第Ⅳ群土器の胎土と比べると類似性が高い。これらの試料は古屋敷遺跡における型式学的分類の第Ⅲ群1，3～5類に相当するもので，分析試料をみるかぎりでは整形も古屋敷遺跡のものと同様な擦痕が施されている(註4)。No.35とした第Ⅳ群土器は，岩石鉱物組成や重鉱物組成の傾向，推定産地（A群）が古屋敷遺跡の第Ⅳ群土器と共通する。

以上のことは，古屋敷遺跡と清水柳遺跡の野島式土器は胎土選択と整形について，また，同両遺跡の第Ⅳ群土器は胎土選択において，それぞれ共通の伝統を保有する製作者によって作られた可能性が高いことを示している。つまり，古屋敷遺跡の野島式土器は野島式土器主要分布圏からの，清水柳遺跡の第Ⅳ群土器は第Ⅳ群土器主要分布圏からの搬入品であると考えられる。型式学的検討で第Ⅳ群土器と野島式土器の分布圏が互いに閉鎖的でなかったことを予測したが，胎土・製作技法の分析からみた両分布圏間相互の土器の搬入・搬出現象という面からもそのことが裏付けられる。

胎土分析のみによって土器に関わる諸現象を判断するのは危険を伴う。しかし，土器製作に関わるひとつの情報として，型式学的分析と相互に補完するかたちで用いれば，土器群の特徴をより一層明確にできるはずである。本分析もそのような目的のもとに取り組んだもので，第Ⅳ群土器の特徴を胎土や製作技法の面から補足してきた。最後に，本稿に記載した様々なデータが今後の研究の基礎資料として役立てば幸いである。

本分析にあたり，会田進，小林康男，瀬川祐市郎の諸氏には胎土分析試料の提供を快諾していただき，その際，宮下健司氏には便宜を計っていただいた。また，岩石学的分析の統計解析に関しては東北大学の島本昌憲氏にお世話になった。記して感謝の意を表する次第である。

なお，本稿第2項の岩石学的分析と執筆は山梨文化財研究所の河西　学がおこない，胎土の肉眼観察と製作技法の観察は古屋敷遺跡調査団胎土分析班の中村哲也，馬場倍子，前川容子が担当し，第1，3，4項は中村が執筆した。

## 註

註1　本稿では，粘土紐の輪積み，巻き上げによって器形を形作る段階までを成形とし，それ以降の細かい調整の段階を整形した。

註2　文献（小杉1987）「1土器成形技術の検討　積みあげのタイミング」参照。

註3　文献（小杉1987）「1土器成形技術の検討　粘土帯の積みあげ」の<第2手法>に対応する。

註4　報文によると，清水柳遺跡の野島式土器の整形は繊維束のナデによっておこなわれているものが多く，古屋敷遺跡の野島式土器の整形と共通する。

## 引用・参考文献


河西　学　1989　「甲府盆地における河川堆積物の岩石鉱物組成ー土器胎土分析のための基礎的データー」『山梨考古学論集II』P505～523　山梨県考古学協会編

河西　学・櫛原功一・大村昭三　1989　「八ヶ岳地域とその周辺地域における縄文時代中期末土器群の胎土分析」山梨文化財研究所研究報告1　P1～64

小杉　康　1984　「物質的事象としての搬入・搬出，模倣製作」駿台史学第60号　駿台史学会

小杉　康　1987　「第5章　樋沢遺跡押型文土器の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』長野県岡谷市教育委員会

笹津備洋・瀬川祐市郎・関野哲夫・杉山治夫　1976　「清水柳遺跡の土器と石器」沼津市歴史民俗資料館紀要1　P3～80

佐原　真　1979　「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ(2)』　有斐閣

塩尻市教育委員会　1985　『堂の前・福沢・青木沢』

長崎元広　1984　「長野県岡谷市下り林遺跡の早期縄文土器」長野県考古学会誌48

藤井敏嗣・由井将雄　1985　「愛鷹火山の岩石学的特徴」月刊地球7　P622～627

山梨県地質図編纂委員会　1970　10万分の1図幅『山梨県地質誌』

# 第3節　古屋敷遺跡早期第Ⅴ群土器の型式学的検討
## —神之木台式土器の再検討—

恩田　勇

### はじめに

古屋敷遺跡の調査においては，事実記載から明らかなように，縄文時代早期に属する諸型式が検出されている。ここで扱うのは，早期第Ⅴ群として分類された土器群で，その特徴は神之木台式の範疇で捉えられるものである。この第Ⅴ群は遺跡からの出土土器の全体からみれば，その占める割合は低いが，型式学的特徴にまとまりをもっており，神之木台式に好資料を提供しているといえよう。

神之木台式の存在はすでに下吉井遺跡の調査（岡本1970）で明らかとなっていたが，神之木台遺跡における層位的事例から下吉井式に先行する型式としての認識がなされた（高橋・吉田1977）。後年には共伴する東海系の土器から神之木台式に先行する型式として打越式が設定される（荒井・小出1978）。神之木台式とそれに前後する両型式との関連については，渋谷昌彦氏による精力的な研究により大綱が与えられ（渋谷1983・1984），また神奈川考古同人会によるシンポジウムにおいて早期末から前期初頭の諸型式が体系的に資料集成および討議されるなかで扱われ，その指針が提供された（神奈川考古同人会編1983・84）。このシンポジウムにおいては打越式と神之木台式の関連を示唆する資料があらためて喚起され，その後谷口康浩氏によって詳細な分析が提示されているが（谷口1984），一方これを疑問視する論考もみられる（古谷1984）。だが，いずれも神之木台式の特徴とされる隆帯の生成の過程について，いまだ充分な説明がなされたとは言いがたい状況にある。

このような動向と並行して，資料の蓄積も進み，神之木台式の型式細分もおこなわれていく（渋谷1983・1984，小田1984，小野1984 a・b，古谷1984）。ここでは，これらの論考に深く立ち入る余裕はないが，変遷のおおきな流れについては共通点を見出せるものの，型式細分の線引きについては微妙な違いがみられ，これに連動して細分型式の呼称に混乱が生じている。

神之木台式は型式設定の時点において，端的な型式学的特徴が述べられたように，その特徴は口縁部に展開する隆帯に凝縮されている。各論考における型式細分の微妙な違いは，このような唯一の特徴ともいえる隆帯の属性の解釈に起因している。いずれも下吉井式との関連について視点が置かれているためか，肝要な課題である隆帯の生成の過程については論考が及んでいない状況にある。

以上のような経緯を踏まえて，古屋敷遺跡出土の土器群の解釈をおこなう途上で派生する問題を扱っていきたい。

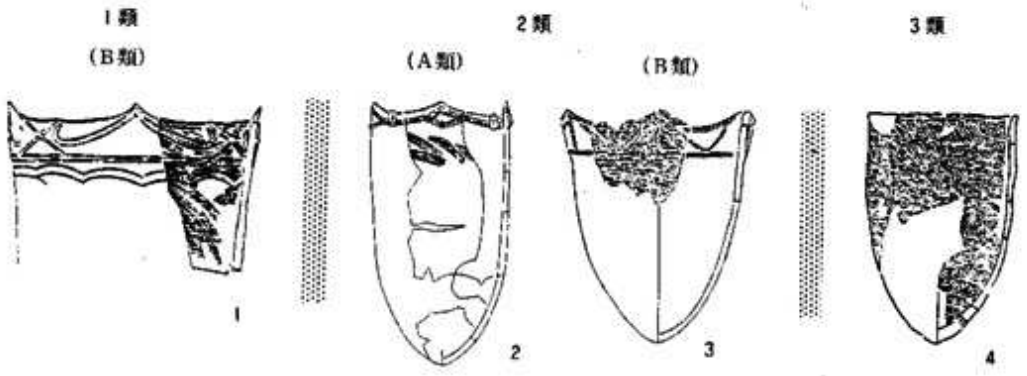
## 1　早期第Ⅴ群土器の型式学的特徴

古屋敷遺跡Ⅳ区１・２トレンチにおいては，神之木台式に比定される土器群が検出されている。特にⅣ区１トレンチ５号住居址からは，1/4程度が調査されたにとどまりながらも，比較的纏まった資料が得られている。この住居址出土の第71図４の個体はⅣ区２トレンチから出土した数点の破片と接合関係が認められるが，Ⅲ区１トレンチ・Ⅳ区３トレンチにおいては神之木台式に比定される土器は検出されておらず，その分布範囲が比較的狭小なことが理解される。このような事実に加えて，神之木台式に時間的に近接する土器型式の出土をみていない。このことから古屋敷遺跡出土の神之木台式は時間的な一括性が高く，後世の撹乱をあまり受けていないことが推察される。出土土器群の型式学的特徴も似通っており，これを証左するものといえよう。

事実記載においては第Ⅴ群中に１～３類を設け説明をおこなってきた。１類（第72図１）・２類（第72図２・３）は口縁部に隆帯による文様を描くもので，１類はこの下に貝殻条痕文と貝殻腹縁文が加わる特徴を有している。２類においては，貝殻腹縁文を欠くが，隆帯の下に貝殻条痕文が観察される個体が多い。３類（第72図４）は隆帯をもたず貝殻条痕文だけが観察されるものである。

１類における貝殻腹縁文は，先行する打越式の特徴となる文様で，神之木台式の成立を究明するにあたって興味深い資料といえよう。この１類の存在に理解を及ぼすためには，打越式の終末期の様相を明らかに要する必要がある。

また，１・２類における隆帯による口縁部文様帯の形成方法には，大きく２つの種類が認められる。ひとつは，口縁部の上端近くに隆帯を巡らせ，幅の狭い文様帯を形成するもの（第72図２）で，もうひとつは，口縁部に水平な隆帯を巡らせることによって幅の広い文様帯を形成するものである（第72図１・３）。事実記載では用いなかった分類概念であるが，ここでは前者をＡ類，後者をＢ類と仮称し，以後の記述に備えたい。この両類の違いは，何処にその発生が求められるのか，また，これが神之木台式の変遷においてどのように捉えられるのかが問題となろう。




第72図　古屋敷遺跡早期第Ⅴ群土器の構成

## 2　神之木台式土器の成立

神之木台式の成立過程を詳らかにするためには，まず先行する打越式の新しい段階の型式内容を理解しておく必要がある。このような作業は，神之木台式の型式内容を理解する際に，どの要素が前型式から継承されあるいは消滅したのか，また新生の要素は何かを確認するためにも重要となる。ここで問題とする打越式と神之木台式はいまだ層位的な検証は経ていないが，型式学的視点および共伴する東海系の型式により，両型式の前後関係についての大筋の理解は得られている。しかし打越式から神之木台式への，特に隆帯の生成過程については型式学的に充分説明されたとは言いがたい状況にある。

さて，神之木台式の成立に係わるものとして，すぐさま問題となるのは谷口氏によって「打越式W相」として指摘された土器群である（谷口1984）。この土器群の特徴は従来まで理解されていた打越式の特徴に加えて口縁部に隆帯が付くもので，南関東・静岡東部・山梨に主たる分布をおくことが明らかにされている。この隆帯は氏も指摘するように神之木台式の成立に係わるものであるが，その成立の経緯については筆者と見解の相違がある。ここでは，まず南関東・静岡東部・山梨に分布する打越式から神之木台式への隆帯の生成過程を型式学的にあとずけ，それに伴う文様帯構成の変化について説明を加えていきたい。

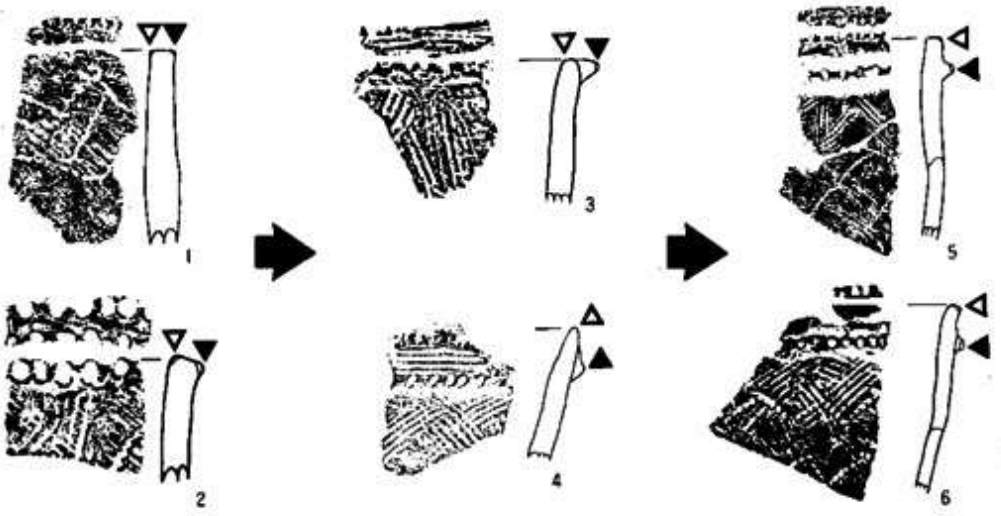
隆帯の生成の直前段階の資料は，いまだ稀少的存在であるが，第73図１・２はそれが窺えるものといえよう。特徴として，口唇部が緩やかに凹んだ角頭状の口縁部断面を呈し，口唇部の両端には刻みを加えている。口縁部上端が器外面に緩やかに突出したものもみられる。これらの口縁部形態を造り出している要因は口唇部の撫であるいは条痕調整によるもので，これによる粘土の器外面へのはみだしが隆帯の生成にかかわるものであろう。文様施文は胴部上半（IIａ帯）に集約され，胴部下半（IIｂ帯）は器面調整を残す無文帯となる（第73図１）。胴部上半のIIａ帯には，口縁部上端から条痕による斜格子目文が描出され，その下あるいは下に被るように貝殻腹縁の刺突による連続山形文が巡る。ここでは便宜上，前者をIIａ—１帯，後者をIIａ—２帯と呼称していきたい。

口唇部の調整を契機として，口縁部上端に隆帯の貼り付けがおこなわれるようになる（第73図２・３）。隆帯上側が口唇部と平坦に連なるかたちをとるもの（第73図２）は，隆帯発生の直後段階の特徴を示しているといえようか。さらに隆帯は口縁部上端から下降し（第73図５・６），ここに幅の狭い口縁部文様帯（Ｉ帯）が新たに生成する（第74図２）。口唇部および隆帯上には刻みが施されることが多く，先行する土器の施文部位を踏襲していることがわかる。文様帯の構成は隆帯の発生によって生成したＩ帯の下に，先行する土器から受け継がれたIIａ—１帯およびIIａ—２帯が配される。Ｉ帯には隆帯に併行する条痕調整が明瞭に観察できる個体が多く，IIａ—１帯・IIａ—２帯の文様モチーフに顕著な変化はみられない。ここでは口縁部上端に幅の狭いＩ帯をもつものをＡ類と仮称していくこととしたい。

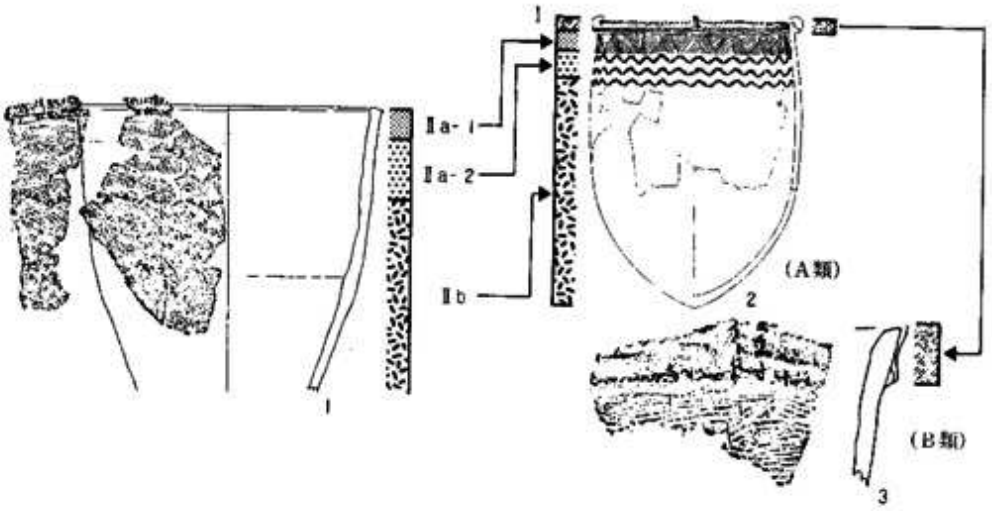
このほかに，口縁部上端よりやや下がったところに水平な隆帯を巡らせ，A類より比較的幅の広いI帯をもつ個体が散見する（第74図3）。IIa—1・IIa—2帯はA類とほぼ同様の内容を有している。このような口縁部に比較的幅の広いI帯を形成するものをB類と仮称しておきたい。水平隆帯に接するように波頂部からは隆帯が垂下するが，この垂下隆帯はA類にみられた耳状あるいは環状の突起が水平隆帯の下降，言い変えればA類（第74図2）におけるI帯の拡幅に伴って変化したものとおもわれる。

このような特徴からB類は，A類より後出する要素を示している。しかし，A類の特徴は引き続き神之木台式に継承されるようであり，一概にA類の時間的変化の所産として，B類の存在を説明しきれない部分がある。また遺跡における出土状況をみても，両者がともに検出されている割合が比較的多いことから現状においては時間差として分離する積極的な根拠を見出せない。このような経緯から，当該地域の打越式の終末期においてI帯の形成方法の異なるA類・B類が存在し，B類はA類から派生した可能性があるものと解釈しておきたい。そして，この両類が神之木台式のI帯の形成方法に受け継がれていくものと理解される。

神之木台式に特徴的な隆帯の系譜を，先行する打越式まで遡ることによって，その糸口を模索してきた。この結果，隆帯の生成は南関東・静岡東部・山梨に分布する打越式の終末期において求められることが型式学的に観察できた。また，古墁敷遺跡にみられた神之木台式におけるA類・B類が，この時期にすでに認められることも理解された。なお，当該地域の打越式の終末期に2つの段階を設けて説明したが，これらの土器群は層位的検証はもとより，遺跡単位での様相をみても現在のところ混在して出土しており，型式細分を検証できるにたる状況ではない。ここではあくまでも神之木台式における隆帯の系譜をあとずけることに主眼をおいており，打越式の細分は良好な資料の増加をまって慎重に対処していくべきであろう。




第73図　隆帯の生成過程




第74図　隆帯生成に伴う文様帯構成の変化

## 3　神之木台式土器の変遷

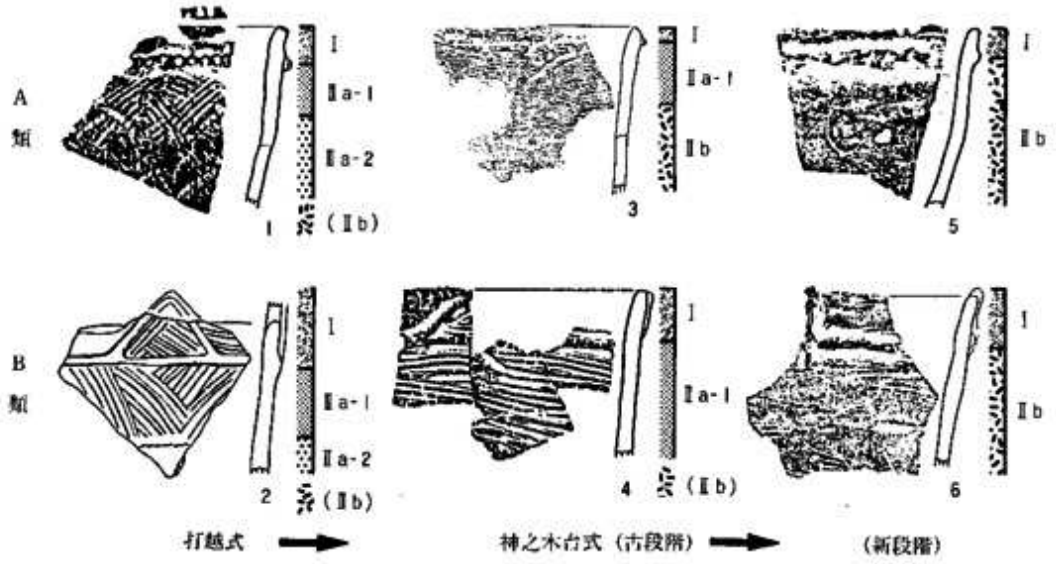
先述したように，神之木台式の特徴となる隆帯は，すでに南関東・静岡東部・山梨に分布する打越式の終末期に生成され，それが神之木台式に継承されていくことが予察された。

ここでは当該地域における打越式の終末期の様相が，神之木台式の変遷においてどのような変化の過程を踏んでいくのかを概観し，古屋敷遺跡出土土器群の編年的位置づけの拠りどころとしたい。

結論を急げば，神之木台式の変遷は型式学的特徴から古・新の2段階を設定することによって理解されるものと考えられる。ここで言う段階とは，型式学的特徴から観察される時間差を表す概念を意味し，細分型式を設定するための準備的な概念として理解しておきたい。細分型式は，段階として設定されたものが，層位的あるいは遺構の切り合い関係等により検証されたのちに成立するものと考える。

（1）　文様帯構成の変化

第75図3・5は口縁部上端近くには隆帯が巡り，幅の狭いI帯を形成する。この特徴は先の打越式での分類に従えばA類に該当するものである。古段階には隆帯の下に意図的と思われる貝殻条痕文が観察される個体が多い（第75図3）。この条痕文は打越式におけるIIa—1帯が継承されたものである。条痕文のモチーフは，打越式の斜格子目文が崩れたかたちが残存する個体も見受けられるが（第76図2），多くのものは横位・斜位に緩やかな弧を描く条痕文に変化している。また隆帯の下に沈線文により乱雑な文様を描くものが散見されるが（第76図3），これらは条痕文を置換させたものであろうか。新段階には隆帯下の条痕文によるIIa—1帯は消滅し，隆帯以下底部まで器面調整を残す無文部（IIb帯）となる。




第75図　打越式から神之木台式への文様帯構成の変化

第75図4・6は水平な隆帯を口縁部に巡らせ，幅の広いI帯を形成するものである。これも先の打越式の分類に従えばB類に該当するものである。古段階ではI帯を区画する隆帯の下に，やはりIIa—1帯として横位・斜位に緩やかな弧を描く貝殻条痕文が描出されることが多い（第75図4）。古屋敷遺跡出土の第71図1は，IIa—2帯が残存している好例である。この貝殻腹縁刺突によって描出されるモチーフには若干の変化がみられる。モチーフは下弦の弧を描き，連続山形文が縦に潰され横に広がったような形をとる。この弧の1単位は2回の刺突を弧の中央部付近で連結させるもので，山形文の1単位の刺突回数と同様といえる。新段階ではA類のそれと同様に，IIa—1帯の意図的な条痕文は観察されない（第75図6）。

神之木台式の成立の段階には，隆帯によるI帯の形成方法の異なるA・B類が認められたが，この両類は既に打越式の終末期に観察されることは先述したとおりである。A類・B類におけるI帯は神之木台式の変遷を通じて観察されるが，IIa—1（2）帯は消滅の方向を辿る。ここでは文様帯構成におけるIIa—1（2）帯の有無をひとつのメルクマールとして古段階（第75図3・4）と新段階（第75図5・6）の区分が設定できるものと考える。

（2）　隆帯による文様モチーフの変化

隆帯のモチーフは近年の資料の増加に伴って多様なバラエティーが存在することが判明している。この反面，モチーフの異同が必ずしも時間的なメルクマールとならないことから，これが神之木台式の変遷を見通すことを困難にしている。先にA類・B類を設定した経緯は，このような多様なバラエティーを表出している基本形を捉えようとすることにある。

A・B類は器周する隆帯によるI帯の形成のしかたに違いをみせるが，波頂部や波底部に垂下隆帯をつけることに共通点をもちながら，神之木台式を通して共存する。両段階には両類の違い

を越えて隆帯の断面形態やその加飾等の型式学的特徴に共通性が認められることはこれを証左している。

古段階におけるA類の特徴は口縁部上端近くに隆帯を巡らせ，これに接して波頂部や波底部からは短い隆帯が垂下する（第76図２～５）。B類は口縁部上端から間隔をおいて水平な隆帯を巡らせ，A類と同様に，これに接して波頂部や波底部からは隆帯が垂下し，これに加えて水平隆帯に向かって波頂部または波底部から斜めの隆帯が付けられ波頂部または波底部に三角形の区画を形成するものが多い（第76図６）。このほかに水平隆帯に加えて，口縁部上端に隆帯を巡らせるものが存在する（第76図７）。単にA・B類の中間的なものとする見方もあるが，波頂部下の三角形状のモチーフからの派生として捉えることも可能かと思われる。現状では水平隆帯による文様帯の区画を重視してB類の範疇としておきたい。

この段階のB類にはすでに蕨手文がみられるが，その発生の経緯については不明な部分が多い。ただ蕨手文が出現する部分は限定されている傾向にあり，先の三角形の区画を形成する斜めの隆帯の末端（第76図８）かあるいは隆帯により三角形に区画された波頂部下にみられる（第76図９）。前者は波頂部または波底部からの垂下隆帯を挟んで対をなす。蕨手は下から巻くことが多く，下吉井式のそれが上から巻ことが多いのと対照的である。

両類に共通した特徴として，隆帯の断面形態は低い三角形状を呈する。隆帯は無文のものも存在するが，多くは貝殻腹縁や篦状工具による刻みが施される。特に貝殻腹縁は多用される傾向にある。隆帯の脇にはこれを撫でつけたと思われる貝殻条痕が顕著に観察されることも特徴である。

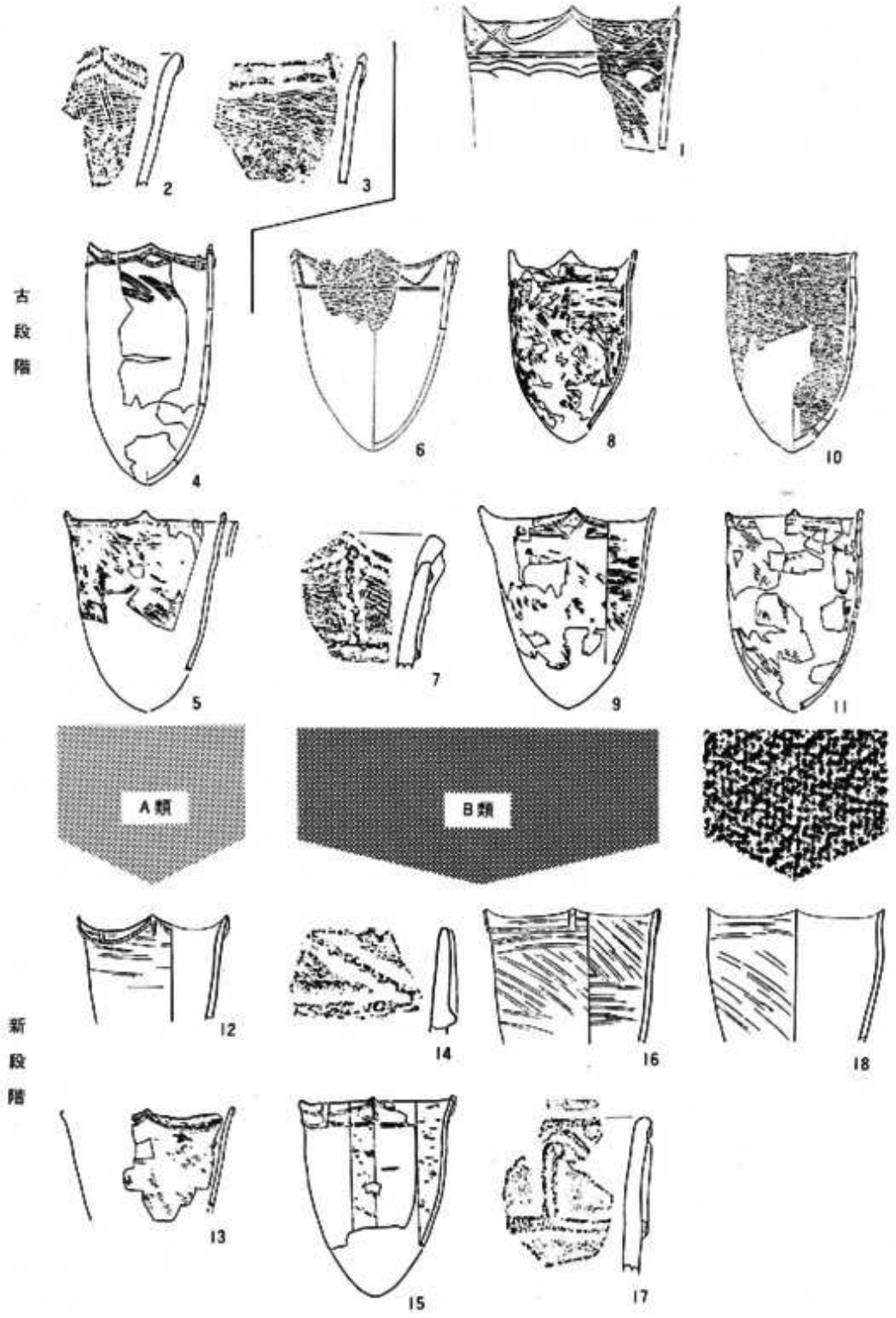
新段階におけるA類は隆帯が口縁部上端近くに添うものから，波頂部から波頂部へ垂れ下がるもの（第76図12・13）が顕著となる。波頂部から隆帯が垂下する場合には，器周する隆帯とを合わせたモチーフは，三叉状を呈するものが多い。

B類は古段階にみられた三角形状のモチーフを表出するらしいもの（第76図14）が散見する一方，これを欠いたもの（第76図16）やこの上にさらにもう一条隆帯が巡るものが多くみられる（第76図15）。後者の解釈については先に触れたとおりである。水平隆帯の上に巡る隆帯は波頂部から波頂部へ垂れ下がるもの（第76図15）や水平隆帯と平行に巡らせるものがみられる。波頂部から隆帯が垂下する場合に，水平隆帯と交わり十字状を呈するものも多い（第75図６）。

この段階のB類の中には貝殻背圧痕により偏平化した隆帯のモチーフをなぞるように，角棒状工具による押し引き文等が加えられる個体が散見される（第76図17）。

両類に共通した特徴としては，隆帯上は無文のもの（第76図16）もあるが，篦状工具による刻み（第76図12・14）や貝殻背圧痕（第76図13・15）が多用される。隆帯の断面形態は貝殻背圧痕が施されたものを除き，古段階に比べて太く高い傾向にある。貝殻背圧痕が施された隆帯はその施文のため，偏平化し台形状を呈する。

なお，神之木台式を通じて隆帯の加飾のとともに口唇部にも同様な工具によって加飾されることが多い。この起源は，打越式の終末期における隆帯の生成段階に求められ，この伝統が神之木




第76図　神之木台式の変遷

台式において施文部位を踏襲しながら，施文工具を変えて変遷していることが理解できる。また当該型式には隆帯をもたない土器が組成することも看過してはならない（第76図10・11・18）。

いままでⅠ帯の形成方法の異なるA類・B類は古・新段階にわたって観察されることが明らかとなった。ここでは両類のなかでも特徴的にみられる文様モチーフをとりあげて説明を加えたにすぎず，このほかにも多様な文様モチーフが存在している。今回は，資料が稀少なため早急な結論を避けたが，今後は全体が窺える資料をもとにこれを構成する諸属性を体系的に捉えていく作業をおこなっていく必要があろう。

## 4　早期第Ⅴ群土器の編年的位置

これまで説明してきたように，古屋敷遺跡において観察された，隆帯によるⅠ帯の形成方法の異なるA類・B類は，打越式の終末期にその発生が求められることが明らかとなった。

1類は，B類に該当するⅠ帯と貝殻条痕文のⅡa—1帯・貝殻腹縁文のⅡa—2帯の文様帯構成をとり，打越式の文様帯構成を受け継ぐものであった。しかし各文様帯内のモチーフには変化がみられ，特にⅠ帯・Ⅱa—1帯を構成する要素は2類と共通点を有し，先述した神之木台式の古段階の範疇で捉えられるものである。

2類はA・B類のⅠ帯に加えて，打越式からの名残りであるⅡa—1帯が観察される個体が多い。両文様帯を構成する要素は，やはり神之木台式の古段階の特徴を良く示すものである。

3類は貝殻条痕のみで隆帯をもたないものであり編年的位置づけに苦慮するが，1・2類が古段階に比定されることや5号住居址の出土状況から概ね古段階と考えられる。特に第72図4の個体は条痕の施文手法が1・2類のⅡa—1帯の条痕文のそれと類似することが指摘される。

このように，古屋敷遺跡出土の土器群は型式学的特徴から神之木台式の古段階に位置づけられることが明らかとなった。1類は打越式の終末期との関連を示唆するもので，2類はⅠ帯の形成方法の異なるA・B類の存在を良く示すものであった。3類は等閑視されがらな神之木台式における組成を捉えるための資料を提供している。5号住居址出土土器は，これらの状況を端的に示すものといえよう。

## 5　ま　と　め

これまで，古屋敷遺跡出土土器群を理解するにあたって派生する問題をとりあげてきた。この結論から，神之木台式の特徴となる隆帯は，南関東・静岡東部・山梨に分布する打越式の終末期における変化の過程にその発生が求められ，両型式は型式学的に連続が辿れることが明らかとなった。

神之木台式はその型式学的特徴から古段階と新段階に分けられ，前者は打越式の遺制を残すことを特徴とする。神之木台式を通じては，隆帯によるⅠ帯の形成方法に違いをみせるものが存在し，これをA類・B類と仮称した。A類は口縁部上端に幅の狭いⅠ帯を形成するもので，打越式

の終末期にみられたA類を根強く受け継ぐものである。B類は口縁部に幅の広いI帯を形成するもので，これもやはり打越式の終末期のB類にその起源が求められる。このB類は打越式の終末期においてA類から派生したものと思われ，打越式にはあまり盛行をみず，神之木台式に到って顕著となるようである。

このような考察のもとに古屋敷遺跡の土器群を観察したところ，その特徴は神之木台式の古段階として理解されるものであった。

この考察では，主として南関東・静岡東部・山梨に分布する打越式だけを対象とし，武蔵野台地以東に分布する打越式やこれと関連の深い「絡条体圧痕文土器群」との関連について，理解を及ぼすことができなかった。また，下吉井式との関連や菊名遺跡下層出土土器群の解釈については今回これを保留した。これらについては今後の課題としておきたい。

## 参考文献


荒井幹夫　1982「早期末葉から前期初頭にかかる隆帯文・沈線文土器群の実態とその編年」『研究紀要』2　富士見市遺跡調査会

荒井幹夫　1978「縄文時代早期末～前期初頭の土器について」『打越遺跡』　富士見市教育委員会
小出輝雄

岡本　勇　1970「下吉井遺跡」『埋蔵文化財調査報告』1　神奈川県教育委員会

小野正文　1984 a「神之木台式土器について―特に甲斐地域を中心として―」『研究紀要』1　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

1984 b「縄文時代早期・前期初頭の土器について―釈迦堂遺跡群を中心として―」『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　記録・論考集』（『神奈川考古』第18号）

神奈川考古同人会編　1983『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　土器資料集成図集』（『神奈川考古』第17号）

1984『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　記録・論考集』（『神奈川考古』第18号）

小出輝雄　1984「花積下層式成立直前の土器」『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　記録・論考集』（『神奈川考古』第18号）

渋谷昌彦　1983「神之木台・下吉井式土器の研究―その型式内容と編年的位置について―」『小田原考古学研究会会報』11

1984「神之木台式の検討」『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　記録・論考集』（『神奈川考古』第18号）

高橋雄三　1977「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物―とくに早期末～前期初頭の土器を中心として」
吉田哲夫　『調査研究集録』2　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

谷口康浩　1984「「打越式」の再検討」『東京考古』2

古谷健一郎　1984「神之木台式・下吉井式土器の変遷」『丘陵』11

## 図版出典（古屋敷遺跡出土は除く）

| | |
|---|---|
| 第72図1・2・5 | 広瀬昭弘他　1987『恋ケ窪南遺跡発掘調査概報』国分寺遺跡調査会 |
| 第72図3 | 関野哲夫・渋谷昌彦・鈴木敏中　1983「静岡県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集　穴ノ沢遺跡」<br>『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　土器集成図集』（『神奈川考古』第17号） |
| 第72図4・第73図1・3・第75図2 | 椙田稔他　1987『上川遺跡』堺野市教育委員会 |
| 第72図6～第74図1 | 関野哲夫・渋谷昌彦・鈴木敏中　1983「静岡県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集　穴ノ沢遺跡」<br>『シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題　土器集成図集』（『神奈川考古』第17号） |
| 第73図2 | 谷口康浩　1984「「打越式」の再検討」『東京考古』2 |
| 第74図2 | 多摩ニュータウンNo.534遺跡。正式報告がされていないため失礼ながら（谷口1984）から引用させていただいた。 |
| 第74図4 | 佐々木克典　1982『神谷原II』八王子市椚田遺跡調査会 |
| 第74図5・第75図12・14・16・18 | 高橋雄三・吉田哲夫　1977「横浜市神之木台遺跡出土の縄文時代遺物」『調査研究集録』2　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団 |
| 第74図6 | 清水比呂之　1982『多聞寺前遺跡I』多聞寺前遺跡調査会 |
| 第75図3・5・8・9・11・13・15 | 小野正文他　1986『釈迦堂I』山梨県教育委員会 |
| 第75図7・17 | 滝沢亮他　1989『山神下遺跡』相武考古学研究所 |

# 第4節　古屋敷遺跡前期第Ⅲ群1類土器の型式学的検討

中村哲也

## はじめに

諸磯式土器の研究は従来より関東地方西部の資料を中心におこなわれており，その型式学的内容が細部にわたって明らかにされてきている。しかし，同型式の分布圏に属する長野，山梨といった甲信地方における様相は，関東地方との対比によってある程度把握されているものの，地域的な特徴を捉えるような研究は余り進んでいない。古屋敷遺跡でも諸磯a式土器に該当する土器（第Ⅲ群1類土器）が出土しているが，その中には関東地方に類例がない特徴を持つ土器が存在する。ここではそれらの土器を編年的，系統的に位置付けることによって，古屋敷遺跡における諸磯a式土器の地域的な性格の一端を明らかにしてみたい。

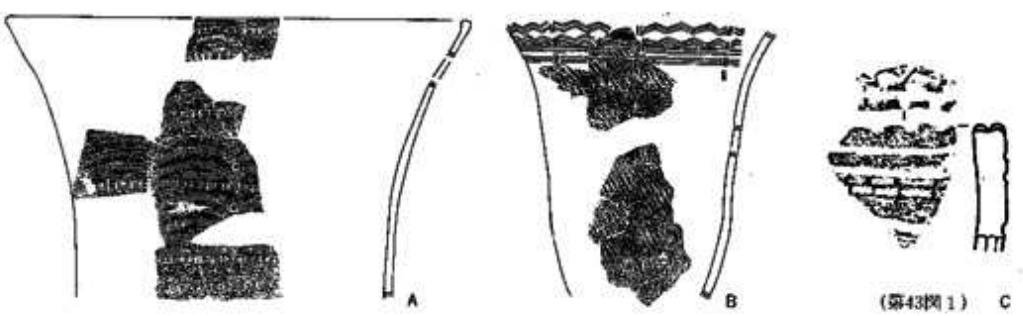
## 1　前期第Ⅲ群1類土器の型式学的特徴

今回の調査ではⅡ層とした縄文時代前期の文化層を中心に4個体の第Ⅲ群1類土器が出土している。各土器とも事実記載で基本的な観察事項はすでに述べているので，ここでは編年的・系統的な位置づけを考える際に視点となる土器と特徴のみを取りあげる（第77図）。

第1図Aは胴上部に櫛歯状工具によっていわゆる「肋骨文」が描かれた文様帯を有する。肋骨文は12単位の縦区画の間を弧線状の文様で連結したものであり，また，文様帯内に肋骨文施文後，横位の区画線を施しているのが特徴である。胎土には金色雲母片を多く含む。

Bは平行沈線によって細かい鋸歯状の文様が数段にわたって描かれたもので，均整の取れた鋸歯状文を描いている。胎土には小礫を含む。

Cは口唇部に特徴を持つ。口唇部には半截竹管状工具の内側を器面に付けて押し引くことによって形作られた，爪形状の刻みが付いた細いかまぼこ状の隆帯が2列存在する。また，口唇部下の口縁部には，やはり半截竹管状工具の内側を器面に向けて押し引くことによって表出された，節




第77図　古屋敷遺跡出土前期第Ⅲ群1類土器（A，B 1/8　C 1/2）

付きの平行沈線がみられる。この平行沈線と口唇部上の文様との決定的な違いは，後者が押し引きの“押し”の部分を意識的にしっかりとおこなっているのに対し，前者の“押し”は施文具を節の所で止めたという程度のものである。胎土には金色雲母片を含むが，Bの土器より少ない。

## 2　前期第Ⅲ群1類土器の編年的位置

次に，第1項でみてきた型式学的特徴をもとに，古屋敷遺跡前期第Ⅲ群1類土器を時間的・空間的に位置付けてみよう。

諸磯a式土器の時間的細分は，羽生淳子氏，川名広文氏によっておこなわれている（羽生1983，川名1987）。両氏とも鈴木徳雄氏が論じた「タテ区画の崩壊」を基本原理とした型式学的変遷（鈴木1979）を観点として，関東地方の遺跡における住居跡出土土器をもとに細別している。両氏の細分の仕方は異なるが，大筋ではタテ区画の存在するいわゆる「肋骨文」等のモチーフを描くものを古い様相，タテ区画がなく「三角形，木葉状，入組木葉状の図形」といった単独の文様を描くものを新しい様相の土器としており，ここでは資料の制限もあることから，前者を古段階，後者を新段階として大枠で捉え，時間的位置付けを考えていくことにする。

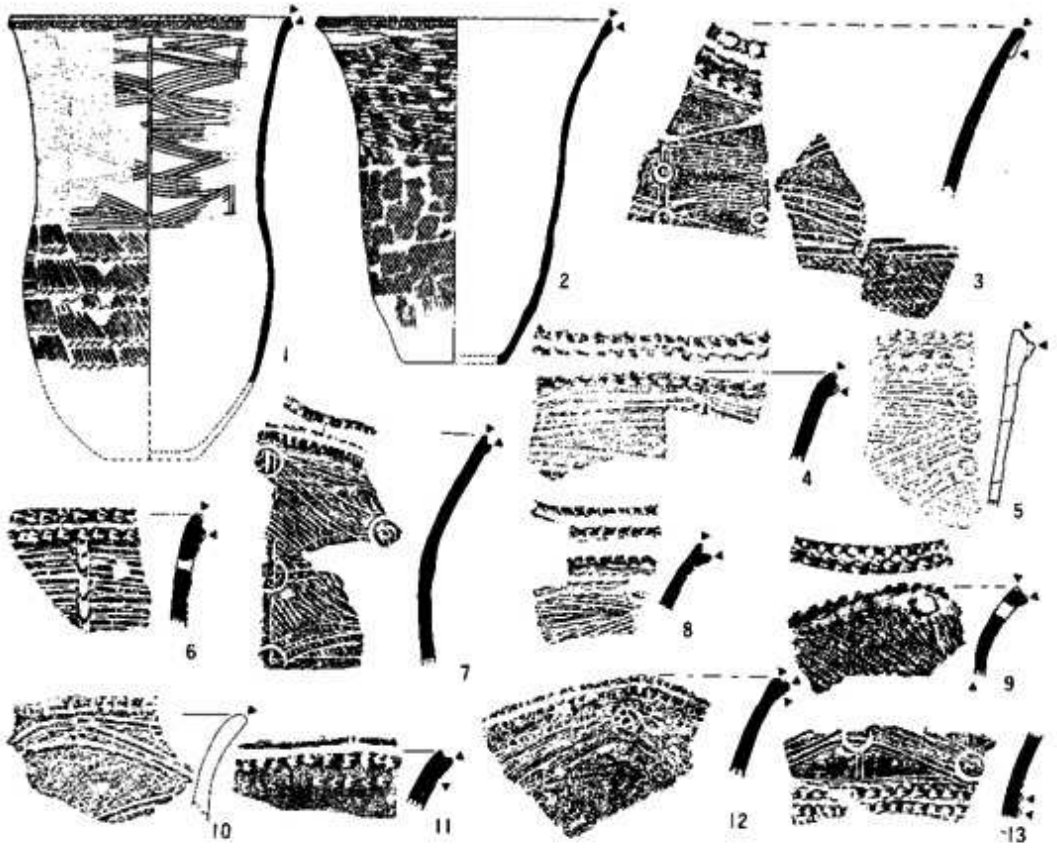
Aの土器は上記の細分案からみると，タテ区画を用いた肋骨文を有していることから，諸磯a式の古い段階に相当する。胎土に金色雲母を含む特徴は本遺跡の他の諸磯式土器（第Ⅲ群2類・第Ⅳ群土器）の過半数にみられることから，当土器が在地系であることを暗示している。また，文様帯内の横位の区画文は関東地方では類例がなく，地域的な特徴である可能性がある。(註1)

Bのような平行沈線によって鋸歯状の文様を口縁部に描く土器は，関東地方西部においては諸磯a，b式土器の組成を担うものとして普遍的に存在する。しかし，甲信地方の遺跡で出土した諸磯a，b式土器の中には余りみうけられない。小礫を含む胎土が関東地方の諸磯式土器によく認められる特徴であることを考え合わせると，Bは関東的な諸磯式土器といえる。細かい時間的な対応については，モチーフの形を視点として，関東地方の遺跡での他の土器との共伴例をみると，諸磯a式期のものである可能性が強い。(註2)

Cの土器の編年的位置を検討するには，資料が小片であるためにまず他遺跡での類例を集める必要がある。

Cと同様な口唇部を持つ土器は，山梨県釈迦堂遺跡，長野県十二ノ后遺跡，阿久遺跡，内田清心遺跡等で出土しており，関東地方の遺跡では確認できなかった。分布の傾向をみると，明らかに甲信地方独特のものであることがわかる。

では，具体的に各遺跡出土の類例土器をみていこう（第78図）。器形が復元できるものは，阿久遺跡で2個体出土している。両個体とも口縁部が外反する平口縁の深鉢形を呈し，胴上部から口縁部にかけては，半截竹管状工具を原体とする平行沈線によってモチーフを描いた文様帯が形成されている。器形については波状口縁を示す破片もある。また，文様帯についても幾つかの傾向が指摘できる。描かれるモチーフは，タテ区画を基点として斜位の集合線を配して菱形をつく



第78図　口唇部に隆帯を有する類似土器（1，2 1/8　他は 1/4）

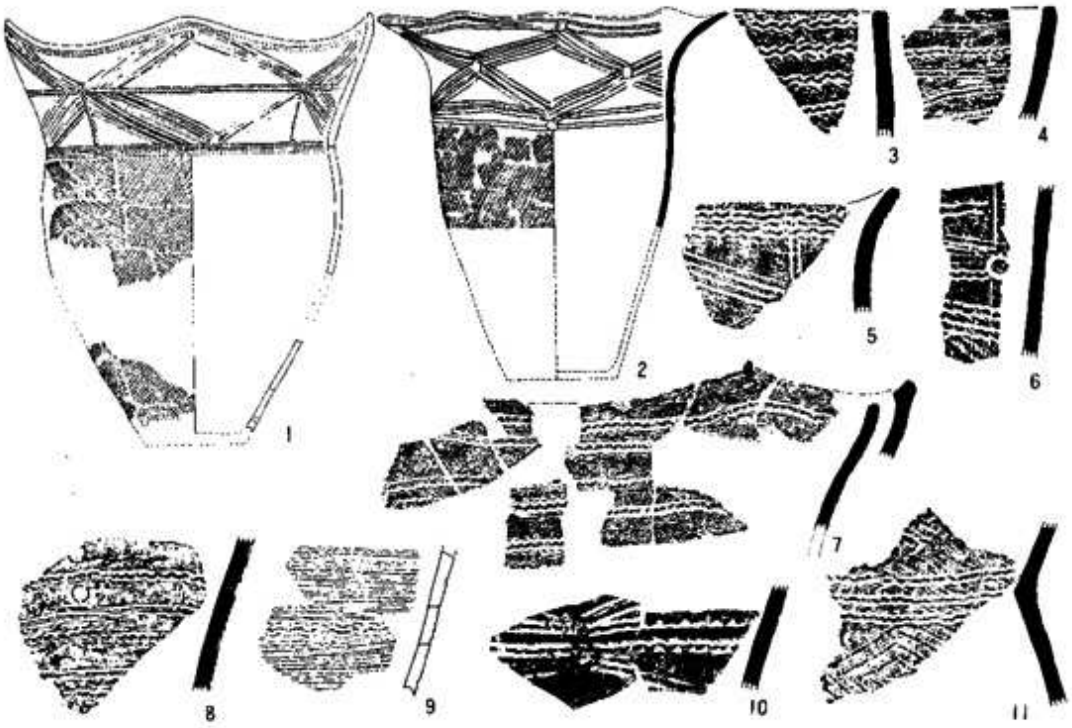
る肋骨文が多用され，口唇直下からモチーフが描かれているのが特徴といえる。

口唇部の形態にも細かいバラエティーが認められる。爪形状の刻みの付いた隆帯の表出方法は，押し引きによるものの他，一旦かまぼこ状の隆帯を用意しておいて，後から爪形状の刺突を加えた例も多い。また，隆帯を粘土紐の貼り付けによってかたちづくったものもみられる。変則的な類似例としては，口唇部上の隆帯に爪形状の刻みがないものや(11)，隆帯は存在しないが口唇部上に爪形列が施されたもの(10)，口唇部と同様な隆起帯が文様帯下端の区画文に用いられている例(13)などがある。

これらの土器の時間的位置付けであるが，タテ区画を有する肋骨文が描かれている例があることから，諸磯ａ式の古い段階に属することが予測できる。

次に，Ｃの土器のもう一つの特徴である節を有する平行沈線が施文された土器についてみていこう。類例は口唇部のときに挙げた遺跡において確認できる。一方，関東地方の諸磯式土器の中には認められず，やはり甲信地方に片寄る傾向がある。類例として挙げたものは，半截竹管状工具をややロッキングさせながら押し引いたもので，古屋敷の例とはやや異なるが，節のところで工具を止めるようにする施文手法が共通することから，同一系統の文様と考えて良いだろう。

器形が復元できるものは，内田清心遺跡と阿久遺跡で出土している（第79図１，２）。内田清



第79図　節を有する平行沈線が施文された類似土器（1，2 1/8　7 1/6　他は 1/4）

心遺跡のものは胴上部に弱い稜れを有し，口縁部が外側に開く波状口縁の深鉢形を呈し，阿久遺跡の例は口縁部が外反する波状口縁の深鉢形を呈する。どちらの土器も，節を持つ平行沈線によって上下を区画した文様帯が口縁部に形成され，文様帯内には半截竹管状工具を原体とする集合沈線によって4単位の菱形のモチーフが描かれている。また，文様帯を縦断するタテ区画は存在しない。(註3)

他の文様との関係でみてみると，古屋敷遺跡の例と同じように，爪形状の刻みが付いた隆帯を有する口唇部や，半截竹管状工具による集合沈線と一緒に用いられているものがみられる（第78図8，第79図1，2，5，9）。特に，後者とは密接な関係にある。

節を持つ平行沈線が施された土器の時間的位置づけについてであるが，爪形状の刻みの付いた隆帯を有する口唇部と一緒に施文されている土器については，前述した例から諸磯a式の古い段階に想定できる。

一方，阿久遺跡住居址26出土の類例は（第79図7），押し引きというよりは半截竹管状工具の両端を交互に支点として連続する小さな弧状の線を表出したもので，関東地方の黒浜式土器にみられるいわゆる「コンパス文」に近いものである。また，口縁部がやや立ち上がりぎみに外側に傾く器形も，黒浜式のコンパス文の土器と共通する。ただ，阿久遺跡のものは黒浜式土器と違って胎土に繊維を含まないことから，一種の黒浜式の模倣土器と思われる。節を持つ平行沈線は，このようなコンパス文的な文様から派生したと考えられるため，諸磯a式の前段階にあたる黒浜

式期から用いられていた可能性が予測できる。また，阿久遺跡・内田清心遺跡の復元個体を含む口唇部に隆帯を持たない資料には，文様帯を縦断する諸磯a式的なタテ区画が無いものが多いこともこの予想を裏付ける。このことから，節を持つ平行沈線が描かれた土器は，黒浜式のコンパス文土器出現期から諸磯a式古段階までの時間幅の中にはいるものとして，ここでは捉えておきたい。(註4)

以上の類例土器の検討から，古屋敷遺跡のCは諸磯a式の古い段階の甲信地方特有の類型として位置付けられる。

## 3　甲信地方の諸磯a式土器成立時における文様帯区画文の形成

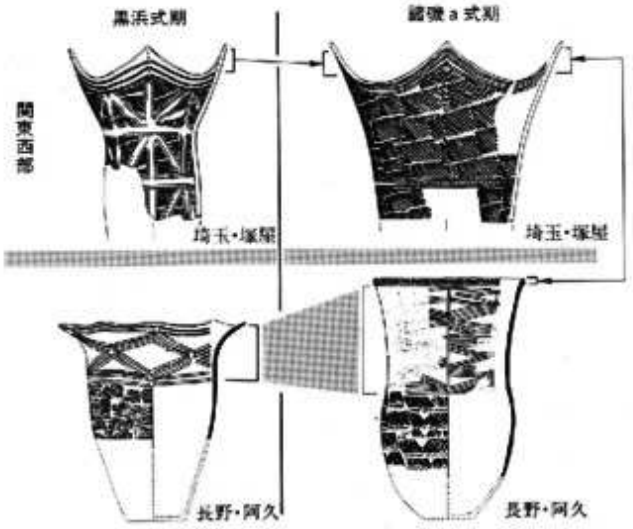
本項では，古屋敷遺跡のCにみられる口唇部形態の存在が，該期の土器変遷史の中でどのような意味を持つのかを，文様帯区画文の形成という視点から検討してみたい。

諸磯a式土器は斉一性の強い土器として，関東地方西部から甲信地方にかけて全体的に分布する。その斉一性の強いひとつの特徴として，爪形列や平行沈線によって上下を区画した胴上部文様帯の存在があげられる。この文様帯の区画文は半截竹管状工具によって描かれる場合が多く，工具を刺突して表出した爪形列，工具の内側を器面に向けて引くことによって得られる平行沈線，その平行沈線上に同一工具の刺突による爪形文を加えた爪形列の3種類が認められる。普通これら3種類のうちの一つを文様帯の上下端に1～4列配して区画文とする。

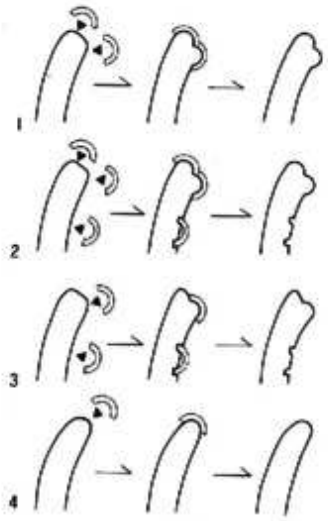
以上のような文様帯区画文は，関東地方における前段階の土器型式である黒浜式土器にすでにみられるもので，諸磯a式土器の文様帯区画文は黒浜式土器の系統上に成立したものと考えられる。

一方，甲信地方の諸磯a式前段階の在地系土器としては，阿久遺跡における阿久III期I群土器，釈迦堂遺跡において2群1類とした仮称釈迦堂Z3式土器が，少なくともコンパス文土器出現期以降の黒浜式土器と並行するものとして知られている（百瀬1982，小野1986）(註5)。胎土に繊維を含まず，内面に指頭圧痕等の整形痕が明瞭に残るもので，外面に縄文が施される。縄文地に沈線を描いたものもあるが，量的には非常に少ない。また，前項で示したように，節を持つ平行沈線や集合沈線が施された土器も黒浜式のコンパス文土器出現期以降の在地系土器として存在する可能性がある。良好な一括資料がないため，前者の土器群とどういう関係にあるかは不明であるが，集合沈線による菱形のモチーフは前段階の土器群とのつながりを予想させる(註6)。これらの土器群には，諸磯a式土器の文様帯区画文にみられるような手法は認められない。

以上のように諸磯a式前段階の甲信地方には，関東地方西部とは異なった独自の土器群が存在する。この土器群と諸磯a式土器との間には系統的な断絶が認められるため，甲信地方における諸磯a式土器の成立にあたっては，他地域の土器群からの影響があったと予想される。特に，胴上部文様帯の形成については，関東地方西部で発達した文様帯区画文の採用が大きな役目を果たしたと思われる。では，次にその文様帯区画文の採用のされ方を考察してみよう。




第80図　口唇部に隆帯を有する土器の型式学的位置




第81図　口唇部形成過程

釈迦堂Z３式に代表される縄文のみの土器は諸磯a式土器との共通項が少なく，どの程度その要素が諸磯a式に受け継がれたかはわからないが，関東地方西部で用いられていた文様帯区画文がその伝統上に取り入れられたとしても，もともと文様帯が存在しないため，特別な変容や制約は受けなかったと思われる。

一方，すでに文様帯が存在している土器に新たに文様帯区画文を採用する場合は，文様帯区画文の施文場所は既成の文様帯の位置に規制されることになる。節を持つ平行沈線や集合沈線による文様をメルクマールとする土器は，文様帯が口唇部ぎりぎりの所まで形成されているため，文様帯の上端を区切る区画文は必然的に口唇部付近に施文せざるを得ない。例えば，平行沈線上に爪形状の刺突を加えた爪形列２列を文様帯区画文として取り入れた場合，１列は口唇部上に，もう１列は口唇部外側の稜線上に施文することになる。口唇部上は幅が限られ，稜線上はもともとある程度角度を有していることから，そこに半截竹管状工具の内側を器面に向けて文様を描けば，自然に２列の細いかまぼこ状の隆帯が作り出される（第81図１）。つまり，古屋敷遺跡のCにみられるような口唇部形態は，諸磯a式土器の成立に伴って，在地の伝統を残す土器に関東系文様帯区画文が採用されたことによって生成されたものといえるのである（第80図）。

このような解釈をとれば，第２項で指摘した口唇部形態に様々なバラエティーが存在することも説明が付く。ここでは図版に示したものがどのような文様帯区画文を採用した結果であるかを記載して説明にかえたい。第78図10は１列の平行線上に爪形状刺突を加えた爪形列，11は口唇部の稜上と口唇部直下に２列の爪形列，12は３列の平行沈線上に爪形状刺突を加えた爪形列を取り入れた結果といえる（第81図２～４）。なお，押し引きや隆帯の貼り付けによる表出方法，文様帯下端の区画文への採用は型式学的に後出する現象と考えられる。

## 4 まとめ

第1～3項で検討してきたように，古屋敷遺跡前期第Ⅲ群1類土器はおおよそ諸磯a式の古い段階に属し，その中でもCとした土器は，該期の甲信地方に特有にみられる類型であることがわかった。さらに，Cに代表される土器の地域的特徴となっている細い隆帯を有する口唇部形態は，諸磯a式土器成立時に採用された関東系文様帯区画文の変容した姿として捉えられる。この変容は，もともと伝統にはない要素が他から取り入れられた結果引き起こされたもので，甲信地方における諸磯a式土器成立過程の一端を示している。

以上のことから古屋敷遺跡前期第Ⅲ群1類土器は，諸磯a式という斉一性の強い土器群の成立に際して関東地方西部とは異なった成立過程を示す，甲信地方の地域的背景が表れている土器群として位置づけられる。

### 註

註1　Aにみられる横位の区画文は，後述する内田清心遺跡の土器（第79図1）の横位の区画文との関係が考えられるが，ここでは体系的に論じる準備がないので，指摘に留める。

註2　諸磯式土器のうち，細かい鋸歯状や波状のモチーフを口縁部に数段重ねた文様を有する類型は，諸磯b式になるとその鋸歯状や波状のモチーフが小さな弧を連ねたようなモチーフに変化する傾向が認められる。例としては，諸磯b式土器を単純な形で出土した埼玉県塚屋遺跡23号住居跡や同上南原遺跡第7，8号住居址の資料が良好なものである。

註3　内田清心遺跡の資料については，以前，島田哲男氏の御好意により実見させていただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。報文では文様帯区画文について「刺突文」としか記述していないが，それが押し引きによるものであることが実見の際確認できた。

註4　黒浜式土器の時間的細分案は，新井和之氏，鈴木素行氏，奥野麦生氏によって示されているが（新井1982 1988，鈴木素1985，奥野1989），各氏ともコンパス文土器を指標とする段階・期を黒浜式期の途中に設定している。

註5　阿久遺跡の報文の中では，Ⅰ群に共伴するⅡ群土器（黒浜式土器）の違いを主な基準として阿久Ⅲ期を時間的に2細分する案も示している。このうち新段階をコンパス文土器が伴出する時期としていることから，Ⅰ群土器はコンパス文土器出現期以前から存在していた可能性がある。

註6　該期の菱形文を描く土器については，金子直行氏の論文に詳しい。（金子1989）

### 引用・参考文献


新井和之　1982　「黒浜式土器」『縄文文化の研究3』雄山閣

〃　1988　「黒浜式土器段階分け発想法」奈和第26号

小野正文　1986　「まとめ　釈迦堂S－1区の土器分類」『釈迦堂Ⅰ』山梨県教育委員会　日本道路公団

金子直行　1989　「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」埼玉考古第25号

川名広文　1987　「縄文前期後葉の土器について」『鷺森遺跡の調査』上福岡市教育委員会

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982　『上南原』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983　『塚屋・北塚屋』
鈴木素行　1985　「土器に関する問題」『原町西貝塚発掘調査報告書』古河市史編さん委員会原始古代部会
鈴木徳雄　1979　「諸磯式土器文様の変遷について」『白石城』埼玉県遺跡調査会
〃　1989　「諸磯a式土器研究史(1)」土曜考古第13号
長野県松本地方事務所・松本市教育委員会　1987　『松本市内田清心・砂原遺跡』
日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1976　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市その4』
羽生淳子　1983　「稲荷丸北遺跡出土の縄文時代前期土器について」『稲荷丸北遺跡』稲荷丸北遺跡調査団
百瀬新治　1982　「出土遺物の検討　土器　阿久Ⅲ期」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　原村その5』日本道路公団名古屋建設局　長野県教育委員会

## 付図出典遺跡

第2図1～4，6，8，9，12，13，第3図2，7，8阿久遺跡，第2図5，第3図9釈迦堂遺跡，第2図7，11，第3図3，5，6，10，11十二ノ后遺跡，第2図10，第3図1内田清心遺跡

# 第5節　早期土器片中にみられる動植物体圧痕について

磯田　進・田中　総

## はじめに

本遺跡出土の土器片中に動植物の圧痕のみられる資料が3点検出された。そのうち2点は植物種子の圧痕，残りは動物体の圧痕である。いずれも縄文時代早期に属するものである。本節では資料の観察およびの分析を試み，遺跡内での存在意義とその背景を考えてみたい。

植物種子の同定は，昭和大学磯田がおこない，類例の指摘と分析は田中が担当した。

## 1　土器片にみられる堅果種子圧痕の同定

古屋敷遺跡より出土した土器の破片2片より，“どんぐり”状の木ノ実の圧痕が認められた。この木ノ実（写真19）は，円柱状卵形で先端部は尖っており縦の筋があり，長さ16.5㎜，径7.72㎜であった。先端部は尖っているが基部はやや不明瞭であった。残りの一方（写真18図）は，長さ12.2㎜，径6.5㎜であるが原型をとどめていない。この2つの木ノ実が同一のものであるか否かについては不明である。

当時，木ノ実は大変貴重な食料であったことは想像に難くなく，釈迦堂遺跡など県内の遺跡からもまとまって発見されている。これらの木ノ実はおもにカヤを始めとしてナラ，クルミ，トチなどで食料として保存されたものといわれている。何れにしても土器を作る際に混入したものであることを考え合わせると，比較的身近な木ノ実であることが推察される。

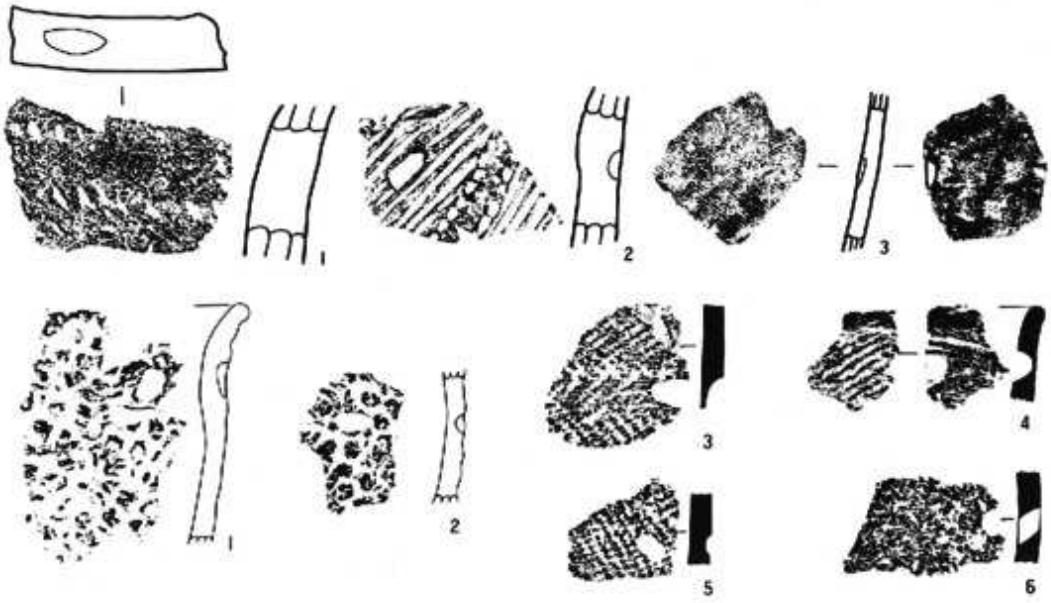
石膏で復元した木ノ実はカヤまたはイヌガヤに大変類似している。カヤの実は楕円形で長さ20～30㎜，径10～20㎜であるが，堅い種皮は長さ15～25㎜，径7～15㎜で両端が尖り縦溝がある。東北地方南部から九州，沖縄にかけて分布し，昔から食用に用いられていた。尚，本植物の遺体は，関東以西の日本の洪積世や沖積世から報告されている。またイヌガヤの実は長さ20～30㎜，径8～15㎜であるが，堅い種皮は長さ15～20㎜，径は5～10㎜で先端は尖り，基部はやや丸みを帯び，へそがある。北海道から九州の広い地域にかけて分布している。カヤは食用にされているのに対して，イヌガヤは独特の臭いがあり食用にされない。

写真17　カヤの実（現生：1/1）

以上のことから，県内の遺跡から発見された木ノ実などを考慮すると，比較的形が類似しているカヤの実ではないかと推測される。

## 2　堅果種子圧痕土器の観察

種子圧痕のみられる土器片は，出土地点を異にするが，いずれもⅢ層より出土している。それぞ



第82図　古屋敷遺跡の動植物圧痕土器と類例（1～3：古屋敷　4，5：福井破入　6～9：富山極楽寺）

れすでに図示されており，第82図1がⅣ区1トレンチ出土の第30図19に対応し，同じく2はⅣ区2トレンチ出土の第38図8に対応する。

1は第Ⅲ群5類に帰属する胴部破片であり，文様要素として絡条体圧痕文が施文される。種子圧痕は土器破片の割れ口にみられ，ほぼ器壁中に混入されるかたちで圧痕が確認された。種子は器面に対し横向きに混入されている。輪積みの際の粘土紐の接合面ではないことから，すでに胎土に混入していたものと考えられる。

写真18　古屋敷遺跡出土の植物圧痕土器(1)

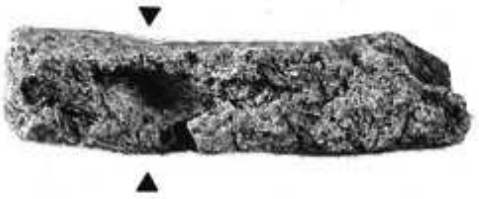


写真19　古屋敷遺跡出土の植物圧痕土器(2)

2は第Ⅲ群4類に帰属する胴部破片である。沈線文および刺突文がおもな文様要素であり，器面に種子の横断形が圧痕として観察される。1と同様に器面を貫通してはいない。しかし，1と同じ性格の混入物であったかについては，観察所見からいくつかの差異が指摘しうる。まず沈線文の施文と種子圧痕の関係をみてみると，沈線文は単一の棒状工具によるもので，浅く斜位に施文される。そして，この圧痕部周辺における沈線が種子圧痕により切られておらず，圧痕を意識しながら連続的に施文を行っている。したがって，沈線文施文段階にはすでに種子が外れていたものと考えられる。また，このことは圧痕縁辺における粘土が内面にくるまるように観察され，なおかつ圧痕が種子の原型をとどめず，つぶれたように観察されることからも言えることである。

以上のように本遺跡でみられる種子圧痕土器は胎土に混入されたものが製作，焼成段階を通じて器壁中に残されているものと，焼成段階もしくは施文段階以前に器面に露出した種子が脱出され，その痕跡のみがとどめられるものの二者に分類される。

## 3　貝殻片圧痕土器の観察

写真20に図示した動物体の圧痕のみられる土器片は，Ⅳ区１トレンチⅢ層出土のものである。なおトレンチ内における事実記載では図示されていない。Ⅲ群６類に帰属される薄手無文土器群の胴部破片と考えられ，器厚は約５㎜を測る。色調は灰褐色を呈し，胎土に多量の細砂粒と微量の繊維を含む。焼成は良好である。動物体の種類は貝類と断定され，土器破片内面の端部にその圧痕が観察される。貝殻の輪郭の遺存状況から推察すると，あらかじめ破砕され胎土に混入されていたものと思われる。現存する圧痕の範囲は幅約８㎜，長さ約４㎜を測り，殻表面の細かい放射肋および輪脈が布目圧痕様にネガティブなかたちでみられる。以上，圧痕にみられる諸特徴から推察すると，貝片は二枚貝種であるアサリに同定される可能性が高い。

## 4　動植物体圧痕土器の類例と分類

本遺跡にみられるような動植物体圧痕土器の類例は縄文時代早期に限らず，時期的・地域的にもかなり幅広くみられ，各地の遺跡で検出されている。なかでも縄文時代前期の大型住居址が多数検出された秋田県上ノ山Ⅱ遺跡からは「ドングリ圧痕土器」として数量的にも前例のない122点の種子圧痕土器片が集中地点をもって出土している（山崎1989）。

ここで，種子圧痕土器の出土した遺跡で，本遺跡と時期的に近接するものを列挙すると，静岡県清水柳遺跡，福井県破入遺跡（第81図４・５），富山県極楽寺遺跡（第81図６～９）があげられる。そのうち前二者が早期に所属する。清水柳遺跡では条痕文系の無文土器群中の胎土に「ドングリ」を含有しているものが数量的には不明だが検出されている。現時点で本遺跡と時期的・地域的に関係する可能性が高いと推察されるのはこの遺跡例だけである。また，破入遺跡は押型文土器の中では新しい段階に位置づけられ，種子圧痕のみられる土器では現在最古のものである。出土点数は８点と比較的多く，「どんぐり状圧痕」は器面圧痕と器壁混入の例が報告されている。そして，極楽寺遺跡では前期初頭に位置づけられる土器群中15点に「ドングリ状」の圧痕および混入のみられることが報告されている。

貝殻片混入土器は，縄文土器製作技術の中で，時期的・地域的にその混入の実際が具体的に把握された例は現在のところ知られていない。したがって，本遺跡の資料も，その混入の実際については意図的なものか偶然なものかという確証をもった分析はできない。ただ，アサリは早期という枠のなかで考えた場合，食料としての需要は高くとも，施文具もしくは加工の際に砕片を生じるような貝製品に利用される例はほとんど皆無であったと思われる。よってここでは，食料として集落に運び入れられ，残滓となったアサリの貝殻が，何らかの理由により破砕し，土器胎土

中に偶然混入した場合を想定したい。このことから，この土器の出自をもとめるならば，海浜部に位置した貝類の採集の行われていたであろう集落で製作されたものと解釈される。

種子圧痕土器については，早期の例である清水柳遺跡，破入遺跡とも資料の提示が少ないため，本遺跡と明確な比較はできない。ただし，破入遺跡例では拓影図からみると楕円文の粒子が種子圧痕によって切られているものがある。このことが第81図2の土器と同様の経緯をもつものかは判然としない。しかし，第81図2は断面図にみられるように圧痕は浅く，種子が器面に露出したままであったことがうかがわれる。したがって，種子を無視して押型文原体が回転施文されたとは考え難く，また同時に，種子を器壁に残置させたまま施文段階に至らなかったことを示すのである。すなわち，これらは種子を抜去した結果生じた場合の圧痕をとどめたまま施文されたか，もしくは施文後，圧痕が加えられた場合のいずれかが想定しうるのではなかろうか。この事実をもとに，ここでは前者を「混入」として，後者を「圧痕」として，それぞれを区別したい。また，同様のことは極楽寺遺跡例にも当てはまる。この様な観点をもって例示すれば，以下の分類基準が設定しうる。

(1) 成形段階以前に胎土に混入された種子が，施文段階に至って器面に露出した場合，意図的に摘出され，器面調整を経た後，文様が施文されるもの。圧痕もしくは貫通として観察される。

(2) 成形段階および器面調整を経て，施文された後に種子圧痕の行われるもの。器面はほぼ乾燥しているので圧痕形態は浅く，“埋め込み”または“貫通”はほとんどの場合困難である。

(3) 上記の二例が一個体で同時に行われるもの。胎土混入のものはそのまま残され，種子圧痕は器面調整もしくは施文後に行われる。混入・圧痕がともに観察される。

以上の三例がこの種の土器群には想定できるのではないだろうか。先にも述べたように本遺跡においては(1)または(3)例が充当するものと考えられる。

また，この諸例に土器の収縮や施文順序などの具体的諸条件を加味したうえで，器面に限り器壁に種子を残したまま焼成段階に至らせる場合を再考するならば，いずれも種子の周辺には，土器の収縮にともない，少なからず亀裂の発生する蓋然性の高いことが指摘できよう。したがって，種子の摘出という行為は土器製作のうえで最低限に不可欠であったと推察される。さらに，種子の原型がとどめられていないものは，露出した種子の摘出が行われた結果によるものと解釈せねばならない。しかし，器壁内に混入している場合の種子が収縮時にどのような影響を及ぼすのかは推測の域を出ない。

## 5 ま と め

従来，種子圧痕をはじめとする動植物体圧痕土器に対しては，季節を限った食料採集と土器製作の同時性を考え合わせ「偶然性」の方面から解釈するものや，「流行」という言葉に置き換え，混入に「意識的」な動作が働いたものとする考えなどが主体を占めていた。これらはいずれも，

その特異性のみが指摘されるにとどまっている。なおかつ，そのほとんどが成形（整形）→施文→焼成という土器製作の各段階を無視した空論に依拠したものであり，しかも「圧痕」と「混入」の二者が混同されたまま一切の解釈が行われたものでもあった。このことから本稿では，資料の貧しさという制約を受けざるをえないが，分類に不可欠な観察と，その基礎概念の確立に眼目をおいた。そして，それらを検討した結果，種子圧痕という事実に対し，「混入」および「圧痕」という二つの場合があることを，具体例をもって指摘した。なお，今回の発掘資料ではその性格・系譜を述べるには至らなかったため，ここでは今後の類例に備え，本資料の分析内容を提示するにとどめておくことにする。

しかし，先にも述べたように現状の分析例には，これらの意義を高めることの困難な場合が散見される。例えば，豊富な分析データを提供した上ノ山II遺跡においても，その分析概念は土器としての機能を果たすか否かという極めて一面的なとらえ方であり，論点の飛躍にも看過すべからざるものがある。ここで明らかにすべきことは，「ドングリ圧痕」が偶然か必然かというその特異性の裏付けではなく，土器製作という行為，またはその技術の中においてこの種の土器の存在がどのように社会のあり方を反映しているかということにあったのではなかろうか。このことを前提にデータを導き出し，それから「ドングリ圧痕土器」の性格なり，系譜なりを論ずるのが順当であったものと思われる。よって今後はこれらと同等な資料の観察・分析を詳細に行い，種子混入の諸形態を具体的に明らかにすることにより，その実態を把握することが当面の課題とされよう。

また，先にも示した清水柳遺跡の近隣に位置する茅山下層式期の元野遺跡では，炭化したクリおよびミズキの種子が1000個以上集積された状態で出土したことが報告されている。条痕文期の遺跡において積極的に可食植物の集積が行われていたことを示す例であり，この様な場で土器製作が行われれば，必然的にドングリに代表される種子混入の確率も高くなるものと考えられよう。

遺跡の性格という点からの問題提起も今後の課題としなければならない。

## 引用・参考文献


石井良一・仁科章　1977　『破入遺跡』

小島俊彰　1965　『極楽寺遺跡発掘調査報告書』

小林達雄　1978　『縄文土器』　「日本の美術」145

笹津海祥・瀬川裕市郎ほか　1976　「清水柳遺跡の土器と石器」　『沼津市歴史民俗資料館紀要』1

佐原眞　1979　「土器の用途と製作」　『日本考古学を学ぶ』2

瀬川裕市郎ほか　1975　『元野遺跡発掘調査報告書』

千葉市加曾利貝塚博物館　1975　『縄文土器の技術』

山崎文幸　1989　「ドングリ圧痕土器」　『上ノ山II遺跡』補遺

# 第6節　古屋敷遺跡における花粉分析ならびにプラント・オパール分析

外山秀一

## はじめに

縄文時代早期以降，人々の居住の場となった古屋敷遺跡[1]（以下当遺跡）は富士山を南方に望み，その噴火活動のなかで盛衰を繰り返してきた。また当遺跡の周辺地域（以下当地域）も，少なからずその噴火活動の影響を受けたきたところである。

完新世における富士山の活動史のなかでも，約10,000年前から5,000年前までは静穏期[2]とされ，富士黒土層とよばれる黒色の腐植質火山灰が生成された時代である。こうした状況下における当遺跡の立地環境はいかなるものであったのだろうか。

遺跡の立地環境を復原する際には，それをとりまく自然現象とそこでの人文現象を明らかにする必要がある。筆者は，地形分析と花粉分析，プラント・オパール分析をとおして，上記のテーマの一端を明らかにしようと試みている[3]。これらの目的と方法のうち，ここでは花粉分析とプラント・オパール分析を用いて当遺跡の植生環境について検討することにしたい。

その際に，比較的安定した地層の堆積状況を示す富士黒土層を対象とした。同層は，当遺跡にみられる地層のなかでも植生環境を検討するうえで比較的良好であると考えたからである。

## 1　遺跡の立地と地層の特徴

富士吉田市北東部の大明見（あしみ）地区古屋敷に所在する当遺跡は，道志（どうし）山地西端にあたる通称背戸山南麓の緩斜面に立地する[4]。標高780m前後の比較的高燥な土地条件のもとに，遺跡は営まれたものと考えられる。その前面には，古屋川のつくる谷底低地が狭長に発達する。古屋川は，富士山から流出した溶岩流によりその流路を塞がれた形となっており，大明見地区の北方を溶岩の崖に沿いかろうじてその流路を見つけだすかのように流下している。また低地は，泥流や溶岩流[5]により桂川流域平野への出口を閉ざされた歴史をもち，そのたびに湿地あるいは沼沢地となった地域[6]で，当遺跡の北方に位置する明見湖はその面影を今日に留めている。このように，当遺跡は富士山による火山災害を除けば，遺跡の立地条件としては恵まれた地にあったといえる。

分析用試料の採取は，第Ⅳ区第3トレンチ（第Ⅲ章第44図）でおこなった。全層が火山起源の堆積物となっており，このうち地表面下約200cm～300cmにかけて堆積する富士黒土層を分析の対象とした。同層は，層相の違いから上位よりⅠ～Ⅴの5層に細分される。全般的には黒褐色や暗褐色を呈し，細粒の腐植質火山灰層からなる。各層の層相は，以下のとおりである。Ⅰ層―暗褐色シルト質（上部にスコリア混じり），Ⅱ層―暗褐色粗粒シルト質，Ⅲ層―黒褐色粘土質，Ⅳ層―暗褐色粘土質，Ⅴ層―暗褐色粘土質（赤褐色焼土混じり）。なお，Ⅰ層は縄文時代前期に比定される土器の包含層，Ⅱ層は同じく早期後半の土器の包含層，Ⅲ～Ⅴ層は早期住居址の埋土で

ある[7]。

分析用の試料は，Ⅰ層とⅡ層，Ⅴ層については上部と下部より2試料ずつ，Ⅲ層とⅣ層については下部より1試料ずつを採取した。

ところで，富士黒土層はＦＢⅠとＦＢⅡとに分けられ，前者は約8,000～6,000年前，他方後者は約10,000～8,000年前にその時期が与えられている[8]。また，約6,300年前に噴出したとされる鬼界アカホヤ火山灰[9]は，富士山東麓ではS－1火山灰と同層準[10]あるいはS－0－6とS－1との間[11]に挟在する。当遺跡では，富士黒土層の直上にS－1火山灰層がみられる[12]。以上のことから，当遺跡では約10,000年前から6,000年前までの時期の堆積物を対象にしていると考えられる。

## 2　分析の方法

1)花粉分析

試料の処理は，5％ＫＯＨ処理―遠心分離による細粒物質の除去―フッ酸処理―重液($ZnCl_2$，比重約2.00）分離―アセトリシス処理の順序でおこない，残渣にグリセリンゼリーを加えてプレパラートを作成した。

花粉の分類学的検討は，600倍ないし1,000倍の生物顕微鏡下でおこない，花粉と胞子化石を同定・計測した。

2)プラント・オパール分析

定量分析法による試料の処理は，藤原（1976）[13]に基づき，絶対乾燥―重量測定・仮比重測定―ガラス・ビーズの混入―ホモジナイザーによる分散―ストーク法による細粒物質除去―乾燥の順序でおこない，オイキット液によりプレパラートを作成した。プラント・オパールの分類学的検討は，400倍ないし600倍の偏光顕微鏡下で，主にイネ科の機動細胞プラント・オパールの形態分類に基づいておこなった。

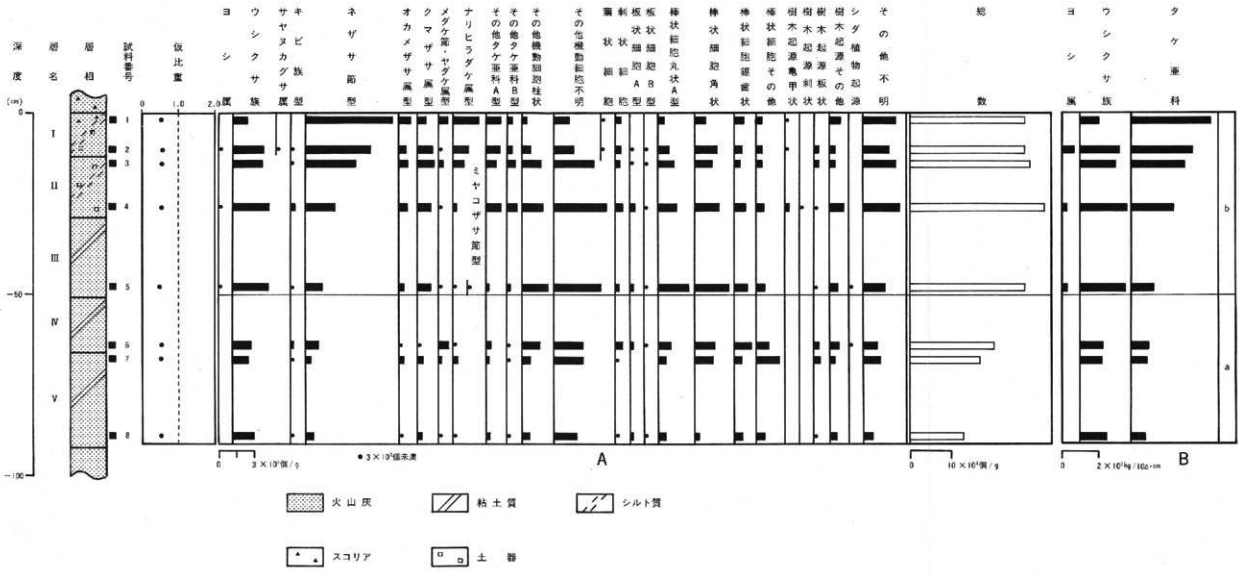
そして，検出されたガラス・ビーズとプラント・オパールとの比率から，試料1ｇあたりのプラント・オパールの数ならびに総数を求めた。さらに，ヨシ属（*Phragmites*），ウシクサ族（*Andropogoneae*）ならびにタケ亜科（*Bambusoideae*）については地上部全ての重さ（乾物重）を，層厚1㎝・面積10ａあたりの検出量で示した。なお，タケ亜科の分類については杉山・藤原（1986）[14]・杉山（1987）[15]によった。

プラント・オパール分析の結果を第83図のＡ（検出数）とＢ（検出量）に示す。

## 3　結　　果

1)花粉分析

検出された花粉ならびに胞子化石は種類・数ともにきわめて少なく，なかには風化が著しく判別困難なものもみられる。樹木花粉ではスギ属（*Cryptomeria*），コウヤマキ属（*Sciadopitys*），モミ属（*Abies*），ツガ属（*Tsuga*），マツ属（*Pinus*），コナラ亜属（*Lepidobalanus*），




第83図　プラント・オパール分析結果

アカガシ亜属（*Cyclobalanopsis*），ニレ・ケヤキ属（*Ulmus-Zelkova*），エノキ・ムクノキ属（*Celtis-Aphananthe*），カエデ属（*Acer*），また草本花粉ではイネ科（*Gramineae*），ナデシコ科型（*Caryophyllaceae-type*），キク亜科（*Tubuliflorae*），ヨモギ属（*Artemisia*），タンポポ科（*Liguliflorae*）がその主なものである。さらに，胞子化石は単条溝型，三条溝型などに代表される。

2)プラント・オパール分析

全般的には，ネザサ節型に代表されるタケ亜科とウシクサ族の高出現に特徴づけられる。その他には，樹木起源のプラント・オパールも僅かながら検出される。こうしたプラント・オパールの検出状況から，その群集帯は下位よりａ帯（試料６～８）とｂ帯（試料１～５）とに二分される。

ａ帯では，検出数・量ともに少ないながらも安定した出現傾向を示す。ｂ帯になると，全般的に増加傾向を示す。とりわけネザサ節型に代表されるタケ亜科の増加が目立つ。これに対し，ウシクサ族は試料５から２まで安定して検出されるが，試料１ではやや減少する。なお，試料２と４，５ではヨシ属が僅かながら検出される。

## 4　考　　察

わが国における火山起源の地層を対象とした花粉分析[16]やプラント・オパール分析[17]の研究は，ここ富士山麓をはじめとして，各地で盛んに進められている。こうした地層は，強酸性であり，高燥な土地条件のもとで堆積した場合通気性が高いことなどから，植物遺体の保存状態は必ずしも良くない。花粉化石の場合分解していることがあり，植生の復原が困難なことも少なくない。これに対し，プラント・オパールは時代により風化の程度に差はみられるものの保存状態は良好で，その分析法は火山灰起源の地層を対象とした植生環境復原の一手段として有効である。

火山灰起源の地層の堆積状況としては，比較的安定して良好な富士黒土層においても，花粉化石はその種類・数ともに少なく，植生を復原するまでには至らなかった。もとより，高燥な土地条件下における花粉化石の残存は難しく，検出された花粉も同時期の他地域においてみられるものがほとんどである。これらの結果から，当地域の植生を明らかにすることはできないが，縄文時代早期から前期にかけては，針葉樹や落葉および常緑の広葉樹，そしてイネ科やキク科をはじめとする草本類などが生育していたことは言えそうである。

他方，プラント・オパール分析の結果，全般的にはウシクサ類やタケ類など比較的高燥な土地条件を好む植物群に代表される。これは，当遺跡近辺の植生がススキやチガヤなどの生育する草原やネザサをはじめとする竹笹によって形成されていたことを示唆するものである。

なお，こうした比較的高燥な土地条件であったと推定される当遺跡において，低湿な環境を好むヨシ属が検出される。黒色土の母材が風成堆積物であることから，それは風によって運搬されたことも考えられるが，これを当時の人々の植物利用という観点からみれば非常に興味深い。ま

た得られた試料が遺跡内の土壌であることから，人々の利用したイネ科の草本類やタケ類の残滓の可能性も考えなければならない。従って，検出されたヨシ類はそこに生育していたとするよりも，何らかの形で運び込まれ利用されたと考えるほうがより妥当であると思われる。

ところで，黒土いわゆる黒ボク土壌には，イネ科草本に由来すると考えられる植物起源粒子が含まれ，またそれは腐植含量と正の相関関係をもつとされ[18]，植物と黒土層の腐植の生成との関係を指摘する声も聞かれる[19]。また，黒ボク土の生成にはススキに代表される草本性イネ科が重要な役割を果たすことはよく知られている[20]。さらに，ススキは黒ボク土中のリン酸アルミニウムを利用することができる。黒ボク土中のススキの遺体は，活性のアルミニウムが多いために微生物による分解は不安定になり，さらに活性アルミニウムが腐植と強く結合して腐植を蓄積してゆくと考えられている。こうして，ススキをはじめとする酸性に強いイネ科植物は火山灰土壌にすみつき，土に有機物をたくわえるはたらきをしている[21]。

富士山西麓の約2,700年前以降に生成したと考えられる黒土層（黒ボク土）も，非タケ亜科のイネ科植物起源の珪酸体に富む。このように，火山灰起源の黒ボク土はススキをはじめとするイネ科草本のプラント・オパールの含有量が多く，そこに腐植の原因がもとめられている[22]。

富士黒土層の腐植はこうしたイネ科草本のみに由来するものであろうか。前述したように，当遺跡ではススキをはじめすとるウシクサ類に加えてタケ類が多く，また樹木起源のプラント・オパールも僅かながら検出され，多様性に富む植生相を示している。富士黒土層の生成は，約10,000年前から5,000年前まで続き，僅かずつ堆積する火山灰に腐植が集積したとされている[23]。かかる時期には気温は徐々に上昇して，約6,000年前にはヒプシサーマルとよばれる最温暖期を迎える。これに伴い，遺跡周辺では植生相の質的・量的変化の生じたことが考えられる。当遺跡からは木の実状の圧痕のついた２点の土器片が出土しており，それらはブナ科植物とカヤまたはイヌガヤと推測された（本章第５節）。かかる土器片は縄文時代早期の第Ⅲ群に編年されているが[24]，これらの土器が当地域で製作されたものであるならば，当時はブナ科やカヤ属またはイヌガヤ属の植物が存在していたことになる。このように，当遺跡の場合，樹木起源の花粉化石やプラント・オパールの検出が示すように，そこには草原と森林の混在する植生の成立していたことが推定されるのである。従って，この地で数千年もの長きにわたり草原が成立し続け，あるいは人間による植生改変が継続したとは考え難い。

以上のことは，同様な火山灰起源の黒色土壌であっても，時代や気候などの違いによって植生相が異なり，それがプラント・オパールの出現傾向の違いとなって表れていることを示しているのであろうか。

ところで，こうした富士黒土層は火山灰を母材とし植物の腐植により生成されたものである。土器やテフラの編年からすると，その時期はおおよそ縄文時代早期から前期の間と考えられる。プラント・オパール分析の結果，ａ帯からｂ帯にかけてその検出数や量は総じて増加傾向を示す。こうした違いは，両者の土壌化の程度の差や腐植が生じる際の時期の違いを示すものかもしれな

い。

ここで，腐植が継続的に生じたものなのかあるいは一時的なものなのか，つまり黒土層の生成の時期が問題となってくる。前述したように，縄文時代の早期から前期にかけての気温の上昇とそれによる植生の変化が富士黒土層の生成の一要因であるとすれば，プラント・オパールの検出数や量の漸移的変化は説明できる。また一方では，富士黒土層の上部すなわち縄文時代前期の一時期に著しい腐植化が起こり，それが小動物や植物の根などの撹乱で，下部に影響を与えたことも考えられる。後者の場合であれば，土器やテフラの編年と黒土層の生成時期との間に時間のずれを生じることになり，また分析結果の解釈もおのずと異なってくる。かかる点については，今後さらに検討を加えなければならない。

## おわりに

徐々に温暖化してゆく気候を背景に，そして富士山の噴火活動の穏やかな時期を待つかのように，縄文時代早期における古屋敷の人々の生活は背戸山南麓緩斜面の安定した土地条件のもとに始められた。当時の植生は，ススキをはじめとするウシクサ類やネザサの仲間に代表されるタケ類などのイネ科の植物群のみならず，針葉樹や落葉・常緑広葉樹などを混じえる植生相を示していたと考えられる。しかしながら，得られた化石から当時の植生の詳細を明らかにすることはできなかった。分析の対象とした富士黒土層は，花粉化石の保存には必ずしも良好ではなかったことが，その原因の一つにあげられよう[25]。また，珪酸は植物の種類によって著しくその含有率を異にし[26]，検出されたプラント・オパールのみから植生の全てを復原することはできないことも踏まえておかねばならない。当遺跡の立地環境の詳細を明らかにするためには，遺物やテフラによる編年が正確でかつ植物遺体の保存状態の良好な地層を対象とした総合研究が必要になってくる。

ところで，富士山北麓地域は富士山の押し出す泥流や溶岩流のたびに，河川が塞き止められ湖や沼沢地になったといわれ，古期富士火山第II期には，河口湖や本栖湖，そして現在は干上がっている忍野(おしの)湖が，また新期富士火山活動期には精進湖や西湖，山中湖が形成される[27]。こうした活動期の間の静穏期である富士黒土層の生成期においても，規模の大小を問わず池や湿地は残存していたにちがいない。現在，富士吉田市に分布する湖や谷底の低地も，こうした富士山の活動史とともに湖や湿地と低地との繰り返しを経てきたのではないだろうか。とすれば，当遺跡前面の谷底低地の地下には富士山の活動史とともに遺跡を取り巻く環境の変遷史がそのままパックされていると考えられ，古屋敷の当時の状況を克明に記録しているにちがいない。しかもそこは，後に生産の場としても重要な役割を果たしてきたと考えられ，周辺の山麓に分布する弥生時代の遺跡[28]がそれを示唆している。今後，当遺跡の立地環境を総合的に明らかにするには，かかる地域の調査も含めて検討しなければならない。

## 註

1） 富士吉田市教育委員会（1983）『古屋敷遺跡』富士吉田の文化財（その19）

2） 1町田　洋（1977）『火山灰は語る：火山と平野の自然史』蒼樹書房

2また，宮地（1988）によると，この静穏期は約8,000～4,500年前で，山頂火口からの小規模なテフラが間欠的に噴出していた時期にあたる。

宮地直道（1988）「新富士火山の活動史」地質学雑誌　94

3） 外山秀一（1989）「遺跡の立地環境の復原―滋賀，比留田法田遺跡・湯之部遺跡を例に―」帝京大学山梨文化財研究所研究報告　1

4） 前掲1）

5） 古富士泥流や猿橋溶岩，明見溶岩，丸尾溶岩（檜丸尾第1溶岩）などに代表される。

1上杉　陽（1986）「地史」都留市史編纂委員会『都留市史　資料編　地史・考古』

2前掲1）

3前掲2）1

6） 前掲1）

7） 富士吉田教育委員会　堀内　真氏，明治大学　阿部芳郎氏のご教示による。

8） 上杉　陽他（1983）「テフラからみた関東平野」久保田鉄工株式会社『URBAN KUBOTA』21

9） 前掲2）1

10） 上杉　陽・木越邦彦（1986）「富士黒土層の$^{14}$C年代」火山　31

11） 前掲2）2

12） 都留文化大学　上杉　陽先生の調査資料による。

13） 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法―」考古学と自然科学　9

14） 杉山真二・藤原宏志（1986）「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定―古環境推定の基礎資料として―」考古学と自然科学　19

15） 杉山真二（1987）「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」富士竹類植物園報告　31

16） 1荒谷正憲（1972）「くじゅう火山の成層草原土壌および崩積森林土壌の花粉分析」日本生態学会誌　22

2藤原宏志（1988）「新保遺跡におけるプラント・オパール分析」群馬県教育委員会・財群馬県埋蔵文化財調査事業団『新保遺跡II―弥生・古墳時代集落編―』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書　18

3橋本真紀夫（1983）「花粉分析」東京大学東京天文台『東京天文台構内遺跡』

4橋本真紀夫（1987）「花粉分析」国際基督教大学考古学研究センター『日性寺遺跡』Occasional Papers 7

5橋屋光孝（1986）「黒色土中の花粉化石群集」國學院大學『あざみ野遺跡―國學院大學あざみ野運動場内遺跡発掘調査報告書―』

6堀木正子（1975）「花粉分析による往時の植生及び気候・環境」加藤学園考古学研究所『千居』

7一色直記・パリノ・サーヴェイ（1984）「風化火山灰中の花粉及び胞子化石分析」東京都教育委員会『湯浜遺跡』東京都埋蔵文化財調査報告　11

8叶内敦子（1988）「根ノ上遺跡・ローム層の花粉分析」東京都住宅局・根ノ上遺跡発掘調査会『根ノ上遺跡』

9加瀬清之（1981）「No.5遺跡関東ローム層の花粉分析」新東京国際空港公団・㈶千葉県文化財センター『木の根』

10河室公康・鳥居厚志（1982）「火山放出物に由来する森林土壌の生成論的研究（Ⅳ）—長野県黒姫山の褐色森林土と黒色土の花粉分析結果—」93回日本林学会大会発表論文集

11河室公康・鳥居厚志（1984）「火山放出物に由来する森林土壌の植被（Ⅰ）—八甲田山の褐色森林土の花粉分析結果—」95回日本林学会大会発表論文集

12河室公康・鳥居厚志（1984）「火山放出物に由来する森林土壌の植被（Ⅱ）—八甲田山の黒色土の花粉分析結果—」95回日本林学会大会発表論文集

13小林達雄（1986）「縄状遺構土壌の花粉分析について」東京都住宅局・円福寺西方（西台三丁目団地）遺跡調査会『五段田遺跡Ⅰ—都営西台三丁目団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

14森　緋一・小川美喜子（1976）「荒屋敷貝塚『A23北壁』並びに『A23北壁泥炭土層』の花粉分析」日本道路公団・㈶千葉県文化財センター『千葉市荒屋敷貝塚』

15森　地生（1980）「沢ノ台遺跡における花粉分析結果」沢之台遺跡発掘調査団・船橋市教育委員会『沢之台遺跡』

16小田静夫・パリノ・サーヴェイ（1980）「花粉分析」東京都教育委員会『西之台遺跡B地点』東京都埋蔵文化財調査報告　7

17パリノ・サーヴェイ（1978）「花粉分析」千葉県企業庁・㈶千葉県文化財センター『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ・復山谷遺跡（CN204）』

18パリノ・サーヴェイ（1978）「花粉分析」千葉県企業庁・㈶千葉県文化財センター『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ・白井第1遺跡（CN104）』

19パリノ・サーヴェイ（1979）「No.558遺跡花粉分析報告」多摩ニュータウン遺跡調査会『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅷ—No.558遺跡—』

20パリノ・サーヴェイ（1980）「花粉分析結果」高崎市教育委員会『御布呂遺跡』高崎市文化財調査報告書　18

21パリノ・サーヴェイ（1980）「苗見作遺跡における花粉分析」君津広域水道企業団『君津広域水道用水供給事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—角山遺跡・深城遺跡・飯富遺跡・苗見作遺跡』

22パリノ・サーヴェイ（1981）「No.6遺跡花粉分析」前掲16）　9

23パリノ・サーヴェイ（1981）「花粉分析」日本住宅公団・㈶千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン　11—六通金山遺跡—』

24パリノ・サーヴェイ（1982）「花粉分析」世田谷区教育委員会『喜留多遺跡・砧中学校7号墳』

25パリノ・サーヴェイ（1982）「花粉分析報告」㈶東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡—No.3遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告　2

26パリノ・サーヴェイ（1982）「花粉分析」日本道路公団東京第一建設局・㈶千葉県文化財センター『常盤自動車埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—館林，水砂，花前Ⅱ—1—』

27パリノ・サーヴェイ（1982）「花粉分析」住宅・都市整備公団・㈶千葉県文化財センター『千葉東南部ニュータウン　10—小金沢貝塚—』

28パリノ・サーヴェイ（1983）「花粉分析」千葉県土木部・㈶千葉県文化財センター『岩坂大台遺跡』

29パリノ・サーヴェイ（1983）「町田市木曽中学校用地内遺跡試料花粉分析報告」木曽中学校用地内遺跡調査会・町田市教育委員会『町田市木曽中学校遺跡』

30パリノ・サーヴェイ（1984）「花粉分析の結果とその評価」住宅・都市整備公団・㈶千葉県文化財センター『八千代市権限後遺跡—萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ—』

31パリノ・サーヴェイ（1984）「蓮田市久台遺跡試料花粉分析報告」㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団『国道122号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—II—久台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　36
32パリノ・サーヴェイ（1984）「大和市下鶴間長堀遺跡試料花粉分析報告」大和市教育委員会『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告III』大和市文化財調査報告書　17
33パリノ・サーヴェイ（1985）「清水が丘遺跡試料花粉分析結果」東京都建設局・府中市遺跡調査会『清水が丘遺跡—府中都市計画道路２・１・４号線建設に伴う事前調査』
34パリノ・サーヴェイ（1985）「一般国道125号線行田市地内白鳥田遺跡出土試料花粉分析報告」㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団『白鳥田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　54
35パリノ・サーヴェイ（1986）「花粉分析」千葉県企業庁・㈶千葉県文化財センター『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書—林小原子台・巣枝・土持台・林中ノ台・吹入台—』
36パリノ・サーヴェイ（1986）「花粉分析」日本道路公団東京第一建設局・㈶千葉県文化財センター『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V—谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)—』
37パリノ・サーヴェイ（1986）「花粉分析」㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団『中矢下・夕日ノ沢，上前原沢・芝口ヲネ，後山北谷・滝尾塚』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　57
38パリノ・サーヴェイ（1986）「花粉分析」㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団『下触牛伏遺跡』身体障害者スポーツセンター建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
39パリノ・サーヴェイ（1987）「花粉分析」群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『後田遺跡（旧石器編）』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書　15
40パリノ・サーヴェイ（1987）「比々多第一地区遺跡調査団中坂東遺跡試料花粉分析報告」比々多第一地区遺跡調査団『比々多遺跡群（遺物編）』
41パリノ・サーヴェイ（1987）「境松遺跡試料花粉分析報告」㈶茨城県教育財団『境松遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告書　14
42パリノ・サーヴェイ（1988）「二ノ谷遺跡花粉分析報告」住宅・都市整備公団・㈶栃木県文化振興事業団『二ノ谷遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告　97
43パリノ・サーヴェイ（1989）「花粉分析」埼玉県教育委員会『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書　4
44パリノ・サーヴェイ（1989）「花粉分析」新井三丁目遺跡調査会『新井三丁目遺跡』
45パリノ・サーヴェイ（1989）「花粉分析」群馬県教育委員会・㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団『勝保沢中ノ山遺跡II㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告　87
46パリノ・サーヴェイ（1989）「花粉分析結果報告」㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団『中三谷遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　76
47パリノ・サーヴェイ（1989）「花粉分析」埼玉県教育委員会『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳—自然科学分析編—』埼玉古墳群発掘調査報告書　7
48田尻貞治（1969）「関東ローム層における花粉分析法の考案」日本花粉学会誌　4
49徳永重元（1975）「花粉分析」国際基督教大学考古学研究センター『中山谷遺跡』Occasional Papers 1
50徳永重元（1976）「花粉分析」国際基督教大学考古学研究センター『前原遺跡』Occasional Papers 3
51徳永重元（1977）「花粉分析」高井戸東遺跡調査会『高井戸東遺跡』
52徳永重元（1977）「花粉分析」国際基督教大学考古学研究センター『新橋遺跡』Occasional Papers 4
53徳永重元（1978）「花粉分析」鈴木遺跡調査会『鈴木遺跡Ⅰ』
54徳永重元・橋本真紀夫（1981）「花粉分析—DO区ローム層・AO区粘土化ローム層の花粉分析—」日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会『伊皿子貝塚遺跡』

55鈴木重元・橋本真紀夫（1983）「はけうえ遺跡の花粉分析」国際基督教大学考古学研究センター『はけうえ遺跡・研究編（Ⅰ）』Occasional Papers 5

56鈴木重元（1984）「ローム層の花粉分析―とくに武蔵野台地について―」考古学ジャーナル 227

57辻 誠一郎（1983）「立川ローム層第2暗色帯の花粉化石群集」前掲16）55

58浦部連明（1975）「岩手山麓の埋没火山灰土壌の花粉分析的研究」ペドロジスト 19

なお，以下の研究成果については入手できなかったため未掲載である。また，分析用試料の一部が火山起源のものについては除いた。

『野川遺跡概報』，『三里塚No.6遺跡』，『三里塚No.55遺跡』

17）1細野 衛・佐瀬 隆（1985）「浦和市の関東ローム層―とくに鉱物と植物珪酸体について―」浦和市史編さん室・浦和市教育委員会『浦和市史調査報告書 17 自然編』

2細野 衛・佐瀬 隆（1989）「利根川沖積低地下に埋没した小松古墳の基盤について―土壌学的手法による解明―」第四紀研究28

3加藤芳朗（1960）「『黒ボク』土壌中の植物起源粒子について（予報）」日本土壌肥料学雑誌 30

4加藤芳朗（1962）「関東ローム層の細砂軽鉱物組成」地球化学 62

5加藤芳朗（1963）「火山灰中の植物珪酸体」第四紀研究 3

6加藤芳朗他（1986）「累積火山灰断面腐植層中の植物珪酸体による年代推定法（Ⅰ）―蓄積年率からの推定―」第四紀研究 25

7加藤芳朗他（1986）「累積火山灰断面腐植層中の植物珪酸体による年代推定法（Ⅱ）―風化度からの推定―」第四紀研究 25

8河室公康・鳥居厚志（1982）「火山放出物に由来する森林土壌の生成論的研究（Ⅳ）―長野県黒姫山の褐色森林土と黒色土について（予報）―」93回日本林学会大会発表論文集

9河室公康（1983）「十和田火山灰由来の褐色森林土および黒色土のA層および埋没A層中の植物珪酸体について」94回日本林学会大会発表論文集

10河室公康・鳥居厚志（1984）「火山放出物に由来する森林土壌の植被（Ⅰ）・（Ⅱ）」95回日本林学会大会発表論文集

11河室公康・鳥居厚志（1986）「長野県黒姫山に分布する火山灰由来の黒色土と褐色森林土の成因的特徴―とくに過去の植被の違いについて―」第四紀研究 25

12町田 洋（1971）「南関東のテフロクロノロジー（Ⅰ）―下末吉期以降のテフラの起源および層序と年代について―」第四紀研究 10

13佐瀬 隆・近藤錬三（1974）「北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について」帯広畜産大学学術研究報告，第Ⅰ部 8

14佐瀬 隆・加藤芳朗（1976）「現世ならびに埋没火山灰土腐植層中の植物起源粒子―とくに植物珪酸体―に関する研究（第Ⅰ報）―給源植生の推定に関する問題―」第四紀研究 15

15佐瀬 隆・加藤芳朗（1976）「現世ならびに埋没火山灰土腐植層中の植物起源粒子―とくに植物珪酸体に関する研究（第Ⅱ報）―火山灰土の腐植給源植物に関する問題と植物珪酸体を用いた古気候推定―」第四紀研究 15

16佐瀬 隆（1980）「南部浮石層直下の埋没土壌の植物珪酸体分析」第四紀研究 19

17佐瀬 隆（1981）「八戸浮石層直下の埋没土の植物珪酸体（プラントオパール）分析」第四紀研究 20

18佐瀬 隆他（1982）「成増露頭における関東ロームの諸特性 その2―植物珪酸体分析―」日本第四紀学会講演要旨集 12

19佐瀬 隆・近藤錬三・井上克弘（1984）「岩手山麓に分布するテフラの植物珪酸体分析」日本第四紀学会

講演要旨集　14

20佐瀬　隆（1984）「No.122遺跡の住居跡炉跡のプラントオパール分析」(財)東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡No.122遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告　5

21佐瀬　隆・加藤芳朗・牧野誠一（1985）「富士山麓および天城山麓の火山灰土壌の植物珪酸体分析」ペドロジスト　29

22佐瀬　隆（1986）「十和田火山起源の完新世テフラを母材にする火山灰土壌のプラントオパール分析」ペドロジスト　30

23佐瀬　隆（1986）「湯舟沢遺跡の植物珪酸体」滝沢村教育委員会『湯舟沢遺跡』湯舟沢文化財調査報告書　2

24佐瀬　隆他（1987）「武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体」第四紀研究　26

25佐瀬　隆（1988）「累積テフラ層の植物珪酸体分析」日本第四紀学会講演要旨集　18

なお，以下の研究成果については入手できなかったため未掲載である。また，分析用試料の一部が火山起源のものについては除いた。

「テフロクロノロジー総合研究連絡誌」，『成増露頭地質調査報告書』

18）　加藤芳朗（1960）「『黒ボク』土壌中の植物起源粒子について（予報）」日本土壌肥料学雑誌　30

19）　加藤芳朗（1964）「腐植にとむ土壌（『黒ボク』土壌）の生成に関する問題点」第四紀研究　3

20）　山根一郎（1973）「黒ボク土生成におけるススキの意義」ペドロジスト　17

21）　高橋英一（1987）『ケイ酸植物と石灰植物―作物の個性をさぐる―』農山漁村文化協会

22）　前掲17）21

23）　前掲２）１

24）　明治大学　阿部芳郎氏のご教示による。

25）　また，ローム層を対象とした花粉分析の解釈について，以下のような指摘がある。

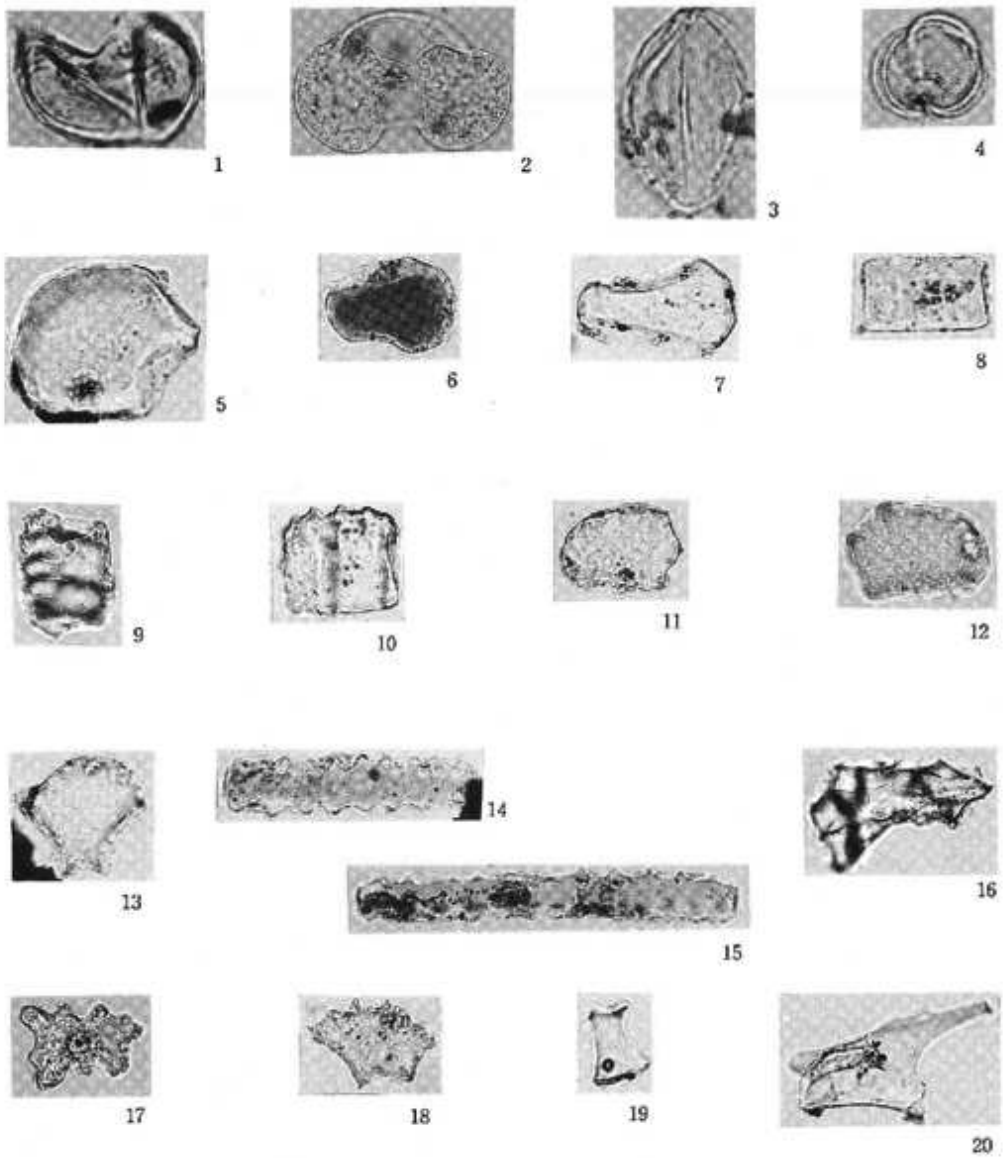
「花粉の大半が消失するであろうローム層中では，検出された花粉の量比が古植生を考察する上で，どのような意味を持つのか充分考える必要がある。」前掲16）31

26）　高橋英一・田中輝夫・三宅靖人（1981）「植物界におけるケイ酸植物の分布について（その４）羊歯植物における分布」日本土壌肥料学会誌　52

27）　富士山の活動史は，古期富士火山第Ⅰ期，同第Ⅱ期，活動静穏期および新期富士火山活動期の各時期にわけられる。古期富士火山第Ⅱ期は約10,000年前から活動静穏期までの間の多量の溶岩を流出する時期，また新期富士火山の活動期は約5,000年前以降の時期にあたる。

前掲２）１

28）　前掲１）



1．スギ属　2．二葉マツ亜属　3．カエデ族　4．ヨモギ属
5．ヨシ属　6．ウシクサ族　7．ウシクサ族　8．キビ族型
9．ネザサ属　10．ネザサ節型　11．クマグサ属型　12．クマザサ属型
13．ミヤコザサ属　14．棒状（鋸歯状）　15．棒状（鋸歯状）　16．樹木起源
17．樹木起源　18．不明　19．不明　20．不明
（1，3，4　400倍，その他　200倍）

写真20　花粉化石，プラント・オパール

# 第7節　古屋敷遺跡およびその周辺採集の弥生式土器

黒沢　浩

## はじめに

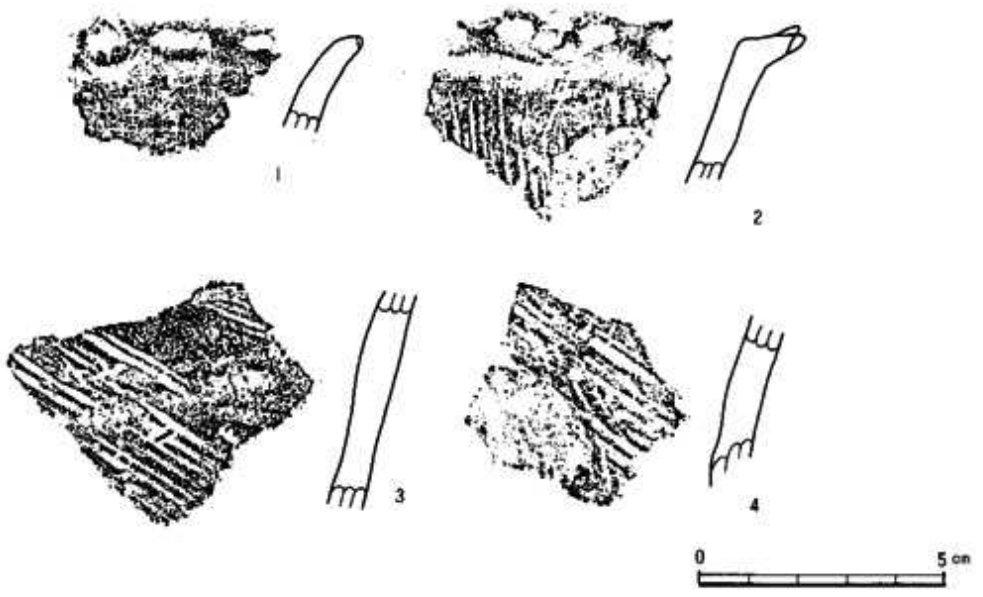
古屋敷遺跡とその周辺からはごく僅かではあるが，弥生時代中期およびそれ以前に属するものと考えられる資料が出土している。それらはいずれも，『富士吉田市の遺跡』（富士吉田市・富士吉田市教育委員会1981）にすでに報告されているが，今回それらを再検討する機会を与えられたので，それらについて若干の私見を含めて紹介しておきたい。

## 1　資料紹介

### (1)　弥生文化波及期の土器（第84図1～4）

前述の『富士吉田市の遺跡』（以下『遺跡』と略す）では山ノ神戸遺跡出土として拓本が掲載されている。この遺跡の所在地は大明見字山ノ神戸となっており，古屋敷遺跡を南東にさらに道志山地側に登った所に位置する。『遺跡』では弥生中期のものとして5片の土器が図示されているが今回は『遺跡』掲載第22図4の土器は実見していない。したがって，ここでは4点について報告する。

第84図1・2は甕形土器の口縁部である。両者ともに口唇端部に押捺を施している。1は大き




第84図　山ノ神戸遺跡採集土器

く外反する器形で内外面の調整はナデによる。2は内面に明瞭な面を取り，押捺部分が大きく突出している。外面にタテ方向の粗い条痕が施されている。3・4もやはり甕形土器の胴部破片。外面に斜方向の粗い条痕（4条／cm）が施され，内面はともにヨコ方向のヘラケズリである。

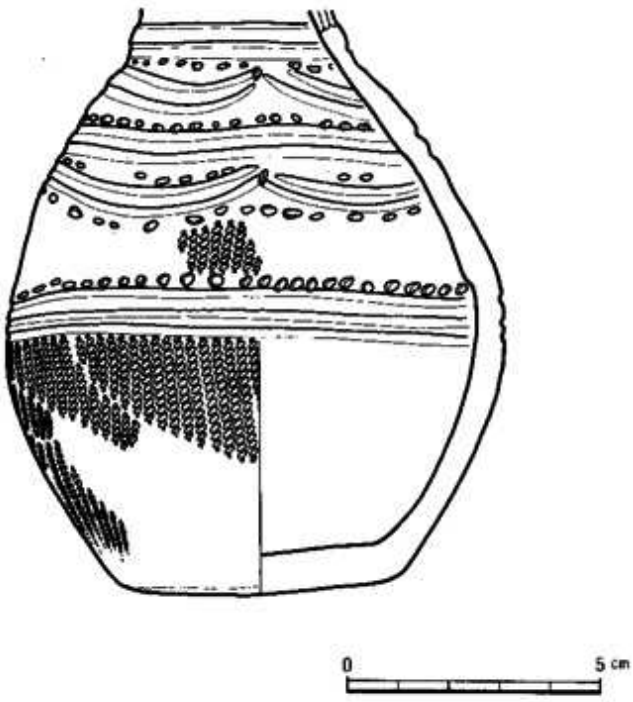
これらの土器は，いずれも既報告で位置付けられた弥生中期よりも遡る可能性がある。そのことについては後述しよう。

(2) **弥生中期の土器**（第85図．写真22）

第85図に示したのは過去に古屋敷遺跡から出土した土器である。『遺跡』では古屋敷A遺跡として図示されている。

器形はやや下膨らみの壺形である。頸部より上を欠く。『遺跡』では細頸の壺形土器として復元されているが，欠損部より屈曲しながら大きく外反するかもしれない。底部はやや丸みを帯びており不安定である。

文様は二本一組の沈線文による直線文に上向きの弧線が付随する構成で二段にわたって描かれている。弧線が隣接する弧線と直線とに交わる交点には刺突が加えられる。刺突は本例土器では多用され各直線・弧線に沿うように施されている。これらが描かれる文様帯は胴部最大径にあたる位置で三本一組の沈線による直線文で区画される。この直線にも刺突が付随する。ところで，本例土器を特徴づけているのはこれらの沈線文よりも，むしろ地文に施された縄文にある。縄文は条が縦走する様に施されたもので，器面の摩耗がひどいため詳しい観察はできなかったが，お




第85図　古屋敷遺跡出土土器（単独出土）

そらく原体は単節RLを斜方向に転がしたものであろう。施文範囲は上から二段目の弧線の付近から胴下半・底部付近にまでおよぶ。

こうした本例土器に見られる特徴は，甲斐地域を初め周辺の関東や中部高地においてもきわめて稀なものであり，今後注意すべきである。

## 2　若干の考察

ここに報告した土器は，既に述べたように弥生文化の波及期にあたるものと，その特徴が該地域を初め周辺においても類例のないものである。そこで，ここではそれらについての編年的・系統的な位置付けを考えてみたい。

まず，第84図１～４の土器はその条痕手法に特徴がある。これに類似した土器は山梨県内においても近年蓄積されつつあり，南都留郡河口湖町宝可塚遺跡（山本1966ａ），同町島原遺跡（山本1966ｂ）においてこれら条痕文系土器の単純な資料が出土している。両遺跡とも断片的ではあるが浮線文土器を含んでおらず，また静岡県渋沢遺跡の丸子式土器ときわめて類似するといわれる都留市生出山山頂遺跡出土資料（中山1985）に見られるような縦位羽状条痕も含んでいないことから，中期初頭よりは古く，東海地方の樫王式土器よりは新しいものと考えられる。

今それらの資料と１～４の資料とを比較するならば，口縁部の装飾手法，条痕の施文手法において宝可塚遺跡，島原遺跡の土器の特徴と共通する点が多い。したがって，１～４の資料は，従来いわれていた弥生中期のものではなく前期末併行期――水神平式併行期までさかのぼる可能性が高い。

現状では，この時期を東日本においても弥生時代とする考え方が大勢を占めつつある。当該地域においてもすでに中山誠二氏が指摘されているように，該期を境にして浮線文土器が急速に消滅し，かわって条痕文系土器が主体をなすなど一つの画期となっている（中山1985）。そこで，以上のような理由から，第84図１～４の土器を弥生時代前期に位置付けておきたい。

次に第85図の土器であるが，前述のように周辺地域にも比較すべき資料を見出すことは出来ない。純粋に型式学的な方法によって本例土器に考察を加えるならば，まずは文様に注目しなければならない。本例土器の胴部上半に施された沈線による直線文と弧線文との構成は，交点に刺突が加えられるという特徴から，変形工字文の系統の中で考えるべきであろう。そうとすれば，少なくとも，関東一円に分布する変形工字文系統の文様とは共通点をもつことになり，ことさら文様の点ではありえないものではない。

問題は，先述のように地文として用いられる縄文にある。特に胴部下半まで条の縦走する縄文を施文するという手法は，関東以西では類例がない。

そこで，地域をさらに広げてみると東北地方北部の土器群あるいは続縄文文化に含まれる恵山式土器にその手法が顕著であることに気が付く。中でも，恵山Ａ式土器（中村1973）は文様の構成，沈線文に刺突文を沿わせる手法などにおいて共通点が多い。

しかし，本例土器を恵山式系統の土器とするには，いくつかの理由で躊躇される。最も大きな理由は，恵山式土器の型式圏との距離的な遠さとその間に全く恵山式土器の搬入あるいは恵山式土器が影響を与えたと見るべき痕跡がないことによる。

また，土器自身の特徴からいっても恵山式土器の多くは上げ底をなすのに対して，本例土器はやや飛び出した感じの不安定なものであることも，ためらわれる理由である。

したがって，ここでは最も類似した土器型式は恵山式土器であると指摘するに留めておく。今後の検討が望まれるところである。時期的には中期後半に位置付けて大過あるまい。

以上で古屋敷遺跡およびその周辺出土の弥生式土器についての報告と若干の考察を終ることとする。山梨県内の弥生時代研究はまだ始まったばかりといえる。資料もようやく蓄積されてきたというのが現状であろう。特に，中期中頃・後半の資料については，まだその実態がおぼろげにしか見えていない。もしかしたら，古屋敷遺跡のような土器はもっと別な考え方で無理なく説明できるのではないかという危惧が去らない。編年体系の整備こそが緊急の課題といえよう。資料の増加に期待したい。

## 参考文献


山本寿々雄1966 a　「南都留郡河口湖町小立字宝可ケ塚出土の土器について」
『富士国立公園博物館研究報告』第15号

山本寿々雄1966 b　「南都留郡河口湖町小立鳥原出土の弥生式土器」
『富士国立公園博物館研究報告』第16号

富士吉田市・富士吉田市教育委員会1981『富士吉田市の遺跡』富士吉田市史編さん研究資料 1

中村五郎1973「北海道南部の続縄文土器編年」『北海道考古学』第 9 輯

中山誠二1985「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要』2　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

写真21　古屋敷遺跡出土の弥生式土器

# 第８節　弥生末―古墳時代前期の土器群について

白石真理

## はじめに

古屋敷遺跡では1977年の分布調査の際に弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての土器群が点箱に２箱ほど採集された。何れも接合不能の破片資料であり，全形を保つものは見られない。

しかし，ここ何年かにおいて富士山北麓地域，富士吉田市周辺においてほぼ同時期の土器の検出例が増えているようである。河口湖に浮かぶウノシマ遺跡からも同期の土器（破片）が採集されている（山本1986）。また現在報告書作成にむけて整理作業中であるが，富士吉田市内の池之元遺跡では古墳時代前期の住居址の床面から５個体の土器が一括出土している。

今後の資料の増加に備え，甲府盆地周辺における弥生後期後半から古墳時代前期の土器の変遷を概観した上で，古屋敷遺跡の採集資料の位置づけと若干の考察を行っておきたい。

## １　採集資料の紹介

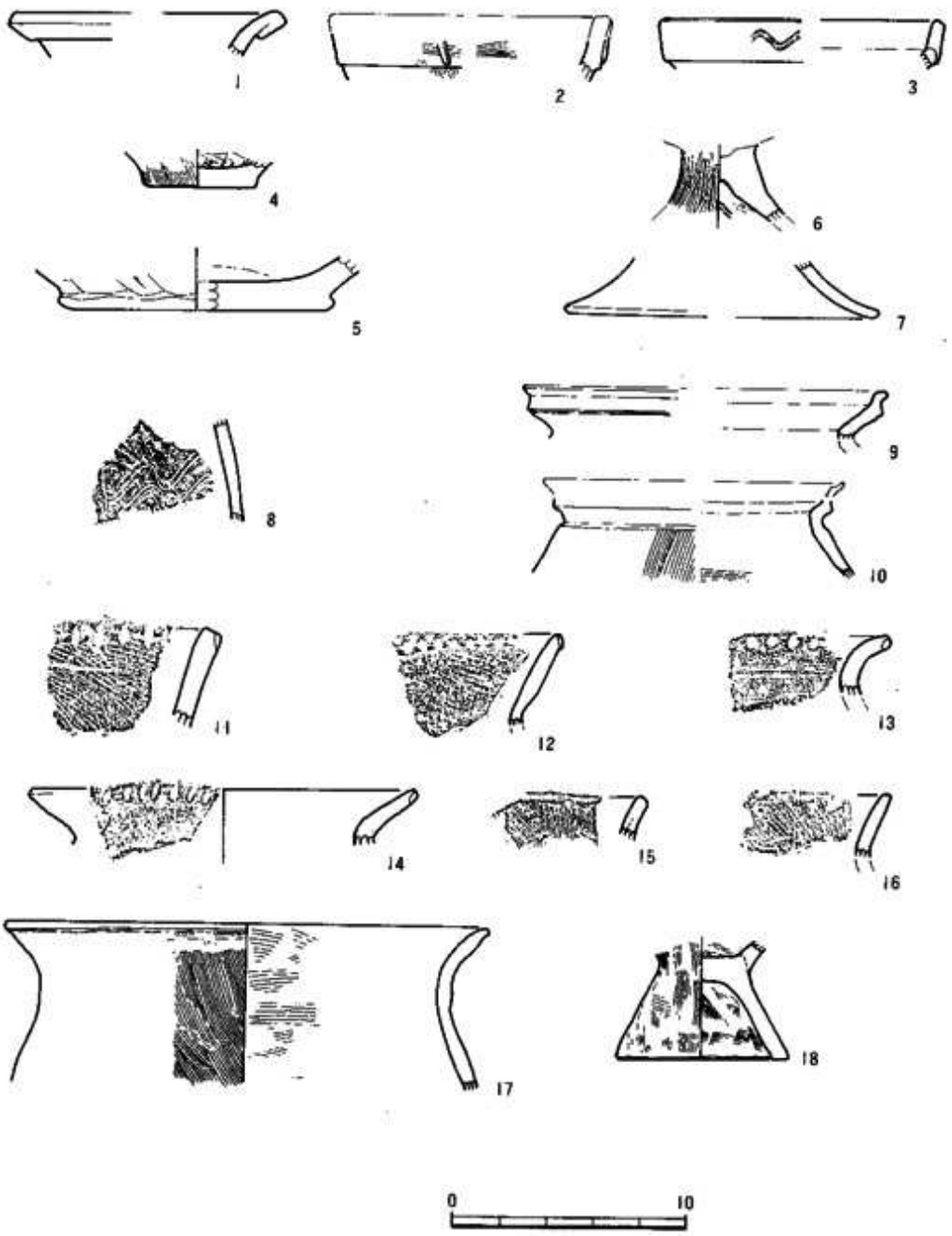
**壷**（第86図１―５）　口縁部は何れも小片で法量の復元は不可能であった。底部は全体的からすれば数の少ないものである。

１は複合口縁部を持つ壷の破片である。口唇部および口縁部外面はハケ後，横ナデを行い，メントリを行っている。色調は明黄褐色を呈し，胎土には長石の混じった砂粒を含み，焼成は良好である。２も複合口縁部を持つ壷の破片である。ハケ後，横ナデを行って器面を調整した後口縁部外面にはヘラで山形文を施文，丸くおさめた口唇部にはハケ状工具で刺突を行っている。内外とも赤彩され，赤褐色を呈している。胎土には細砂粒を含み，焼成は良である。３も僅かに段を持つ壷の口縁部破片である。粘土帯の張りつけの手法は認めなかった。内外はハケ調整をおこなっている。外面には横ハケ後，棒状の浮文を張りつけているが，小片のために浮文の単位などは不明である。胎土には白色粒子，砂粒を含み，焼成は良である。

４の底部は径5.6cmを測る。外面はハケ調整，内面は反時計回りに螺旋状にヘラナデ，底面はナデ調整をおこなっている。底面のみ全部残っている。色調は淡褐色を呈し，胎土には２―３mm大の小石と砂粒を含み，焼成は良である。５の底部は復元径11.8cmを測り，2/5周程残存する。内外面ともヘラなどでナデ調整している。色調はやや肌色味を帯びた淡褐色で，胎土に細砂粒を含み，焼成は良である。

**高杯**（第86図６・７）　高杯と見られる小片はいくつか認められたが，図化できたのは２点のみである。

６は接合部から脚部にかけての破片である。最も窄まった部分の径は3.1cmを測り，全測している。外面はナデ後，ヘラミガキ，内面はハケ後，ナデ調整がおこなわれている。杯部との接合




第86図　古屋敷遺跡弥生末～古墳時代前期の採集資料

面の中央には指でほぞを挿入するための窪みをつけている。色調は肌色味を帯びた淡褐色を呈している。胎土に長石・金雲母が混じった砂粒を含み，焼成は良である。7は脚部の破片である。復元径12—14cmを測るものと見られる。器面が荒れているために調整は不明瞭であるが，内外面とも赤彩が施され，赤褐色を呈している。胎土はきめが細かく，細砂粒を含む。焼成はやや甘い。

甕（第86図8—21）　採集資料のうち，最も数が多かったのが甕の破片である。接合できる資料が無かったために器形がうかがえるものは少ない。

8は天竜川周辺に見られる弥生時代後期の甕の破片で，平底でやや中膨らみの胴部を持ち，口縁部は外に反る器形を持ち，胴部の上半部に櫛描文が施文される。外面はナデ調整後，櫛描文を施文している。内面はハケ後ヘラミガキで器面が整えられている。色調は肌色味を帯びた淡褐色で，外面には煤の付着がある。この天竜川周辺地域では壺にも櫛描文の施文が見られるが，内面調整や破片より想定される器形から一応甕として取り扱っておく。

9と10は「S字状」の断面形態を持つ所謂S字状口縁台付甕の破片である。（以下S字甕と略称する）9は口縁端部を工具でメントリを施し，外面は指ナデで下段を作り出している。内面は横ハケ後ナデ調整，屈曲部に横ハケが施され，面が作り出されている。色調は肌色に近い淡黄褐色で胎土に細砂粒を含み，焼成は良好である。10は外面の胴部縦ハケ調整後，口縁部の下段を指ナデしており，頸部外面のハケメがナデ消されている。内面はナデ調整によって整えられており，下部に横ハケが残存する。色調は橙褐色，胎土に細砂粒を含み，焼成は良であるが，断面の内部は黒ずんでいる。

11から18は台付甕の破片である。口縁部に刻み目を持つもの（11—14）と持たないものに別れる。何れも頸部以下が不明瞭であるが，屈曲の有るもの（13・14）とそうでないものに更に分けられる。また刻み目のある破片も端部に面を残すものと（11），横ナデによって丸みを帯びるもの（13・14）にも分けられる。17の口縁部は1／5周残存していたのを復元実測したものである。内外面のハケ調整後口縁端部に横ナデが施されたものである。18の台部は裾の径約7.3cm，残存高5.1cmの小型なものである。内外面ともハケ調整が施されている。胎土や焼成に大きな差は無く，色調も褐色（15），淡褐色（9・11・12・13・14・16）と橙褐色（10・18）の3つに大別できる。

## 2　採集資料の位置づけ

山梨県の弥生時代後期前半には敷島町金の尾遺跡の土器群に見られるように中部高地の櫛描文が主体となっている（末木[註1]1979）。これが後期後半に到ると甲西町住吉遺跡1号住居址の一括資料に見られるように東海地方・長野県下・南関東等の地理的に近接する多地域との関係を持つようになってゆく。その中でも東海東部の駿河地方の土器群との強い脈絡が指摘されている（新津1981）。三珠町一宮林遺跡1号住居址一括資料は，後期終末段階において山梨県の土器群は駿河地方の土器群と密接な並行関係を示している（山梨1980）。したがって山梨県の土器の変遷を述

べるには，東海東部の土器の変遷をふまえておくことが必須条件となる。

ここでは近年この時期の研究を意欲的に行っている加納俊介氏が分析を行った富士宮市の月の輪遺跡群の土器の記述を参考に器種分類を検討し，位置づけを行っておく（加納1981）。

壷（第86図1—5参照）

1は口縁部の外面に幅狭い粘土帯を重ねて複合口縁（折り返し口縁）を作る。「壷C」に当たるものである。2・3は口縁下位の外側に粘土帯の一部を重ね合わせるもので，「壷B」に当てはめることができよう。

高杯（第86図6・7参照）

何れも器形を想定しえないものであり，比較資料にはならない。しかし，裾部の広がり具合や接合部の断面形態から高杯Bなどの可能性も考えられよう。

甕（第86図8—18参照）

9・10のS字甕は甕$A^1$・$A^2$にあてはめることができよう。胎土に若干の違いが認められる。特に10は胎土や技法の観察から，東海西部からもたらされたものと考えるより，甲府盆地もしくは駿河地方で製作された特色を保有しているように見受けられる。

台付甕は口縁部については刻み目をもつもの甕$D^1$と，刻み目を持たないものに分けられる。月の輪遺跡では後者は頸部の屈曲がゆるやかなもの$D^2$，「く」の字状に外反するもの$D^3$の二者にわけられている。しかし，ここでは$D^2$は認められたが，$D^3$については存在は不明である。

採集資料を月の輪遺跡の分類に沿って概観した。この結果，甕を中心に

・甕$D^1$・$D^2$のみで「く」の字に屈曲する$D^3$が認められなかった

・S字甕は甕$A^2$・$A^3$で$A^4$・$A^5$を伴わない

ことが指摘できる。この2点の要素は月の輪古段階もしくはそれ以前に遡る段階に見られるものである。したがって採集資料は概ね弥生時代後期後半から古墳時代前期の前半の範疇に位置づけられるものが大半を占めていると言える。

## 3　駿河・甲府における該当期の様相

山梨県下における該当期の遺跡の様相を駿河や長野と比較する。ここでは特に甕の組成に見られる比率の相違に注目して各地の変遷をおってみたい。(註2)

弥生時代後期後半（終末期）——

一城林遺跡Y1住居址では$D^1$（5個体），$D^2$（1個体）にともなって赤塚A類のS字甕に類似する甕が共伴する（赤塚1986ab　以下S字甕については赤塚氏の提唱する濃尾平野：A系統の分類に従う）。口縁部外面の下段にはハケ状工具による刺突が施され，さらにその下に薄い隆帯を貼り付け，爪で刻みを入れている。胎土が在地の特色を持つものであること，濃尾平野のA類のS字甕に比較して付加的な装飾要素が見られることなどから，在地でA類のS字甕を模倣

したものと考えられる。

ここで参考に長野県で確認されている搬入されたA類のS字甕の出土例をあげておく。飯田市恒川遺跡B18号住居址からも搬入されたA類のS字甕に伴って中島式の甕が出土している（山下1986）。上郷町高松原遺跡II—6号住居址からもA類S字甕に伴い，複合口縁部を持つ壺と在地の中島式の甕が出土している（佐藤1984）。また，塩尻市上木戸遺跡からも全体の43%を占める外来系土器群（畿内・近江・北陸・東海西部・東海西部・南関東）が出土している。このうちS字甕のA類を含む東海西部の土器はその80%を占め，A類S字甕は5個体を数える。そのうち搬入品は1点のみで，他は胎土・製作技法において異なる要素がみられると指摘されている。（宇賀神1988）また駿河においては月の輪平遺跡43号住居址から模倣されたA類のS字甕と共に出土しているのは，$D^1$である（加納1981）。この段階では$D^1$が主体であり，$D^2$がごく一部に認められる。

日常使用される土器において，搬入される時期と模倣される時期に大きな時間的開きを考える必要性がないものと見られるため，一城林遺跡の一括資料を弥生最終末に位置づけることに何ら問題は無いものと思われる。

古墳時代前期前半——

肩部に横ハケのあるB・C類のS字甕と台付甕が共伴する。$D^1$も稀に見られるが主流は$D^2$である。韮崎市久保屋敷遺跡（山梨県1984）・境川村京原遺跡（山梨県1974）・塩山市西田遺跡（山梨県1978）においてこの傾向がみられる。この段階に至って，甕の組成におけるS字甕の占める比重が大きくなってゆく。組成的には$D^2$と半々もしくはそれに近しい数値を持つようである。(註3) B類のS字甕で搬入された資料は明らかではない。韮崎市坂井南遺跡B地区4号住居址出土の小型のS字甕には，ややB類に近い様相が認められる（韮崎市1984）。胎土の相違や製作技法からみて，甲府盆地でS字甕が製作されはじめたのはこの段階であり，概ねC類としての特徴を持つものが多く，B類として見られるものは稀少なようである。

東海東部の月の輪平遺跡の出土の甕の組成の中心はAのS字甕・B・C・Dにあたる台付甕によって占められる。(註4) 沼津市藤井原遺跡の甕の組成を見ると，月の輪遺跡には見られなかった大型甕Dが組成のなかに存在している（沼津市1978）。このような大型甕Dは駿河から三浦半島周辺の沿岸に位置する遺跡分布，甕の組成において普遍的存在として見られる傾向にある（西川1982）。このような甕の器種構成に差が見られるものの，S字甕の占める比重は僅かずつではあるが増加していく傾向がある。またS字甕が駿河において製作が開始されるのも甲斐同様この段階であるが，B類のS字甕は極めて少ない。(註5)

古墳時代前期後半——

肩部の横ハケを消失したD類のS字甕を主体として，$D^2$・$D^3$が共伴する。S字甕は駿河・

甲斐共に東海西部とは異なる変遷を示すようになる。技術面で口縁部横ナデの発達と外面ヘラケズリ技法の導入が指摘される。この結果，口縁部縦のび傾向の進化，器形も長胴化と称せられるように胴部上半の張りの弱い器形に変化する(註6)。ハケ調整も従来の目の粗く櫛目のようなものから，在地の甕に見られる目の密なものに変化する。このS字甕は古墳時代中期前半まで残存するため，山梨県内の前期末と中期の境界については微妙な問題があることが指摘されている（坂本1984）。

現在この時期に属するものとして御坂町姥塚遺跡30号住居址・41号住居址の一括資料があげられる（山梨県埋1987）。組成的にはS字甕が主体となり，$D^2$・$D^3$を排他するような傾向が見られる。しかし，このあとの中期前半に位置づけられている塩山市西田遺跡2号住居址ではS字甕と素口縁を持つ甕が共伴しており（山梨県1978），甲府盆地内においても甕の組成には若干の地域差が存在する可能性も考慮しておかねばなるまい。

東海東部ではこの時期の甕の組成には遺跡間で，さらには同じ遺跡内においても住居単位で組成が異なる傾向が見られる。

沿岸にある藤井原遺跡，富士市三新田遺跡では甕は前述の大型甕DD$^2$・$D^3$にS字甕が加わって構成される（富士市1983）。組成的にはS字甕は客体的と見られるが，住居など遺構単位でばらつきが見られる(註7)。月の輪平遺跡では，甲斐同様S字甕が主体となり，他を排地するような傾向がある。しかし，甕D類のみしか認められない住居跡一括資料も一部には存在する(註8)。

## 4　ま　と　め

古屋敷遺跡から採集された資料の位置づけを行うために甲府盆地と駿河における弥生時代末から古墳時代前期の土器の変遷を比較，検討をおこなった。ここで近年よく問題にされる土器の移動における諸問題について若干述べておきたい。

**〔東海西部から駿河・甲斐に至るまでの土器の移動に伴う経路〕**

美濃から神坂峠を越えて飯田から北進して諏訪平にいたる道筋には搬入された土器の存在が各所に見られる。しかし現在まとまった出土が見られるのは恒川遺跡，上木戸遺跡の二遺跡である。何れも弥生終末段階以降に位置づけられる東海西部を中心とする外来系土器を出土している。このような段階で経路の要にあたる所に外部からの人間の介在を想定しうる基地的な遺跡が出現することは大いに注意しておかねばなるまい。しかしながら，この時期甲府盆地で東海西部の土器は認められず，両地域を結ぶ動きは希薄であったものと見なすこともできる。

東海地方をみると東海西部のS字甕は三河・遠江・西駿河では，継続して搬入品の存在は認められるが，定着する現象は現在殆ど認められない(註9)。袋井市上橋遺跡においてまとまった量のA類—D類のS字甕が認められるが，明らかに搬入されたものを除くと口縁部は横ナデによって成形された変形したものが多い。技術を習得した痕跡は認められず，S字甕が定着しなかったことを示すものである（袋井市1985）。

先日静岡市瀬名遺跡で古墳時代前期の準構造船の検出が報じられ，この時期の海上交通の存在

がにわかにクローズアップされているが，利島，大島の島に見られる古式土師器にはS字甕も含まれており，東海地方から関東地方において海路によってS字甕の移動があったことも肯定できる（利島村1984，東京都1986）。また駿河湾周辺の弥生時代後期の遺跡には，漁労を主たる生産手段とした集団の集落遺跡がみられ，社会的分業の進行が指摘されている（辰巳1982）。このような背景をもとに尾張から駿河東部までにおけるS字甕の分布・定着の状況を見ると，東海地方におけるS字甕の移動は海路に依存する傾向が高かったかに思わせるものがある。

〔甕に見られる変化について〕

弥生時代後期末から古墳時代前期に見られる土器の移動において，甕のみが移動する場合，熱効率の良い庄内甕のように甕が交易品であった可能性が指摘されている。そして多器種にわたる土器群（基本的な生活用具）の移動が伴う場合に，人の移動と居住の可能性は高いとされている（都出1974，米田1983）。

しかし，甕とは煮沸の実用的な機能と共に，生活に密着するが故の保守性を強く持つ土器である。また，S字甕は特殊な製作技法を持ち，技術の習得もしくは技術習得者の介在がなければ製作される現象が不可能な甕でもある。この2点をもとにS字甕の製作技術の分析・S字甕の定着した地域における甕の組成の分析をもって，東海西部からの人の移動と居住をある程度までは推測することも可能であると考える。(註10)

上野における弥生時代後期の平底甕からS字甕へ移行は，煮沸の機能面が格段に進化したレベルに変化したことを意味する。(註11) この変換については従来から東海西部からの大規模な集団移入の開拓が指摘されている。(註12) しかし，古式土師器への移行が地域的に若干の時間差が伴う現象，さらに器種によって影響相違が存在することを一方的な文化の移入においてのみ生じた文化変容と断定するには疑問を覚える。ここでは熱効率の良いS字甕を認め，これを羨望した在地の人々の自発的な意思の選択において技術が習得され，暫時普及した可能性と，その後も継続した両地域の交流が背後に介在した可能性を想定しておきたい。

南関東地方ではS字甕は稀少で客体的な存在に過ぎない。在地での定着は殆ど無く，搬入されたものを除くと概ね口縁部やハケ調整をまねた稚拙な模倣品のレベルにあるものが多い。このことは台付甕を主体にするこの地域には，S字甕を望む選択が存在しなかったこと，または土器の移動は人の居住が伴わないものであったことを示す。(註13) 南関東において搬入品と総称されるS字甕のうち駿河東部で製作された特徴を持つものの混在が指摘されている（小川1984）。しかし，駿河東部と甲府盆地で製作されたS字甕は色調や胎土，製作技法とも類似しているため，何れとも判断はしがたい。(註14) 判断は，胎土分析などのデータの集積を待って後年に譲ることにしても，仮に甲府盆地で製作されたものもあるとすれば，これらの土器の移動経路について検討しておく必要もあろう。

駿河東部における在地の台付甕とS字甕の共伴関係について考えてみよう。台付甕文化圏にあって在地の甕に混じって同じ台付甕の一種であるS字甕が定着することは，甕における保守的な性

質上，S字甕の製作技術習得者である東海西部の人々が一部この地に落ち着き，在地の人々と居住を供にした可能性が強い。では何故この地にわざわざ居住する必要があったのであろう。おそらく甲府盆地や東国開発に望む経路における中継地の必要性によるものと考えられる。東海西部の人々や土器は，このような漁労専門集団を背景とする駿河東部に落ち着いた後に，さらに海路で伊豆半島をまわって東進するものと甲府盆地めざして北進するものに別れていったのである。駿河東部の沿岸と内陸における遺跡の甕の組成の差異は，生産手段における地域性を示すものであり，また前期後半段階におけるS字甕の増加は，前半に定着したS字甕の製作技術がこの地域において二次的に伝播・拡散した現象とも考えられる(註17)。

甲府盆地内においては，組成の比較において地域性を明確に指示できる資料は稀少である。古墳の分布に示されるように前期から中期に至る段階では甲府盆地南側が中心となっている。小平沢古墳以行面々と首長墓のつづく中道町や八代町周辺に前期の集落が集中する傾向があり，甕の組成も何らかの関係を反映するかもしれない。

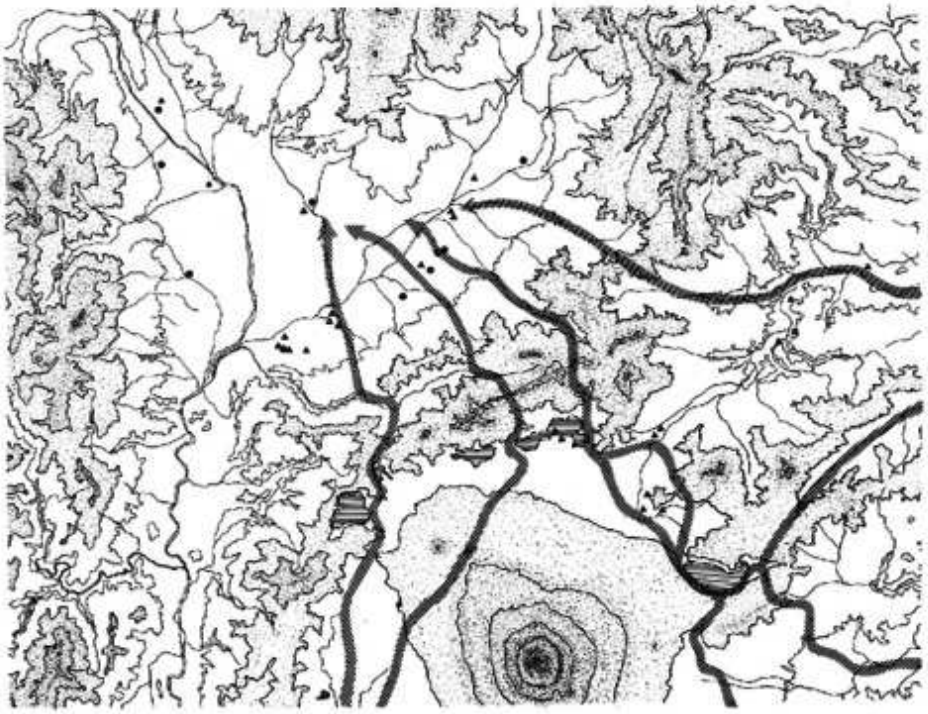
〔甲府盆地と駿河・武蔵・相模を結ぶ道〕

古代において甲斐の国には何本かの道があったことが記録されている。富士山の西麓を通過する中道往環と若彦路，そして後に官道となった富士山東麓の御坂路（延喜官道），さらには笹子峠から笹子川に沿ってのびる甲州街道などがそれである（山本1984）。御坂路は甲府盆地の東，笛吹川に注ぐ支流を遡り，御坂峠を越えて河口湖，現在の富士吉田市周辺を抜けて山中湖に到る。この後山中湖からは籠坂峠を越えて御殿場から沼津方面に到る路と三国峠を越えて小山から酒匂川を下って小田原に到る路，丹沢山地をぬけて相模原台地に至る路に別れる。富士吉田市周辺も富士火山灰の堆積のため，水田耕作に適した環境にあったとは言いがたい。しかし，ここにこの時代の土器が認められることは，駿河と甲府，相模と甲府を結ぶ後の御坂路の要所として性格を裏付けるものである。

弥生時代後期から古墳時代前期の段階では，中道首長家が展開する中道・八代町周辺に出入口を持つ中道往環や若彦路が駿河東部との綿密なつながりにおいて交通路の主流を占めていたものと見られる。中道首長家の衰退後，しだいに御坂から甲府盆地北縁部に権力が移動していくが，交通路の主流もこれに合わせて御坂路・甲州街道に移行し，富士吉田市周辺地域も新たなる局面を迎えるに至ったのではないだろうか。

## おわりに

古屋敷遺跡から採集された資料をもとに該当期について若干の考察を述べた。図化できる土器が少なく資料的な制約があり，今後資料の増加を待ってさらに多方面からの検討を行うべきであることを痛感する次第である。先学諸氏の御教示，厳しい御指導を賜れば幸いである。



第87図　山梨県における弥生時代～古墳時代前期の遺跡分布図

## 註

1　金の尾遺跡の土器から住吉遺跡の土器の間にはもう一段階型式が存在すると述べられている。

2　この時期は東海西部土器の影響が多器種に見られるが，加納俊介氏らによって器種によって影響に差異が指摘されている。このために実際に検出個体数を提示してみたが，個体数の識別・一括性における問題を内在することは否めない。

3　赤塚氏は上野・駿河をまとめてB系統と分類，濃尾平野周辺のA系統とは異なった変遷をたどるものとしている。

筆者はこのB系統については一部疑問を持つため，あえてA系統の分類を使用した。

4　甕の組成は次の様な数値を示す。「S字甕：$D^2$」で表示する。（以下同じ）

京原遺跡　2号住「2：2」　4号住「2：1or2」

久保屋敷遺跡　1号住「7：3or4」甕$D^1$を1個体含む2号住「（破）：1」　4号住「2：0」

5　月の輪平遺跡では前期にあたる資料で組成が明らかなものは少ない。一部56号住居址において「1：3」が確認されるが，台部と胴部の接合部分のみで形態は不明である。

6　在地の胎土を持って作られたS字甕が搬入品と共にこの段階で確認される。（加納　1981）

7　毛野や駿河・甲府においては長胴化はヘラケズリ技法の導入と関係付けられているが，導入時期に差異が存在するようであり，検討を要する（白石　1990）。また濃尾の長胴化したS字甕の器形は，この時期に消失するいわれる在地の台付甕の影響が想定される。しかし，搬出地とされるこの地域において頸部がくの字状に屈曲する台付甕がS字甕と共伴する状況は明らかにされていない。

8　三新田遺跡では次のように表示する。「S字甕：甕D：大型甕D」B7号住「1：0：1」・B9号住「1：2：2」B11号住「2：0：0」・B16号住「0：3：0」・B18号住「0：3：0」（小型品のみ）またB18号住に見られるような口径10cm強の小型品の台付甕が散見される。

9　月の輪新段階にあたる月の輪平遺跡T18・T22上・T45・T62号住からは甕はS字甕しか出土していない。T64号住からは「甕$D^2$・$D^3$」「甕C」だけで出土している。

10　静岡県内においては古式土師器の指標として組成の中に存在するが，東海西部からの搬入されたものが多い。静岡市の小黒遺跡から東海西部のS字甕に加えて，駿河東部の特色をもつS字甕が混在する。（日本考古学協会　1988）

現在東海地方は大きくは西部・東部と呼称され，前者は尾張・濃尾・伊勢湾の地域を包括する。後者は駿河を指すことが通常であるが，月の輪遺跡・三新田遺跡・藤井原遺跡にみられるS字甕の定着性が東部に見られることから筆者は駿河東部呼称しておく。

11　現在並行して執筆中の論文にふれておいた。興味があれば参照されたい。（白石　1988・1990）

12　群馬の樽式土器に見られる平底で胴が余り張らない器形を持つ甕からS字甕への変化は，台が付くことにおける炎の外炎部の効果的活用，胴が張ることにおける火を受ける面積の拡大，において煮沸形態上格段に進化を遂げたと言える。

13　古くより多くの人が指摘する。田口一郎氏は土器の変遷に見られる共通性から，移植は長時間にわたって断続的に行われていたものと述べている（田口1972・1981）

14　関東や畿内ではこの時期の胎土の分析が盛んであるが，駿河東部・甲斐の土器の分析は行われていない。また，分析方法の違いにおいて各データの比較・検討が難しいことにも問題がある。

## 参考文献


赤塚次郎　1986a　「『S字甕』覚書　85」愛知県埋蔵文化財センター研究紀要

赤塚次郎　1986b　「S字甕」『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会

赤塚次郎　1987　「遊遙する土器」『欠山式土器とその前後』研究・報告編　東海埋蔵文化財研究会

宇賀神誠司　他　1988　『上木戸遺跡』中央道長野県線埋蔵文化財発掘調査報告書2　（財）長野県埋蔵文化財センター

小川貴司　他　1984　「S字口縁甕」特別展図録『三－四世紀の東国―揺れ動く謎の時代―』八王子市郷土資料館

加納俊介　他　1981　『月の輪遺跡群』　富士宮市教育委員会

坂本美夫・末木健　1984　『山梨県』「古墳時代土器の研究」小出義治編　古墳時代土器研究会

佐藤勉信　他　1984　『高松原II』県立飯田高校・上郷町教育委員会

白石真理　1988　「第4章　第2節　遺物の分類　S字甕」（P65）『上小岩遺跡I』江戸川区教育委員会

白石真理　1990（未）「南関東地方におけるS字状口縁台付甕形土器の搬入・模倣の動向」『上小岩遺跡II』江戸川区教育委員会

末木健　他　1979　『山梨県中巨摩群敷島町金の尾遺跡発掘調査中間報告』長野県考古学会誌33－36号

田口一郎　1972　「塚原遺跡―古式土師器を出土する一遺跡」いぶき6・7合併号　埼玉県立本庄高等学校考古学部

田口一郎　1981　「元島名将軍塚古墳」高崎市教育委員会

辰巳和弘　1982　『日本の古代遺跡　1　静岡』保育社

都出比呂志　1974　「古墳発生前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号

東海埋蔵文化財研究会　1986　『欠山式土器とその前後』資料編

東京都島嶼地域分布調査団　1980　「東京都島嶼地域分布調査報告書―大島・三宅島―」

利島村教育委員会　1984―86　『利島大石山遺跡』範囲確認調査報告書II・III・IV

新津健　他　1981　『住吉遺跡』甲西町教育委員会

西川修一　1982　「内原遺跡における古墳時代前期の検討」『長井内原遺跡』内原遺跡調査団
日本考古学協会静岡大会実行委員会　他　1988　「日本における稲作農耕の起源と展開　—資料集—」
菰崎市教育委員会　1984　『坂井南遺跡』
沼津市教育委員会　1987　『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ　遺構編』
袋井市教育委員会　他　1985　『土橋遺跡—基礎資料編—』
富士市教育委員会　1983　『三新田遺跡』
山下誠一　他　1986『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
山梨県教育委員会　1974　『京原』
山梨県教育委員会　1978　『西田遺跡』
山梨県教育委員会　1980　『一城林遺跡』
山梨県教育委員会　1984　『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』
山梨県埋蔵文化財センター　1987　『姥塚遺跡』
山本寿々雄　1984　『日本の古代遺跡　14　山梨』保育社（P60-67）
米田文孝　1983　「搬入された古式土師器　—摂津市垂水南遺跡を中心として—」考古学論叢　関西大学考古学研究室開設30周年記念

また資料の実見にあたって下記の機関の皆様から御厚配と有益な御指導・御教示を賜った。末筆ながら記して深く感謝の意を表すものであります。（順不同）

一宮市教育委員会・愛知県埋蔵文化財センター・愛知県清洲貝殻山貝塚資料館・豊橋市美術博物館・細江町歴街道歴史資料館・浜松市博物館・焼津市歴史資料館・藤枝市埋蔵文化財調査事務所・静岡市立登呂博物館・静岡市教育委員会・沼津市歴史民俗資料陳列館・沼津市埋蔵文化財センター・富士市立博物館・富士宮市教育委員会・飯田市考古資料館・上郷町教育委員会・上郷町民俗資料館・長野県埋蔵文化財センター・山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

# 総　　括

## —火山の大地と古代の遺跡—

戸沢　充則

富士吉田市の市史を作るための，市内にある考古資料の本格調査に着手したのは，1987年であった。その年５月，私は明治大学大学院の“精鋭”たち９名の協力を得て，はじめて市内全域の遺跡分布調査に入った。

市の海抜標高は約800m。東京などにくらべれば，もちろんかなり高冷地の印象は拭えない。しかし私の生まれ故郷である信州諏訪は，全体に標高約750m以上で，富士吉田市と同様の高冷地であるにもかかわらず，標高1000m以上の土地も含めて，そこには「縄文王国」とさえいわれるほど，原始・古代の文化の発達は著しい。当然のことながら富士吉田市内でも，従来の調査で知られている以上の，さらに多くの遺跡を発見しようと，大きな期待と意欲をもって，分布調査の第一歩を踏み出した。

考古学における分布調査の第一義の目的は，いうまでもなく市内の原始・古代を主とした遺跡・遺物の所在を確認し，また新しい資料の発見に努めることにあるが，同時にそうした遺跡や遺物などの資料を使って，その土地の原始，古代の歴史を，市史としていきいきと叙述するために，歴史の舞台としての富士吉田市域の土地そのものの特徴を理解することにある。

そうした目標をかかげてはじまった分布調査であったが，その土地のことを本で読んだり，話に聞いただけの知識で，実際のことを実地で確かめた経験の全くなかったのは，いまにして思えば，ほんとうに恥ずかしいことだったと反省する。意気込んで調査に乗り出した私たちの前に立ちはだかったのは，「霊峰富士」が富士吉田市域全体にもたらした，すさまじいばかりの猛烈な火山活動の「遺産」であった。

＊

いま多くの人々が住み，市街が栄える市域の大部分は，「有史」以来，記録に残るだけでも，度重なる富士山の大噴火によって噴出した熔岩と火山礫や火山灰，あるいは噴火にともなう「二次災害」ともいえる泥流や火砕流などの厚い堆積物が形成する地盤の上にある。

市街の中心部に近い，竜ケ丘の西丸尾遺跡では，厚さ約５mにも達する堅い玄武岩質の熔岩の下に，平安時代の竪穴住居址の埋もれているようすが，いまでも実見できる。それは住居の床も壁も，いやその周辺の土層も，鮮やかなほどの赤色に焼けている。おそらくこの住居址の周辺の旧地表面は，ひろい範囲にわたって，灼熱地獄さながらの焦土の痕跡をのこしているものと思わ

れる。たかだか1000年前の平安時代の遺跡についてさえそうだとすれば，それ以前のより古い時代の遺跡の大部分は，常識をこえるほどの厚い火山堆積物の下に埋没しているのにちがいない。いまは全く望めないが，いずれ将来，何らかの事情でその厚い堆積物が取り去られ，その下から豊かな原始時代の生活の跡が，あるいは火山活動でひどく痛めつけられた姿かもしれないが，きっと見出されるものと私は信じている。

*

ところで，そうした熔岩や泥流などによる壊滅的な被害や，厚い火山灰に完全に埋没することをわずかに免れて，富士吉田市域で現在認められる古代以前の遺跡は，いずれも市街を盆地状にとりまく周囲の山腹や山麓に当たる部分に見出される。今回報告した古屋敷遺跡もそのひとつであって，以前から段々畑にされた遺跡の表面のあちこちから，近世から古代，石器時代に属する遺物が採集されていた。

1985年の分布調査の際，ここで行った数ケ所の試掘坑（1m四方の小ピット）のうちの一つから，ようやく2～3片の土器片（時期不詳）と，赤褐色の火山灰中への表土の落ち込み（竪穴住居址などの遺構の一画と推定）を発見した。この不確実な所見を頼りに，市史研究資料の収集を目的とした発掘調査が実現されたのである。

その成果については詳細に報告した通りであるが，試掘調査時の土器片出土は偶然のものであり，遺構発見という推定もまた誤りであって，そのはるか下層にあたる全く予期しなかった深層から，何層もの厚い火山灰に覆われた縄文時代の早期と，一部前期に属する集落遺跡の一部が発見されたのである。

この縄文集落は，古屋川あるいは明見の低地帯（旧明見湖をふくむ湿地帯）に面した山の斜面に帯状に形成された，最大時5軒ほどの竪穴住居址群からなる，それほど大きくない集落跡と推定されるが，今回の調査は部分的な発掘であったため，全容を明らかにするには至っていない。しかし発見された住居址等の遺構も，またそこから出土した土器などの遺物も，厚い火山灰の下で保存状況はきわめて良好であった。今後の注意深い遺跡全体の保護と，将来の完全な学術調査によって，富士吉田市域の比較的初期の縄文人の生活とその文化の動きを知る，数多くの貴重な歴史遺産を明らかにすることができると思う。

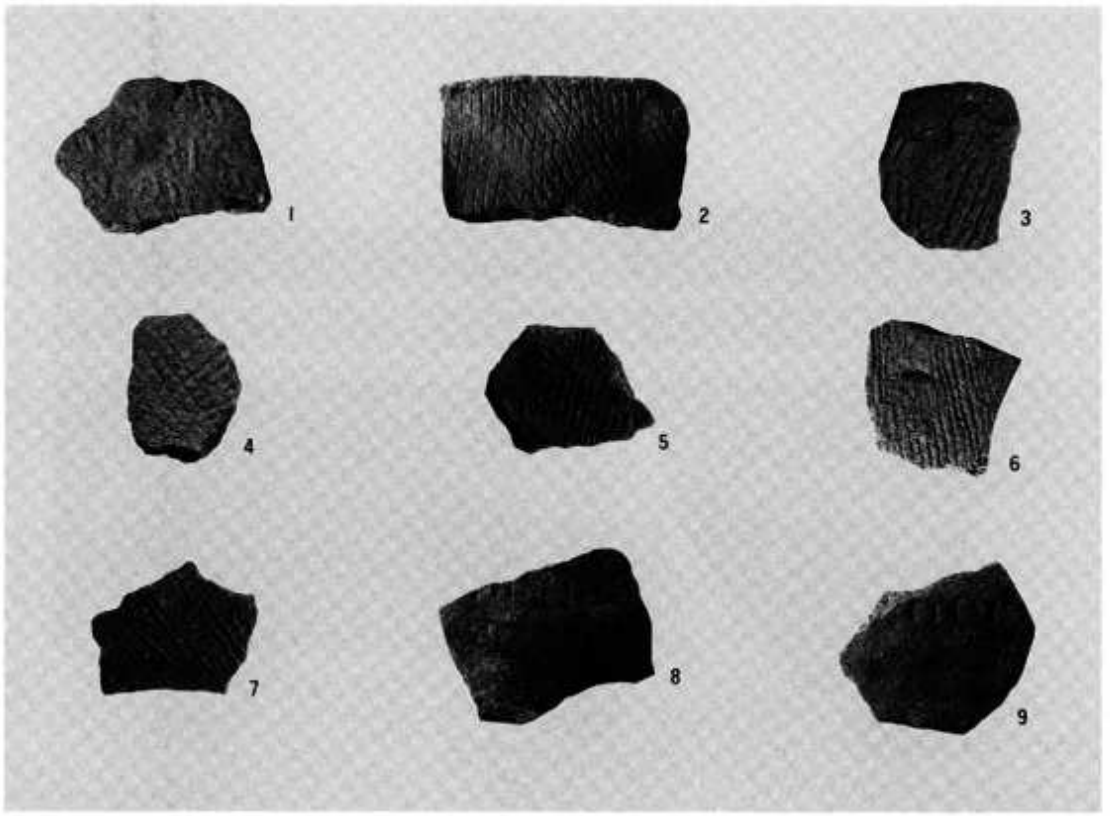
*

ところで報告書の研究編は，出土した縄文土器の型式学的な分析が中心となった。富士吉田市を含む富士山麓には，古来，東海・中部・関東をつなぐ，人や文化の交流の十字路の役割を果たした地域である。

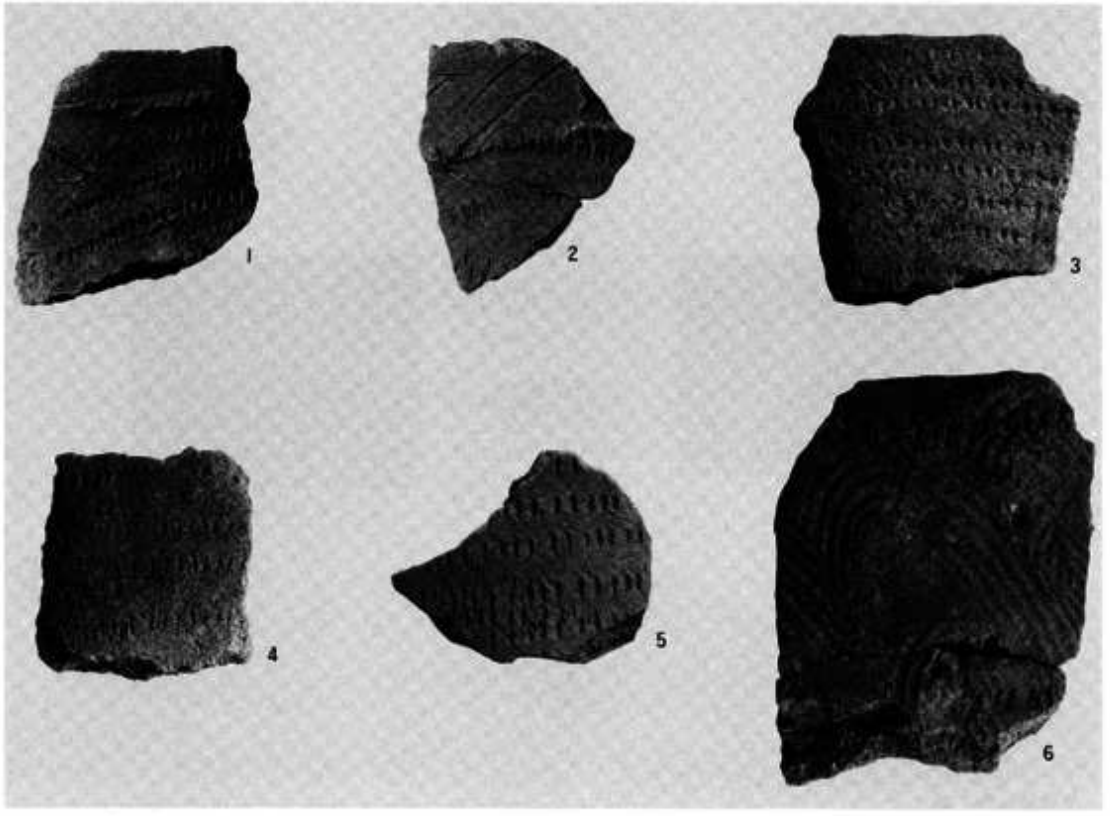
考古学における土器の型式学的研究は，文化の動態や地域間の関係を，比較的よく示す指標となる。古屋敷遺跡出土土器の中心をなす縄文早期後葉の土器でも，また前期の土器についても，その型式学的特徴は関東・東海・中部高地などの地域的特色をそなえながら（すなわちそうした地域との交流の影響をうけながら），富士山麓地帯の独自性をも示していると分析された。

以上のことは，ひとり土器の問題だけでなく，この地域に適応した縄文人の生活の様式と，そのもとで育成された文化的伝統があったということを推測させる。そうした富士吉田市域における「地域考古史」としての正しい評価は，土器以外の様々な文物についても，それ以上に，富士山の火山活動と人間生活の有機的関係を，より科学的に明らかにする調査と研究を深めて後，はじめて達成されるであろう。

古屋敷遺跡という，火山性堆積物に厚くおおわれた縄文時代遺跡の発掘を通じて，自然と人間の歴史のかかわりについて，いままでにない新しい経験と，新たな認識をもつきっかけを得たことを，私たち自身の大きな成果としたい。

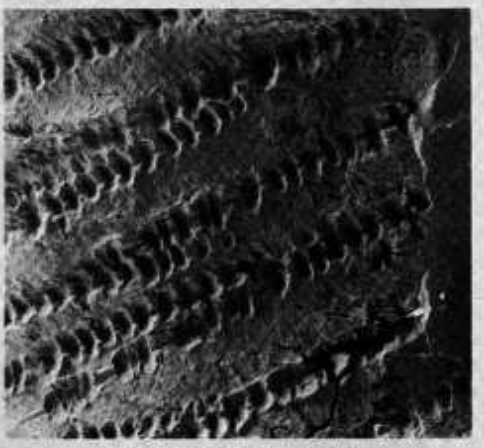



1：早期第Ⅰ群Ⅰ類，2～7：第Ⅰ群2類，8，9：第Ⅱ群




1～6：早期第Ⅲ群3類

図版 2

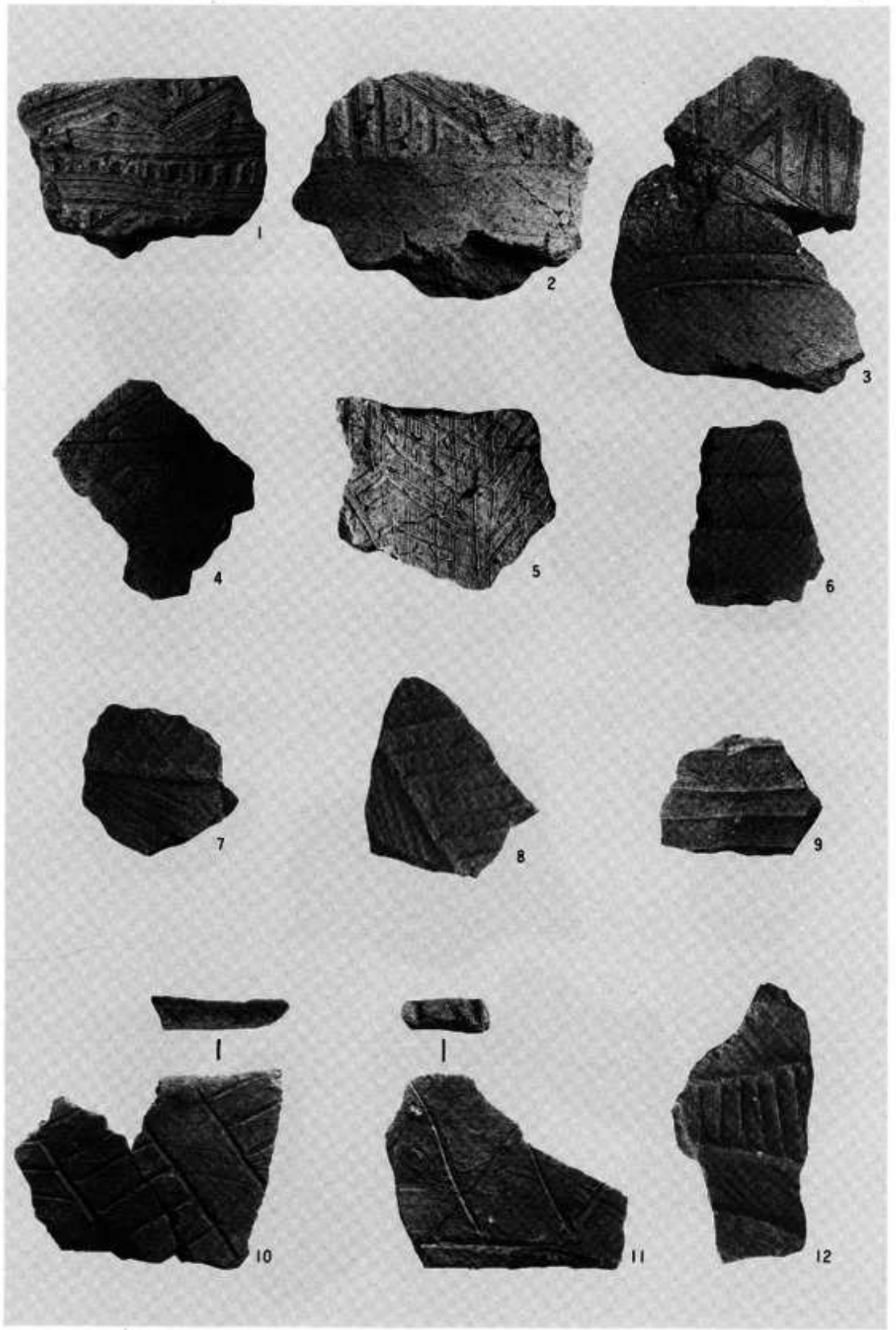


絡条体圧痕文の接写(1/1)

絡条体圧痕文の接写(1/1)

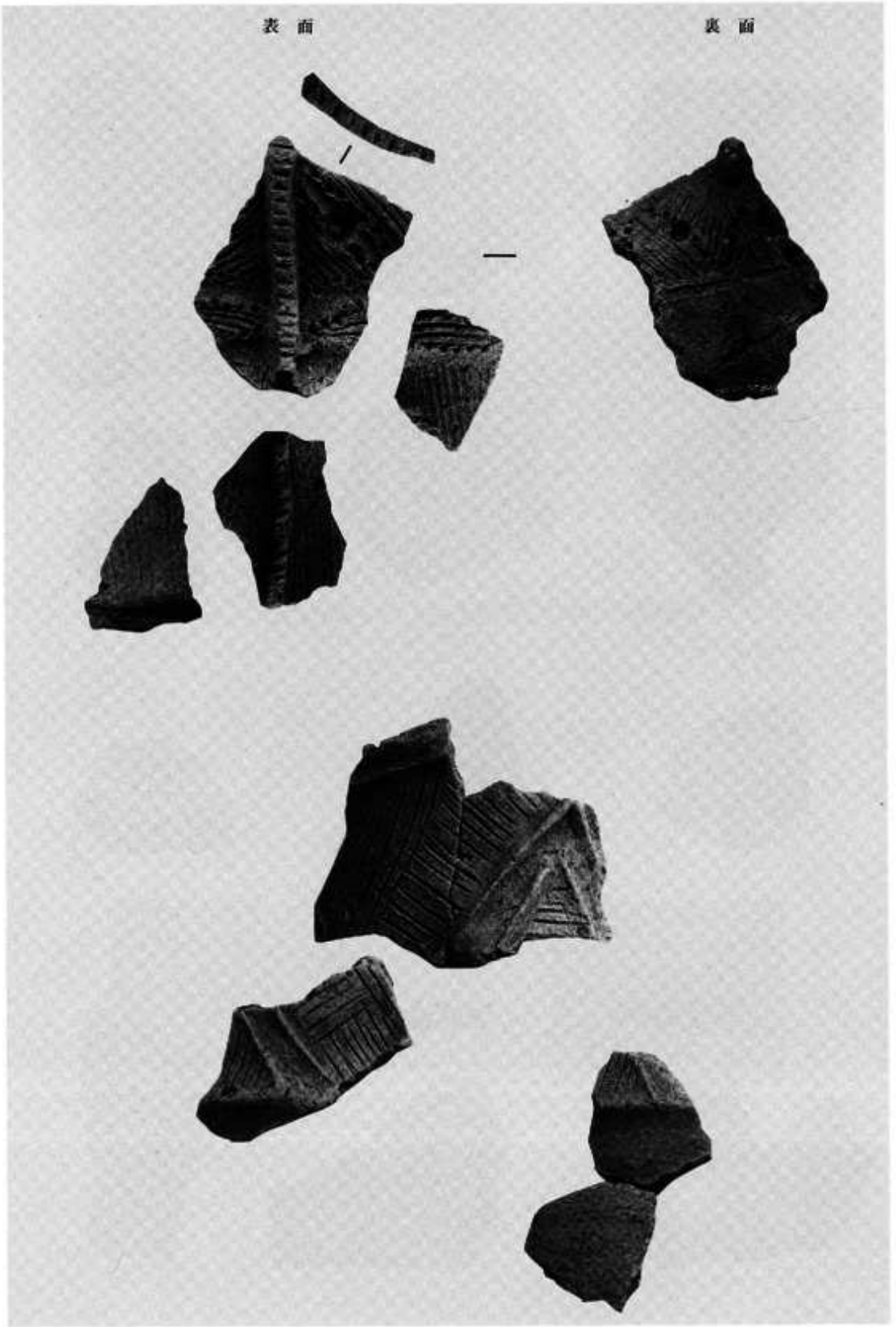
絡条体圧痕文の接写(1/1)

早期第III群 4 類

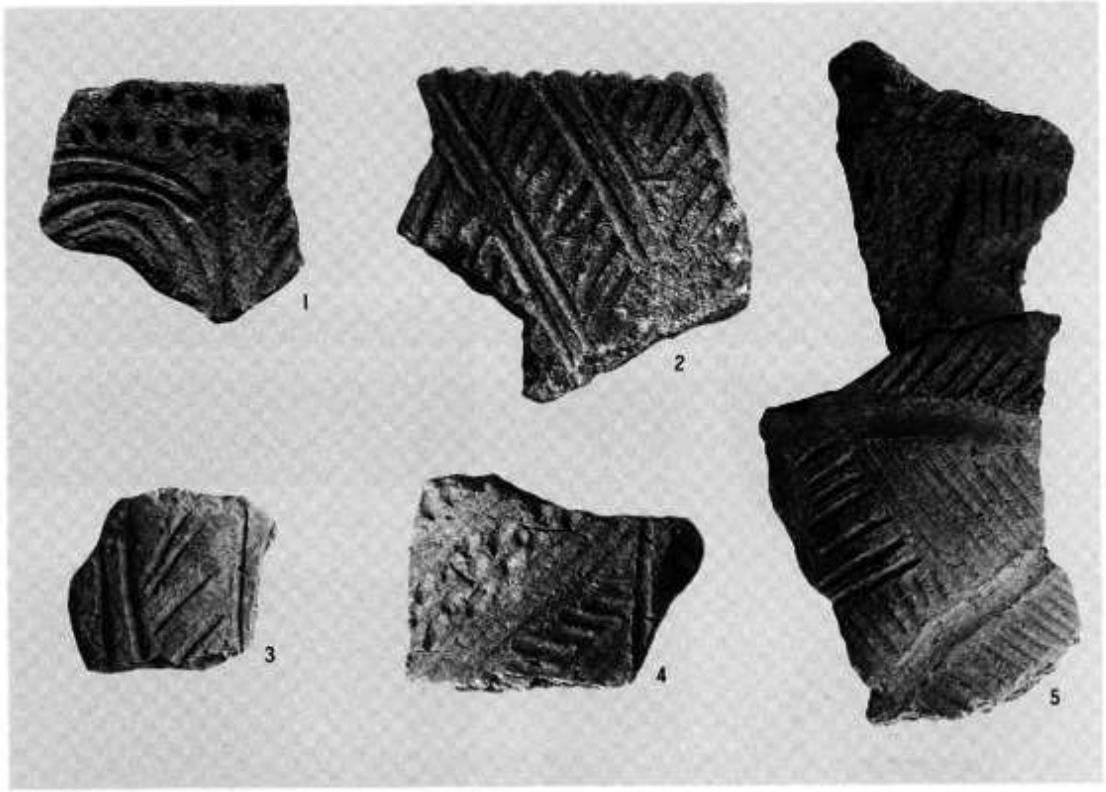



1－5，10，11：早期第Ⅲ群3類，6－9，12：早期第Ⅲ群2類

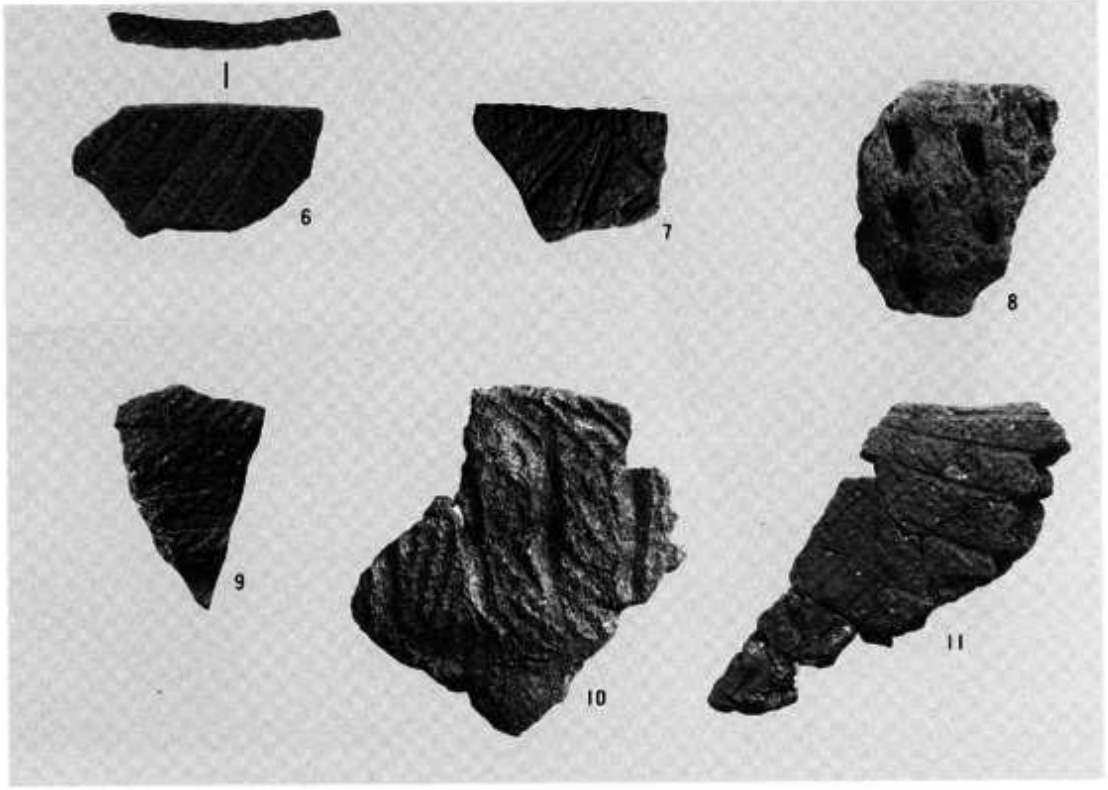
図版 4




早期第III群 I 類

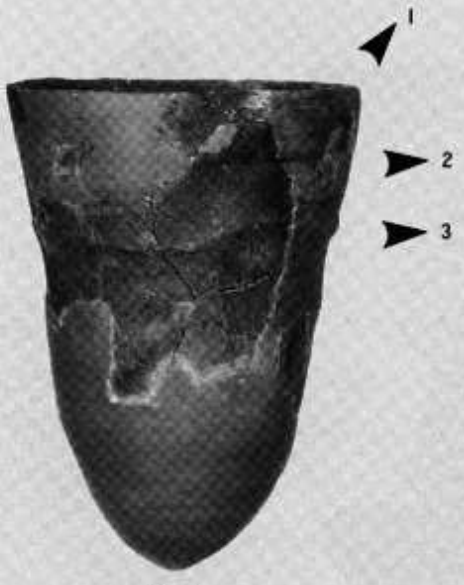



1～5：早期第Ⅲ群3類




6～11：早期第Ⅳ群2類

図版 6




個体 1

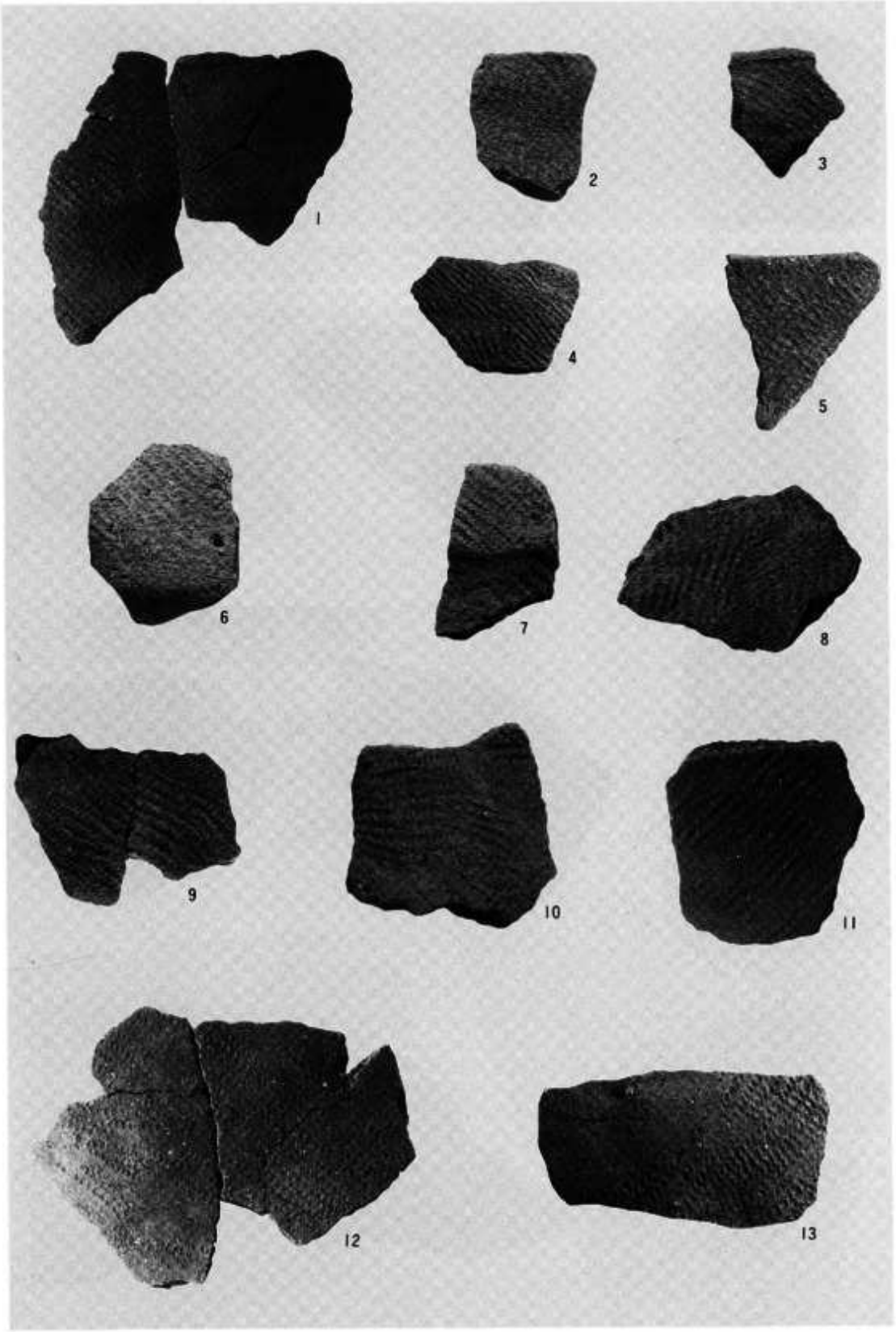
1　口唇部に施された縄文(個体 1)

2　段帯部上半の擬似羽状縄文(個体 1)

個体 2

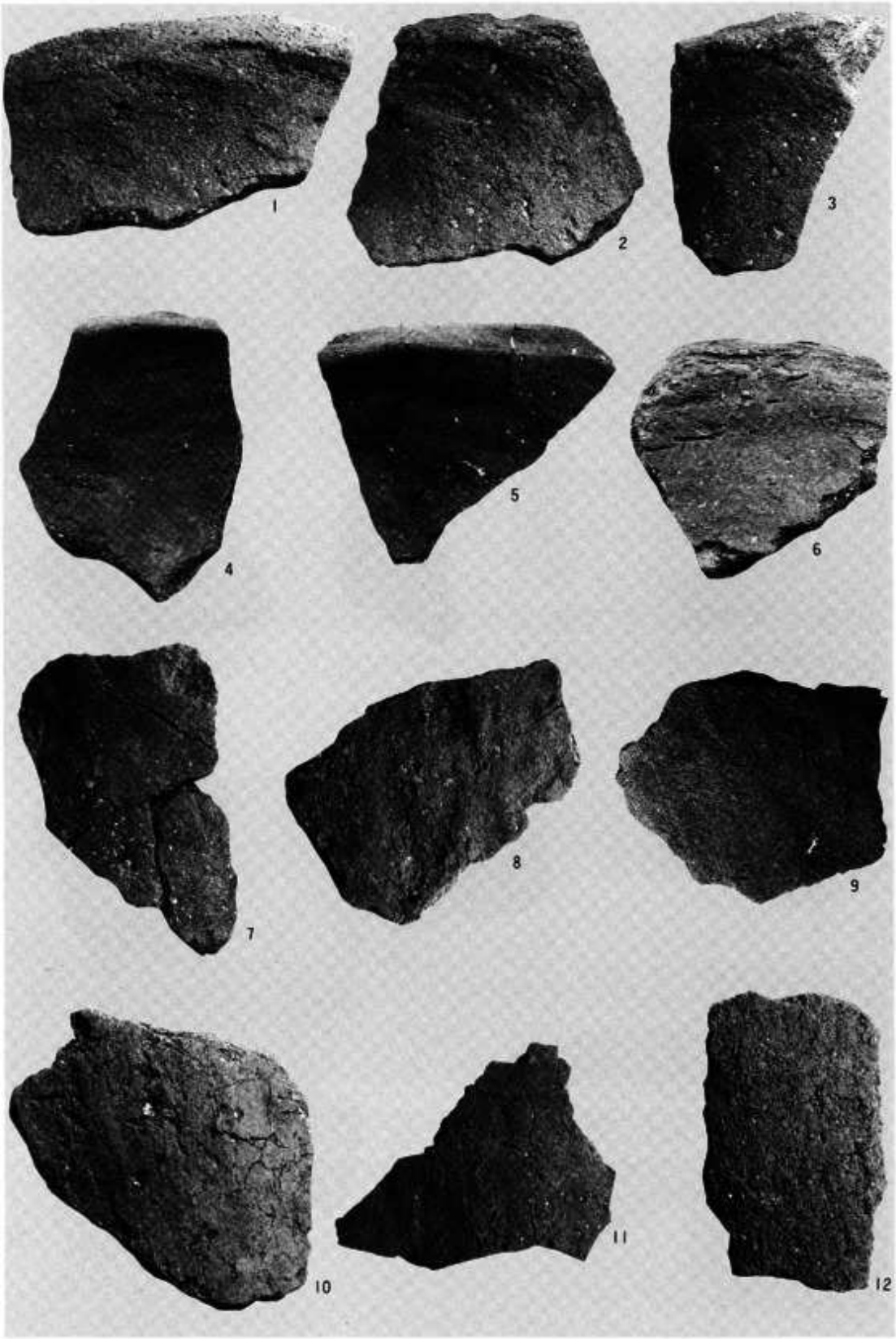
3　段帯部接写(個体 1)

早期第Ⅳ群 1 類

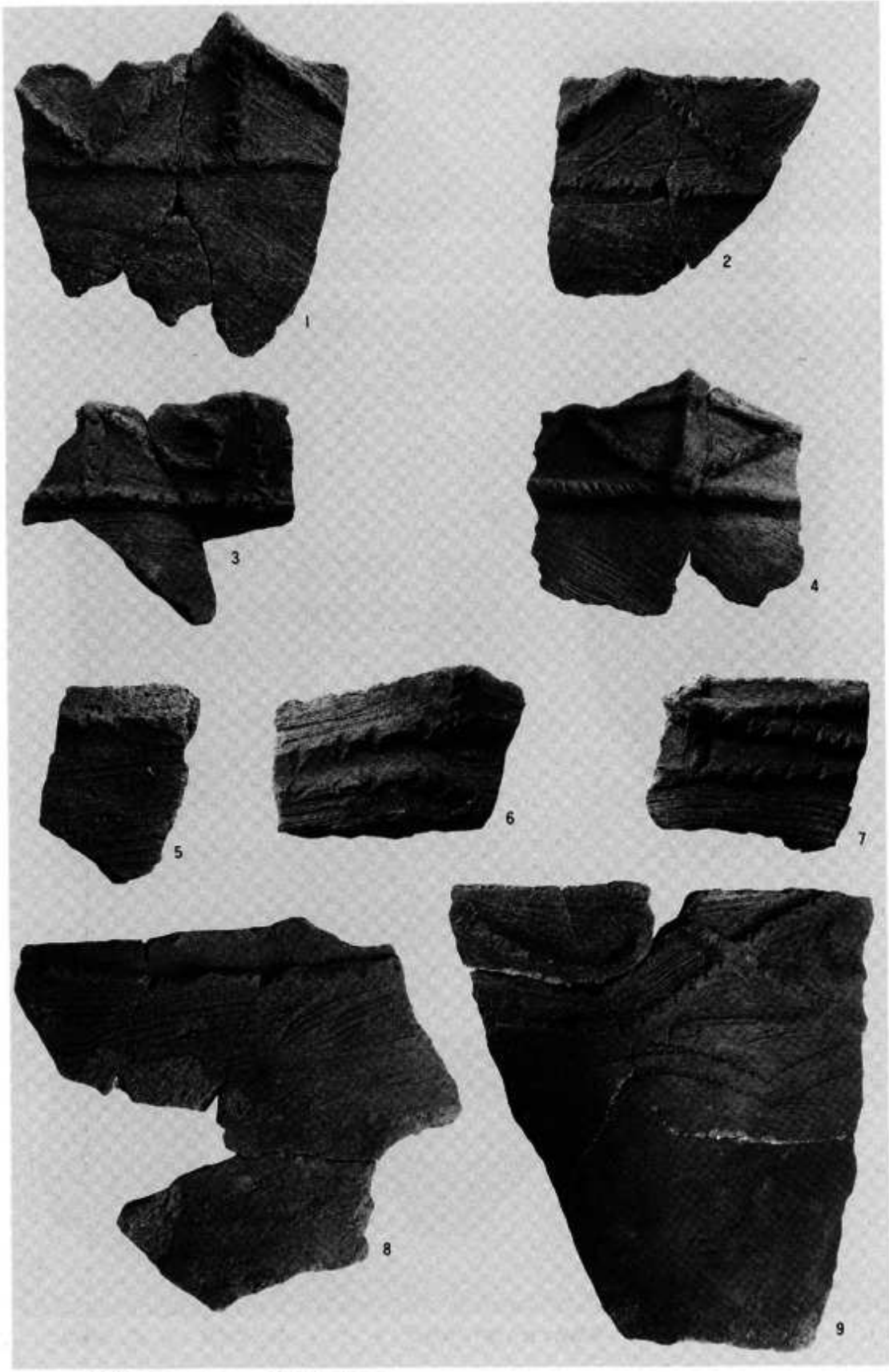



1～13：早期第Ⅳ群Ⅰ類

図版 8

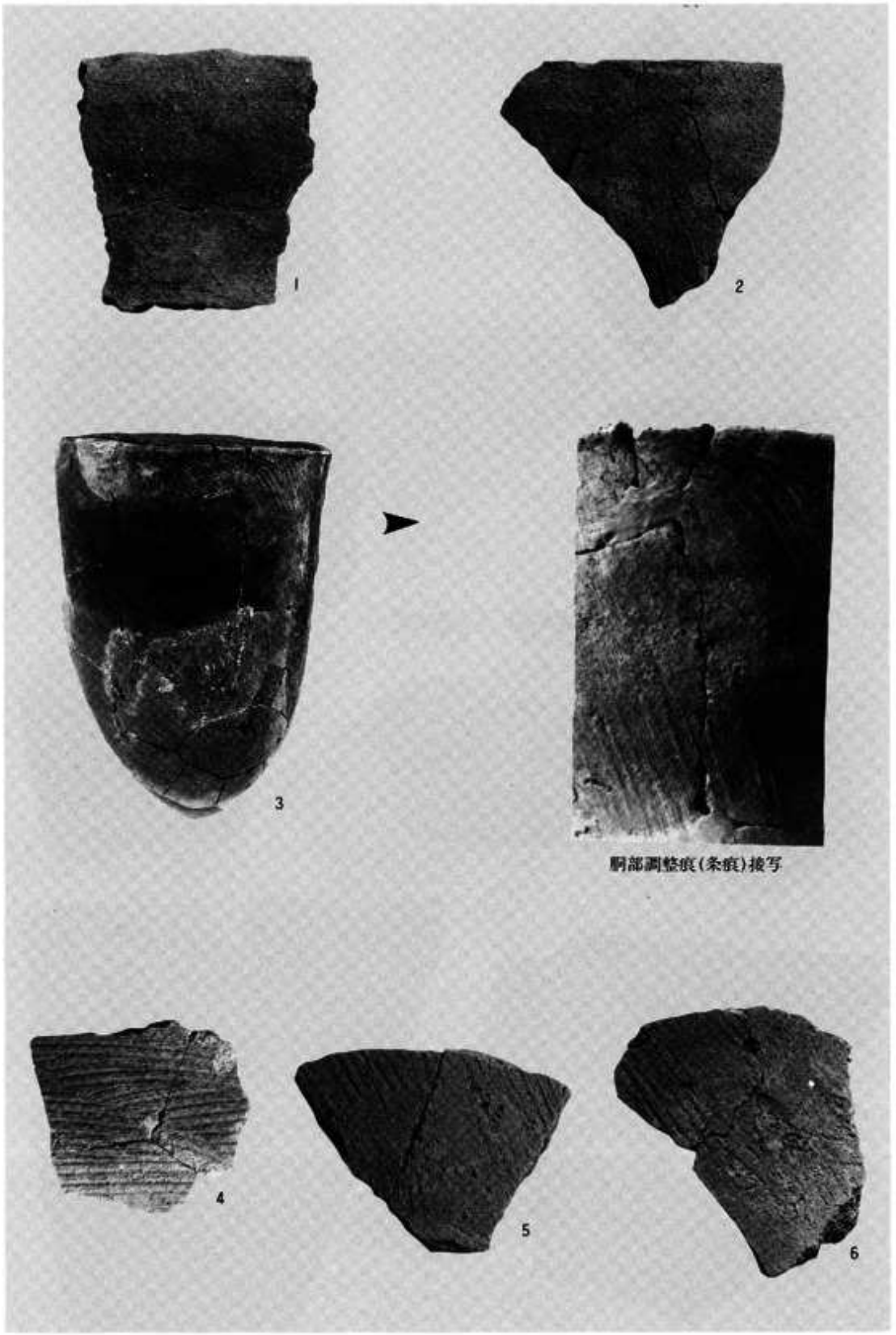



1～12：早期第Ⅳ群３類

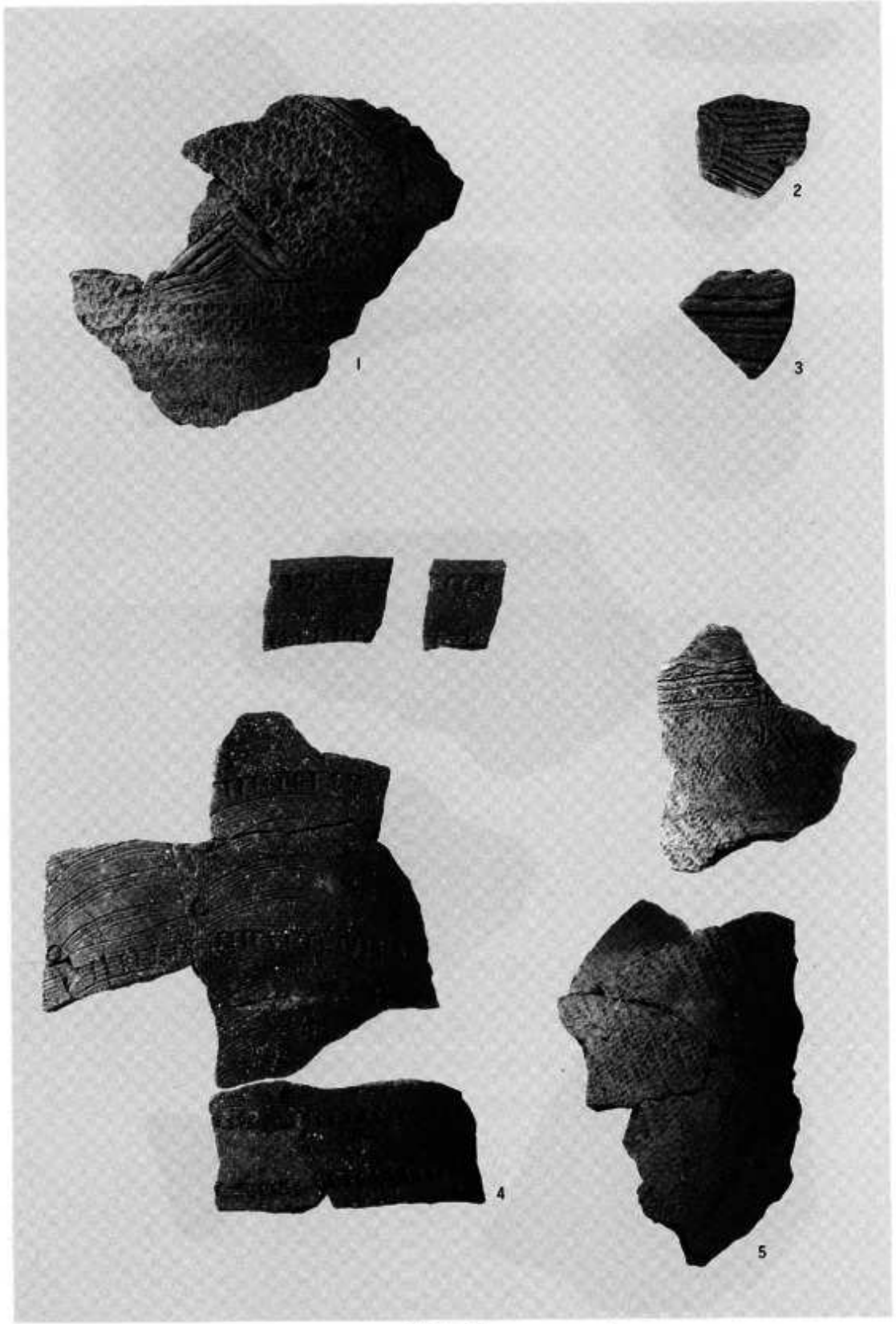



1－8：早期第Ⅴ群Ⅰ類，9：早期第Ⅴ群2類

図版10

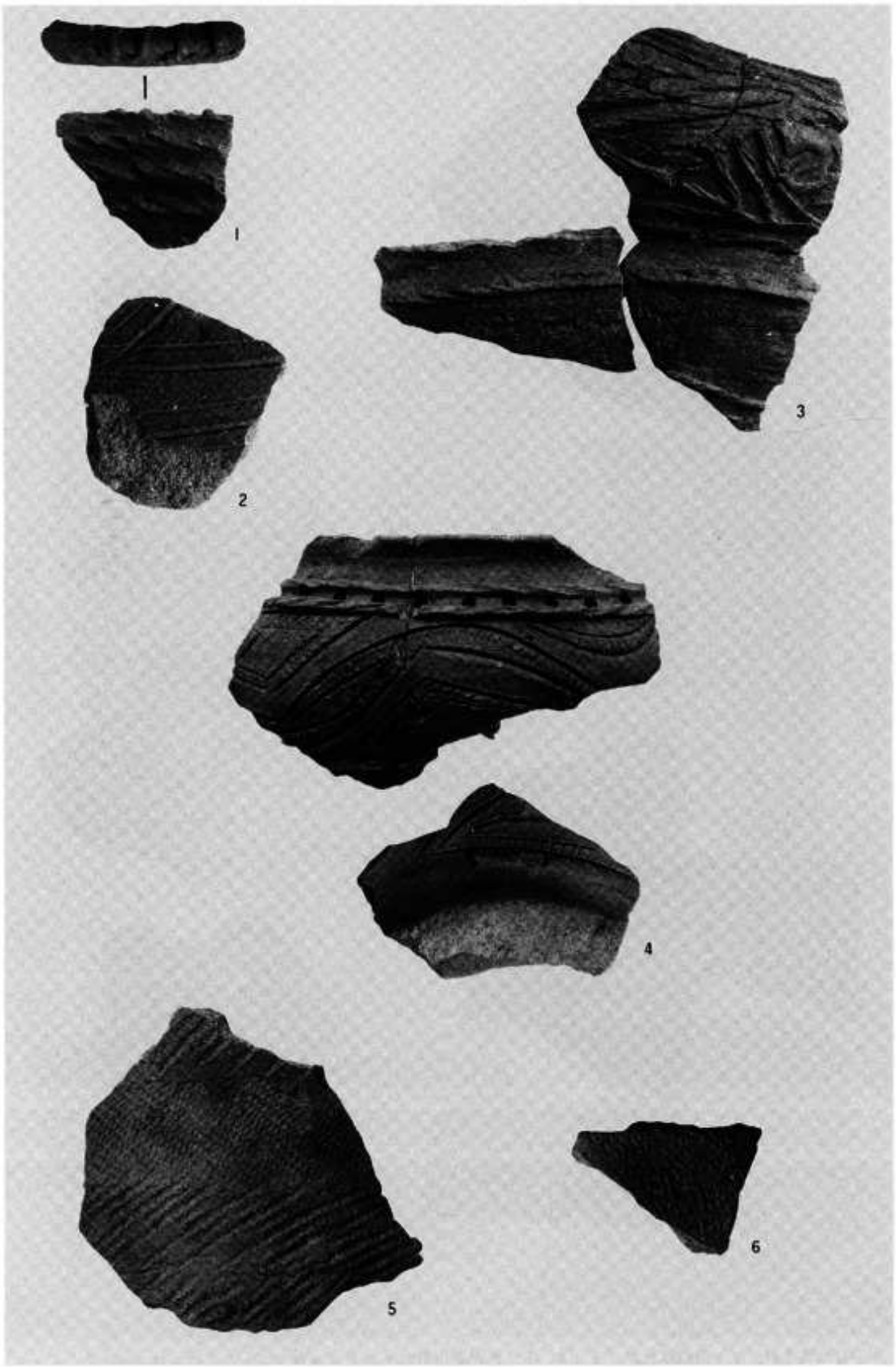



1，2：早期第III群6類，3～6：早期第V群3類




1：前期第Ⅰ群，2：前期第Ⅱ群，3，4，5：前期第Ⅲ群

図版12




1～4：前期第Ⅳ群，5，6：前期第Ⅲ～Ⅳ群

富士吉田市史資料叢書８

古屋敷遺跡発掘調査報告書

平成２年３月31日　発行

編集　古　屋　敷　遺　跡　調　査　団

発行　富士吉田市教育委員会市史編さん室

〒403 富士吉田市下吉田１９０４

電話(0555)２３－１７６５

印刷　株式会社　ぎょうせい